

(府営大東北新町住宅建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査)

# 北新町遺跡第4次発掘調査概要報告書

大阪府大東市北新町所在

(本文編)

1998

大東市北新町遺跡調査会

『北新町遺跡第4次発掘調査概要報告書』正誤表

頁	行	誤	正
目次	卷頭図版3	V区遺構出土青磁、白磁、綠釉陶器	V区遺構出土青磁、白磁、綠釉
3	7行	そして同年5月、	そして、
3	26行	扉、敷居、鴨居などの部材が	扉、鴨居などの部材が
23	第7図	SD-11	SD-01
29	8行	西側で	南側で
29	12行	III SD-76	III: SD-76
33	2行	自然流路・河川	自然流路・河川
35	21行	ピット	ピット
35	25行	足跡群	足跡群
36	8行	SD-05	SD-05 (図版8)
36	12行	SD-06	SD-06 (図版8)
39	4行	SD-07	SD-07 (図版8)
51	16行	皿等出土	皿等が出土
52	25行	使用されていたと	使用されていたと
54	1行	ピット	ピット
62	23~24行	途切れるていよう	途切れていよう
73	15行	SD-31・33・42が	SD-31・33・62が
74	11行	SD-24	SD-24 (第51図)
96	5行	III ST-02	III: ST-02
96	23行	III SR-01・02	III: SR-01・02
115	5行	I-2-b類相当する。	I-2-b類に相当する。
124	参考文献21行	『中世・近世渡米銭標本集』	『中世・近世渡米銭標本集』
124	参考文献22行	『出土渡米銭』	『出土渡米銭』
132	22行	水路によってが区画される	水路によって区画される
140	25~26行	板状工具による	板状工具による
143	16~17行	縦約cm、横約cm	縦約5.2cm、横約2.3cm
146	11行	東大寺造営料	東大寺造営料
147	30行	焼かれていたことからも	焼かれていたことが
150	5行	魚住泊	魚住の泊
150	7・16行	渡辺津	渡辺の津
151	13行	1962年(元禄5)	1692年(元禄5)
151	註(1)	『北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書』	『北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書』

(府営大東北新町住宅建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査)

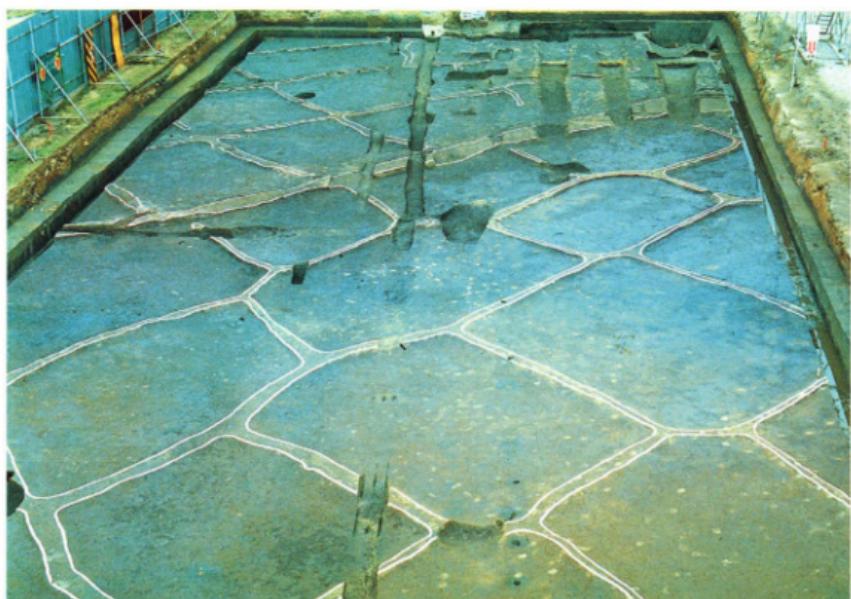
# 北新町遺跡第4次発掘調査概要報告書

大阪府大東市北新町所在

(本文編)

1998

大東市北新町遺跡調査会



U区 第3遺構面(水田跡)全景(南より)



V区 SD-78出土状況(北より)



U区 包含層出土 白磁



U区 遺構及び包含層出土 青磁、白磁



V区 遺構出土 青磁、白磁、綠釉



V区 包含層出土 白磁



S区 遺構出土 染付



U区 遺構及び包含層出土 染付

## はしがき

昭和60年から継続して実施してまいりました府営大東北新町住宅建替え工事に伴う発掘調査も、ようやく終了することになりました。思い返しますと、調査を開始しました頃は大東市には埋蔵文化財の専門職員がおらず、大阪府建築部、大阪府教育委員会のご協力を得て、暗中模索の中でのスタートでした。その後昭和62年には、市立総合文化センターの中に歴史民俗資料館が開館し、歴史資料・民俗資料の収集、公開などとともに埋蔵文化財の発掘調査も実施するようになり、専門職員の配置もされ、今日に至っております。このように本市の文化財行政の整備は、北新町遺跡調査会とともに歩んで來たと言えましょう。

今回の報告をもちまして北新町遺跡調査会は解散を致しますが、調査で得られた貴重な記録や遺物は、大東の歴史を解明するうえで欠くことのできないものであり、今後は大東市教育委員会で大切に保管し、文化財の普及、啓蒙などに広く活用していきたいと思っております。

最後になりましたが、調査に御協力頂いたすべての方々に対して、記して感謝の意を表します。

平成10年3月

大東市北新町遺跡調査会

委員長 北本慶三

## 例　　言

1. 本書は大阪府建築部住宅建設課が計画している、大東市北新町に所在する府営大東北新町住宅建替え第四期建築工事に伴って実施した北新町遺跡の第Ⅳ期発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は大阪府建築部住宅建設課の委託を受けて、府住宅建設課、府文化財保護課、大東市教育委員会の三者において設立した北新町遺跡調査会が実施した。
3. 本調査は平成5年7月1日から同年9月28日まで住宅建築予定地約901m<sup>2</sup>（R区）を、平成6年7月18日から同年11月1日まで道路拡幅及び貯留槽、受水槽部分約823m<sup>2</sup>（S・T区）を、平成7年7月26日から平成8年1月19日まで住宅建築予定地約1761m<sup>2</sup>（U区）を、平成9年2月12日から同年3月10日まで水路整備部分約241m<sup>2</sup>（V区）を第Ⅳ期の現地調査として実施した。土器の洗浄、接合等基礎的な整理作業については、上記の現地調査と並行して実施していたが、平成8年4月1日より第Ⅲ期調査報告書作成の整理作業が開始されたため一時中断し、平成9年4月1日から再開し、平成10年3月31日に本報告書を完成している。
4. 本調査は大阪府教育委員会及び北新町遺跡調査会調査指導部長田代克巳（帝塚山短期大学教授）の指導の下、同調査指導員黒田淳（大東市立歴史民俗資料館）が担当したが、V区の調査に関しては、現地調査を大阪府教育委員会文化財保護課技師松岡良憲、服部文章に依頼した。
5. 本調査に要した費用は大阪府建築部が負担した。
6. 現地調査及び内業整理作業の過程においては、下記の諸氏、諸機関より有益な御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）  
大野薰、服部文章、松岡良憲（大阪府教育委員会）、野島稔（四條畷市教育委員会）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、田村啓介（岡山県立博物館）、堀池春峰（東大寺史研究所）、焰硝岩哲郎（瀬戸町教育委員会）、堅田直（帝塚山大学）、中世上器研究会、奈良国立文化財研究所
7. 現地調査及び内業整理作業にあたっては、下記の諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）  
山田芳樹、野村香枝、井尻由美子、清水崇子、井戸上照子、松岡美佳子、北田亨子、

小堀直子、宮田八重子、森石千枝子、徳田登喜子、金城慶子、岩上直子、村尾奈津子、川崎昌美、今井加奈子、小山和高、塙山彦一郎、塙山万里、谷本由紀、八木尊生、西内敬美、山川賢、日爪佑介、小堀努、富永忠、橋本大司、

8. 本調査で出土した木製品及び金属製品等の科学的保存処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
9. 第Ⅲ期調査において実施した花粉・プラントオパール分析は、川崎地質株式会社に委託し、その報告を受けている。その分析結果は本書の考察編に掲載している。
10. 本調査で出土した遺物の写真は有限会社阿南写真工房の阿南辰秀氏に委託した。
11. 本書の執筆、編集は黒田が行なった。
12. 調査において作成した写真、実測図、カラースライド等は、大東市立歴史民俗資料館において保管している。今後、広く利用されることを希望する。

## 北新町遺跡調査会組織表

第Ⅳ期調査開始時

平成5年7月

委員長	大東市教育委員会教育長	大東元二
委員兼調査部長	帝塚山短期大学教授	田代克巳
委員	大阪府教育委員会文化財保護課長	亀岡勝敏
委員	大阪府建築部住宅建設課長	難波敏廣
委員	大東市教育委員会管理部長	北木慶三
委員	大東市教育委員会指導部長	岡本弘司
委員	大東市文化財保護委員会会長	萩家大藏
監査委員	大東市教育委員会総合文化センター館長	小菅良明
監査委員	大東市教育委員会管理部次長兼教育総務課長	和田久樹
事務部長	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館長	橋本義一
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	太田基久
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主査	江野弘二
調査指導員	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館技術吏員	黒田 淳

## 北新町遺跡調査会組織表

第Ⅳ期調査終了時

平成10年3月

委員長	大東市教育委員会教育長	北本慶三
委員兼調査部長	帝塚山短期大学教授	田代克巳
委員	大阪府教育委員会文化財保護課長	鹿野一美
委員	大阪府建築部副理事兼住宅建設課長	川崎正嗣
委員	大東市教育委員会管理部長	田口幹雄
委員	大東市教育委員会指導部長	中口馨
委員	大東市文化財保護委員会会长	合川昭夫
監査委員	大東市教育委員会総合文化センター館長	中村一郎
監査委員	大東市教育委員会管理部次長兼教育総務課長	和田久樹
事務部長	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館長	橋本義一
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	森泰章
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	室屋幹雄
調査指導員	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館技術吏員	黒田淳

## 凡 例

- 北新町遺跡の略称は、K S M (K I T A S H I N M A C H I s i t e) である。
- 調査区名は第一～四期建替え計画順に、それぞれ I～IV のローマ数字で表記している。（例：第 IV 期調査区）
- 調査名は遺跡の略称と調査区名を組み合わせて表記しており（例：K S M IV）、出土遺物の註記はこれにしたがっている。さらに調査年次順を調査名の後に「-」（ハイフン）を付しアラビア数字で表記している。（例：K S M III-1、K S M IV-2）  
また、本書で建替え計画全体の調査名を表す場合は、調査区名を使用している。  
(例：第三期建替え計画に伴う調査 (K S M III-1～3) → 第 III 期調査)
- 各調査区において設定したトレンチ名は、調査順にアルファベット順で付している。  
なお、建替え工事名と調査(区)名、トレンチ名との関係は、第 1 章 第 1 節 調査に至る経過のなかで詳しく述べている。
- 遺構図及び断面図中の標高は、東京湾標準潮位 (T.P.) を基準として m 単位で表示している。
- 遺構等の実測図作成の測量基準については国土座標第 IV 系を使用しており、挿図中の北はすべて座標北を指し、座標値の記載は km 単位で表示している。
- 各トレンチの地区割りについては、座標のメッシュとは関係なく独自に設定しており、トレンチ名（アルファベット）の後に「-」（ハイフン）、アラビア数字の順に表示している。（例：R-1 区、U-15 区）  
地区割りの詳細については第 1 章 第 2 節 調査の方法で記述している。
- 本書で使用する遺構名については、アルファベットとアラビア数字の組合せで表記しており、アルファベットは遺構の種類を、アラビア数字は遺構番号を表している。  
本書で登場する遺構の種類については以下に示す通りである。

S A	棚	S B	建物
S D	溝、水路	S E	井戸
S F	焼土坑	S I	土器集積
S J	壙	S K	土坑
S M	水田、畑	S N	畦畔

S P ..... ピット

S R ..... 河川

S T ..... 池、落ち込み

S X ..... 集石遺構

9. 本書で使用している基本層序、遺構面、遺構番号等については、前回報告した第Ⅲ期調査で設定したものに準じているが、第Ⅰ期、Ⅱ期調査のものとは関連していない。各遺構番号の付し方については、第Ⅳ期調査の中で連番で、調査順（R区→V区）に付しているが、溝や自然流路などの遺構で2箇所以上のトレンチにわたり検出されて、同一の遺構と判断出来るものについては、なるべく同じ遺構番号を付すようにしている。なお、本文中において既往の調査で検出している遺構を用いる場合には、混乱を避けるため遺構名の頭に各調査区名を表すローマ数字を冠している。

（例：II・S R-01、III・S D-76）

10. 掘図の遺物実測図の縮尺は、土器が1/4、石器2/3、木器1/4を基本としているが、一部の遺物については、それぞれの大きさに応じて縮尺を変えている。掘図中の各スケールを参照されたい。遺物の断面は、須恵器・陶磁器類を黒塗りで、土師器類を白抜きで、瓦器・瓦質土器・瓦をスクリーントーンで表現している。また黒色土器に関しては、黒色土器A類を「黒A」、黒色土器B類を「黒B」とそれぞれ掘図中において表示している。
11. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修による。

## 卷頭図版

卷頭図版 1	U区第3遺構面（水田跡）全景（南より）／V区 S D-78土器 出土状況（北より）
卷頭図版 2	U区包含層出土白磁／U区遺構及び包含層出土青磁、白磁
卷頭図版 3	V区遺構出土青磁、白磁、綠釉陶器／V区包層出土白磁
卷頭図版 4	S区遺構出土染付／U区遺構及び包含層出土染付
はしがき	
例 言	
北新町遺跡調査会組織表	
凡 例	

## 本文目次

第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 これまでの調査成果	3
第3節 調査方法	5
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3章 基本層序	15
第4章 遺構	
第1節 R区の遺構	23
第2節 S・T区の遺構	40
第3節 U区の遺構	73
第4節 V区の遺構	94
第5章 遺物	
第1節 出土遺物の概要	99
第2節 R区の出土遺物	101
第3節 S・T区の出土遺物	103

第4節 U区の出土遺物 .....	110
第5節 V区の出土遺物 .....	115
第6節 出土錢貨 .....	122
第6章 木製品	
第1節 S・T区の出土木製品 .....	125
第2節 U区の出土木製品 .....	125
第7章 まとめ .....	130
第8章 考察	
北新町遺跡発掘調査に伴う花粉およびプラント・オパール分析 .....	133
北新町遺跡出土の「東大寺」刻印瓦について .....	140
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第 1 図 大東市位置図.....	1
第 2 図 調査区位置図.....	4
第 3 図 調査区区割り図.....	6
第 4 図 市内遺跡分布図.....	9 ~ 10
第 5 図 R ~ U 区土層断面柱状図.....	17 ~ 18
第 6 図 R 区第 1 遺構面平面図.....	21 ~ 22
第 7 図 S D - 01 平面、立面、土層断面図（北側）.....	23
第 8 図 S D - 01 平面、立面、土層断面図（南側）.....	24
第 9 図 S D - 03 平面、土層断面図.....	25
第 10 図 R 区第 2 遺構面平面図.....	27 ~ 28
第 11 図 S D - 04 平面、土層断面図.....	26
第 12 図 R 区第 3 遺構面平面図.....	31 ~ 32
第 13 図 S K - 01 平面、土層断面図.....	30
第 14 図 S K - 02 • 03、S P - 05 • 06 平面図.....	30
第 15 図 S K - 04 • 05、S R - 04 平面図.....	33
第 16 図 S R - 01 • 03 平面、土層断面図.....	34
第 17 図 S R - 02、S P - 09 平面、土層断面図.....	35
第 18 図 S R - 05、S P - 03 • 04 平面図.....	36
第 19 図 R 区第 4 遺構面平面図.....	37 ~ 38
第 20 図 S • T 区第 1 遺構面平面図.....	41 ~ 42
第 21 図 S D - 11 平面、立面図.....	43 ~ 44
第 22 図 S D - 14 平面、立面、断面図.....	45 ~ 46
第 23 図 S • T 区第 2 遺構面平面図.....	49 ~ 50
第 24 図 S D - 15 • 16、S P - 28 ~ 44 平面図.....	47
第 25 図 S D - 15 土器出土状況平面・断面図.....	48
第 26 図 S D - 17、S P - 60 平面図.....	48
第 27 図 S E - 01 平面、立面、土層断面図.....	51
第 28 図 S E - 02 平面、立面、土層断面図.....	52

第 29 図	S E -03平面、立面、土層断面図	53
第 30 図	S K -06平面、土層断面図	54
第 31 図	S P -12・13・43・53～55平面・断面図	57
第 32 図	S・T区第3遺構面上層平面図	55～56
第 33 図	畦畔検出状況平面図	58
第 34 図	S N -01平面、断面、土層断面及び水口断面図	59
第 35 図	S N -01須恵器出七状況平面、断面図	60
第 36 図	S N -02平面、土層断面図	60
第 37 図	S N -02須恵器出土状況平面、断面図	61
第 38 図	S R -07平面図	61
第 39 図	S・T区第3遺構面下層平面図	63～64
第 40 図	S D -18、S P -81～85平面、土層断面図	62
第 41 図	S D -18、21、S P -68～80平面、土層断面図	65
第 42 図	S D -19平面、上層断面図	66
第 43 図	S D -20、S K -10、S R -09平面、土層断面図	67
第 44 図	S K -08平面、断面図	68
第 45 図	S K -09平面、立面、断面図	68
第 46 図	S K -10平面、土層断面図	68
第 47 図	S R -06・08平面、土層断面図	69
第 48 図	S R -06・08土器出土状況平面、土層断面図	70
第 49 図	S・T区第4遺構面平面図	71～72
第 50 図	U区第1遺構面・第2遺構面上層平面図	75～76
第 51 図	S D -11・22・23平面図	74
第 52 図	S D -35・40～43平面、土層断面図	77～78
第 53 図	U区第2遺構面下層、第3遺構面平面図	81～82
第 54 図	S D -54、S K -12平面図	80
第 55 図	S D -55、S E -05平面図	80
第 56 図	S D -74～77平面、上層断面図	83
第 57 図	S E -05平面、立面、土層断面図	84
第 58 図	S E -06平面図	85

第 59 図	S E -07平面、立面、土層断面図	85
第 60 図	S E -08平面、立面、土層断面図	86
第 61 図	S K -11平面、土層断面図	86
第 62 図	S P -86平面、断面図	86
第 63 図	S D -56、S N -03平面、断面図	87
第 64 図	S D -57、S N -04平面、断面図	89
第 65 図	S I -01（S N -06内）平面、断面図	90
第 66 図	U区第4遺構面上層、下層平面図、S R -11~14・18土層断面図	91~92
第 67 図	V区第2遺構面平面図	97~98
第 68 図	S D -01・04、包含層出土遺物	102
第 69 図	S E -01・02・03、出土遺物	104
第 70 図	S D -11・15出土遺物	105
第 71 図	S K -08、S R -06出土遺物	107
第 72 図	S R -07・08、S N -01・02、S P -53、包含層出土遺物	109
第 73 図	S D -11・22・24・38・60・S E -05・06・08出土遺物	111
第 74 図	S I -01、S P -86、包含層出土遺物	113
第 75 図	U区包含層出土遺物	114
第 76 図	S D -78出土遺物	116
第 77 図	S D -78・79出土遺物	117
第 78 図	S T -02出土遺物	119
第 79 図	V区包含層出土遺物（1）	120
第 80 図	V区包含層出土遺物（2）	121
第 81 図	出土錢貨	123
第 82 図	S E -01~03、S R -08出土木製品	126
第 83 図	S E -05・07、包含層出土木製品	127
第 84 図	S E -08、S R -11出土木製品	128
第 85 図	北新町遺跡出土繩文土器	130
第 86 図	試料採取地点（K区）	133
第 87 図	北新町遺跡の花粉ダイアグラム	134
第 88 図	北新町遺跡のプラント・オパールダイアグラム	137

第 89 図 万富東大寺瓦窯位置図	141
第 90 図 東大寺瓦出土遺構	142
第 91 図 東大寺瓦実測図	144
第 92 図 東大寺瓦採集地点	148
第 93 図 東大寺瓦搬送ルート	149

## 表 目 次

表 1 花粉帯と推定期	136
表 2 東大寺関連略年表	151
遺物観察表	153
木製品観察表	164
遺構一覧表	165

## 付 図 目 次

- 付図1 第1遺構面全体図
- 付図2 第2遺構面上層全体図
- 付図3 第2遺構面下層全体図
- 付図4 第3遺構面上層全体図
- 付図5 第3遺構面下層全体図
- 付図6 第4遺構面上層全体図
- 付図7 第4遺構面下層全体図
- 付図8 北新町遺跡近世遺構全体図
- 付図9 北新町遺跡中世前半（鎌倉時代）遺構全体図
- 付図10 北新町遺跡古代末～中世前半（平安～鎌倉時代）遺構全体図
- 付図11 北新町遺跡古墳時代～奈良時代遺構全体図
- 付図12 北新町遺跡古墳時代中期遺構全体図
- 付図13 北新町遺跡古墳時代前期遺構全体図
- 付図14 北新町遺跡弥生時代以前遺構全体図

## 図版編目次

- 図版1 R区第1遺構面 全景（北より）／SD-01・03（北より）
- 図版2 R区第1遺構面 SD-01（南より）／SD-02（北より）
- 図版3 R区第2遺構面 全景（北より）／SD-04（北より）
- 図版4 R区第2遺構面 SD-04（南より）／SD-04土層断面（南より）
- 図版5 R区第3遺構面 全景（北より）／全景（南より）
- 図版6 R区第3遺構面 SR-01・03、SK-01・02（北より）／上・SR-01  
土層断面（南より）、下・SR-02土層断面（南より）、  
上・SK-01（東より）、下・SK-02・03、SP-05・  
06（西より）
- 図版7 R区第3遺構面 6区SR-02と足跡群（東より）／6区足跡検出状況  
(北東より)
- 図版8 R区第4遺構面 全景（北より）／SD-08～10（東より）
- 図版9 R区 東壁土層断面SR-02付近（西より）／北壁土層断面S  
D-04付近（南より）
- 図版10 S区第1遺構面 1～4区全景（北より）／1～4区全景（南より）
- 図版11 S区第1遺構面 SD-11～13（南より）／上・SD-11・12合流付近  
(西より)、下・SD-11杭列、石（南より）、上・SD  
-11・14合流付近（北より）、下・SD-11・13（東よ  
り）
- 図版12 S区第1遺構面 SD-11・13（南より）／SD-11（北より）
- 図版13 S区第2遺構面 6・7区全景（北西より）／8・9区全景（南より）
- 図版14 S区第2遺構面 2～4区全景（北東より）／5・6区全景（南西より）
- 図版15 S区第2遺構面 SD-15、ピット（東より）／SD-15・16、ピット  
(北より)
- 図版16 S区第2遺構面 SE-01～03（北より）／上・SE-01（西より）、下・  
SE-01（北西より）、上・SE-02（南東より）、下・  
SE-02遺物出土状況（北より）

- 図版17 S区第2遺構面 上・S E-03(南より)、下・S E-03曲物検出状況(北より)、上・S K-06(南より)、下・S P-53瓦器  
椀出土状況(北西より)／S D-15遺物出土状況(西より)
- 図版18 S区第3遺構面上層 5・6区全景(北より)／6・7区全景(西より)
- 図版19 S区第3遺構面上層 5・6区畦畔検出状況、S N-01・02(南西より)／5・  
6区畦畔検出状況(北東より)
- 図版20 S区第3遺構面上層 7～9区畦畔検出状況(南より)／5～7区畦畔検出状況(北東より)
- 図版21 S区第3遺構面上層 5区S N-01、S M-01足跡群(北より)／上・5区足  
跡検出状況(南西より)、下・S N-01・02水口(北よ  
り)、上・6区水田耕作土須恵器出土状況(北より)、下・  
S N-01須恵器出土状況(南東より)
- 図版22 S区第3遺構面下層 1～3区全景(南より)／S R-06(北東より)
- 図版23 S区第3遺構面下層 S R-06(南西より)／S R-06土層断面(北東より)
- 図版24 S区第3遺構面下層 1・2区S R-06・08(東より)／1・2区S R-06・  
08(北より)
- 図版25 S区第3遺構面下層 1～3区全景(南より)／2～4区全景(北東より)
- 図版26 S区第3遺構面下層 5・6区全景(北より)／上・S R-09、S K-10(北  
より)、下・S D-18・21、S P-67～80(北東より)、  
上・9区S D-18、S P-81～85(南西より)、下・8  
区S D-19(北西より)
- 図版27 S区第4遺構面 1～3区全景(南より)／1～4区全景(北より)
- 図版28 S区第4遺構面 6区S R-10(西より)／上・S R-10(北西より)、  
下・6～9区全景(北より)、上・7・8区S R-10  
(西より)、下・7・8区S R-10(南より)
- 図版29 T区第1遺構面 全景(東より)／全景(西より)
- 図版30 T区第2遺構面 全景(東より)／全景(西より)
- 図版31 T区第3遺構面上層 全景S R-07(東より)／S R-07(南西より)
- 図版32 T区第3遺構面上層 水田面、段(東より)／水田面、段(南より)

- 図版33 T区第3遺構面下層 S R-06（北東より）／S R-06土器出土状況（北西より）
- 図版34 T区第3遺構面下層 全景 S R-06・08（東より）／上・S R-06（東より）、下・S R-08（西より）、上・S R-06土器出土状況（北東より）、下・S R-08土器出土状況（南東より）
- 図版35 T区第3遺構面下層 全景 S D-19、S R-06・08（東より）／全景 S D-19、S R-08（北西より）
- 図版36 T区第4遺構面 全景（東より）／全景（西より）
- 図版37 U区（南側）第1遺構面 全景（北より）／全景（北東より）
- 図版38 U区（南側）第1遺構面 全景（東より）／上・S D-23（西より）、下・S D-22（北より）、上・S D-25（東より）、下・S D-11・22（南より）
- 図版39 U区（南側）第2遺構面上層 全景（北より）／全景（南より）
- 図版40 U区（南側）第2遺構面下層 S E-05（東より）／上・S E-05遺物出土状況（北より）、下・S E-05土層断面（北より）、上・S K-11（北より）、F・S P-86土師器皿出土状況（南より）
- 図版41 U区（南側）第3遺構面 水田面畦畔検出途中（南西より）／上・1・10区水田面畦畔検出途中（南東より）、下・畦畔検出状況（南より）、上・1区水田面須恵器出土状況（南西より）、下・1区水田面須恵器出土状況（北東より）
- 図版42 U区（南側）第3遺構面 全景（北より）／全景（南より）
- 図版43 U区（南側）第3遺構面 畦畔検出状況（南西より）／S D-56、S N-03（南西より）
- 図版44 U区（南側）第3遺構面 畦畔検出状況（東より）／上・畦畔検出状況（南西より）、下・畦畔検出状況（北東より）、上・S D-57、S N-04（西より）、下・S D-57土器出土状況（東より）
- 図版45 U区（南側）第4遺構面上層 全景（南より）／S R-11（北東より）
- 図版46 U区（南側）第4遺構面上層 S R-12・13（東より）／S R-12・13（西より）

- 図版47 U区（南側）第4遺構面下層 全景（南東より）／S R-18・19（南東より）
- 図版48 U区（南側）第4遺構面上層・下層 S R-18・19（北西より）／上・S R-12上層断面（北壁）、下・S R-18上層断面（西壁）、上・S R-13土層断面（東壁）、下・S R-11土層断面（西壁）
- 図版49 U区（北側）第1遺構面 全景（南より）／上・S D-59・60・61（西より）、下・S D-58・65・66（西より）、上・S D-11（南より）、下・S D-60土層断面（東より）
- 図版50 U区（北側）第2遺構面上層 全景（北東より）／全景（南東より）
- 図版51 U区（北側）第2遺構面下層 S E-07（東より）／上・S E-07土層断面（東より）、下・S E-07曲物（東より）、上・S E-07曲物（東より）、下・S E-07曲物（東より）
- 図版52 U区（北側）第2遺構面下層 S E-08（東より）／上・S E-08遺物出土状況（南より）、下・S E-08遺物出土状況（東より）、上・S E-08遺物出土状況（北より）、下・S E-08曲物（東より）
- 図版53 U区（北側）第3遺構面 全景（南より）／全景（東より）
- 図版54 U区（北側）第3遺構面 全景（北東より）／全景（南東より）
- 図版55 U区（北側）第3遺構面 畦畔検出状況（北より）／上・7区畦畔水口（北東より）、下・8区畦畔水口（南西より）、上・S N-06検出状況（北東より）、下・S I-01（S N-06内）土器出土状況（東より）
- 図版56 U区（北側）第4遺構面上層 全景（南より）／全景（北より）
- 図版57 U区（北側）第4遺構面上層 S R-14・15（東より）／上・S R-14（北東より）、下・S R-15（西より）、上・生物痕、下・生物痕（拡大）
- 図版58 U区（北側）第4遺構面上層 全景（南より）／全景（北東より）
- 図版59 V区（南側）第2遺構面 全景（南東より）／左・全景（北より）、上・S K-13～16（北より）、下・S D-79（南より）

図版60	V区（南側）第3遺構面	左・全景（北より）、右・全景（南より）／須恵器 甕出土状況（東より）
図版61	V区（北側）第2遺構面	全景（北より）／全景（南より）
図版62	V区（北側）第2遺構面	左・S X-04（S D-78内）遺物出土状況（北より）、 右・S X-02（S D-78内）遺物出土状況（北より）／ 上・S X-03（S D-78内）遺物出土状況（西より）、 下・S D-78土師器皿出土状況（南西より）、上・ S D-78土層断面（南より）、下・S X-05（S T -02内）遺物出土状況（西より）
図版63	V区（北側）	最終面（北より）／最終面（南より）
図版64	R区出土遺物	S D-01・04、包含層
図版65	R区出土遺物	包含層
図版66	S区出土遺物	S E-01、S K-08
図版67	S区出土遺物	S E-01・02
図版68	S区出土遺物	S E-03、S D-11
図版69	S区出土遺物	S D-11
図版70	S区出土遺物	S D-11
図版71	S区出土遺物	S D-11
図版72	S区出土遺物	S D-11・15、包含層
図版73	S区出土遺物	S D-15
図版74	S・T区出土遺物	S R-06
図版75	S・T区出土遺物	S R-06
図版76	S・T区出土遺物	S R-07・08
図版77	S・T区出土遺物	S P-53、S N-01・02、包含層
図版78	S・T区出土遺物	S R-06、包含層出土白磁、灰釉
図版79	U区出土遺物	S E-05・08
図版80	U区出土遺物	S E-08、S D-38
図版81	U区出土遺物	S D-11・22・24・60、包含層
図版82	U区出土遺物	S I-01
図版83	U区出土遺物	S I-01、包含層

图版84	U区出土遗物	S E -06、S P -86、包含层
图版85	U区出土遗物	包含层
图版86	U区出土遗物	包含层出土白磁、青磁
图版87	U区出土遗物	S D -11 • 22、包含层
图版88	V区出土遗物	S D -78
图版89	V区出土遗物	S D -78
图版90	V区出土遗物	S D -78
图版91	V区出土遗物	S D -78 • 79
图版92	V区出土遗物	S T -02、S D -79
图版93	V区出土遗物	S T -02
图版94	V区出土遗物	S D -78、S T -02、包含层
图版95	V区出土遗物	包含层出土青磁、白磁
图版96	V区出土遗物	包含层
图版97	S区出土木製品	S E -01 • 02 • 03、S R -08
图版98	U区出土木製品	S E -05 • 07 • 08、S R -11、包含层

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経過

昭和60年大阪府建築部（以下府建築部）より、JR学研都市線四条畷駅西側にある府営大東北新町住宅（当初は大東四條畷住宅）建替え工事の計画が出された。その内容は、既存の平屋住宅を順次中層の住宅に建替えていくもので、まず第一期工事分として、全敷地面積約42,000m<sup>2</sup>のうち北側の約12,000m<sup>2</sup>について実施されることになり、これを受けて大阪府教育委員会（以下府教育委員会）では建替え工事に先立ち、同年7月に試掘調査を実施し、その結果、府営住宅を中心に遺跡の存在することが確認された。試掘調査の結果に基づき、この遺跡を北新町遺跡と命名し新規の遺跡として登録する一方、府建築部に対しては、第一期工事はもちろん

のこと、今後の建替え工事についても事前の発掘調査が必要であることを説いた。府建築部も調査の必要性を認識し、大東市教育委員会（以下市教育委員会）を含めた三者で具体的な調査方法について協議を重ねた結果、三者による北新町遺跡調査会（以下調査会）を新たに設立し、その調査部長に帝塚山短期大学田代克巳教授を迎え、調査を委託して実施することで合意に達した。早速、第一期建替え工事に伴う調査に対応すべく、昭和60年11月25日に市教育委員会社会教育課内に事務局を置く調査会を設立し、府教育委員会



第1図 大東市位置図

文化財保護課技師辻本武が調査指導員として調査を担当することになった。

第Ⅰ期調査は、敷地北側の第一期工事分約12,000m<sup>2</sup>のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分等を対象とし、A～F区の調査区を設定して総面積約4,236m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。調査は外業調査を昭和60年12月～翌61年5月まで実施し、引き続き内業整理作業を行い、同年10月にすべての作業を完了して、報告書の刊行をもって調査会を解散している。

第Ⅱ期調査は、第一期工事区の南側にあたる第二期工事分約12,000m<sup>2</sup>のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分に加え水路付け替え部分等を対象とし、G～J区の調査区を設定して総面積約3,700m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。第Ⅰ期調査と同様に、三者による調査会を昭和62年9月大東市立歴史民俗資料館に事務局を置いて設立し、調査部長を田代教授に依頼し、調査指導員は府文化財保護課技師松岡良憲が担当した。調査は外業調査を昭和62年9月から翌63年11月まで実施し、引き続き内業整理作業を行い、平成元年7月に終了し、報告書の刊行をもって同年に調査会を解散している。

第Ⅲ期調査は、第二期工事区の南側にあたる第三期工事分約12,000m<sup>2</sup>のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分、水路付け替え部分、道路拡幅部分等を対象とし、K～Q区の調査区を設定して総面積約6649m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することになり、これに伴い平成2年9月4日に第Ⅰ・Ⅱ期調査と同様に調査会を設立した。調査は平成2年11月27日に南側のM区から順次行い、平成5年3月3日にK区の調査が終了して外業調査を完了した。その後引き続き、第四期工事に伴う第Ⅳ期調査が開始されるが、内業調査はこれと併行して行い、平成9年3月31日に報告書の刊行をもって作業を完了している。

今回報告する第Ⅳ期調査は、第一～三期工事区の東側にあたる第四期工事分約6,000m<sup>2</sup>のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分、道路拡幅部分等を対象とし、R～U区の調査区を設定して総面積約3485m<sup>2</sup>について実施した発掘調査に関するものである。調査は第Ⅲ期調査から継続して、北新町遺跡調査会が行なった。調査は平成5年7月1日に南側のR区から順次行い、平成7年1月19日にU区の調査終了をもって外業調査は完了したはずであったが、平成8年12月に府建築部より住宅敷地西側の水路改修工事の計画が出された。当該工事に伴う発掘調査に関しては、府教育委員会、市教育委員会とも、既に第Ⅲ期調査（N区）において調査を完了しているものと了解していたが、今回の計画は、当初の計画位置よりも西側へ変更されており、現況の水路とほぼ重複しているものの中世の遺構面の存在が推定される場所であった。直ちに三者による協議のうえ、まず現況

水路による攪乱が、遺構面にどれだけ影響を与えているのかを確認するための試掘調査を実施した。その結果、中世の遺物包含層が確認され、遺構面も残っている可能性が高いことが判明したため、急遽発掘調査を実施することとなった。調査名をⅣ-4、調査トレンチ名をV区として、外業調査を平成9年2月12日に開始し、これに連続する内業調査も含めて同年3月31日まで実施した。その後引き続き平成9年4月1日から第Ⅳ期調査の報告書作成に関する内業調査を実施し、平成10年3月31日をもってすべての作業を完了した。そして同年5月、本書の刊行をもって、府営大東北新町住宅建替え工事に伴う発掘調査はすべて完了したことになり、同年5月26日の委員会により、北新町遺跡調査会を解散した。

#### 建替え工事と調査区及び調査名、トレンチ名の関係

工事名	調査区(名)	調査名	トレンチ名	報告書名
第一期建替え工事	第Ⅰ期調査区	K S M I	A～F区	大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書 <sup>(2)</sup> (1986)
第二期建替え工事	第Ⅱ期調査区	K S M II	G～J区	北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書 <sup>(3)</sup> (1991)
第三期建替え工事	第Ⅲ期調査区	K S M III	K～Q区	北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書 <sup>(4)</sup> (1997)
第四期建替え工事	第Ⅳ期調査区	K S M IV	R～V区	本書

## 第2節 これまでの成果

前節で記述したように、府営住宅敷地内ではこれまでに調査会による発掘調査が実施されているが、また、これとは別に第Ⅱ期調査区と第Ⅲ期調査区の間の敷地約2118m<sup>2</sup>を対象として、都市計画道路四条駅前西線建設工事に伴い、平成2年5月から平成5年12月の間5次にわたり、大東市教育委員会によって実施されている。<sup>(5)</sup>いずれの調査においても古墳時代～近世に至る遺構面が確認されており、特に中世（鎌倉時代）に関しては、この時期の集落跡が広範囲にわたって存在していたことが確認されている。また、第Ⅰ期調査では、奈良時代の自然河川から人面墨書き土器が出土しており、第Ⅱ期調査では、古墳時代の水田跡と中期に属すると考えられる大型の掘立柱建物跡が検出され、同時代の井戸からは、井戸枠に転用された木製の戸口装置一式（扉、敷居、鶴居などの部材がセットで）が出土<sup>(6)</sup>している。さらに第Ⅲ期調査では、中世の井戸の内部施設に使用されていた平瓦のなかに「東大寺」の刻印のあるものが出土している。<sup>(7)</sup>この瓦は、1180年に平氏の南都攻めによって焼失した東大寺を再建するため、12世紀末～13世紀初頭にかけて、岡山県瀬戸町にある万富瓦窯で焼かれたもので、その窯の操業には、当時再建のため大勘進職に任せられた俊



第2図 調査区位置図

乗坊重源が深く関与していたとされている。そして、都市計画道路調査では、ピットと推定される遺構より、和鏡（花枝双鳥文鏡）が出土している。<sup>(9)</sup>このように北新町遺跡では、これまで多大な調査成果が得られており、これら調査成果の詳細については、既にそれぞれ調査報告書が刊行されているので、そちらを参照されたい。

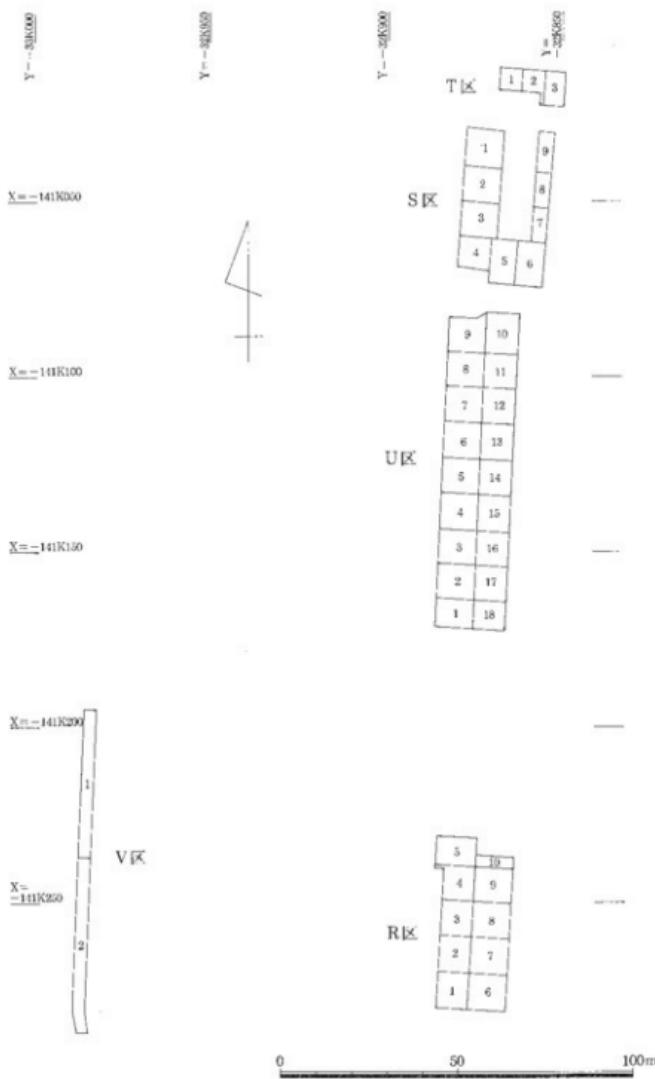
### 第3節 調査方法

調査トレンチは既往の調査と同様に、住棟部分については各種の埋設管工事が予想される外周部分を考慮して、トレンチの輪郭が住棟部の周囲から約1m外側になるように、余分に設定した。また、浄化槽や貯留槽などの付随施設が設置される場所についても調査対象となった他、今回の調査では、敷地西側の水路改修部分、北側と東側の周回道路拡幅部分についても調査対象となった。調査は基本的に、単年度で住棟1棟分若しくはその付随施設部分を調査するものとした。各トレンチ名は第2図に示す通り、これまでの調査のA～Q区に続くR～V区を大割りの名称として使用した。

記録作業は、従来の実測作業とクレーンによる空中写真測量との併用で図化を行い、作業時間の短縮化を図った。今回対象となった府営住宅の敷地は、ほぼ国土座標のメッシュに合致しており、測量などの基準については、国土座標第IV系をそのまま使用した。地区割りについては第3図に示す通り、各トレンチを約10m単位で区切る新たなものを設定してアラビア数字を付し、これにトレンチ名のアルファベットを冠して表示し（例：R-1区、U-3区など）、遺物の取り上げ、本文中の記述もこれに従っている。

掘削深度は、これまでの調査結果に基づきG L-約0.5mでの盛上・旧耕作土部分をバッカホウによる機械掘削を行い、G L-約2～2.2mの地山面まで人力掘削を行なった。ただし、V区に関しては、水路改修工事の影響を及ぼす範囲内であるG L-1.3mまでを対象とした。

これまでの掘削方法は、基本的には調査トレンチを分割することなく実施してきたが、U区については、掘削の残土置き場が足りないため、トレンチを北側（U-6～9、15～18区）と南側（U-1～5、10～14区）に分けて、南側から着手し、調査終了後埋め戻し、北側を調査する反転調査を実施し、V区については、残土置き場の関係と水路改修工事の工程も考慮して、トレンチの南側（V-2区）から着手し、終了後、北側（V-1区）の調査を実施した。



第3図 調査区割り図

註

- (1)昭和32年に建築された。
- (2)『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』1986大東市北新町遺跡調査会
- (3)『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』1991大東市北新町遺跡調査会
- (4)『北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書』1997大東市北新町遺跡調査会
- (5)『北新町遺跡発掘調査報告書』1994大東市教育委員会
- (6)(2)に同じ。
- (7)(3)に同じ。※戸口装置一式は平成3年に大東市指定文化財となっている。
- (8)(4)に同じ。
- (9)(5)に同じ。※この調査では「美濃」の刻印入り須恵器片も出土している。

## 第2章 位置と環境（第4図）

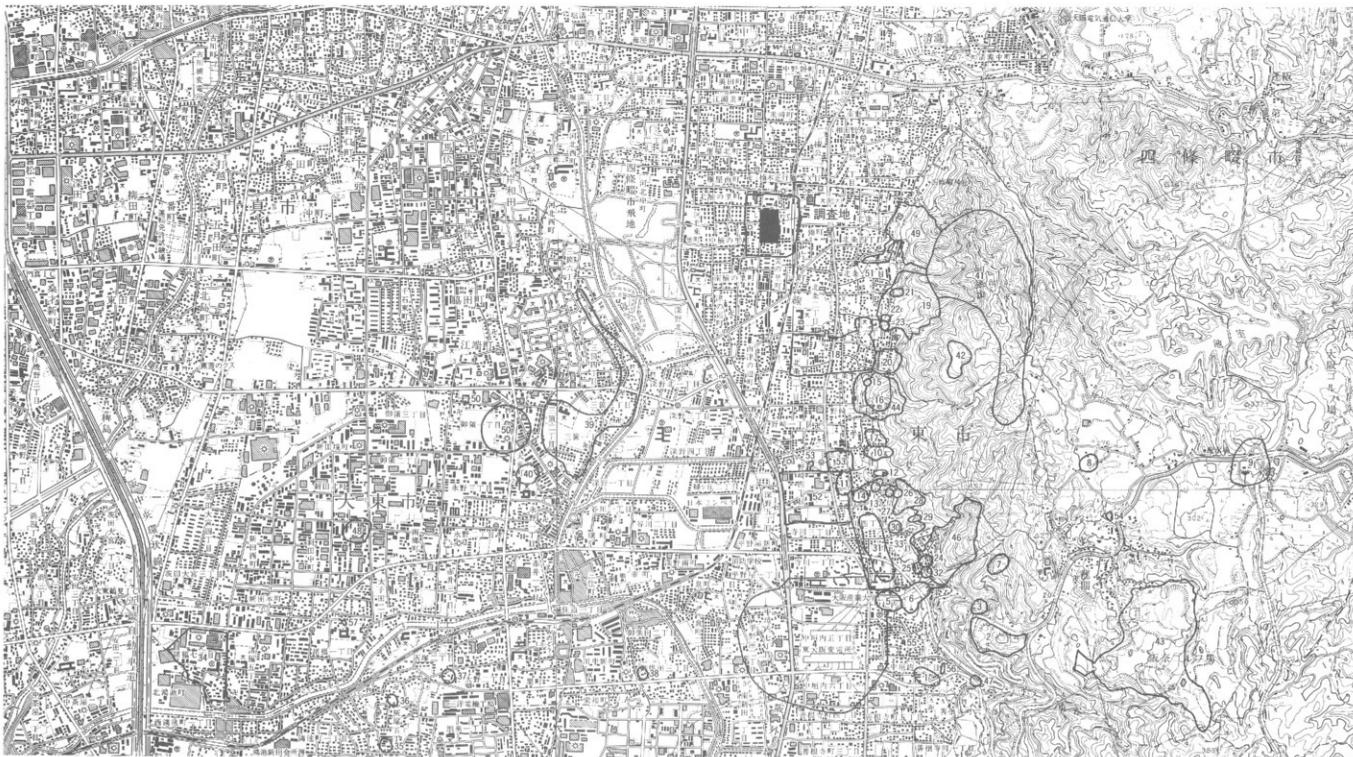
### 第1節 地理的環境

北新町遺跡の所在する大東市は大阪府の中部にあり、河内平野のはば中央部に位置している。市域の周囲は東南端の一部で奈良県生駒市と接し、東から北にかけては四條畷市と寝屋川市、西北は門真市、西は大阪市、南は東大阪市に接している。市域の面積は約18,058haで、人口約13万人（1998年現在）を数える。当地域は旧国名で河内国にあたり、その北部に位置することから枚方、交野、寝屋川、門真、守口、四條畷の各市を合わせて北河内と呼称されることが多い。

市域の地形を概観すると、山地、丘陵地、平地の主な三地形に分類され、山地、丘陵地で市域のはば東半分を占めている。山地は生駒山地が南北に走っている。生駒山地は南から信貴山、生駒山と高度を上げるが、生駒山頂から北に向かって一旦高度を下げ、大東市竜間付近から再び高度を上げて、市域の東にある飯盛山に続いている。飯盛山も山頂の標高314mをピークとして、清滝峠に向かって高度を下げており、北西の枚方丘陵へと続いている。山塊の切れる竜間、清滝は古来から河内と大和を結ぶ重要な山越えのルートであり、竜間越え、清滝越えなどと呼ばれて来た。現在も阪奈道路、国道163号線が、ほぼ旧道に沿って走り、大阪と奈良を結ぶ主要幹線道になっている。山地の西側は尾根が張り出し、急激に高度を下げて平地へ続いており、山地と平地の間には丘陵地があり、緩やかな傾斜で平地へと続いている。山地、丘陵地には一部大阪層群がみられるが、大部分が領家花崗岩類で構成されている。市域の西半分を占める平地は沖積地で、山麓には、山地より流れだす中小河川にによって小規模な扇状地が形成されており、それから西はほとんど高度を変えることなく平坦で、かつては低湿地であったところであり、表土の下には粘土、シルト、砂等などの水性堆積の起因による層が堆積している。平地のはば中央部である住道で、北から流れてくる寝屋川と南から流れてくる恩智川が合流し、西に向かって流れている。これが現在の大東市の地形であるが、ここに至るまでは太古より自然的、人為的影響を受けて地形を変遷させてきたものであり、遺跡の立地と分布はその時代の地形の変遷に深く関係してゐるものと考えられる。

### 第2節 歴史的環境

市域の遺跡について述べるとき、地形の変遷が深く係わっていることは前節で述べた通



- |            |            |           |          |            |          |           |
|------------|------------|-----------|----------|------------|----------|-----------|
| ① 若宮遺跡     | ⑨ 畠間遺跡     | ⑩ 福源寺古墳   | ⑪ 城の越古墳  | ⑫ 寺川道路     | ⑬ 坂山古墳群  | ⑭ 墓谷古墳群   |
| ② 見面高高地遺跡  | ⑩ 福源寺遺跡    | ⑫ 北条古墳群   | ⑫ 寺山土古墳  | ⑮ 西諸風原跡    | ⑮ 北条東古墳群 | ⑯ 御須道跡    |
| ③ 七ヶ堀古墳    | ⑪ メノ遺跡     | ⑬ 宮谷古墳群   | ⑬ 富山下古墳  | ⑯ 灰塚古墳     | ⑯ 石垣場跡   | ⑰ 城・谷遺跡   |
| ④ 中垣内遺跡    | ⑫ 墓垣内道路    | ⑭ 大伴家古墳   | ⑭ 富山古墳群  | ⑯ 灰塚堂山遺跡   | ⑯ 野町城跡   | ⑱ 寺川御遺跡   |
| ⑤ 元粉河遺跡    | ⑬ 市寺川配水場古墳 | ⑮ 北条古墳    | ⑮ 六堆古墳   | ⑯ 灰塚水道局水場跡 | ⑯ 北野町遺跡  | ⑲ 野崎多田遺跡  |
| ⑥ 銀川遺跡     | ⑭ 瓦室遺跡     | ⑯ 北条古墳    | ⑯ 十孫寺古墳  | ⑯ 御供田遺跡    | ⑯ 大谷古墳群  | ⑳ 屯門マツウ道路 |
| ⑦ 太鼓山遺跡    | ⑮ やき山古墳    | ⑯ 北条古墳    | ⑯ 寺川古墳群  | ⑯ 三段遺跡     | ⑯ 大坂城残石  | ㉑ 中垣内東道路  |
| ⑧ 電閣ハンサカ道路 | ⑯ 野崎道路     | ⑯ 城の越上の古墳 | ⑯ 大谷神社古墳 | ⑯ 水野遺跡     | ㉒ 新田遺跡   | ㉓ 若宮東遺跡   |
|            |            |           |          |            |          | ㉔ 諸福社・堂遺跡 |

第4図 市内遺跡分布図

りであるが、それは大阪平野の変遷、歴史そのものを指している。大阪平野の歴史については梶山彦太郎、市原実尚氏の研究によって明らかにされつつあり、ここではその研究成果による大阪平野の変遷を辿りつつ、市域の遺跡について時代を追って説明していくことにする。

#### 旧石器時代

今から約2万年前はウルム氷期の最盛期で、両極の氷河の発達により地球的規模で海平面が約150m低下し、海岸線の後退が起こっていた。当時の大阪の海岸線は現在のそれよりもずっと沖にあったと考えられており、大阪湾はもちろんのこと瀬戸内海も陸地化しており、現在の大坂平野よりも広い平野が広がっていたことが推定されている。地質学の分野では、大阪湾を含むこの平野は「古大阪平野」と呼ばれている。約2万年前といえば後期旧石器時代の終り頃に相当するが、市域では北条遺跡、宮谷古墳群で後期に属すると考えられる有尖頭器が出土しているのみであり、今のところこの時代の生活面は検出されていない。

#### 縄文時代

約1万年前頃になると、地球的規模での気候の温暖化が進み、海平面の上昇が起こった。それでも現在の海平面より約20mは低かったと推定されており、海岸線はまだ沖にあったものと考えられている。南北に伸びる今の上町台地の両側に広がっていたこの陸地は、「古河内平野」と呼ばれている。この時代は考古学的には縄文時代早期に相当するが、市域では鍋田川遺跡で早期末の土器が出土しているのみである。その後も温暖化は進み、約6000年前の縄文時代中期頃には最も海平面が上昇し、古河内平野は上町台地を除き海域となり、「河内湾」と呼ばれる内湾が形成されるに至った。いわゆる縄文海進と呼ばれる現象で、市域のほとんどは海水域となり、飯盛山西麓まで海岸線が迫り山地との間にわずかに陸地を残すのみであったと考えられている。したがって、それ以前の遺跡は水没することになり、さらにその後の堆積作用により沖積層の下に埋没することになる。結果として旧石器時代も含めた早期から前期の遺跡の発見は、水没を免れた丘陵地以外は期待できず、市域では上方からの流れ込みによる土器の出土はあるが、生活面を検出することが困難な状況となっている。その後晩期頃までは湾の状態が続き、前者は「河内湾Ⅰ」、後者は「河内湾Ⅱ」と呼ばれている。中期から晩期まででは、本遺跡で奈良時代の自然河川から中後期～晩期末の土器が出土しており、丘陵上に立地する城ヶ谷遺跡では晩期末の船橋式土器が、鍋田川遺跡でも晩期の土器が出土しているが、いづれも遺構に伴うものではな

く上方からの流れこみによるものである。しかし、最近中垣内遺跡で土坑と推定される浅い窪地状の遺構から中期の北白川C式土器が出土しており、海岸線に近い水際にも集落が存在していたことが推定される。

#### 弥生時代

河内湾はそこへ流れこむ河川などの堆積作用により、次第に外海と隔てられるようになり、縄文時代晩期末～弥生時代前期頃には、湾から「河内潟」となり、その後外海とは完全に隔てられ、弥生時代後期までには「河内湖」と呼ばれる淡水湖が形成される。この時代の遺跡としては、河内潟の水際に立地していたと考えられる中垣内遺跡や北条西遺跡、野崎条里遺跡等がある。特に中垣内遺跡では、現在の関西電力東大阪変電所敷地内で集落跡が検出されており、東大阪市鬼虎川遺跡や四條畷市椎屋遺跡と並び前期の拠点的集落であったと考えられている。中期では、河内潟の中の低湿地で一時的に特異な立地を見せる西諸福遺跡や、前述の中垣内遺跡でも引き続き集落が営まれていたことが判明している。後期では丘陵部にも立地をするようになり、各遺跡から遺物が出土している。北条遺跡ではこの時期の堅穴住居が検出されており、手培り形土器が出土している。

#### 古墳時代

河内湖形成以後も堆積作用により湖の規模は縮小するが、以前として市域の大半が水域に覆われていたと考えられている。飯盛山から派生する丘陵上には古墳が造営され、その西麓の河内湖縁辺部では集落が営まれたようである。古墳に関しては、調査例が少ないため不明な点が多いが、市域では今のところ前期に属するものは確認されていない。中期に入ると三角板皮縫短甲、衝角付冑、鉄刀、鉄鎌等、多量の鉄製武器・武具類が出土した堂山1号墳が造営される。この古墳は標高約100mの尾根上にある径25mを測る円墳で、出土遺物の内容等から、5世紀中葉～後半頃の首長墓的性格の強い古墳であり、初期須恵器を伴うことから、被葬者として当時朝鮮半島と関係の深い人物が考えられている。この他に、5世紀中葉の円筒埴輪が採集された峯垣内古墳があり、また瓦堂寺院跡では、堂山1号墳より遡る5世紀前半の円筒埴輪が採集されている。後期古墳では北条1～3号墳、多量の形象埴輪が出土し、横穴式石室を主体部にもつ宮谷1号墳、横穴式石室基底部が残存し、鉄刀、玉類などの副葬品が出土した城ヶ谷1・2号墳、円筒埴輪が10數本出土したと伝えられる六地蔵古墳等の他、群集墳では堂山古墳群、墓谷古墳群、宮谷古墳群、北条古墳群、寺川古墳群、大谷古墳群等が知られており、後期に入ると数多くの古墳が造営されていたことが推定されている。集落に関しては、祭祀色の強い前期の中垣内遺跡、鍋田川

遺跡があり、本遺跡では中期の倉庫群と推定される掘立柱建物跡を検出している。また本遺跡の他、鍋田川遺跡、北条遺跡、宮谷古墳群、メノコ遺跡、堂山下遺跡等では韓式土器、陶質土器、初期須恵器等が出土しており、渡来系の人々との関連が考えられている。

#### 奈良時代～平安時代

この時代は各遺跡より遺物の出土をみるが、具体的な遺構の検出例は少なく不明な点が多い。本遺跡で奈良時代の自然河川が検出され、そこから人面墨書き土器が出土している他、寺川遺跡でも自然河川から同時代の遺物の出土と建物跡の検出が報告されている。

#### 中世

中世に入るとこの地域は、古代河内湖がそこへ流れ込む河川の堆積作用により徐々にその範囲を狭められ、勿入渕（広見池）と呼ばれる湖に姿を変え、そして、湖の東縁には東高野街道が生駒山麓を南北に走るという水陸両交通の出会う重要な場所であった。この時代の遺跡は東高野街道沿いから湖までの間の低地上に立地していると考えられる。その代表的なものが本遺跡で、鎌倉時代の集落跡が広い範囲で検出されており、この時代の集落の景観を復元するのに大変重要な遺跡となっている。また最近、本遺跡の西方に位置し、これまで遺物の採集はあたっものの、湖の中の低湿地と考えられていた御領遺跡で、本遺跡より時期の下る鎌倉時代終わりから室町時代の集落跡が発見されている。この頃になると勿入渕も、河川の堆積作用などにより水深が浅くなり湖の陸地化が進行し、このようにして形成された微高地に新たに集落が営まれたのであろう。他に同様な立地を示す遺跡には灰塚遺跡、灰塚堂田遺跡、西諸福遺跡等がある。また、この時代は各所で開墾、開発が行なわれたようで、丘陵部に立地する城ヶ谷遺跡でも開発の跡を残す段状遺構と杭列が検出されている。東高野街道以東の丘陵地には、遺構は検出していないものの、中世の遺物が各所に散布しており、開発が盛んに行なわれたことを物語っている。時代が少し下降して中世後半には、眼下に東高野街道と湖を見下ろすという絶好の交通の要衝にあり、戦国時代に一時に畿内支配に成功した三好長慶の居城となった飯盛山城や、宣教師ルイス・フロイス記述の「日本史」に登場する、キリストン大名三箇サンチョの居城であった三箇城が存在した。三箇城は湖に形成された島に存在したと伝えられており、このことから、当時の湖はさらに堆積作用が進行し、微高地から発達した島が湖のあちこちに点在していたようである。残念ながら、今のところ三箇城に関連づけられる遺構・遺物は検出されていない。

## 近世

近世になると、湖は深野池とその西方にある新開池となり、二つの池が形成され、池同士は、一本の川でつながっていた様子が古地図に描かれている。近世の遺跡としては、徳川家により元和六年（1620）から始まる、大坂城再築に伴う石垣用石の採石場が、生駒山中の竜間に存在する。石切場跡遺跡や国見高地性遺跡がそれで、刻印石や矢穴の残る石が今も点在している。また、石の運搬経路であった麓の中垣内1丁目には、大坂城残石と呼ばれる巨石が存在するが、これにも当時石垣工事を請け負った諸藩の刻印がなされている。この場所は竜間に山中で切り出され、谷筋を利用して麓まで運ばれた石を、ここから船に引かして、深野池、新開池を通り大坂城に運んだ中繼地であったと考えられている。近世も中頃に入ると、宝永元年（1704）に大和川の付替え工事が行なわれ、これ以後古代河内湖の名残である深野池、新開池等の池沼は新田開発により陸地化が進み、ほぼ現在の大東市に近い姿になる。

## 参考文献

- 2万5千分の1土地条件図（大阪東北部）昭和58年 国土地理院  
『大東市史』1973 大東市教育委員会  
『大阪府史・第一巻古代編I』1978 大阪府  
梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』1986 青木書店  
『中垣内遺跡発掘調査報告書』1990 大東市教育委員会  
『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書』1991 大東市教育委員会  
『中垣内遺跡発掘調査報告書』1997 大東市教育委員会  
黒田淳「北条遺跡」「鍋田川遺跡」「宮谷古墳群」「韓式系土器研究II」1989 韓式系土器研究会  
中達健一「大東市メノコ遺跡出土の韓式系土器」「韓式系土器研究IV」1993 韩式系土器研究会  
『鍋田川遺跡発掘調査概要・I』1992 大阪府教育委員会  
『城ヶ谷遺跡発掘調査報告書』1990 大東市教育委員会  
『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987 大東市教育委員会  
『堂山古墳群発掘調査概要』1973 大阪府教育委員会  
『堂山古墳群発掘調査概要』1994 大阪府教育委員会  
『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』1986 大東市北新町遺跡調査会  
『大東市北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』1991 大東市北新町遺跡調査会  
『北新町遺跡発掘調査報告書』1994 大東市教育委員会  
『平成7年度発掘調査報展（御領遺跡）』1996 大東市立歴史民俗資料館  
『近世大東の新田開発』1990 大東市立歴史民俗資料館  
和田翠「河内の古道」「環境文化」第51号1981 財團法人環境文化研究所  
日下雅義「第III章 第1節 第2項 歴史・地理の景観」「河内平野遺跡群の動態I」1987 財團法人大阪文化財センター  
『寺川遺跡発掘調査報告書』1997 大東市教育委員会  
『北新町遺跡発掘調査報告書』1997 大東市教育委員会

### 第3章 基本層序（第5図）

既刊の第III期調査の報告と同様に、層序と遺構面の関係を理解しやすいものとするため、各層を所属時期ごとにまとめた基本層序を設定して各遺構面との関係を示し、各トレンチにおける基本層序を柱状図（第5図）で表することにする。なお、この基本層序は第III期調査で設定したものに準じている。<sup>(1)</sup>

#### 基本層序Ⅰ層

盛土と旧耕作土から成る。盛土は平屋の旧府営住宅建設時のもので、旧耕作土はそれ以前の地表面である。盛土表面は現在の地表面で、標高はR区でT.P.+4.6~5.2m、S区でT.P.+6.7~7.1m、T区でT.P.+7.3~7.4m、U区でT.P.+5.6~6.8m、V区でT.P.+4.4~4.9mを測り、柱状図から、敷地の北側から南側へかなりの傾斜が認められる。旧耕作土は灰色～黒灰色を呈し、後世の削平により消失している場所もあるが、層厚約10~30cmを測り、第IV期調査区ではほぼ全体に認められ、府営住宅敷地内及びその周辺でも普遍的に認められる層である。府営住宅が建てられるまでは、水田や畑として利用されており、よく観察すると無数の耕作痕（鋤溝）が認められる。包含する遺物から、近世～近代にかけて形成された層であると考えられる。

#### 基本層序Ⅱ層

旧耕作土の直下に堆積する水田の床土となっていた、上層の灰白色～青灰色砂混じり粘質土とその下に堆積する黄灰色～黄橙色粘質土から成る。上層の灰白色～青灰色砂混じり粘質土は、基本層序Ⅰ層の旧耕作土とセットで、敷地内及びその周辺で普遍的に認められる層で、第1遺構面のベースとなっている層である。断面観察では、南北方向、東西方向に走る無数の耕作痕が重なり合う状態で観察され、分層をしづらいものとしている。間層として冠水によると考えられる薄いシルトや砂層の堆積が認められるが、長期間池や沼地の状態であったわけではなく一時的なもので、それ以外は安定した耕作地として利用されていたようである。包含する遺物から中世末～近世にかけて形成された層であると考えている。<sup>(2)</sup>

#### 基本層序Ⅲ層

第2遺構面のベースとなっている層である。第II・III期調査区では各トレンチの西側半分で、この層の上面において中世の遺構を多数検出しておらず、遺物も多数包含していたが、東側では層厚も薄くなり、遺構が減少するとともに耕作痕（鋤溝）が見られるだけであっ

た。西側でこの層が厚く堆積している理由の一つとして、中世集落の整地によることが考えられる。今回の調査では、V区を除き、各トレンチの位置が既往の調査区の東側にあるため、この層の上面での遺構検出は希薄であったが、S・U区では部分的に整地層と考えられる層が認められ、やはりこの部分に限って溝や井戸、柱穴等を検出している。しかし、第Ⅲ期調査M区のように、この層の下層において奈良時代末～平安時代の遺構は検出されていないので、この時期は欠落しているものと考えられる。したがって時期は明確ではないが、平安末～中世末に形成された層であると考えている。

#### 基本層序Ⅳ層

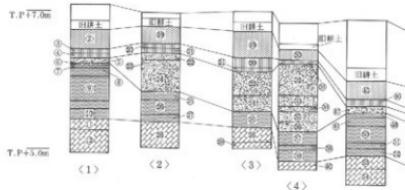
第3遺構面で検出した水田面のベース層である褐色粘土層が主体となっているが、場所によっては色調は同じでも砂やシルトが多く混ざる所もある。水田面の検出状況を見ると、北側に位置するS・U区で良好であった。水田の直上には砂、シルトが堆積するが、砂が堆積している所は、概して畦畔の残りが良くない傾向があった。この傾向は、第Ⅳ期調査区の南側へ行くほど顕著で、R区では畦畔を検出することができなかった。遺物は小片が少量含まれる程度であるため、所属時期を今一つ明確にし得ないが、水田が古墳時代と考えられているので、弥生時代末～古墳時代にかけて形成されたものと考えている。

#### 基本層序Ⅴ層

Ⅳ層直下の堆積層で、各トレンチによって層厚は異なるがシルト～砂を主体とする層で、既往の調査結果より、敷地内全体に普遍的に認められる層である。遺物はほとんど含まれていないので所属時期を明確にし得ないが、弥生時代前期～末にかけて形成されたものと推定している。

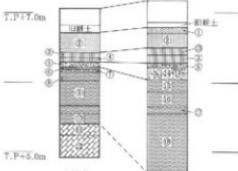
#### 基本層序Ⅵ層

最終遺構面である第4遺構面のベース層となっている黒色粘土層とその下位に堆積する砂、シルトから成る。既往の調査結果から、敷地内全体で普遍的に認められる層で、第Ⅲ期調査O区で実施した最終面からの上層確認トレンチでは、黒色粘土層より下位では砂、シルト、黒色粘土等がほぼ水平に交互に堆積を繰り返しているのが確認されている。<sup>(4)</sup>従来からいわれている河内渦、河内湖によって形成された堆積層と推定され、生活面の存在がほとんど期待できない層である。調査では基本的に上層の黒色粘土を地山と考えて、最終遺構面である第4遺構面として、大小の自然流路を検出している。またU区では下位の黒色粘土をベース層として遺構面（第4遺構面下層）を検出しているが、第4遺構面と同様に自然流路が検出されただけであった。

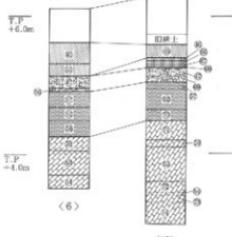
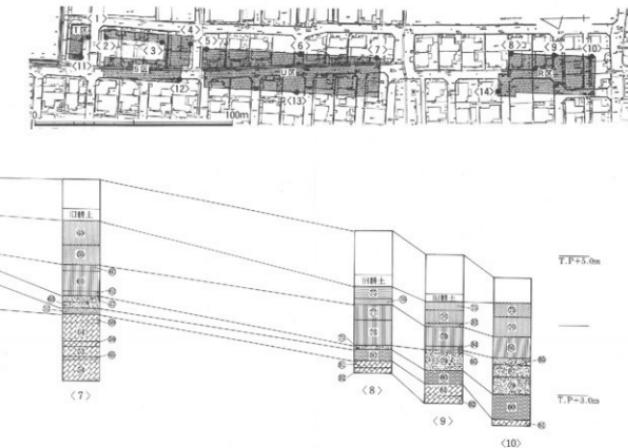


#### 1 粘 土 团 耕 土

- 日解 混合黄色系土(5YR7/6)  
 ①にべい・黄褐色砂粒じり土上(10YR6/3) マンソン層被  
 ②褐色砂粒土(10YR4/1) にべい・黄色の地被  
 ③にべい・黄色砂粒じり土(10YR7/3) 長根、マンソン層被  
 ④浅黄色砂粒じり土(5Y7/3) 青オーライト土(5Y6/2)  
 ⑤浅黄色土上(5Y7/3) ⑥ 浅黄色砂粒じり土質土(5Y7/4)  
 ⑦オーライト砂粒じり土上(7-5Y5/2) ⑧ にべい・褐色砂粒じり土(7-5Y5/4)

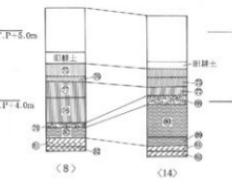


Ⅲ層 ② 淡黄色砂質土(2.5Y7/3) 下部に明黄色褐色風砂(10YR7/6)が堆积



• 100 •

- シート(10YR4/2) 色斑 マンガン斑  
鉛斑(10YR4/1)  
シート(5YV4/1) 棕色地緑縫(5YV2/1) ラミナード  
土生(10YV4/2) 稀少が多い  
シート(10YR6/2) 淡黄色地黒縫(10YR6/1)  
黒縫(2.5YSV1/1) 棕白色地縫立ちじ  
シート(2.5SV5/1) 枯葉模様の地縫  
シート(2/2) 暗色土系(5YV4/1) のブロッタ  
一組(10YR6/2) 錆斑沈着による網状  
シート(10YV6/1)  
シート(10YV6/2) 稀少合心



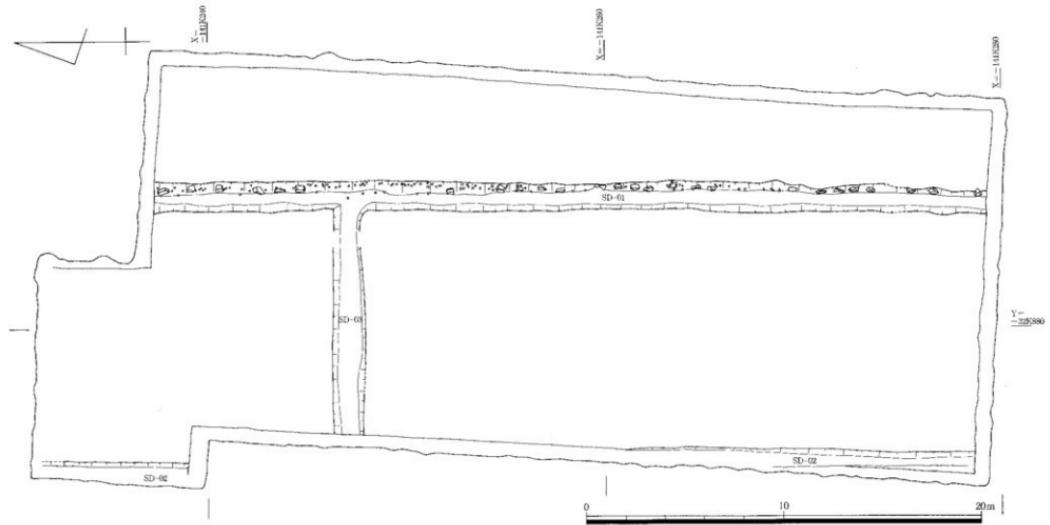



第5圖 B~H区土層断面柱状圖

註

- (1)『北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書』1997大東市北新町遺跡調査会
- (2)大東市都市計画図（3千分の1）昭和31年
- (3)耕作により下位の層が掘り起こされるのでII・III層に関しては各時代の遺物が含まれている。
- (4)場所によっては間にある砂やシルトの堆積が認められず、上位と下位の黒色粘土が連續して堆積している。





第6図 R区第1造構面平面図

## 第4章 遺構

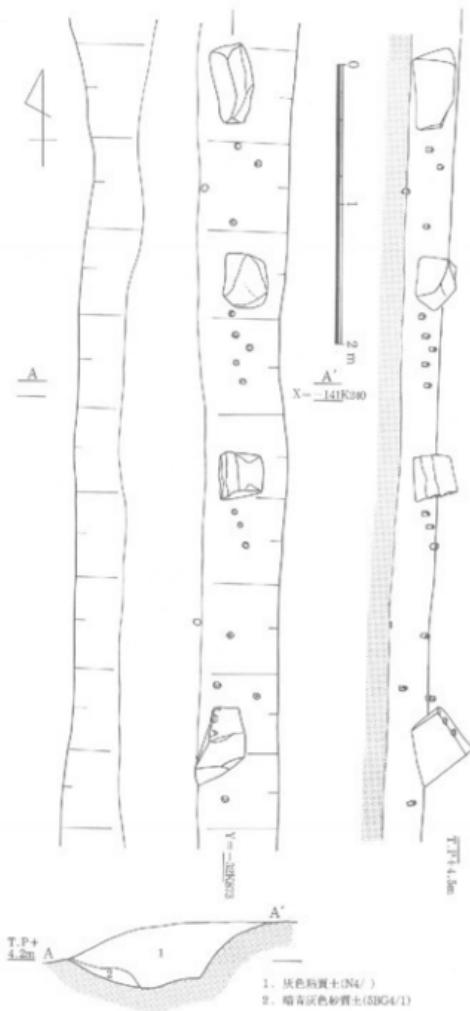
### 第1節 R区の遺構

R区は第IV期調査区の南側に位置し、調査前の地表面の標高はトレンチの北側でT.P.+5.2m、南側でT.P.+4.6mを測り、北から南への傾斜が認められた。

#### 1. 第1遺構面

(第6図、付図1)

第1遺構面は基本層序I層の旧耕作土を除去した時点で検出されており、基本層序II層の上面をベース層としている。近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝が検出されており、水田や畠等の区画を兼ねた灌漑用の用水路と考えられ、この他にも東西方向、南北方向に走る耕作痕（鋤溝）が検出されている。検出面はトレンチの北側でT.P.+4.3m、南側でT.P.+4.1mを測るが、この面で検出された南北方向に走る溝SD-01を境に



して、東側はT.P.+4.1~4.

3m、西側はT.P.+4.1~4.

2mを測り、東側が平均で約1

0cm高くなっている。

溝

S D - 01

(第7・8図、図版1・2)

R-6~10区で検出された。

南北方向にはば直線に走り、

北端、南端はトレンチ外に続

く。幅1.5m、深さ約8~43

cmを測り、埋土は上層に基本

層序1層の旧耕作土に類似す

る灰色~暗オリーブ灰色粘質

土が堆積しており、下層には

暗青灰色~オリーブ灰色砂質

土が堆積していたので、かつ

ては水が流れていることが推

定される。この溝を境に東側

が約30cm程高くなっている所

もある。東側の肩には護岸の

ための花崗岩の割り石が約0.

9~1.4mの間隔で据えられ、

杭が打ち込まれており、割り

石の中には矢穴の跡が残るも

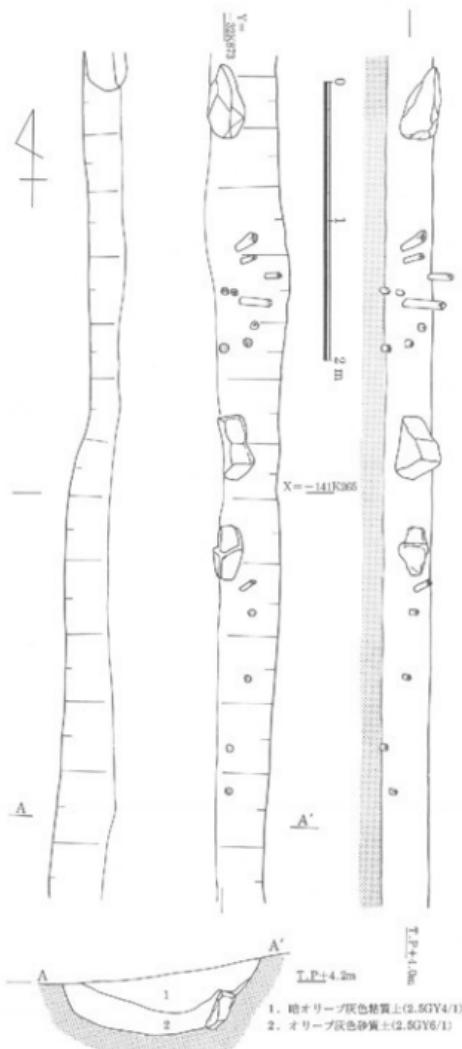
のもあった。遺物は少量であ

るが、主に近世~近代の染付

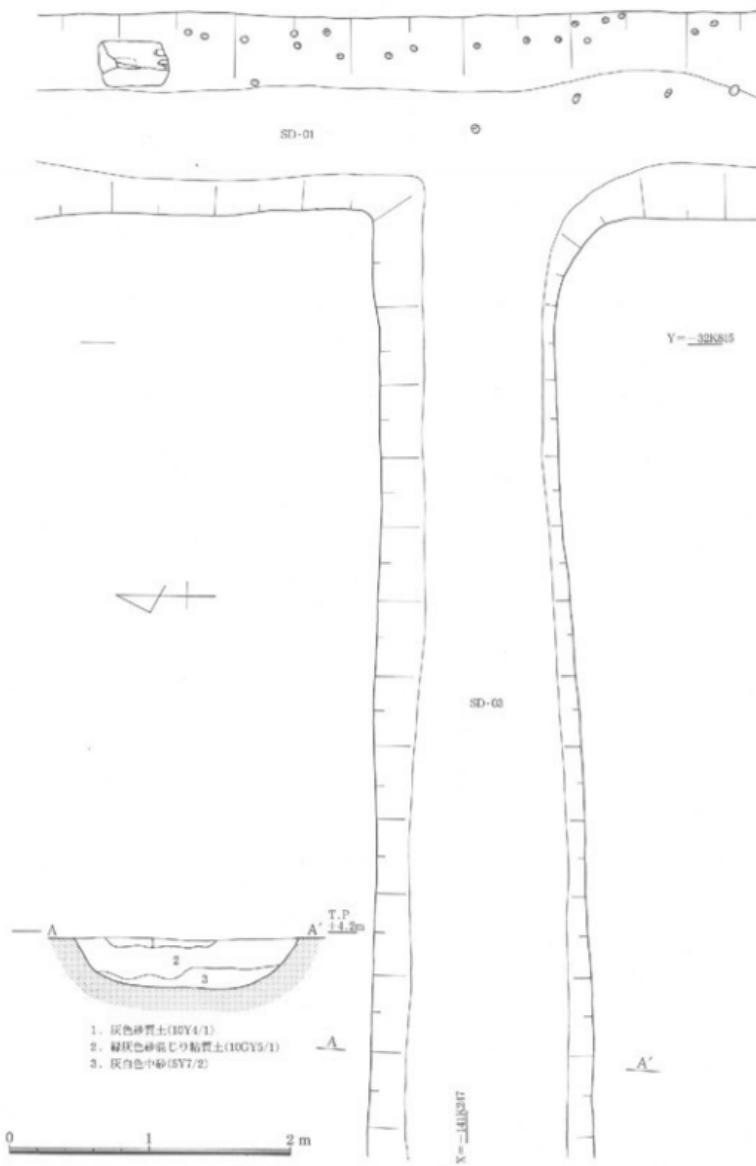
を中心とした陶磁器類が出上

している。

S D - 02 (図版2)



第8図 SD-01平面、立面、土層断面図（南側）



第9図 SD-03平面、土層断面図

R-1・2・

5区で検出された。トレンチの西側際に沿って南北方向に走り、北端、南端は側溝により切られるがトレンチ外へと続いている。幅1.1m、深さは5~43cmを測る。埋土はSD-01と同様に、主に暗オリーブ灰色砂質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶器類が少量出土している。

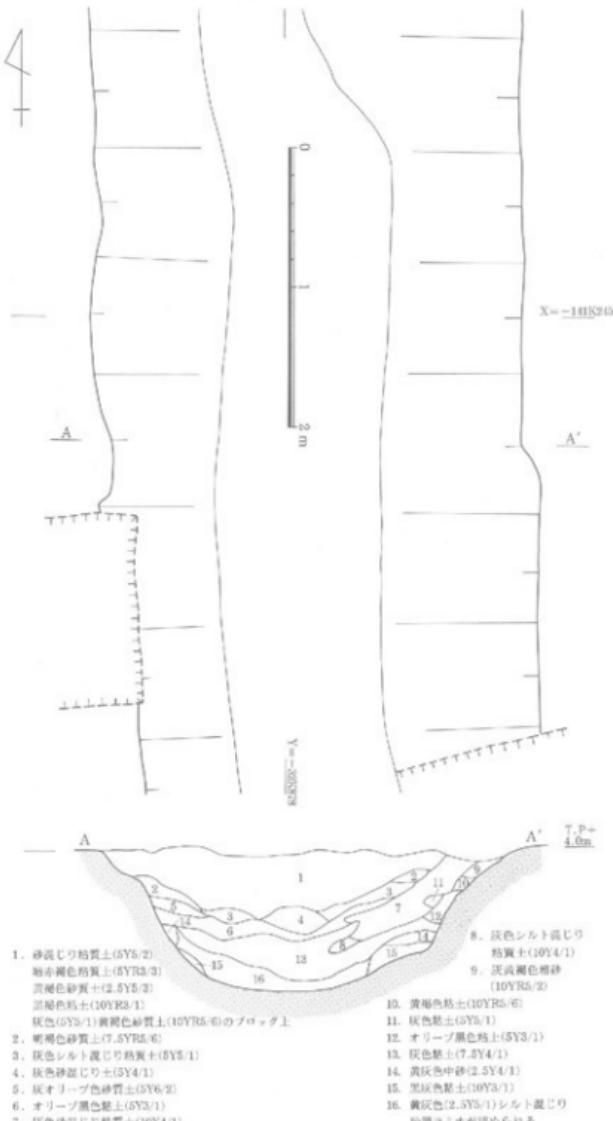
SD-03(第9

図、図版1)

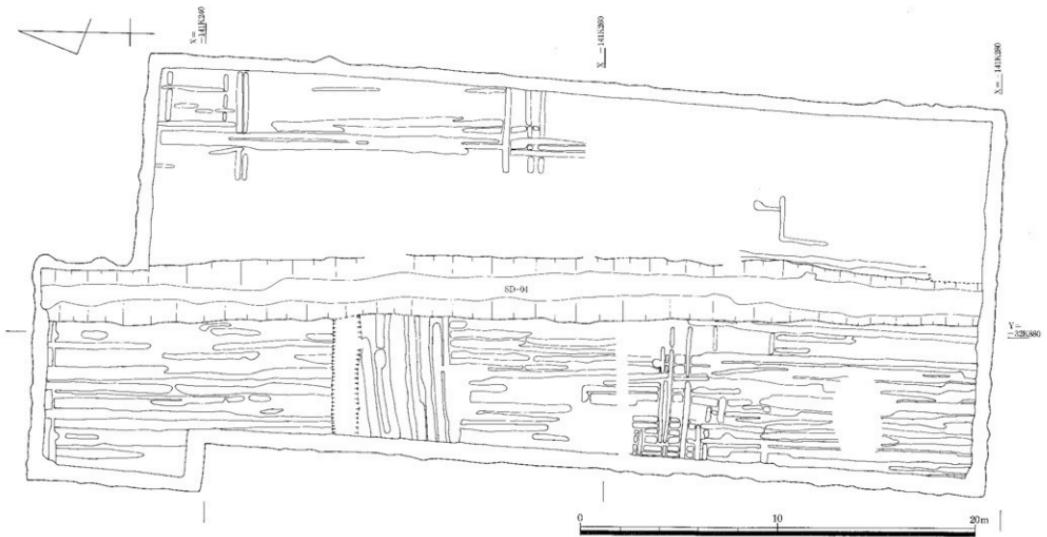
R-4・9区

で検出された。東西方向に走り、西端は側溝により切られるがトレンチ外に続く。東端はSD-01

にはほぼ直角に合



第11図 SD-04平面、土層断面図



第10図 R区第2道横面平面図

流する。幅1.7m、深さ約24～39cmを測り、埋土は上層に灰色砂質土、緑灰色砂混じり粘質土、下層に灰白色中砂が堆積する。遺物は少量で、主に近世の陶磁器類の小片が出土している。

## 2. 第2遺構面（第10図、付図2）

基本層序III層をベース層として検出しており、第III期調査ではこの面で中世の井戸や柱穴を検出しているが、ここでは南北方向に走る大型の溝の他無数の耕作痕が検出されたのみである。また、第III期調査のように遺構面を上層、下層に分けて検出することはできなかった。検出面はトレンチの北側でT.P.+4.1m、西側でT.P.+3.6mを測る。

### 溝

#### SD-04（第11図、図版3・4・9）

トレンチの中央を直線的に南北に横切る形で検出された。南北両端は側溝により切られるがトレンチ外に統いており、Q区で検出したIII SD-76に相当する。幅3.2m、深さ約1mを測り、断面形は播鉢状を呈しており、底面はほぼ平坦である。埋土は粘土や粘質土、シルトを主体として堆積しており、當時水が停滞、或いは緩やかに流れている状況を示している。直線的に走るので、人工的に開削された水路と考えられる。遺物は土師器皿、瓦器碗が小量出土しているだけで、時期を明確にすることはできないが、13世紀頃ではないかと考えている。

## 3. 第3遺構面（第12図、付図3）

基本層序IV層をベース層として検出しており、土坑、ピット、自然流路などが検出されている。既往の調査では水田畦畔が検出されている面であるが、ここでは明確に検出されなかった。しかし、トレンチの南半部分（R-6区）では足跡群が検出され、また、検出された北東から南西方向に走るこれらの流路がかかるトレンチの壁の上層断面を観察すると、流路の両側の肩に畦畔状の高まりが認められるので、小畦畔は検出されていないものの、大型畦畔とそれに伴う水路である可能性も考えられる。時期は遺物がほとんど出土してないので断定はできないが、既往の調査結果と層序の前後関係から古墳時代頃と推定している。検出面はトレンチの北側でT.P.+3.9m、南側でT.P.+3.4mを測る。

### 土坑

#### SK-01（第13図、図版6）

R-9区で検出された。平面形は0.7×1.2mの椭円形を呈しており、深さは24cmを測る。底面は平坦で、壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は粘質土～シルト～砂

が堆積しており、凡そ四層に分層することができ、ほぼ水平堆積を示している。遺物は出土していない。

#### SK-02 (第14図、図版6)

R-4区で検出された。平面形は $1.8 \times 2.0$ mの不定形を呈しており、深さは19cmを測る。埋土は暗青灰色シルト混じり粘質土が堆積している。遺物は出土していない。

#### SK-03 (第14図、図版6)

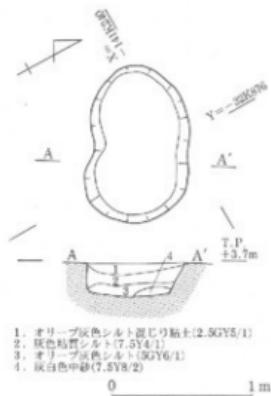
R-4区SK-02の西側で検出された。平面形は径0.6mの円形を呈しており、深さは11cmを測る。埋土はSK-02と同様の暗青灰色シルト混じり粘質土が堆積している。遺物は出土していない。

#### SK-04 (第15図)

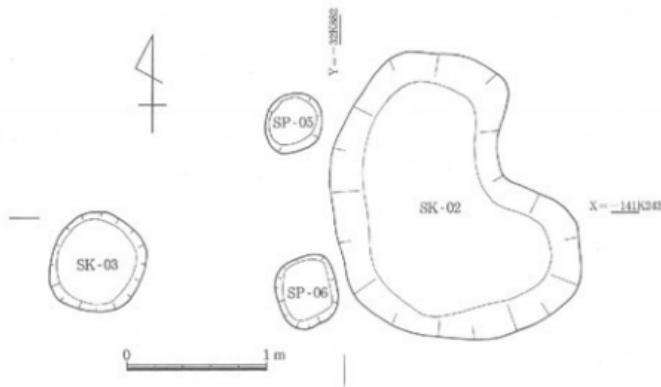
R-6区で検出された。SR-04を切っており、南側は側溝に切られているので平面半円形で検出している。検出規模は平面 $0.4 \times 0.8$ m、深さ10cmを測る。埋土は灰色砂混じり粘質土で、遺物は出土していないが内部に花崗岩の割り石が一個存在していた。

#### SK-05 (第15図)

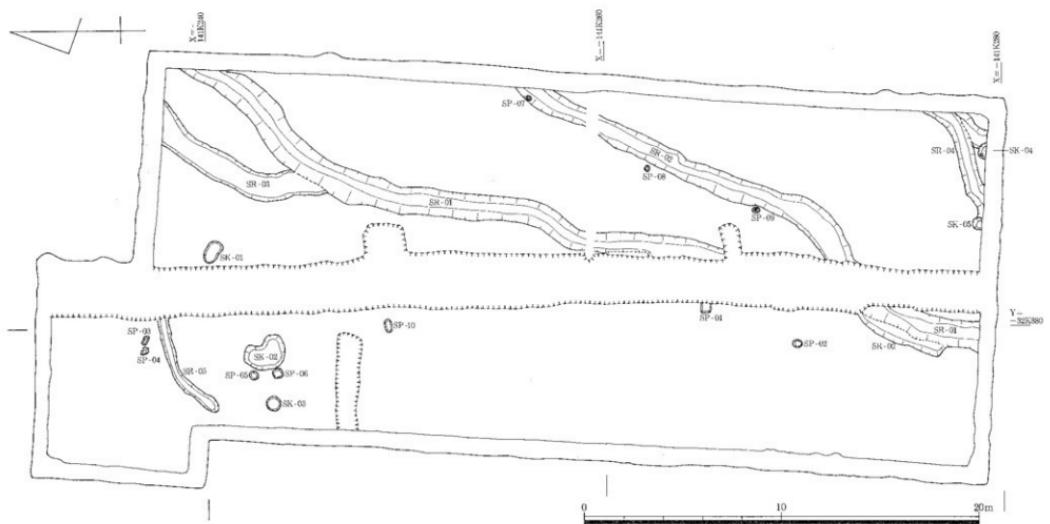
R-6区で検出された。SK-04と同様にSR-04を切っており、南側は側溝に切られているため平面半円形で検出している。検出規模は平面 $0.4 \times 0.6$ m、深さ26cmを測る。埋



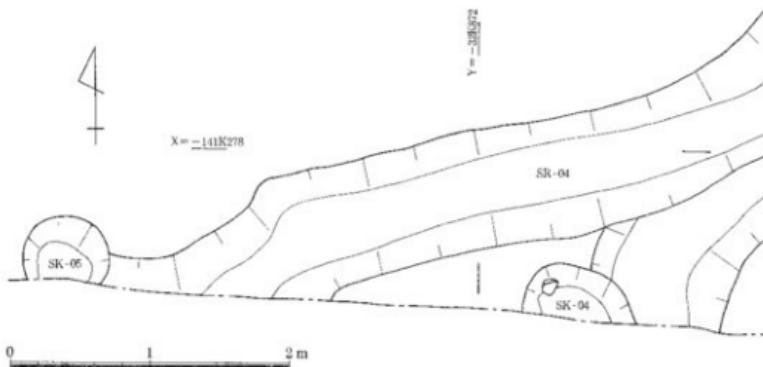
第13図 SK-01平面、土層断面図



第14図 SK-02・03、SP-05・06平面図



第12図 R区第3遺構面平面図



第15図 SK-04・05、SR-04平面図

土は灰色砂混じり粘質土で、遺物は出土していない。

自然流路・河川

#### SR-01（第16図、図版6）

R-1・7~10区で検出されており、小さく蛇行しながらトレンチを北東から南西方向に走り、R-9区でSR-03を切っている。両端は側溝により切られるがトレンチ外へ続いている。幅約1.7m、深さは37cmを測り、埋土は灰白色粗砂、灰色粘質シルト、灰色シルト混じり粘質土、暗灰色粘土が堆積する。遺物は出土していない。

#### SR-02（第17図、図版6）

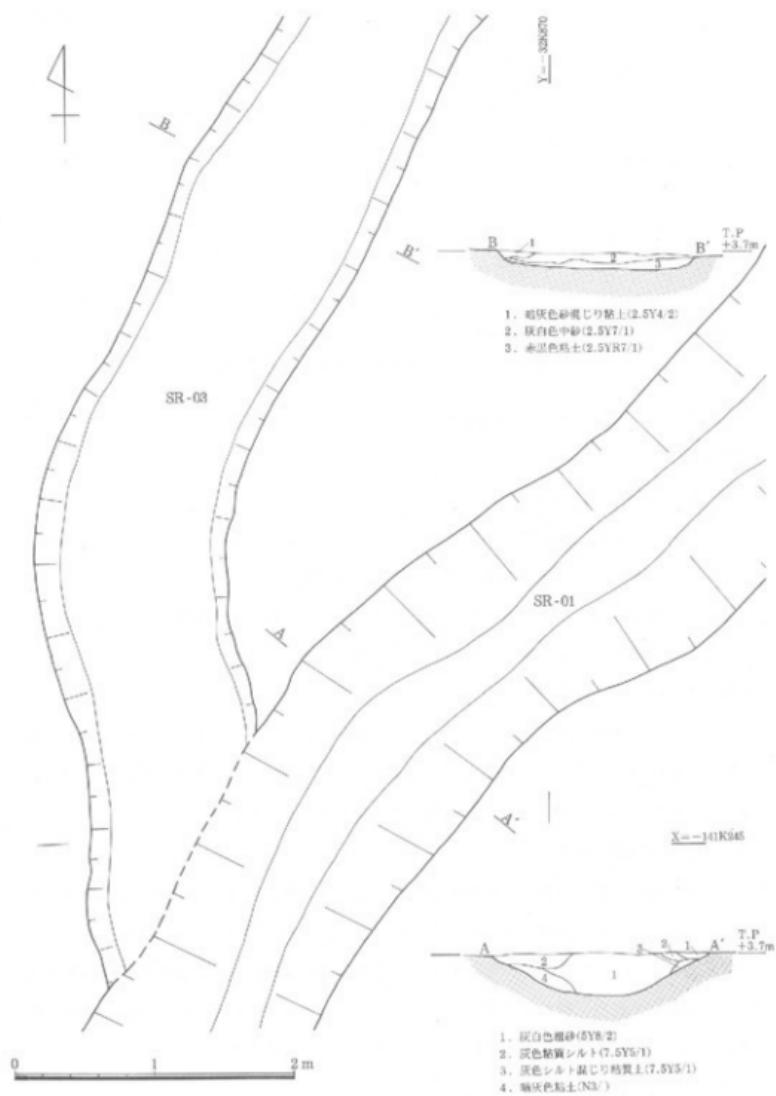
R-1・6~8区で検出されており、SR-01と同様に小さく蛇行しながらトレンチを北東から南西方向に走り、トレンチ外へ続いている。幅約1.5m、深さは約17cmを測り、埋土は灰白色粗砂、暗褐色粘質土が堆積する。遺物は出土していない。

#### SR-03（第16図、図版6）

R-9・10区で検出された。検出長7.6m、幅1.4m、深さ12cmを測り、凡そ北東から南西方向に走り、北端は側溝に切られるがトレンチ外に続き、南端では南に方向を変え、R-9区でSR-01に切られている。埋土は暗灰色砂混じり粘土、灰白色中砂、赤黒色粘土などが堆積しており、遺物は出土していない。トレンチの東壁断面では、流路の両側に畦畔状の高まりが観察され、水田畦畔とそれに伴う水路の可能性もある。

#### SR-04（第15図）

R-6区で検出された。トレンチの南東隅で、北東から南西方向に走る状況で検出され



第16図 SR-01・03平面、土層断面図

ており、両端は側溝に切られるがトレンチ外へ続いている。途中で南へ向かう流路を分岐しているようである。幅0.9m、深さ約20cmを測る。埋土は灰白色粗砂が堆積している。遺物は出土していない。

#### SR-05 (第18図)

R-4・5区で検出された。東から南西方向に走り、東端は第2遺構面検出のSD-04に切られ、南西端は舌状に終わる。検出長6.0m、幅0.6m、深さ約10cmを測る。埋土は灰白色粗砂が堆積している。遺物は出土していない。

#### ピット

全部で7個のピットが検出されているが、建物には復元し得なかった。ただSP-07~09は、SR-02の右岸に沿ってほぼ等間隔に検出されており、SR-02に何らかの関連がありそうである。

#### 足跡群 (図版7)

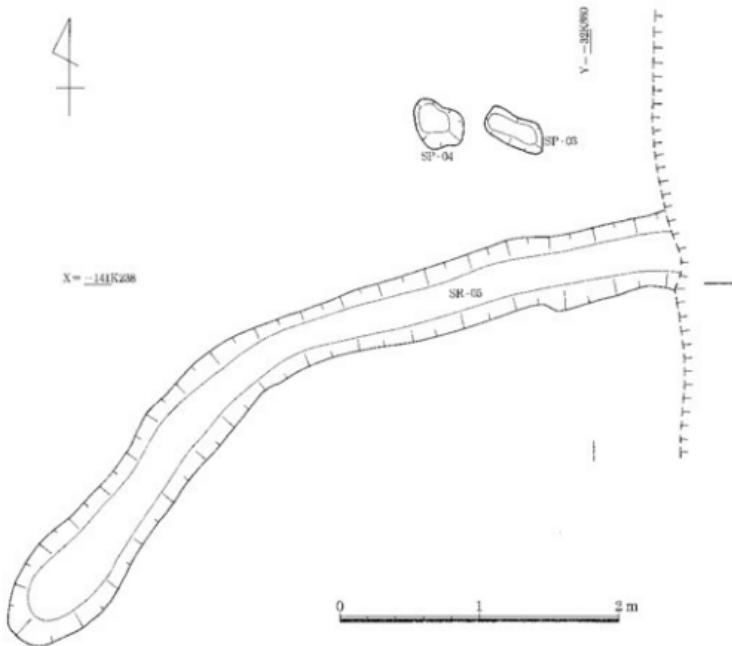
トレンチの南半部分で検出されたが、特に東側のR-6~8区にかけて明確に検出している。形状を特定できるものは少ないが、長円形、円形の2種類のものが存在するようである。

#### 4. 第4遺構面 (第19図、付図6)

第4遺構面は、灰色砂層や緑灰色シルトで構成される基本層序V層を除去した後に現れ



第17図 SR-02、SP-09平面、土層断面図



第18図 SR-05、SP-03・04平面図

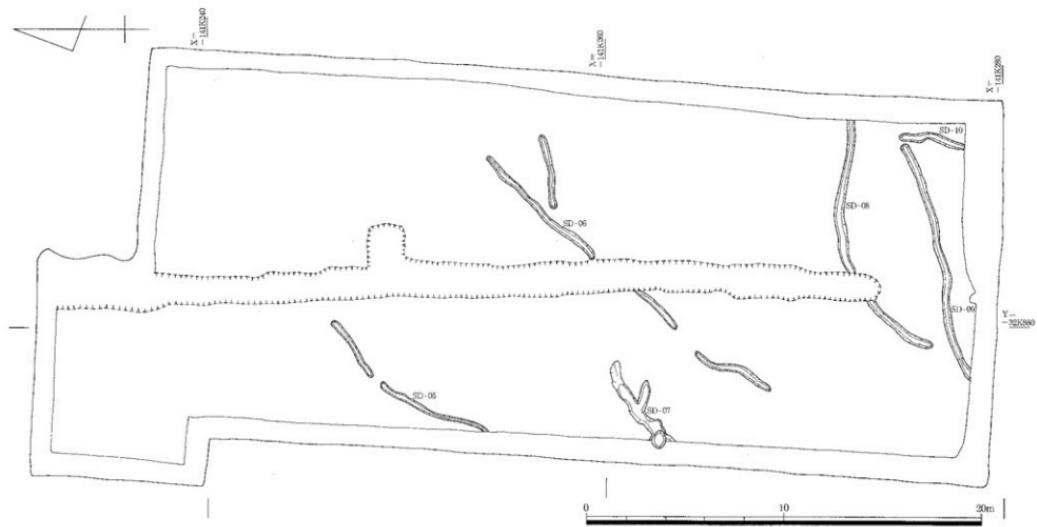
る、基本層序VI層上面の黒色粘土をベース層として検出された最終遺構面である。主に北東から南西方向に走る小規模な溝状の遺構を検出したのみで、他には目立った遺構は存在しなかった。検出された溝は人為的なものとは考え難く、自然流路と考えている。遺物は、遺構内及び包含層からはまったく出土していないので、時期を明確にできないが、既往の調査に準じて、弥生時代以前と考えている。検出面は北側でT.P.+3.5m、南側でT.P.+2.6mを測る。

#### 溝

#### SD-05

R-3・4区で検出された。検出面からの深度は浅く途中で途切れるが、北東方向から南西方向に走り、北東端は舌状に終わっている。検出長9.6m、幅0.3m、深さは3cmを測り、埋土は灰色中砂～緑灰色シルトが堆積している。遺物は出土していない。

#### SD-06



第19図 R区第4遺構面平面図

R-2・7・8区で検出された。北東方向から南西方向に走り、両端は舌状に終わっている。検出長21m、幅0.4m、深さは5cmを測り、埋土はSD-05と同様の灰色中砂～緑灰色シルトが堆積している。遺物は出土していない。

#### SD-07

R-2区で検出された。北東方向から南西方向に走り、南西端は側溝に切られるがトレンチ外に続いており、片側は途中で2条に分岐し、それぞれの先端は舌状に終わっている。検出長6.6m、幅0.6m、深さは8cmを測り、埋土は灰色砂層～緑灰色シルトが堆積している。遺物は出土していない。

#### SD-08(図版8)

R-1・6区で検出されており、ほぼ東西方向に走るが途中で向きを南へ変え舌状に終わり、東端は側溝に切られるがトレンチ外へ続く。検出長13.2m、幅0.5m、深さは5cmを測り、埋土は灰色砂層～緑灰色シルトが堆積している。遺物は出土していない。

#### SD-09(図版8)

R-1・6区で検出されており、北東方向から南西方向に走る。北東端は舌状に終わり、南西端は側溝に切られるがトレンチ外に続いている。検出長12.2m、幅0.4m、深さは9cmを測り、埋土は灰色砂層～緑灰色シルトが堆積している。遺物は出土していない。

#### SD-10(図版8)

R-6区で検出された。ほぼ南北方向に走り、北端は舌状に終わり、南端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続いている。検出長3.4m、幅0.4m、深さは5cmを測り、埋土は灰色砂層～緑灰色シルトが堆積している。遺物は出土していない。

## 第2節 S・T区の遺構

S区は第IV期調査区の北側に位置し、調査前の地表面の標高はトレンチの北側でT.P.+7.1m、南側でT.P.+6.7mを測り、北から南への傾斜が認められた。T区はさらにS区の北側に位置し、トレンチの東側でT.P.+7.4m、西側でT.P.+7.3mを測った。

### 1. 第1遺構面（第20図、付図1）

基本層序II層をベース層として、S区では近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝が検出されている。水田や畑などの区画を兼ねた灌漑用の用水路と考えられ、他にも東西方向、南北方向に走る耕作痕（鋤溝）が検出されている。T区では若干の耕作痕が検出されただけで、他には遺構は検出されなかった。検出面はS区の北側でT.P.+6.7m、南側でT.P.+6.0mを測るが、この面で検出された南北方向に走る溝SD-11を境にして東側が一段高くなっている、溝の東側でT.P.+6.4~6.7m、西側でT.P.+6.1~6.4mを測り、約30cm程度の段差が認められた。T区ではトレンチの東側でT.P.+6.8m、西側でT.P.+6.7mを測る。

#### 溝

##### SD-11（第21図、図版11・12）

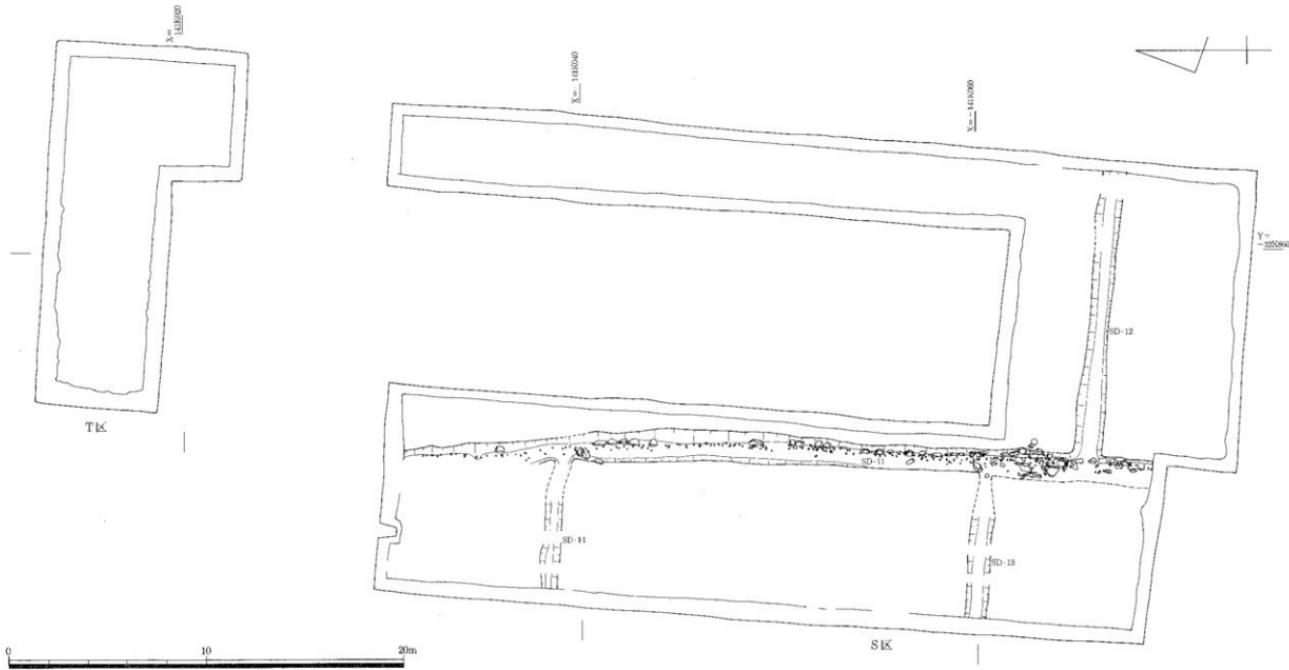
S-1~4区で検出された。南北方向にはほぼ直線に走り、両端はさらにトレンチ外に続いている。S-4区では、東西方向に走るSD-12が合流する。SD-11はトレンチ内を南北に走る現代の水路とはほぼ重なっており、この水路を作る際に削平された部分もあるが、検出幅約1.7m、深さ54cmを測る。埋土は基本層序I層に類似する灰色～灰オリーブ色土が堆積しており、底面付近には灰色砂層の薄い堆積が認められた。この溝を境として、東側の検出面が約30cm程高くなっている、東側の肩には護岸のための石が据えられ、杭が打ち込まれていた。検出状況は、R区第1遺構面検出のSD-01に類似している。遺物は近世の陶磁器類の他に、砥石や土製品などが出土している。

##### SD-12（図版11）

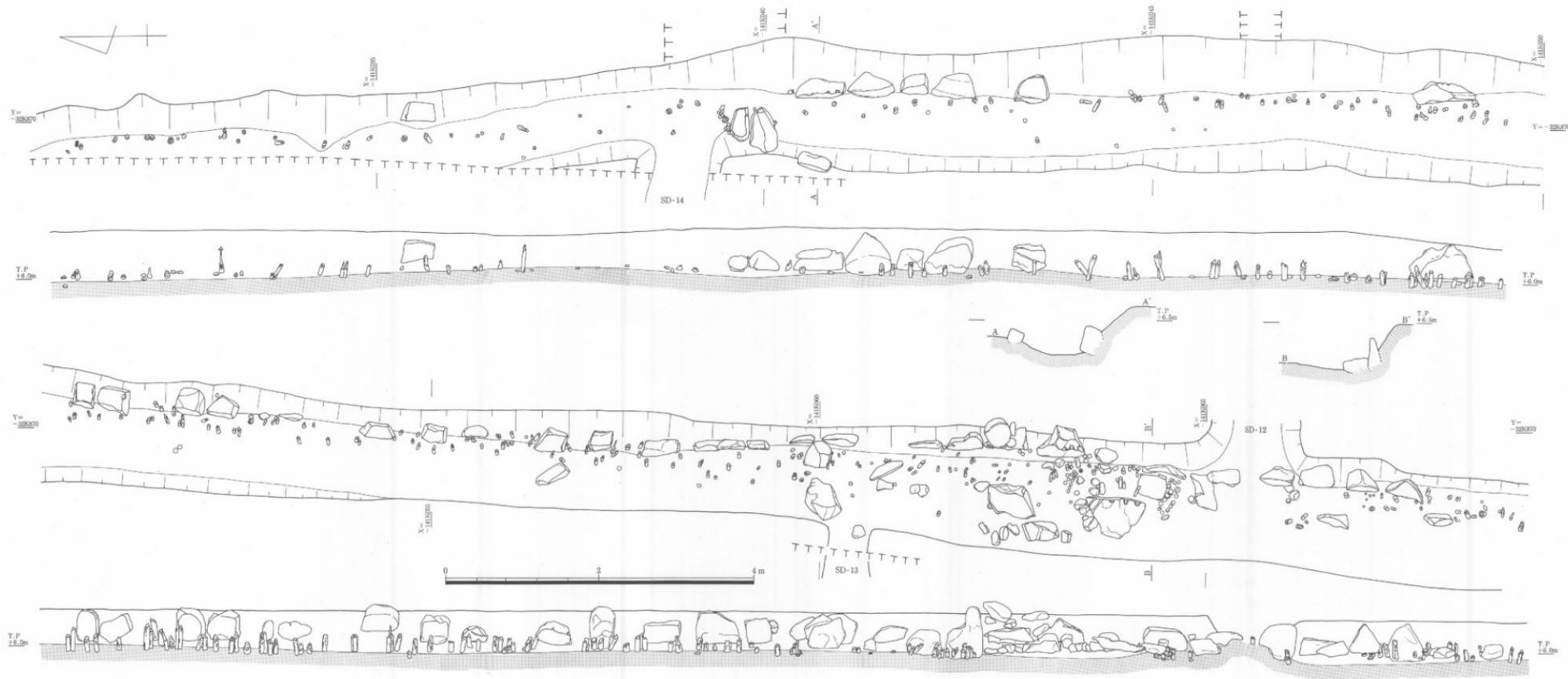
S-4~6区で検出された。東西方向に走り、東端は側溝に切られるがトレンチ外に続いている、西端はS-4区でSD-11に合流している。幅1.5m、深さ14cmを測り、埋土は灰オリーブ色土が堆積している。遺物は近世の陶磁器類や土師器皿の小片が出土している。

##### SD-13（図版11・12）

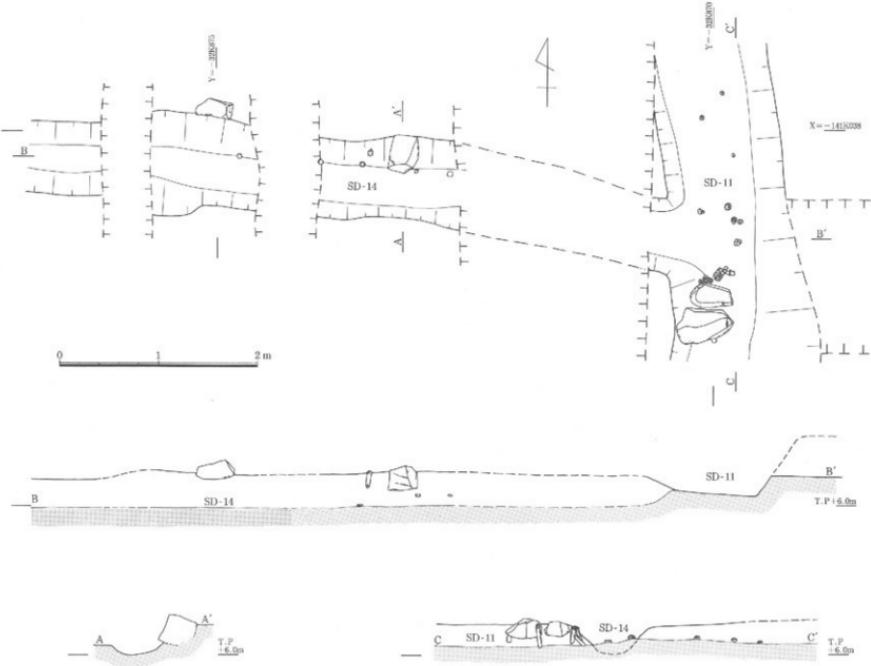
S-3・4区で検出された。東西方向に走り西端はトレンチ外に続いている、東端は途中攪乱によって切られているが、SD-11に合流している。幅1.1m、深さ17cmを測り、



第20図 S+T区第I透様面平面図



第21図 SD-11平面、立面図



第22图 SD-14平面、立面、断面图

埋土は灰オリーブ色土が堆積している。遺物は近世の陶磁器類や土師器皿の小片が出土している。

#### SD-14 (第22図、図版11)

S-1区で検出された。東西方向に走り、西端は側溝に切られるがトレンチ外に続いており、東端は途中攪乱によって切られているが、SD-11に合流している。幅1.0m、深さ32cmを測り、埋土は灰色砂混じり粘質土が堆積している。遺物は近世の陶磁器類や土師器皿の小片が出土している。

#### 2. 第2遺構面 (第23図、付図2)

基本層序Ⅲ層をベース層として、S区ではトレンチの南側に限って、中世の井戸、溝、ピットなどが検出された以外は、主に南北方向に走る耕作痕が全体で見られた程度であり、遺構の密度は低い。一方、T区では主に東西方向に走る耕作痕が検出されたに過ぎない。検出面はS区の北側でT.P.+6.5m、南側でT.P.+6.2mを測り、T区の東側でT.P.+6.6m、西側でT.P.+6.4mを測る。

溝

#### SD-15 (第24・25図、図版15)

S-6・7区で検出された。ほぼ南北方向に走り、南端はSE-01に切られており、北端はやや西側に向きを変えるため西側側溝に切られているが、トレンチ外に続いている。S-7区では東西方向に走るSD-16を切っている。検出長11.5m、幅0.6m、深さ14cmを測り、埋土は暗褐色粘質土が堆積している。溝の中央で瓦器碗や瓦器皿、土師器皿の集積が認められた。瓦器碗の形態は古い様相示し、



第24図 SD-15・16、SP-28~44平面図

土師器皿の形態も「て」の字状口縁を呈しているので、11世紀末～12世紀前半頃の時期が考えられる。S E -01との関連を考えるならば、簡易な排水用の溝と推定される。

#### S D -16

(第24図、図版15)

S - 7区で検出された。東西方向に走り、東端はトレングチ外に続き、西端はS D -15に切られている。検出長2.0m、幅0.3m、深さ20cmを測るが、

S D -15に切られる西端は幅0.1mと狭くなっている。

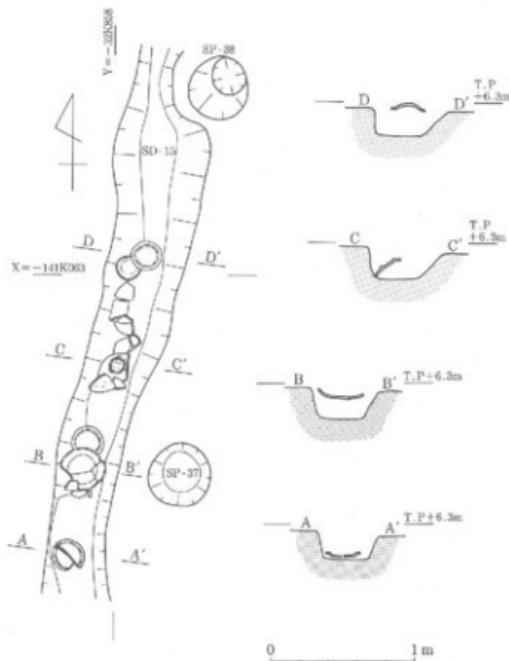
いる。埋土は暗褐色粘質土が堆積している。遺物は瓦器碗や土師器皿の小片が出土しているが、時期は明確ではない。今のところS D -15と同様の時期を考えている。

#### S D -17 (第26図)

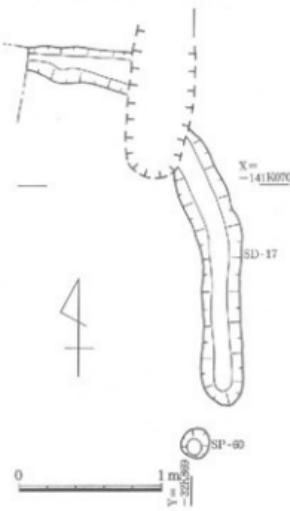
S - 5区で検出された。南端は舌状に終わり、南北方向から屈曲して東西方向に走り、西端も西側側溝手前で、舌状に終わるようである。検出長2.6m、幅0.4m、深さ5cmを測り、埋土は暗赤褐色粘質土が堆積している。遺物は出土していないので、時期は不明である。

井戸

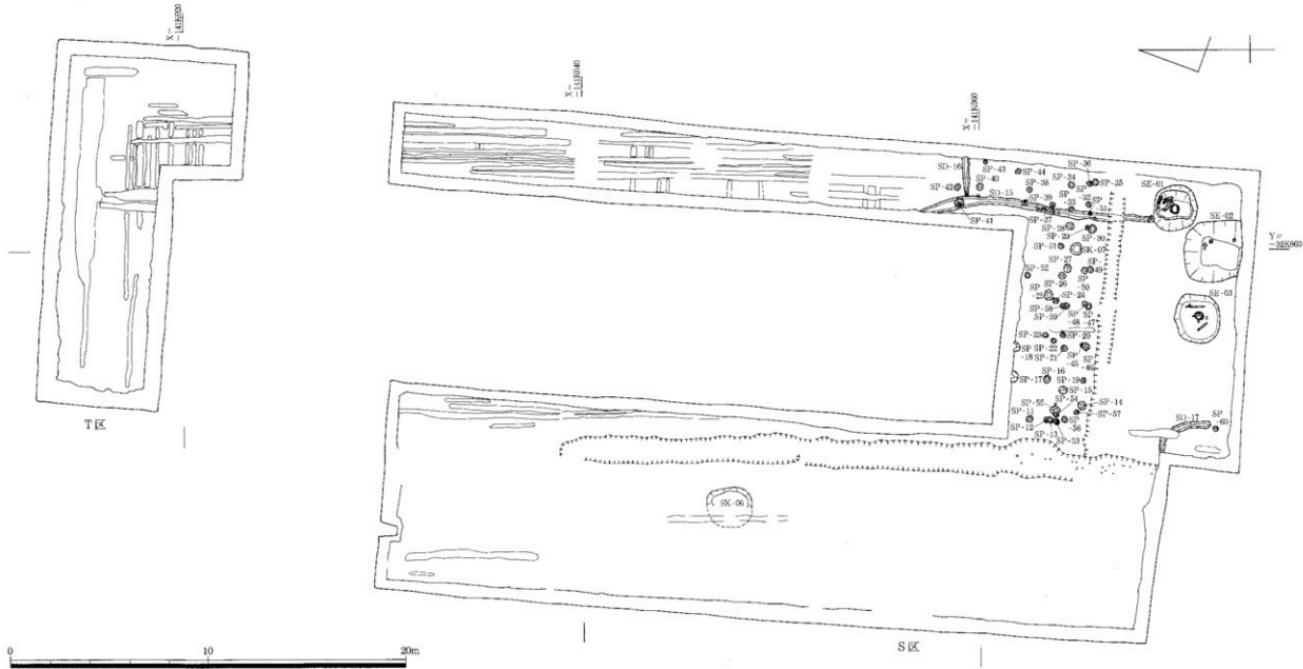
#### S E -01 (第27図、図版16)



第25図 S D -15土器出土状況平面・断面図



第26図 S D -17、S P -60平面図

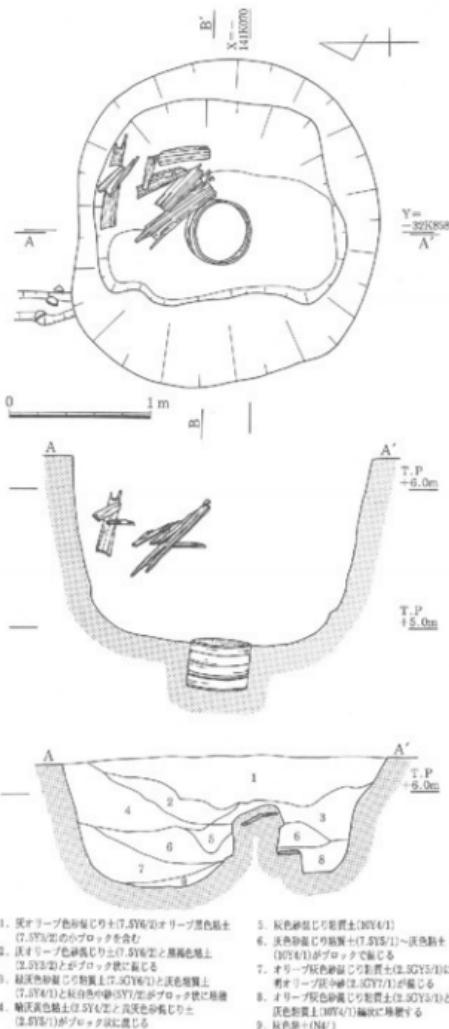


第23図 S・T区第2構造面平面図

S-6区で検出された。平面形は $2.7 \times 3.1\text{m}$ の不整円形を呈しており、深さは88cmを測る。南側でSD-15を切っている。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれておらず、底面は平坦である。底面から一段掘り下げた状態で、水溜用の曲物側板が一段で置かれていた。上部の井戸側はすでに消失していたが、掘り形内には井戸側の縦板に使用されていたと考えられる板材が残っていたので、何らかの井戸側が設けてあったことが推定される。遺物は瓦器椀、瓦器皿、土師器皿等出土しているが、瓦器椀の形態は古い様相を示しており、12世紀前半頃の時期が考えられる。

#### S E - 02 (第28図、図版16)

S-6区でS E - 01のすぐ南側に接して検出している。南側を側溝に切られているが、平面形は一辺が約3.0mの隅丸方形と推定され、深さは56cmを測る。断面形は桶鉢状を呈しており、底面はほぼ平坦である。掘り形内には、両端に加工痕の残る柱



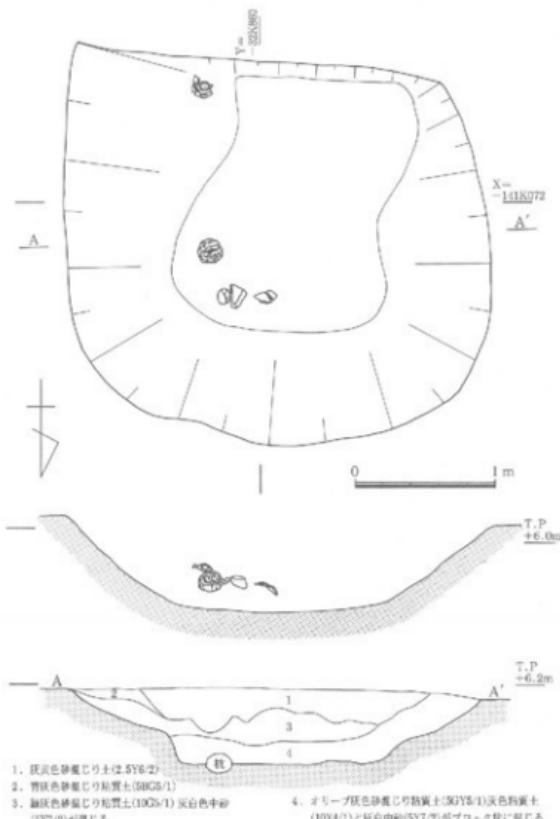
第27図 S E - 01平面、立面、土層断面図

状木製品と小型の割り石が残存するだけで、井戸側は、井戸廃絶時に抜き取られたようである。遺物は、掘り形の南側肩で瓦器椀がほぼ一個体出土した他は、土師器皿、土師器鍋

の小片が出土しているだけである。瓦器椀の形態はSE-01と同様、古い様相を示しており、12世紀初頭～前半頃の時期が考えられる。

SE-03(第29図、図版16・17)

S-5・6区でSE-02のすぐ西側で検出された。平面形は2.2×2.5mの不整円形を呈しており、深さは99cmを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦であ



第28図 SE-02平面、立面、土層断面図

る。底面のほぼ中央に、水溜用の曲物側板一段が底面からさらに掘り下げた状態で置かれており、掘り形内には、井戸側に使用されていたと推定される横桟や隅柱、縦板などの板材が散在していた。遺物は、瓦器椀、土師器皿の小片の他に砥石の破片が出土しているが、出土量は少ない。時期を断定することは難しいが、SE-01・02とそう大差はないものと考えている。

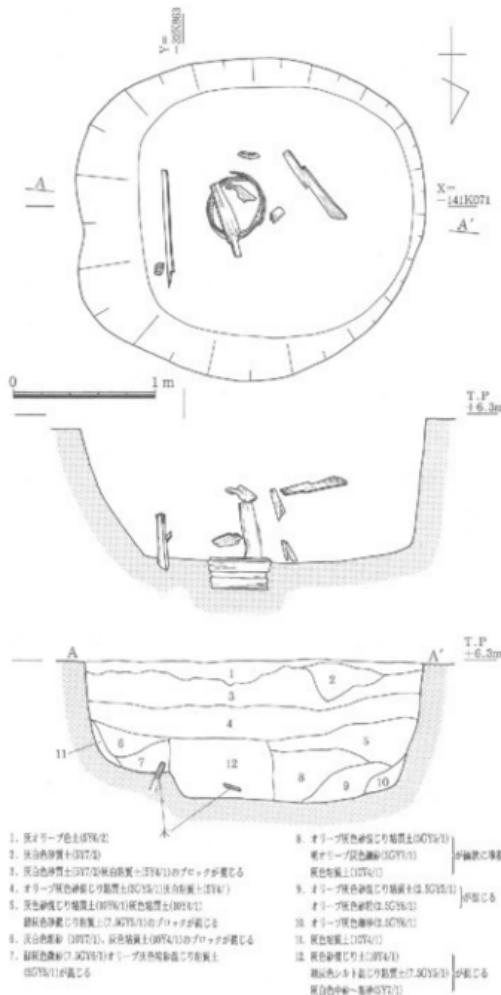
土坑

SK-06(第30図、図版17)

S-2区で検出された。平面形は $2.0 \times 2.3$ mの長円形を呈しており、深さは1.2mを測る。断面形は播鉢状を呈しており、埋土は最上層に浅黄色砂混じり土が薄く堆積する以外は、大半が灰色粘質土がブロック状に含まれる灰オリーブ色砂混じり土、緑灰色砂混じり粘質土等から成り、人為的に埋め戻された土のようである。素掘りの井戸、或いは井戸の抜き取り跡が考えられるが、確かな遺構の性格は不明である。遺物は須恵器片が出土しているが、混入品と考えられるため時期は明確ではない。

#### S K-07

S-6区のピットが集中している場所で検出された。平面形は径約0.5mのほぼ円形を呈しており、深さは46cmを測る。断面形は播鉢状を呈しており、底面はほぼ平坦である。埋土は暗赤褐色砂混じり粘質土が堆積するが、遺物は出土しておらず、時期は明確ではない。



第29図 S E -03平面、立面、土層断面図

## ピット

主に S - 5・6 区で集中して検出されている。東西方向の柵列や建物を復原できそうであるが、調査区外にも存在することが予想され、どのような規模であるのかは不明である。ピット内からの出土遺物が少ないため時期は明確ではないが、同一面で検出された井戸や溝等の時期と同時期と推定され、11世紀末～12世紀前半頃と考えられる。

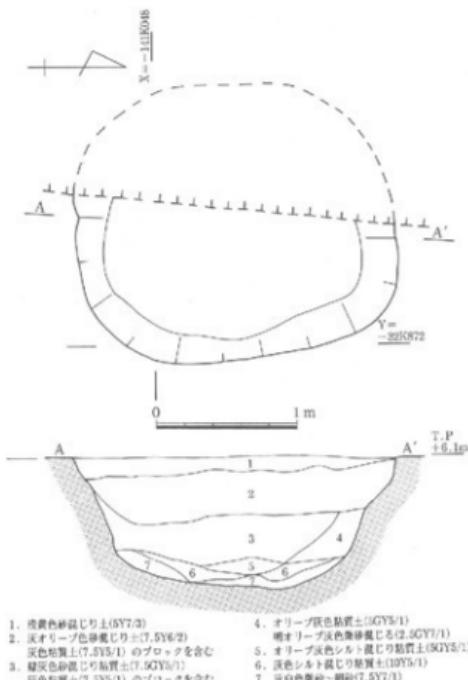
### 3. 第3遺構面上層（第32図、付図4）

基本層序IV層の上層をベース面としており、検出面は S 区ではトレンチの北側で T.P. +6.1m、南側で T.P. +6.0m を測り、T 区では東側で T.P. +6.5m、西側で T.P. +6.2m を測る。

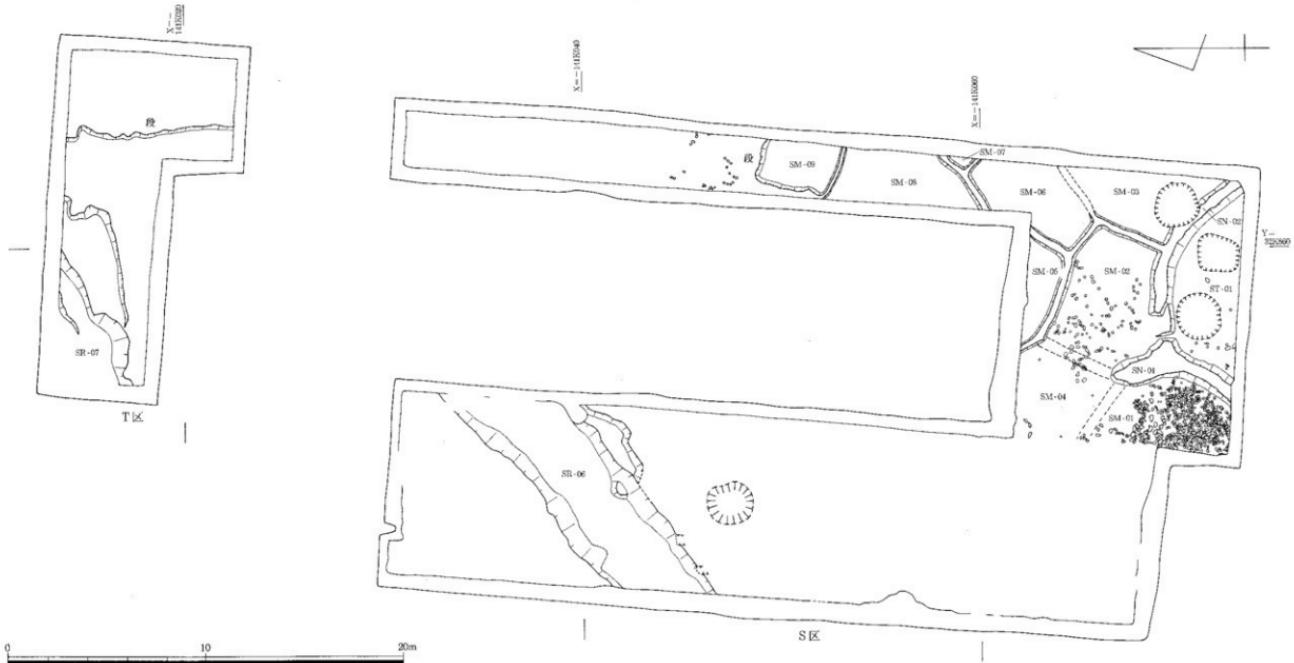
S 区では主にトレンチの東側にあたる S - 6～8 区で大型畦畔 S N - 01・02 と小畦畔で区画される水田跡が検出され、水田面には足跡も残っていたが、西側の S - 1～4 区では畦畔、足跡共まったく検出

されなかった。西側は 1 段低くなっているが、後世の削平によるものと考えられ、特に、第1遺構面で検出した東西方向に走る S D - 11 による影響が大きく、中世末～近世に入ってからこの溝を境にして西側が 1 段低く削平されたため消失したものと推定される。水田域は南側へ広がる様相を示しているが、S - 8・9 区では高低差約 16cm を測る段が検出され、これを境にして畦畔は認められなくなり、T 区でも同様な段を検出したがやはり畦畔は認められ

なかつたので、北側には広



第30図 SK-06平面、土層断面図



第32図 S・T区第3遺構面上層平面図

がらないものと推定される。

水田経営の時期であるが、

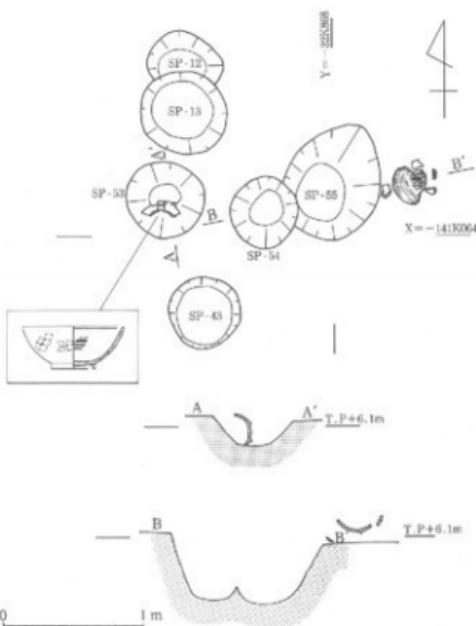
S N - 01・02内からは須恵器杯身、杯蓋がそれぞれ出土しているので、古墳時代後期以降と考えている。

また、S - 1・2区では北東から南北方向に走る自然流路 S R - 06を同一面で検出しているが、遺物は古墳時代前期の土器類を主に出土しており、須恵器は含まれておらず、T区では段を検出した面より下位で検出されることが確認できたので、前述の後世の削平による影響で下位の遺構を同

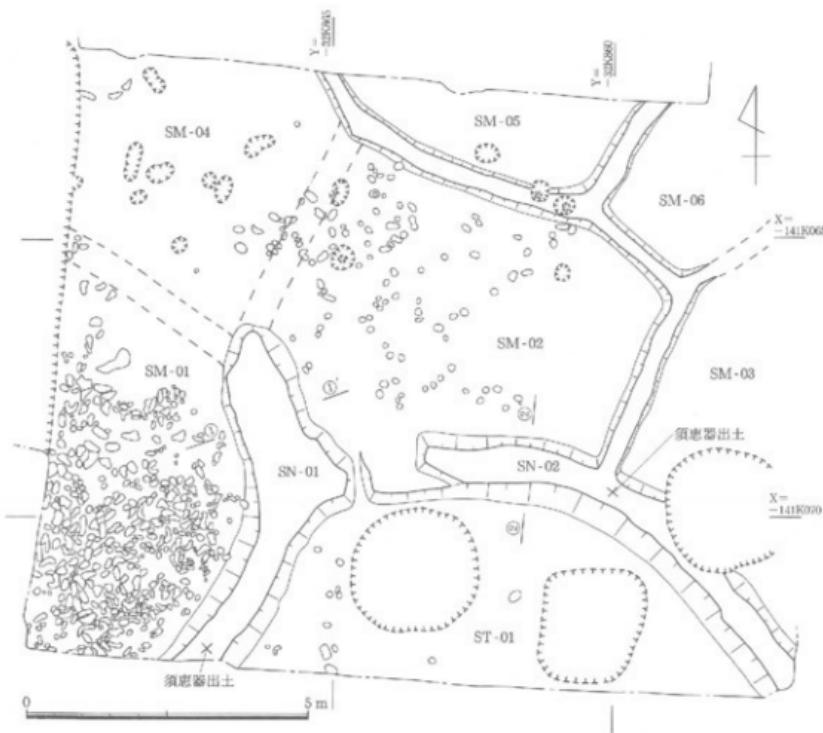
一面で検出したものと考えられ、第3遺構面下層として区別した。この他、T区では西側で奈良時代の遺物を含む別の自然流路 S R - 07を検出している。

#### 水田跡

水田は消失している畦畔を推定復元したものも含めて9枚検出している。明確に区画が判別するものはなかったが、S M - 02・05・06に見られるように、短辺が約2.0~4.7m、長辺が約4.9~6.4mを測る長方形の区画で、面積約20m<sup>2</sup>前後の規模のもので構成されていたようである。水田を区画する小畦畔の規模は、基部で幅20~60cm程度であった。小畦畔には水口は認められず、大型畦畔であるS N - 01・02の間に幅1.2mの水口が認められ、落ち込みとしたS T - 01に向かって開口しているので、遺構面のレベルからすると、各水田への水の取り込みは北東から南西に向けてオーバーフロウさせて行われ、S N - 01・02の間に設けられた水口を利用してS T - 01へ排水していたものと考えられる。



第31図 S P - 12・13・43～55平面・断面図



第33図 畦畔検出状況平面図

### 大型畦畔

SN-01 (第33・34・35図、図版19・21)

S-6区で検出された。SN-02とともにST-01を円弧状に囲んでおり、SN-02との間に設けられた水口部分は少し突出するが、そこから北側に向きを変え、最後は舌状に終わる。基部幅1.2~1.9m、高さは水田側で12cm、ST-01側で31cmを測る。南側側溝付近の畦畔内部より須恵器杯蓋が完形で出土している。

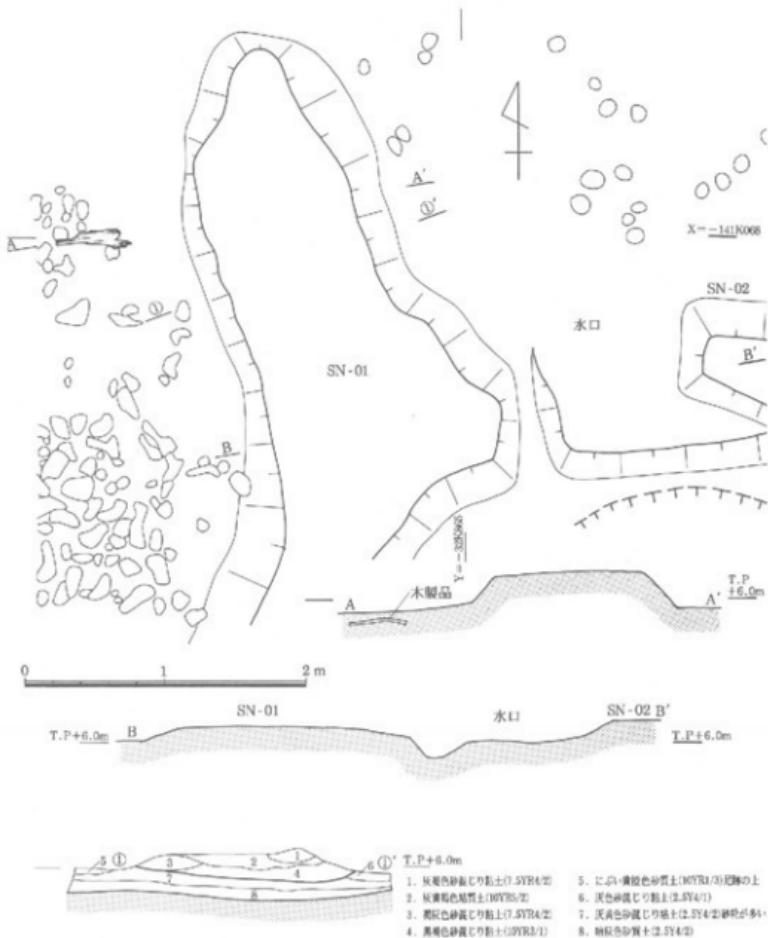
SN-02 (第33・36・37図、図版19・21)

S-5区で検出された。トレンチの南東隅から弧を描き、SN-01とともにST-01を円弧状に囲む。最後は舌状に終わり、SN-01との間に水口が設けられる。基部幅1.2m、

高さは水田側で13cm、S T -01側で40cmを測る。小畦畔が派生する地点の畦畔内部より、須恵器杯身がほぼ完形で出土している。

### 落ち込み

S T -01 (第33図)



第34図 S N -01平面、断面、土層断面及び水口断面図

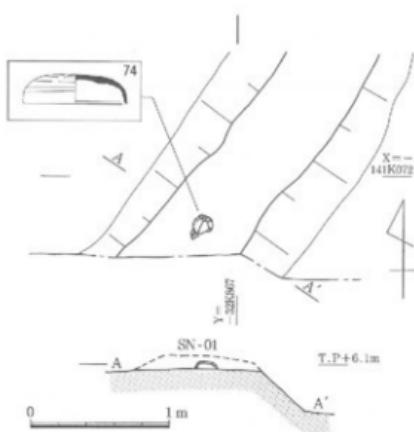
S-5・6区において大型畦畔SN-01・02で開まれた区画である。北側の水田面に比べると約25cm低くなっている。平面形も他の水田の区画とは異なる。また、埋土は浅黄色粗砂～細砂、シルトが縦状に堆積しており、水田耕作土である暗灰黄色粘土やその直上に堆積する浅黄色細砂や微砂は認められなかったので水田とは区別した。北側のSN-01・02の間には水口が設けられており、水田の排水がここから流れ込んでいたものと考えられ、溜池のような施設が

考えられる。遺物は古墳時代の土師器が出土している。

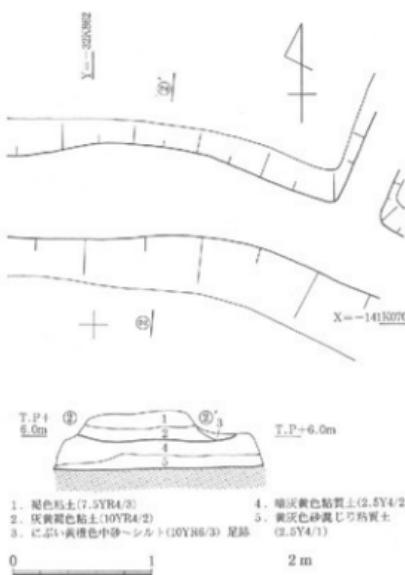
#### 自然流路

##### SR-07（第38図、図版31）

T-1・2区で検出された。トレンチの北西隅で検出されており、北東から南西方向に走るものと推定されるが、全体を検出していないので規模は不明である。埋土はラミナの認められる粗砂～シルトが堆積しており、第3遺構面下層で検出されたSR-08と重複しているため、深さは明確ではないが1.0m以上を測るものと推定される。遺物は少ないが奈良時代の須恵器が出



第35図 SN-01須恵器出土状況平面、断面図



第36図 SN-02平面、土層断面図

#### 4. 第3遺構面下層（第39図、付図5）

基本層序IV層の下層をベース面として、S区では溝、土坑、ピット以外に自然流路SR-06・08が検出され、T区でもSR-06・08を検出している。検出面はS区ではトレンチの北側でT.P.+5.7m、南側でT.P.+5.6mを測り、T区では東側でT.P.+6.0m、西側でT.P.+5.8mを測る。

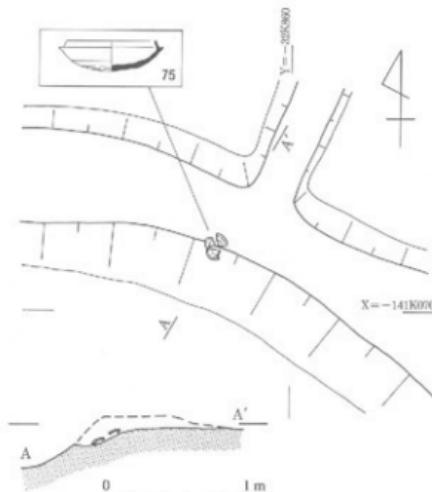
##### 溝

S D - 18（第40・41図、図版26）

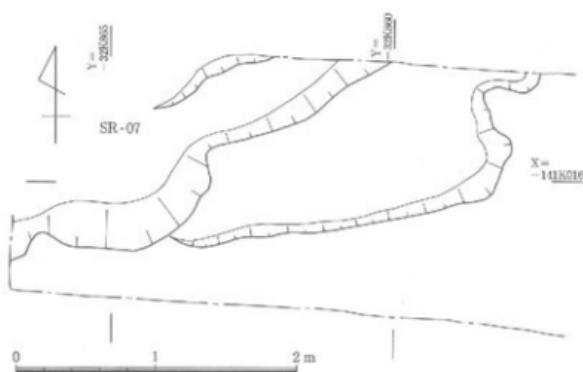
S-2・3・9区で検出された。北東から南北方向に走り、両端とも側溝に切られるがさらにトレンチ外へと続いている。幅約0.6~0.9m、深さ10~21cmを測る。埋土は黒褐色~褐色砂混じり粘質土である。遺物は出土していないので時期は明確ではないが、ほぼ直線に走るので、人為的に掘られた可能性が強い。

S D - 19（第42図、図版26・35）

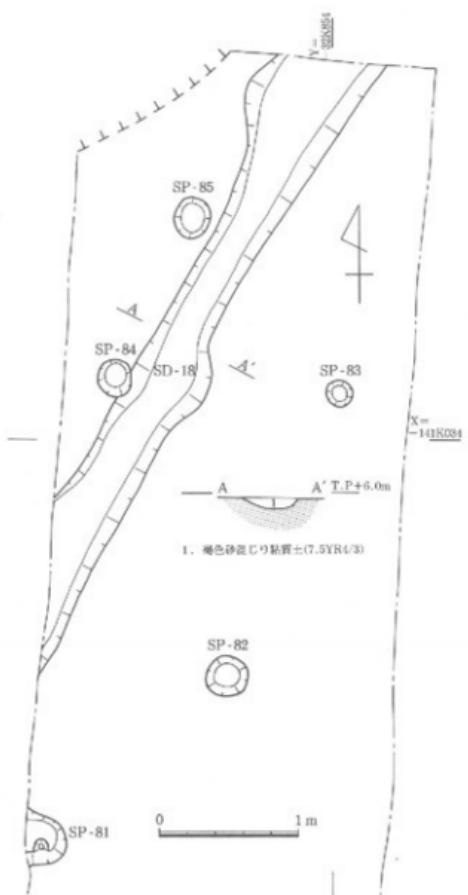
S-8区で検出された。北西から南東方向に走り、両端とも側溝に切られるがさらにトレンチ外へと続き、T区でその続きを検出している。S-8区ではSR-09を切っており、T-



第37図 S N-02須恵器出土状況平面、断面図



第38図 SR-07平面図



第40図 SD-18、SP-81~85平面、土層断面図

響によって削平されたものである。幅約0.8m、深さ24cmを測る。埋土は黒褐色砂質土が堆積している。遺物は出土していないので時期は明確ではない。

### 土坑

#### SK-08 (第44図)

S-3区で検出された。東側は側溝に切られており、検出規模は0.7×2.0m、深さ8cm

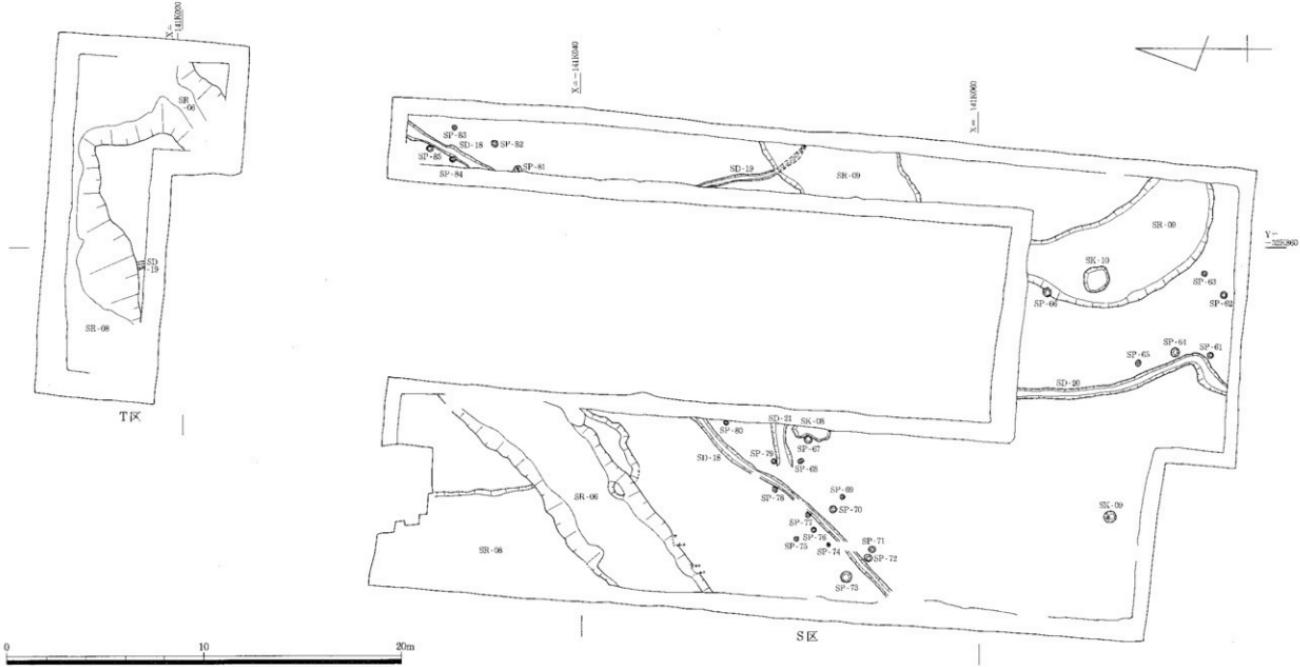
2区ではS R-08に切られてい  
た。幅約0.3~0.4m、深さ19~  
21cmを測る。埋土は暗灰黄色砂  
混じり粘質土、灰色砂混じり粘  
土、底部にオリーブ灰色シルト  
が堆積する。遺物は出土してい  
ないので時期は明確ではない。

#### SD-20 (第43図)

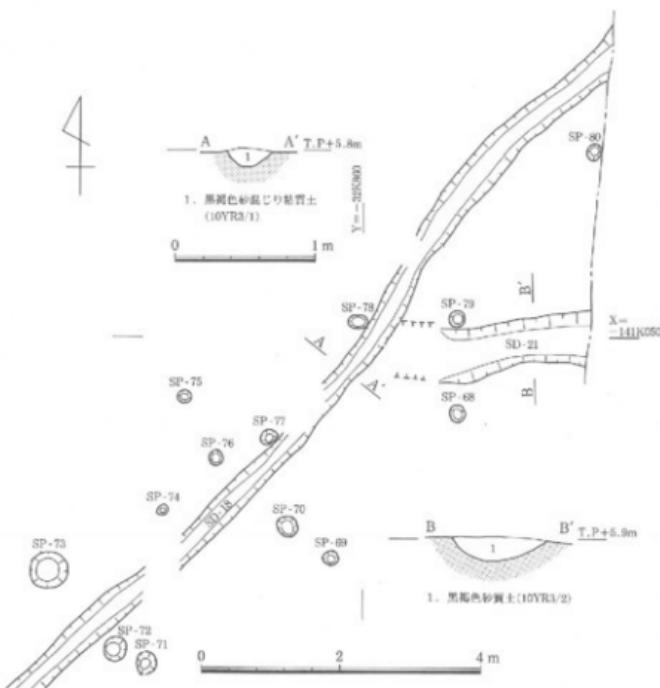
S-5区で検出された。南北  
方向から途中で東側に蛇行し南  
西方向に走り、両端とも側溝に  
切られるがトレンチ外へと続い  
ている。幅約0.4~1.0m、深さ  
23cmを測る。埋土は上層に黑色  
砂混じり粘質土、下層に黄橙~  
灰白色中砂が堆積している。遺  
物は出土していないので時期は  
明確ではない。

#### SD-21 (第40図、図版26)

S-3区で検出された。ほぼ  
東西方向に走り、東側は側溝に  
切られるがトレンチ外へ続いて  
おり、西側は急に途切れるてい  
ように検出しているが、第1遺  
構面で検出されたSD-11の影



第39図 S・T区第3遺構面下層平面図



第41図 SD-18・21、SP-68~80平面、土層断面図

を測り、平面形は不定形を呈している。埋土は暗褐色砂混じり粘質土が堆積している。遺物は弥生時代中期に属する壺の破片が出土している。

#### S K-09 (第45図)

S-4区で検出された。平面形は $0.5 \times 0.6\text{m}$ のほぼ円形を呈しており、深さは28cmを測る。埋土は黒褐色砂混じり粘質土で、遺物は古墳時代前期の高杯が出土している。

#### S K-10 (第43・46図、図版26)

S-6区で検出された。S R-09と重複するが、これよりも新しい。平面形は $1.6 \times 1.8\text{m}$ の隅丸方形を呈しており、深さは32cmを測る。埋土は暗灰色砂混じり粘質土、灰色砂質土、灰色粘土などが水平に堆積する。遺物は出土していないので時期は明確ではない。

## ピット

径12~53cm、深さ5~53cm  
ほどの浅い円形のピット25個  
を検出しているが、建物に関連して柱穴となるようなものはなさそうである。埋土は他の遺構のものと類似する暗褐色砂混じり粘質土である。ただ検出されたピットのはほとんどが、SD-11の周辺に集中しており、中には溝に沿って規則的に並んでいるものも見られるが、現状ではどのような性格のものかは不明である。

## 自然流路

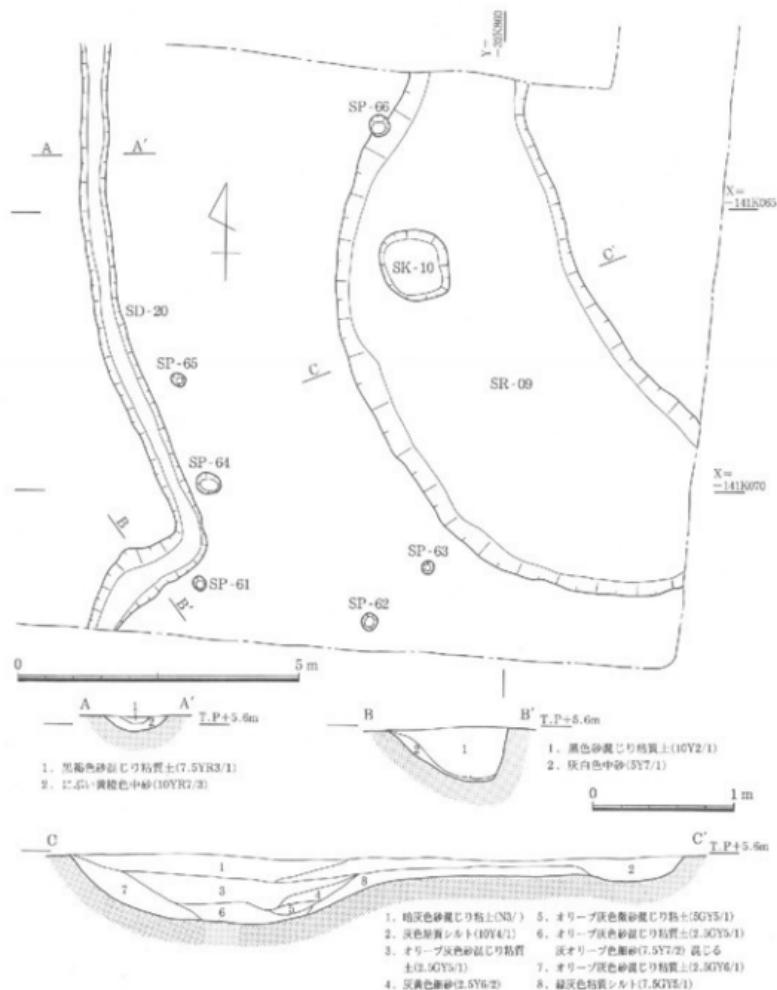
SR-06（第47図、図版22~24・33~35）

S-1・2区、T-3区で検出された。北東から南西方向にはほぼ直線的に走り、両端は側溝に切られるがトレンチ外へと続いている。検出規模は幅約4.0m、深さはT区で

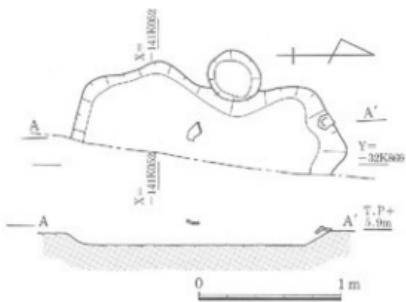
約32cm、S区では69cmを測る。砂やシルトの堆積を主体としており、ラミナが認められる。それぞれのトレンチにおいてSR-08と重複するが、SR-08を切っていることを確認しており、これよりも新しい。遺物は古墳時代前期の土師器甕、小型丸底壺、高杯などが出土しているが、弥生土器、須恵器は1点も含まれていないので、時期は古墳時代前期に限定してもよさそうである。S区では第3遺構面上層の水田面と同時に検出されたため、当初、水田と同一時期を考えたが、T区では水田面のベースとなる層の下から検出されているので、第3遺構面下層として考えた。



第42図 SD-19平面、土層断面図



第43図 SD-20、SK-10、SR-09平面、土層断面図



第44図 SK-08平面、断面図

SR-08 (第38・47・48図、図版24・34・35)

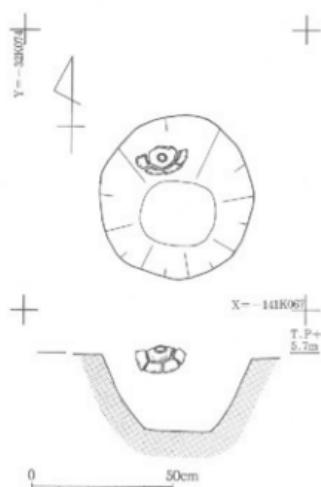
SR-08はS-1区、T-1・2区で検出されており、SR-06に切られている。SR-06が北東から南西方向にほぼ直線的に走るのに対して、北側に大きく蛇行しており、全体を検出していないので規模は不明であるが、深さは18~52cmを測る。遺物は主に弥生時代後期の土器が出土している。

#### 5. 第4遺構面（第49図、付図6）

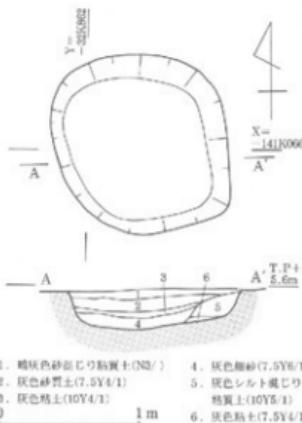
最下層の黒色粘土である基本層序VI層をベース面として、検出しており、S区で自然流路を検出したのみである。検出面はS区ではトレチの北側でT.P.+5.4m、南側でT.P.+5.1mを測り、T区では東側でT.P.+5.5m、西側でT.P.+5.3mを測る。

SR-10（図版28）

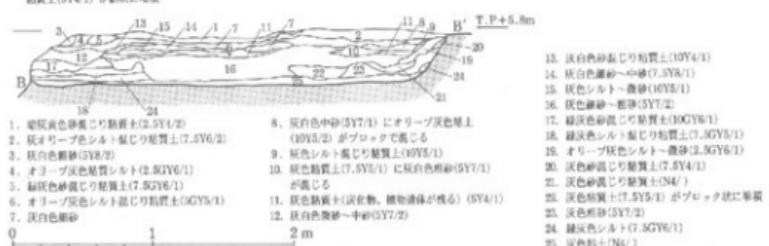
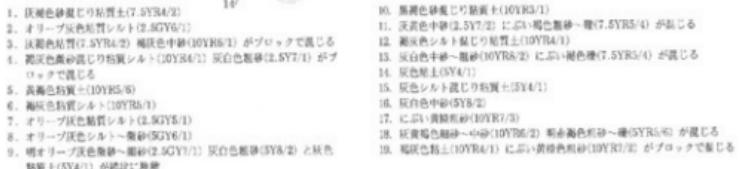
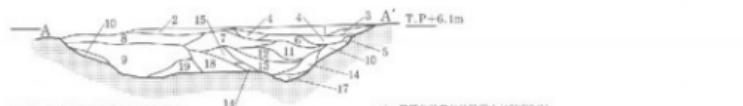
S-6・7・8区で検出された。7・8区ではほぼ東西方向、6区では南北方向に走り、蛇行しているものと考えられる。幅3.0~3.2m、深さは12~64cmを測る。埋土は灰色~灰白色の砂層が堆積している。遺物は出土していない。



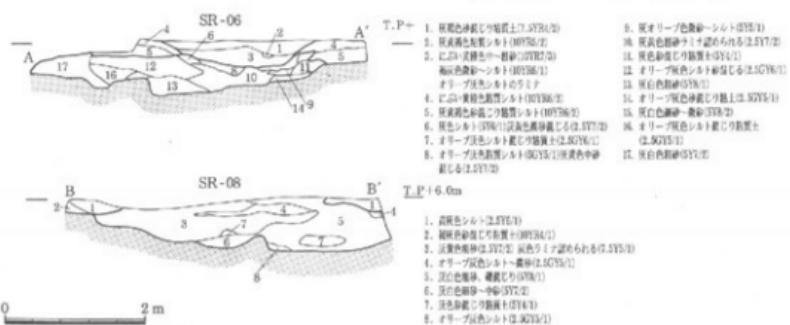
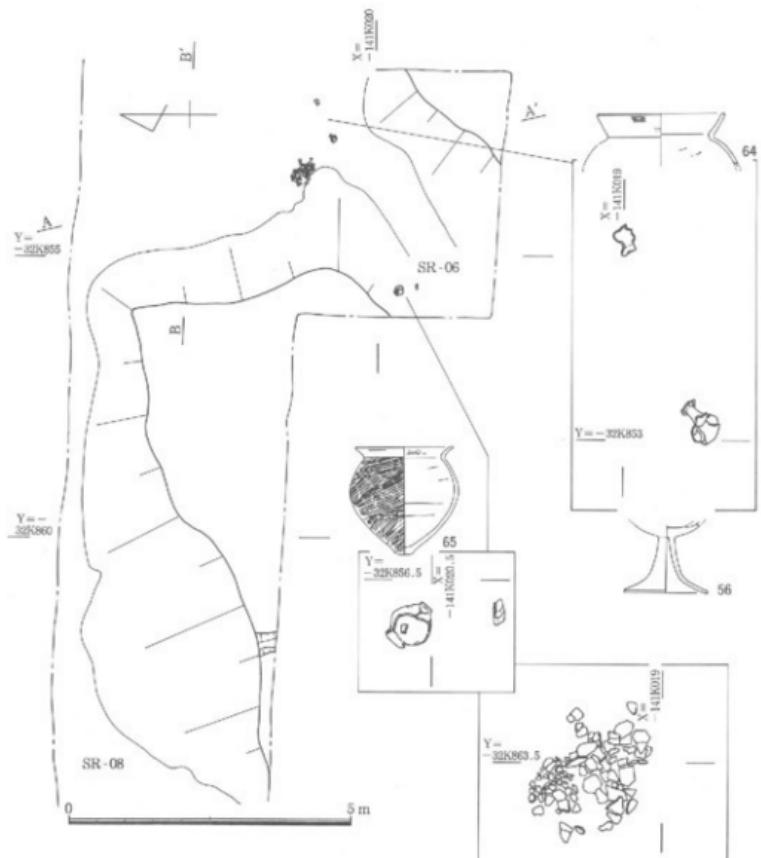
第45図 SK-09平面、立面、断面図



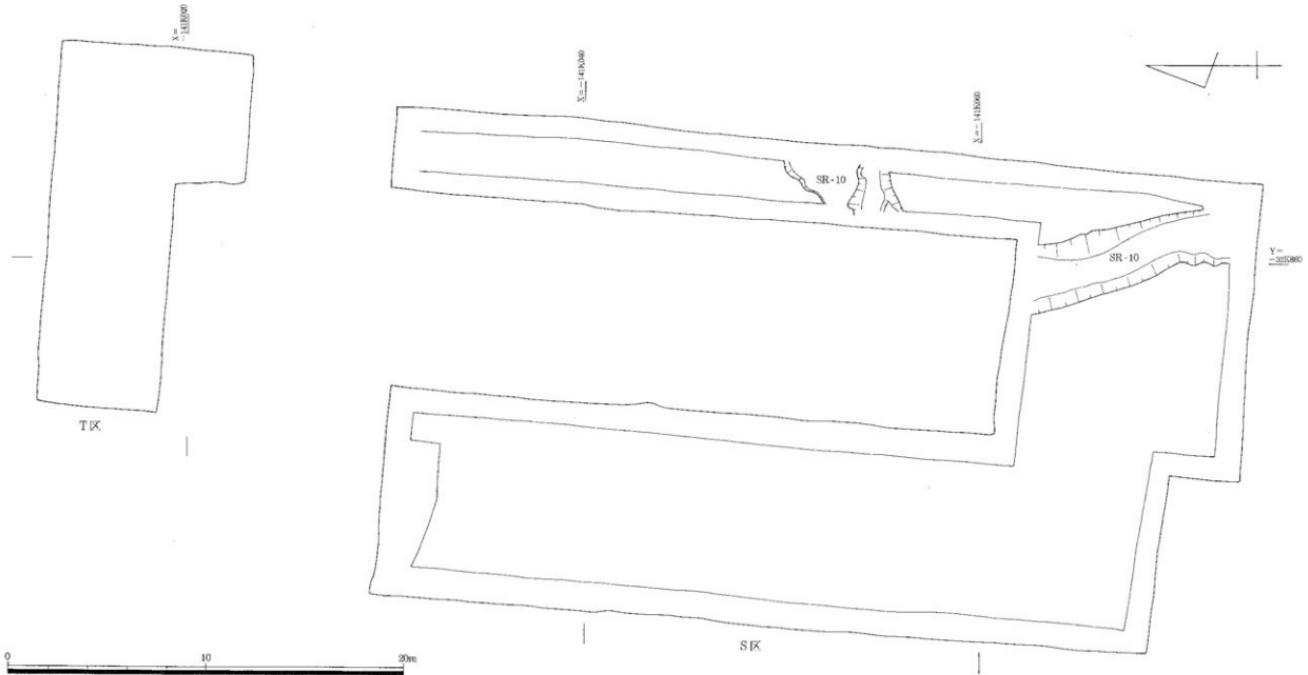
第46図 SK-10平面、土層断面



第47図 S R - 06・08平面、土層断面図



第48図 SR-06・08土器出土状況平面、土層断面図



第49図 S・T区第4造横面平面図

### 第3節 U区の遺構

U区はS区の南側に位置し、第Ⅳ期調査区の中央部にあたる。調査前の地表面の標高はトレンチの北側でT.P.+6.8m、南側でT.P.+5.6mを測り、北から南への傾斜が認められた。

#### 1. 第1遺構面（第50図、付図1）

基本層序II層をベース層として、近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝が検出されており、水田や畑などの区画を兼ねた灌漑用の用水路と考えられ、他にも東西方向、南北方向に走る耕作痕（耕溝）や畠状遺構の溝が検出されているが、全般的に他のトレンチに比べ、検出状況はあまり良くはなかった。検出面はトレンチの北側でT.P.+5.9m、南側でT.P.+5.0mを測る。

#### 水路

##### S D-11（第51図、図版38・49）

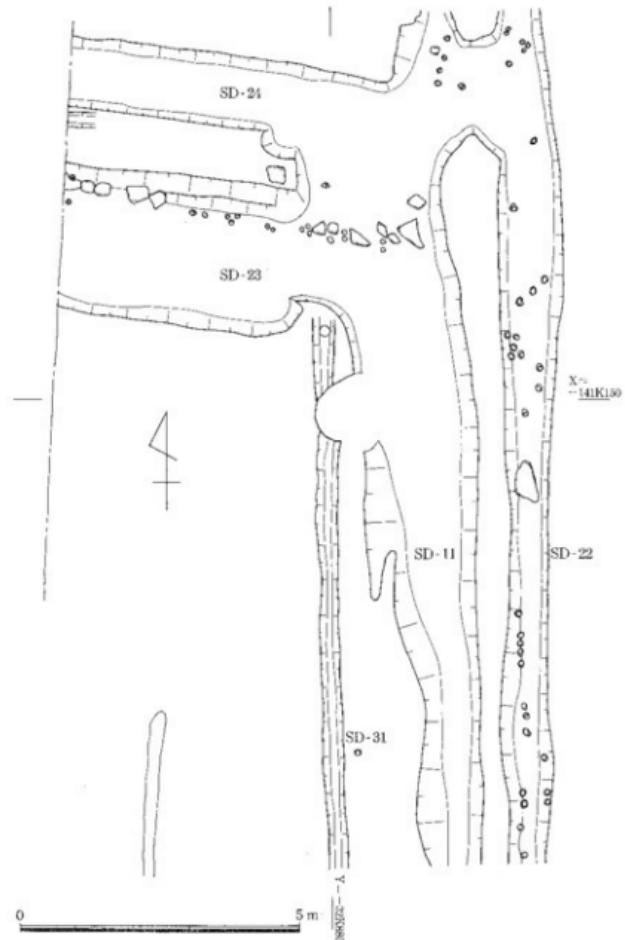
トレンチの中央を南北方向に走る溝で、トレンチの北側での検出状況は悪いが、S区で検出されたSD-11の続きである。南端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外に続いている。東側にSD-22・27、西側にSD-31・33・42が平行して走り、U-3区で東西方向に走るSD-23・24を、U-7区で同じく東西方向に走るSD-58・65・66を派生している。幅は約0.7mを測るが、SD-23・24を派生している地点では最大幅2.0mと広くなり、深さは16cmを測る。埋土は灰色土で、底部に薄く砂の堆積が認められた。遺物は少量であるが、近世の陶磁器類や砥石の破片が出土している。

##### S D-22（第51図、図版38）

SD-11の東側でこれに平行して南北方向に走る。南端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続いており、北端は検出状況が悪く今一つ明確ではないが、最終的にはトレンチ内でSD-11に取り込まれるものと推定される。幅0.5~1.1m、深さ14cmを測り、埋土は灰色土と底部に砂が薄く堆積している。南半部では杭列が認められ、所々に花崗岩の割り石が据えられていた。遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類や砥石の破片が出土している。

##### S D-23（第51図、図版38）

U-3区で検出された。東西方向に走り、東端はSD-11に合流し、西端は側溝に切られているがさらにトレンチ外に続いている。幅2.6m、深さは15~30cmを測り、埋土は灰色土と底部に砂が薄く堆積していた。北側の肩には杭列が認められ、花崗岩の割り石が



第51図 SD-11・22・23平面図

据えられており、この溝を境にして北側の検出面が南側よりも約15cm高くなっている。遺物は少量の近世の陶磁器類が出土している。

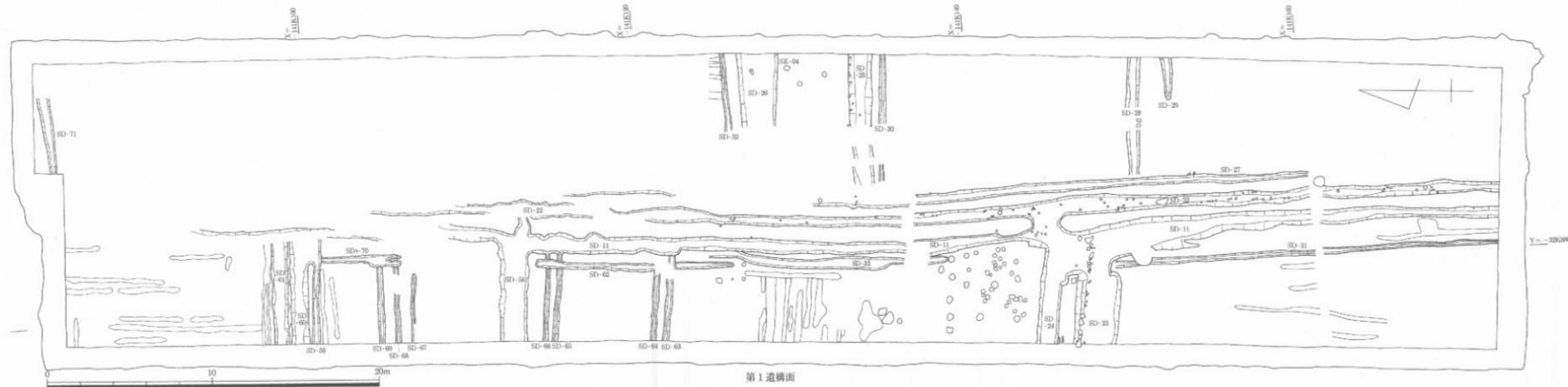
SD-24  
U-3区、  
SD-23の北側で検出され  
ており、平行して東西方向に走る。東端はSD-11に合流し、西端は側溝に切ら  
れているがトレンチ外に続く。幅0.8m、深さ16cmを測

り、埋土は灰  
色土が堆積し

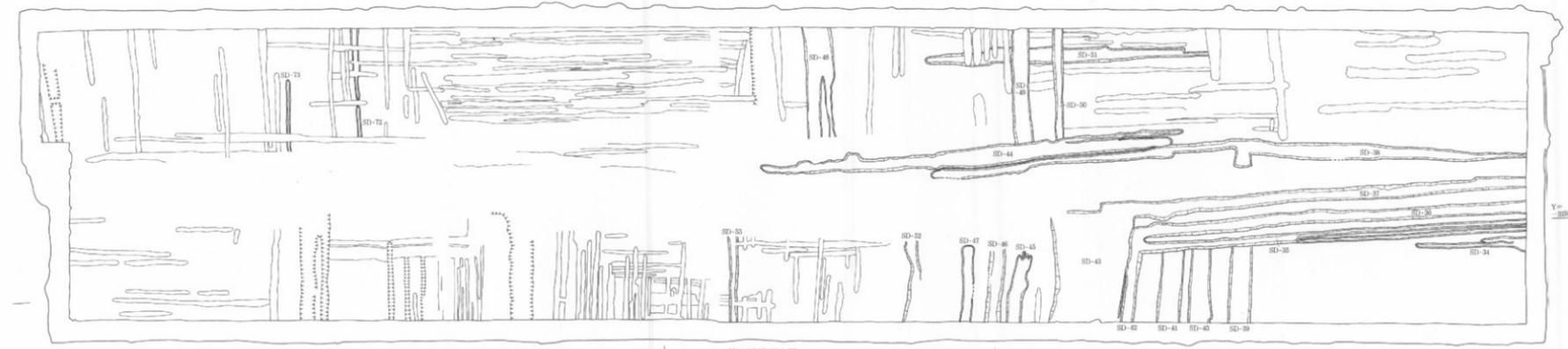
ていた。遺物は少量の近世の陶磁器類が出土している。

SD-25（図版38）

U-13・14区で検出されており、東西方向に走る。東端は側溝に切られるがトレンチ外に続いており、西端は検出状況は悪いものの、南北方向に走るSD-27に合流しているよ

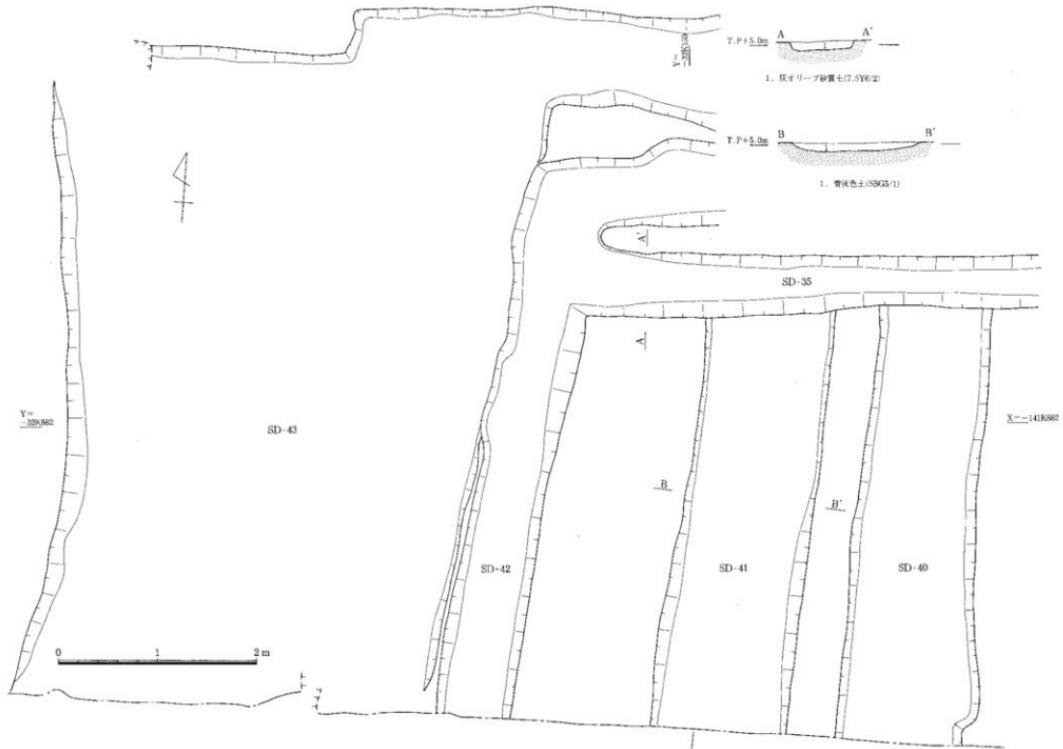


第1造構面



第2造構面上層

第50図 U区第1造構面・第2造構面上層平面図



第52図 SD-35・40~43平面、土層断面図

うである。北側の肩に杭列が認められ、この溝を境に北側の検出面が南側よりも約10cm高くなっている。幅1.2m、深さ27cmを測る。埋土は灰色土で、遺物は少量の近世の陶磁器類が出土している。

#### SD-26

U-14区で検出されており、東西方向に走る。東端は側溝に切られるがトレンチ外に続いており、西端は検出状況が悪く途中で途切れるようである。幅2.6m、深さ14cmを測り、埋土は灰色土で、遺物は少量の近世の陶磁器類が出土している。

#### SD-27

U-11～15区で検出された。SD-22の北側で平行して南北方向に走る。北端、南端とも検出状況が悪く途中で切れているが、最終的にはSD-22に合流するようである。検出長35m、幅0.6m、深さ13cmを測り、埋土は灰色土で、遺物は少量の近世の陶磁器類が出土している。

#### 畝状遺構

幅0.1m前後の細い溝や、幅約0.6m前後の少し広めの溝が2～3条平行に走るように検出されたものを畝状遺構と考えた。U-6区のSD-63・64、同じくSD-65・66、U-7区のSD-67～69、U-8区のSD-59～61がそれにあたる。

#### 鋤溝

東西方向、南北方向のもがあり、水路の各区画内では、同一方向に統一されているようである。

#### その他の溝

規模や形状から水路と断定し難い溝が検出されているが、ほぼ東西方向、南北方向に走るものであり、鋤溝或はそれが複数重なり合っているものを一つの溝として検出したものと考えられる。SD-28～33・32などがこれにあたる。

### 2. 第2遺構面上層（第50図、付図2）

基本層序Ⅲ層をベース層としている。鋤溝や畝状遺構を構成する溝以外の遺構は検出されなかった。検出面はトレンチの北側でT.P.+5.7m、南側でT.P.+4.9mを測る。

#### 畝状遺構

U-1～4区で検出されており、東西方向のものはSD-39～42・45～47・52で構成され、南北方向のものはSD-34～37構成されている。南北方向のものは南端は側溝に切られるが、トレンチ外に続いており、北端はSD-42・43まで続いている。幅0.6～1.4m、

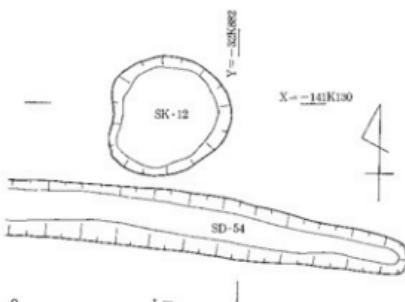
深さ10cm前後を測る。埋土は暗灰色で、遺物は少量の土師器皿、瓦器碗の小片が出土している。

#### 鋤溝

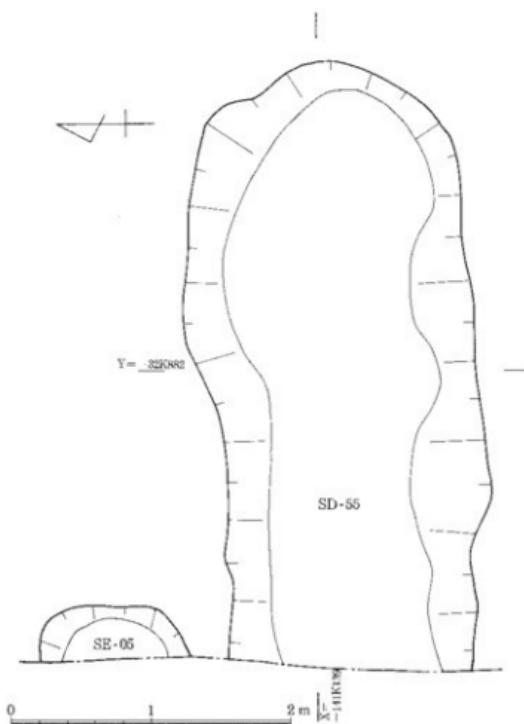
東西方向、南北方向のものが見られるが、第1遺構面のように区画ごとに同一方向でなく、両者が錯綜した状況で検出された。SD-38・44・48～51・53・72・73などは複数の鋤溝を一つの溝として検出したものである。

### 3. 第2遺構面下層（第53図、付図3）

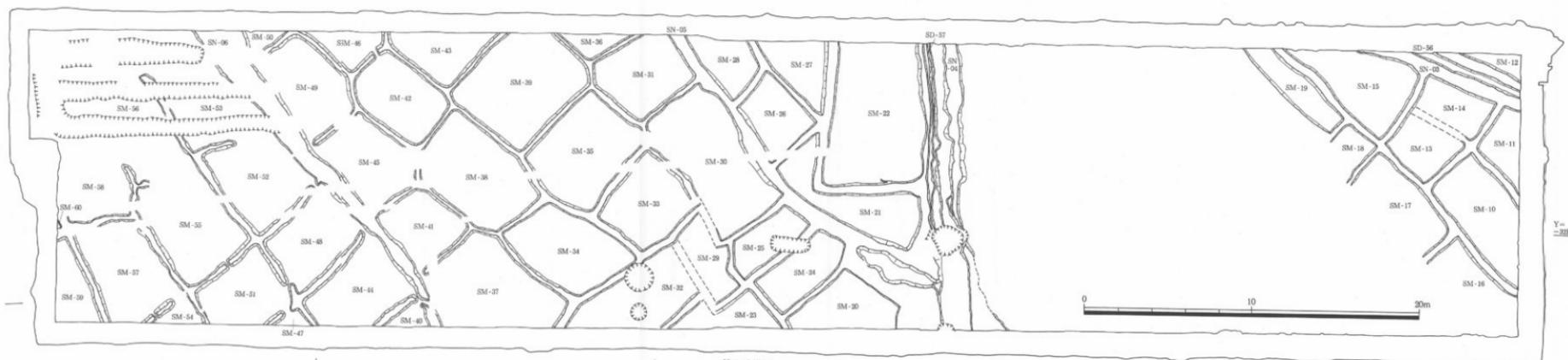
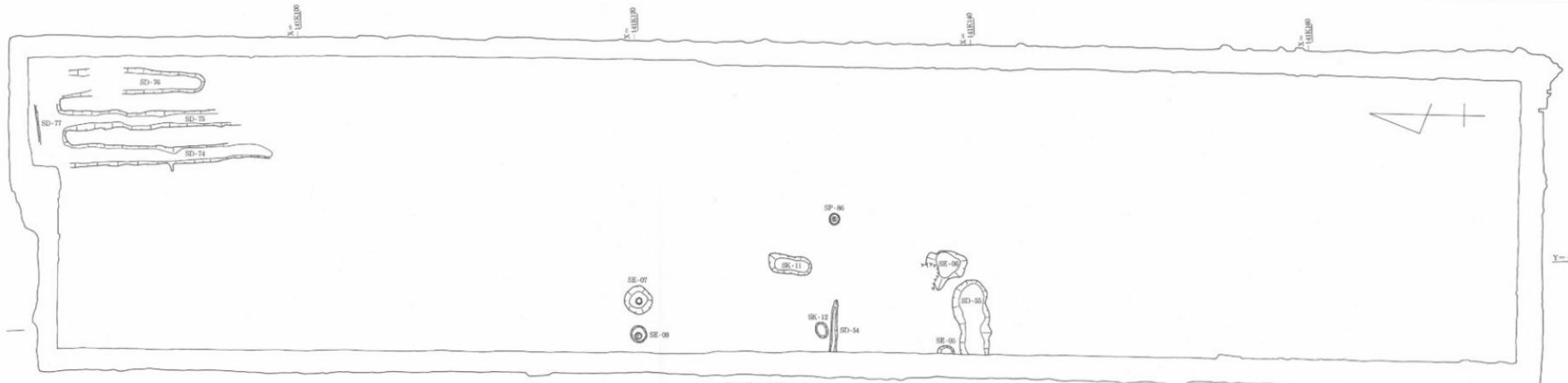
基本層序III層下層の褐色土をベース層として検出している。この層はU-4～6区でしか認められない層で、第2遺構面上層検出時にはすでに表れており、基本層序III層上位の土を除去するとここだけ約4～5cmの高まり状に残ったもので、ここで中世の溝、井戸、土坑などを検出しているので、集落域の整地層と考えら



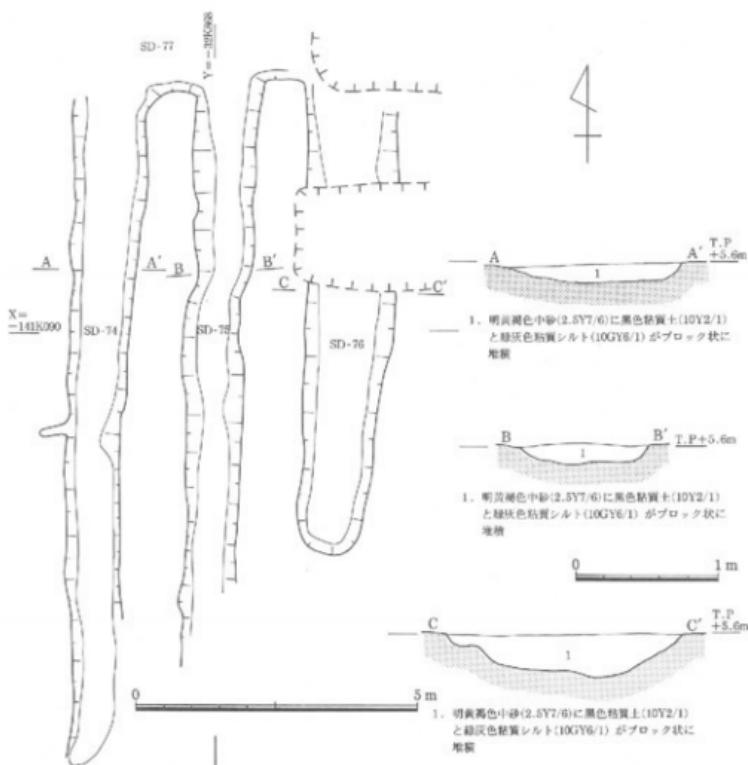
第54図 SD-54、SK-12平面図



第55図 SD-55、SE-05平面図



第53図 川区第2遭撲面下層 第3遭撲面平而凹



第56図 SD-74~77平面、土層断面図

れる。この面での遺構の検出は、トレーナーの北東隅であるU-18区で検出した竪状遺構が見られるだけである。検出面はトレーナーの北側でT.P.+5.6mを測り、南側でT.P.+4.7mを測る。

#### 溝

##### SD-54 (第54図)

U-5区で検出された。すぐ北側でSK-12を検出している。東西方向に走り西端は側溝に切られるが、さらにトレーナー外に続き、東端は舌状に終わっている。検出長2.9m、幅0.4m、深さ5cmを測る。埋土は暗褐色土が堆積しており、遺物は出土していない。

S D - 55 (第55図)

U - 4 区で検出された。すぐ北側では S E - 05 を検出している。東西方向に走り西端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外に統いており、東側は舌状に終わる。検出長4.5m、幅1.7~2.1m、深さ21cmを測る。埋土は暗黄褐色土が堆積しており、遺物は出土していない。

畝状遺構

S D - 74~77 (第56図)

トレンチの北東隅であるU - 18区で検出された。S D - 77は東西方向に走り、検出長3.8m、幅1.5m、深さ19cmを測る。S D - 74~76はS D - 77より派生して南北方向に平行して走り、検出長8.2~12.1m、幅1.2~1.6m、深さは8~21cmを測る。断面形はそれぞれ舟底形を呈しており、埋土は明黄褐色中砂に黒色粘質土と緑灰色シルトがブロック状に堆積している。形状と規模から畝状遺構と考えられる。遺物は瓦器椀、土師器皿の小片が出土している。

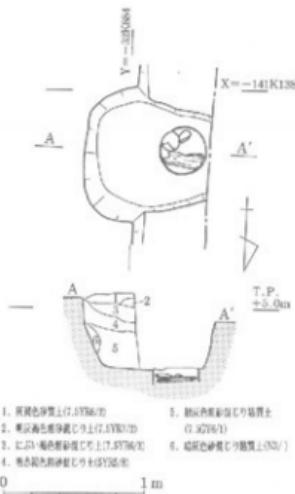
井戸

S E - 05 (第55・57図、図版40)

U - 4 区で検出された。約半分を西側側溝に切られているが、平面形は推定で径約0.8mの円形を呈しているものと考えられ、深さは52cmを測る。断面形は台形を呈しており、底面は平坦である。埋土はおよそ四層に分かれ、灰褐色砂質土、にぶい褐色粗砂混じり土、明赤褐色粗砂混じり土、緑灰色粗砂混じり粘質土などが水平に堆積する。底面からさらにもう一段掘り下げた状態で、水溜用の曲物側板が一段置かれていた。遺物は曲物内上部に薄板片とともにほぼ完形に近い土師器椀が正立の状態で出土している。井戸廃絶の際に意図的に埋納されたものと考えられる。土師器椀の形態から11世紀末~12世紀初頭頃の時期が考えられる。

S E - 06 (第58図)

U - 4 区で検出された。平面形は1.9×2.6mの



第57図 S E - 05平面、立面、土層断面図

不定形を呈しており、深さは65cmを測る。内部には井戸に関する施設は存在しなかったが、形状と規模からして、素掘りの井戸、或は井戸の抜き取り跡と考えた。遺物は底部の砂層から須恵器杯身の破片が1点出土しているが、下部からの混入であって、井戸の時期を示すものではないと考えている。

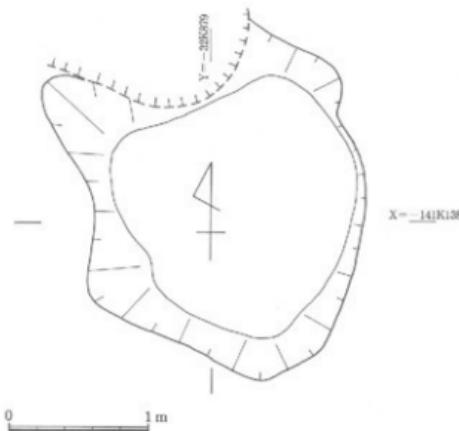
S E - 07 (第59図、図版51)

U - 6 区で検出された。平

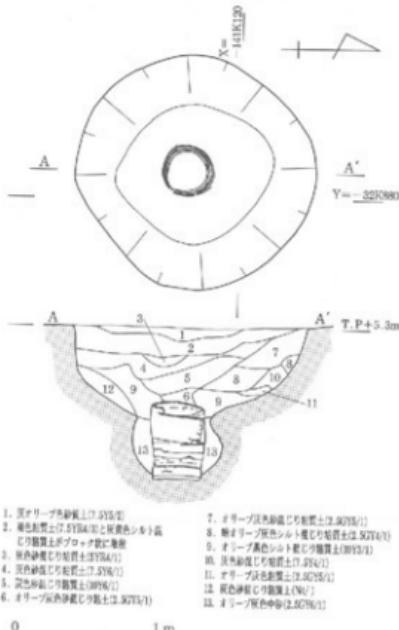
面形は $1.5 \times 1.7\text{m}$ のほぼ円形を呈しており、深さは76cmを測る。底面からさらに掘り下げて水溜用の曲物側板が三段重ねられた状態で置かれていた。遺物はほとんど出土しなかったが、埋土中には瓦器や土器皿の小片が含まれていたのを確認している。

S E - 08 (第60図、図版52)

U - 6 区で検出された。平面形は $0.9 \times 1.0\text{m}$ のほぼ円形を呈しており、深さは59cmを測る。壁は検出面より底部まで、ほぼ垂直に近い状態で掘り込まれており、内部には水溜用の曲物側板が四段重ねられた状態で置かれていた。井戸側などの施設は存在しないので、水溜用の曲物が井戸側を兼ねていたようである。

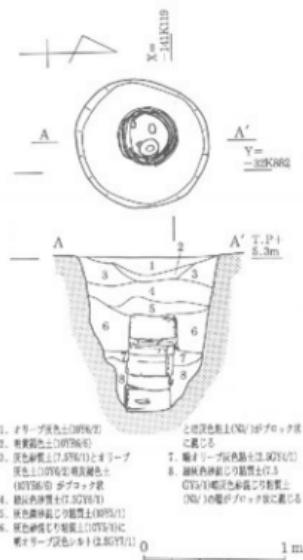


第58図 S E - 06平面図



第59図 S E - 07平面、立面、土層断面図

1. オリーブ色砂質土(2.5%V/I)
2. 緑色粘土(2.5%V/I)と灰緑色シルト粘土(2.5%V/I)と緑色シルト粘土(2.5%V/I)
3. 刃物器(2.5%V/I)
4. 灰色砂質土(2.5%V/I)
5. 灰色砂質土(2.5%V/I)
6. オリーブ色砂質土(2.5%V/I)
7. オリーブ色砂質土(2.5%V/I)
8. 緑色粘土(2.5%V/I)と緑色シルト粘土(2.5%V/I)
9. オリーブ色シルト粘土(2.5%V/I)
10. 灰色砂質土(2.5%V/I)
11. オリーブ色砂質土(2.5%V/I)
12. 灰色砂質土(2.5%V/I)
13. オリーブ色砂質土(2.5%V/I)



第60図 S.E.=08平面、立面、土層断面図

十一

SK-11 (第61図、図版40)

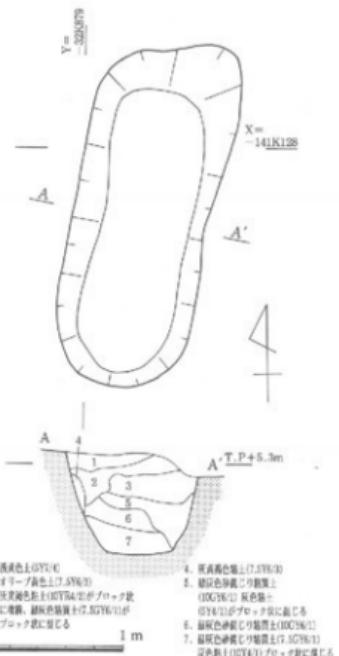
U-5区で検出された。平面形は $1.0 \times 2.5\text{m}$ の長円形を呈しており、深さは69cmを測る。断面形は逆台形を呈しており、底部は平坦であった。埋土の各層には灰黄褐色粘土や緑灰色粘質土、灰色粘土がブロック状に混じり、人為的に埋め戻された様相を呈している。遺物は出土していないので時期は不明である。

#### S K -12 (第54図)

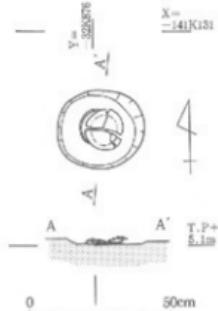
U-5区で検出された。平面形は径0.8mの不整円形を呈しており、深さは7cmを測る。埋土は暗黄褐色土が堆積しており、遺物は出土していない。時刻は不明である。

ピットト

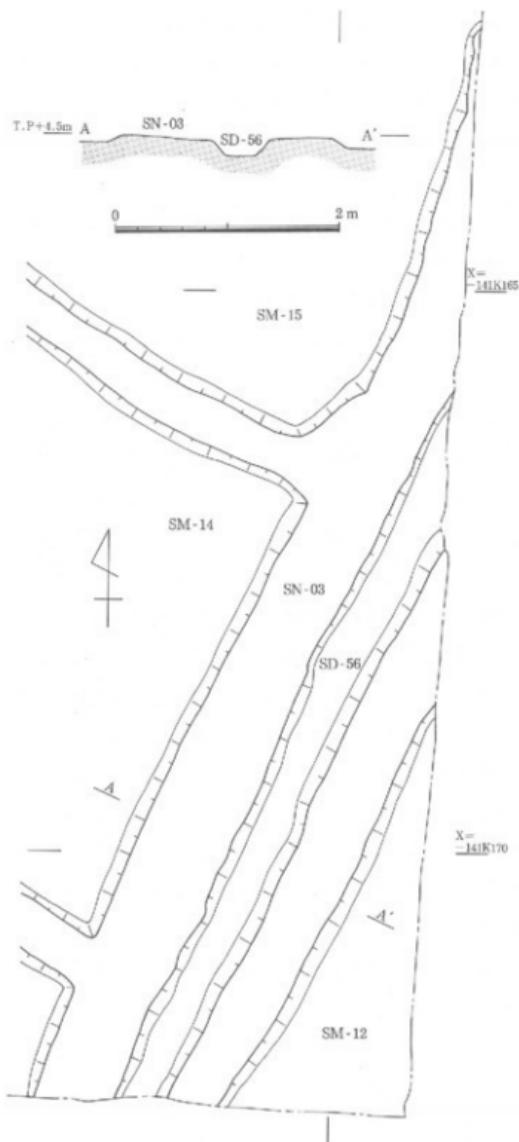
この面においては、建物に関するピットはまったく検出されていないが、土器皿を埋納



第61図 SK-11平面、土層断面図



第62図 SP-86平面・断面図



第63図 SD-56、SN-03平面、断面図

するS P-86を単独で検出している。

#### S P-86 (第62図)

U-5区で検出された。

平面形は $2.3 \times 2.5\text{m}$ のはば円形を呈しており、深さは2cm程度と浅い。内部には、二枚の完形の土師器皿を口縁部どうしを合わせるようにして、合子のようにして重ねて置かれていた。周辺には建物に関連するようなピットは存在せず、皿内部にも何かを入れた様子はないので、このピットがどのような意味を持つのかは不明である。土師器皿の形態は13世紀初め頃の時期を示す。

#### 4. 第3遺構面上層

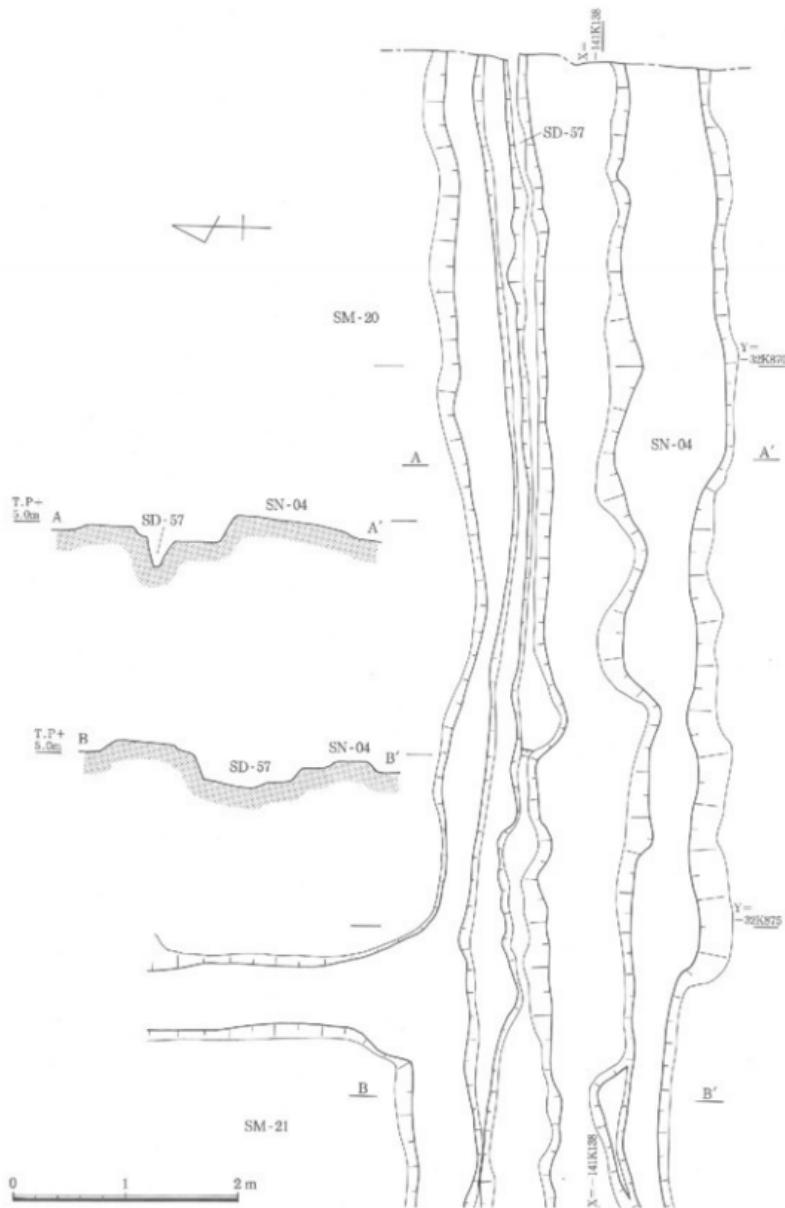
(第53図、付図4)

基本層序IV層の上層をベース層として、大型畦畔と小畦畔で区画される水田跡が検出されている。検出状況はU-4・13区で検出した溝SD-57を伴う大型畦畔SN-04を

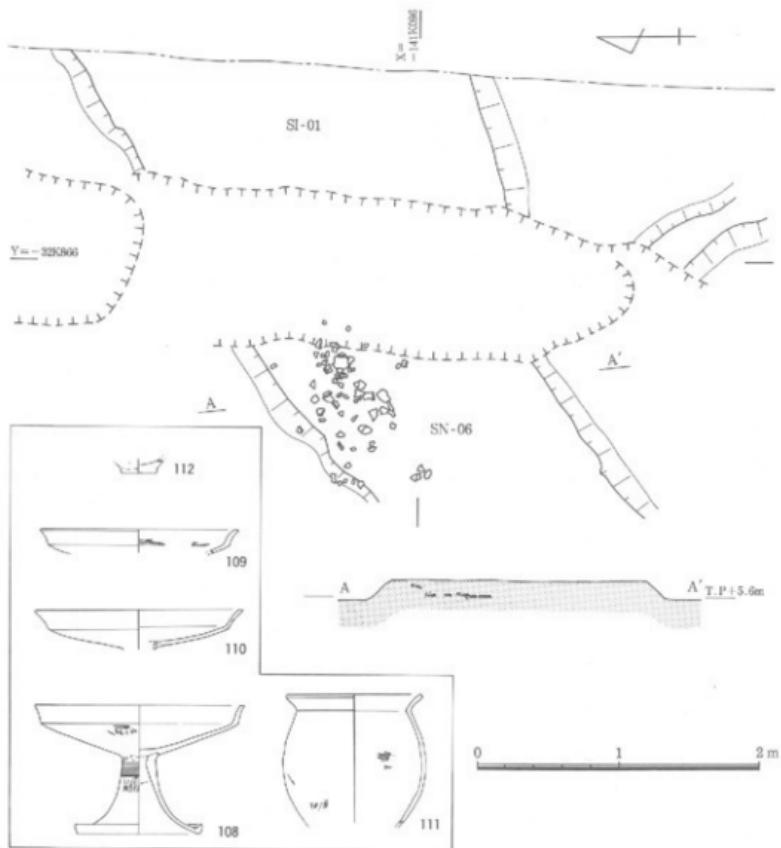
境にして北側では良好で、南側では流失によるものか、畦畔の残りが悪く、U-1・10区で確認できたに過ぎない。検出状況から水田域はトレンチの周囲へ広がる様相を示しており、既往の調査結果と一致する。検出面はトレンチの北側でT.P.+5.6m、南側でT.P.+4.4mを測る。

### 水田跡

水田はトレンチの南側では、消失している畦畔を推定復元したものも含めて10枚（SM-10～19）検出している。区画を明確に復元できるものはなかったが、短辺1.2～3.6m、長辺3.6～8.0mを測る長方形の区画で、面積約10.7～22.0m<sup>2</sup>の規模のもので構成されている。南東隅では、水路 S D-56を伴って北東から南北方向に走る大型畦畔 S N-03が検出されており、この水路は水田への取水、排水の機能を持つものと考えるが、トレンチ内では水路から水田への水口を検出することはできなかった。水田を区画する小畦畔の規模は、基部で幅0.4～0.6m、高さ4～14cmを測り、小畦畔においても水口は認められなかったので、各水田への水の取り込みは北東から南西に向けてオーバーフロウさせて行われ、最終的には S D-56に排水していたものと推定されるが、小畦畔はいずれも基部に近い検出であったため、水口を確認することができなかったことも考えられ、各水田への取排水の方法については、正直なところ不明である。小畦畔は北側で途切れており、U-4・13区で検出された、東西方向に走る大型畦畔 S N-04までの間は、畦畔及び水田耕土自体が検出されておらず、流失したものと考えている。S N-04は水路 S D-57を伴う大型畦畔で、S D-57の南側の畔は一部決壊していた。S N-04を境にして北側では検出面が約13cm高くなっている、消失している畦畔を推定復元したものも含めて、水田を41枚（SM-20～60）検出している。水田の検出状況は、トレンチの北東隅では、中世の墳の削平の影響を受けて、一部畦畔が消失している箇所もあるが、小畦畔の規模は基底部で幅0.3～1.2m、高さは1～14cmを測り、S N-04より南側で検出した水田よりも良好であった。水田面の直上には砂、シルトが薄く堆積するだけで、トレンチの南側の水田が砂で厚く覆われているのとは対象的であり、消失の原因となった洪水等による影響が少なかったことに起因するものと考えられる。大型畦畔は S N-04以外にも二条（S N-05・06）検出されており、双方とも北東から南西方向に走るが、水路は伴わないもので、S N-05は S N-04に合流し、S N-06は南西に向かうほど幅を狭くしている。水田の区画を見ると、大型畦畔による区画を基本にして、さらに小畦畔によって区画されており、規模、形状とも各差があるが、主に、短辺約4.5～5.5m、長辺が7.0m前後の長方形のもので構成されているよう



第64図 SD-57、SN-04平面、断面図

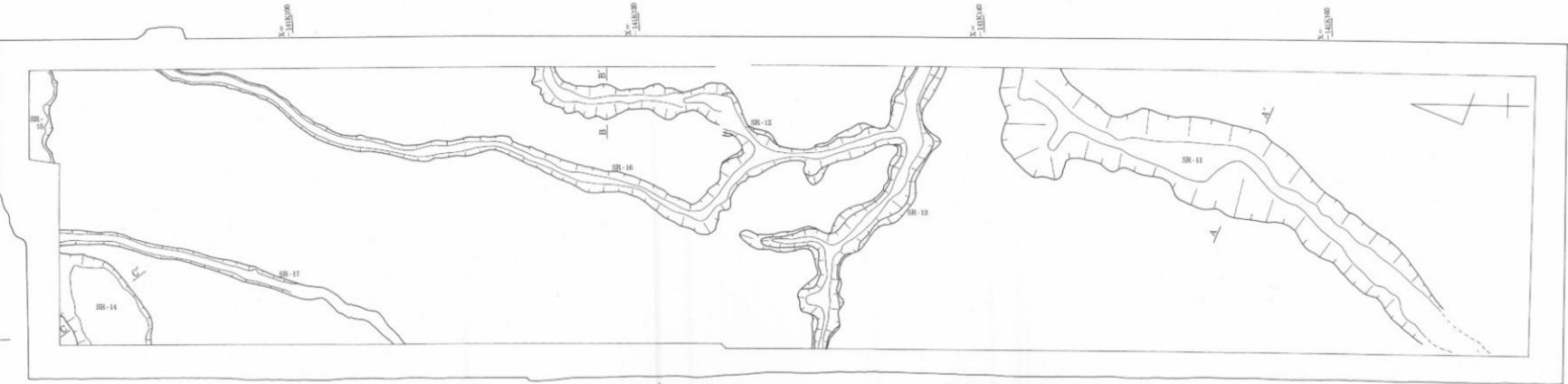


第65図 SI-01 (SN-06内) 平面、断面図

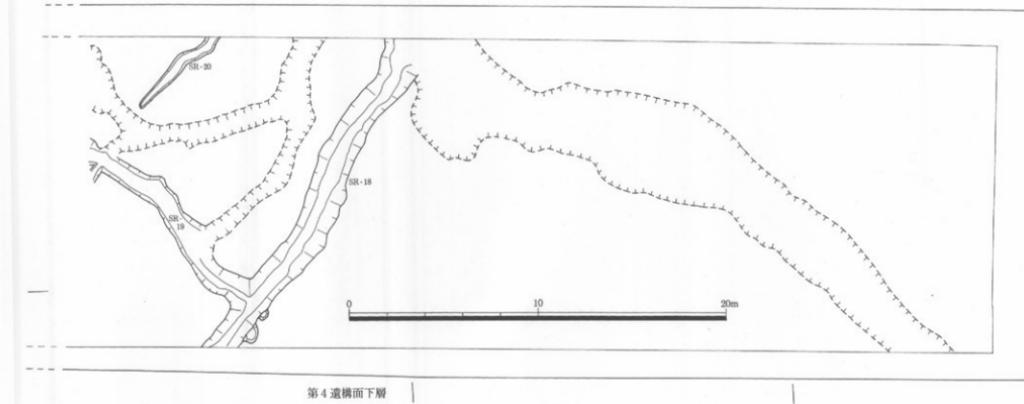
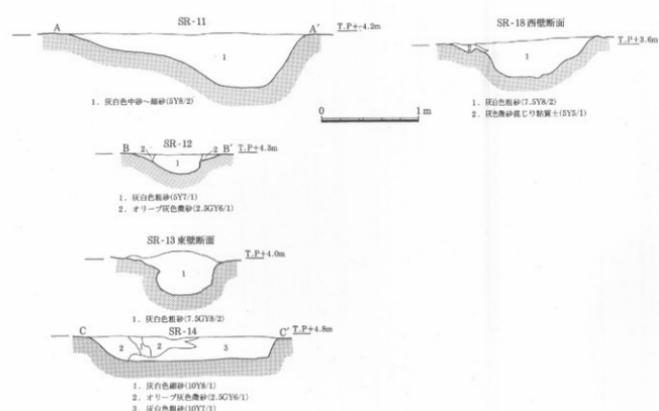
あるが、厳密に言うなら長方形の一隅を短く切った、五角形を呈するものもある。水口は、SN-06の南側に接するSM-37・41・45・49・50や、それよりも北側で検出された水田に顕著に認められるが、その一方で、まったく水口をもたないものも存在しており、各水田への取排水の方法に相違があったものと推定される。

#### 5. 第4遺構面（第60図、付図6・7）

第4遺構面は、灰色砂層や緑灰色シルトで構成される基本層序V層を除去した後に現れる、基本層序VI層上面の黒色粘土をベース層として検出された最終遺構面である。主に北



第4 遺構面上層



第4 遺構下面層

第66図 U区第4遺構面上層、下層平面図、SR-11~14・18土層断面図

東から南西方向に走る小規模な溝状の遺構を検出したのみで、他には目立った遺構は存在しなかった。検出された溝は人為的なものとは考え難く、自然流路と考えている。また、検出面一面に、直上の緑灰色シルトが径1cm前後の円形或いは、幅が同規模で長さ約0.5~1.0mで不定方向に直線状に残る痕跡が無数に検出された。今のところこれが何であるかは特定できないが、何らかの水棲生物の痕跡ではないかと考えている。（図版57）この痕跡は第III期調査の各トレンチでも確認されており、敷地内において普遍的に認められるようである。遺物はSR-11より、種類を特定できないほど磨耗の著しい土器の極小片が出土した以外は、遺構内及び包含層からはまったく出土していないので、時期を明確にできないが、既往の調査結果に準じて、弥生時代以前と考えている。検出面は北側でT.P.+4.7m、南側でT.P.+4.3mを測る。

#### 自然流路（第66図、図版45・48）

##### SR-11

U-1・2・11~13区で検出された。蛇行しながら北東から南西方向に走り、東側と西側側溝に切られるが、さらにトレンチ外に続いている。幅約5.0m、深さは約60cm前後を測り、埋土はラミナの認められる灰白色中砂~細砂が堆積する。磨耗の著しい土器の極小片が出土したが、土器の種類を特定することはできなかった。

##### SR-12（第66図、図版46・48）

U-13~15区で検出された。トレンチ外の東側から蛇行しながら、南北方向に走り、途中でSR-16が合流し、さらにSR-13に合流する。幅約2.2m、深さは約40cm前後を測り、埋土は灰白色粗砂、オリーブ灰色微砂が堆積している。

##### SR-13（第66図、図版46・48）

U-4・5・13区で検出された。蛇行しながら東西方向に走り、途中でSR-12が合流している。幅約2.6m、深さは約50cm前後を測り、埋土は灰白色粗砂が堆積している。

##### SR-14（第66図、図版57）

トレンチの北西隅のU-9区で検出された。蛇行しながら北東から南西方向に走るようで、トレンチ外に続いている。幅5.4m、深さは43cmを測る。埋土はラミナの認められる灰白色細砂~粗砂、オリーブ灰色微砂が堆積している。

##### SR-15（図版57）

トレンチの北東隅のU-18区で検出された。東西方向に走るようでトレンチ外に続いている。検出幅1.6m深さは37cmを測る。埋土はラミナの認められる灰白色細砂~粗砂、オ

リープ灰色微砂が堆積している。位置関係から S R -14 と同一の流路であると考えられる。

#### S R -16

U - 5・6・15~18区で検出された。トレンチ外の東側から蛇行しながらほぼ南北方向に走り、途中で S R -12 に合流する。最大幅約2.0m、深さは約43cm前後を測り、埋土は灰白色粗砂、オリーブ灰色微砂が堆積している。

#### S R -17

U - 7~9区で検出された。トレンチ外の北側から、北東から南北方向に走る。幅1.0m、深さは12cmと浅い。南側に行くにしたがい、しだいに浅くなり、かろうじて痕跡をと止めている。埋土は灰白色中砂が堆積している。

### 6. 第4遺構面下層

基本層序VI層を構成する下位の黒色粘土をベース層として検出している。検出したのは U区の北側部分のみである。

#### S R -18 (第66図、図版47・48)

U - 4・5・13区で検出された。トレンチ外の東側から、南東から北西方向に走る。幅1.8m、深さは25cmを測り、埋土はラミナの認められる灰白色粗砂が堆積している。S R -11と重複するトレンチの東壁断面において、第4遺構面上層で検出した S R -11に切られれていることが確認されている。

#### S R -19 (図版47)

U - 5・14区で検出された。北東から南西方向に走り、S R -18に合流する。幅1.6m、深さは59cmを測り、埋土はラミナの認められる灰白色粗砂が堆積している。

#### S R -20

U - 14区で検出された。南東から北西方向に走り、最後は舌状に終わっている。幅0.8m、深さは8cmと浅く、埋土は灰白色中砂が堆積している。

### 第4節 V区の遺構

V区は第III期調査区（K・L・M・N区）の西側に位置し、調査前の地表面の標高はトレンチの北側でT.P.+4.9m、南側でT.P.+4.4mを測り、北から南への傾斜が認められた。調査トレンチの大部分が、南北方向に走る現況の水路と重複しており、特にトレンチの南側であるV - 2区はこの水路の擾乱による影響が大きかった。

調査深度は、水路改修工事の掘削深度であるG L -1.3mまでを対象としたため、既往の調査において最終遺構面としている第4遺構面までは到達していない。

## 1. 第1遺構面（付図1）

現況の水路工事による攪乱の影響を受けて、近世の面である第1遺構面は検出できなかつたが、これに重複するように南北方向に走る杭列の跡が検出され、水路が存在していたことが窺える。既往の調査で検出した田畠の区画を兼ねた、近世の水路と考えられるが、この水路は何回か改修されて、出土遺物などから、昭和初期の改修を最後に現況の水路に至っていることが判明した。

## 2. 第2遺構面（第67図、付図2）

中世に相当する遺構面であるが、トレンチの南側であるV-2区では、現況の水路工事による攪乱の影響を受けてこの面は消失していたが、北側のV-1区で溝、落ち込み、ピットなどが検出されている。既往の調査結果では上層と下層の二面に分けて検出しているが、当該調査では一面で検出している。

### 溝

#### SD-78（第67図、図版62）

V-1区で検出された。ほぼ南北方向に走る溝で、北端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続き、南端はその向きをやや西側に変えトレンチ外へ続き、南側で検出された落ち込みS T-02に合流していることが予想される。検出長26.0m、幅0.6~1.3m、深さは6~49cmを測る。東側の肩に沿って杭列が認められ、溝内には土器や石の集積（集石遺構S X-01~04）を四箇所検出することができた。最も北側にあるS X-01は、主に10~40cm大の花崗岩の割り石から成り、溝が一段深くなる西側部分でまとめて検出された。S X-02は溝の幅が最も広くなる中央付近で検出されており、S X-01と同様の石の集積が溝幅全体に約1.1×4.4mの範囲で見られ、遺物はこれらの石の間に入り込むようして出土している。特に北側に大きめの石と遺物が集中しているようである。S X-03はS X-02の南側で検出されており、数個の石と遺物の集積が認められる。S X-04は最も南側で検出されており、瓦器碗、土師器皿などがまとめて見られた。溝の埋土は、暗灰色や暗褐色の粘質土とシルト～砂の互層となっており、所によってはラミナが認められる。遺物が多く含まれている上層部と、遺物の量が極端に少なくなる下層部とに分けることができるが、土器や石の集積は、上層の範囲内で検出されている。このことは下層部分に堆積する砂やシルトは、本来の溝として機能していた時期のもので、上層部分は、溝が機能しなくなつて廃絶される時期に近い頃の堆積であると考えられる。遺物は瓦器碗、土師器皿、青磁、白磁の他に、特に瓦器釜、土師器釜、瓦器足釜、土師器足付き鍋などの煮炊き具類の

出土量が目立っている。また、石の中には明らかに熱を受けたものが多く含まれていた。時期は、主に上層や、集石遺構から出土した瓦器椀の型式が13世紀後半～末頃を示しており、これが溝の廃絶時期と考えられる。

#### S T - 02 (第67図、図版62)

第III期調査のL・N区で検出した、東西方向に走る落ち込みⅢ S T - 02の続きであると考えられるが、攪乱の影響により、南側の肩は検出されなかった。深さは43cmを測る。さらに西側に続いており、トレンチ外でS D - 78に合流していることが予想される。埋土は灰色砂混じり粘質土や灰色粘土、オリーブ灰色砂質土が堆積しており、かつては水が停滞或いは緩やかに流れていることを示している。内部に集石遺構S X - 05があり、8~27cm大の花崗岩の割り石が径約0.9mの範囲で検出された。遺物は瓦器椀、瓦器皿、土師器皿、瓦器足釜、土師器足付き鍋、青磁などが出土しており、13世紀前半～後半頃の時期が考えられる。

#### ピット

#### S P - 89~91 (第67図)

円形のピットを3個検出しているが、建物の柱穴になるかどうかは不明である。S P - 91は90を切っている。

#### 3. 第3遺構面 (付図4)

古墳時代に相当する遺構面で、既往の調査結果と同様、明確な生活面は検出はされなかつたが、V - 2区でM区から続いているこの時期の自然流路を検出している。

#### 自然流路

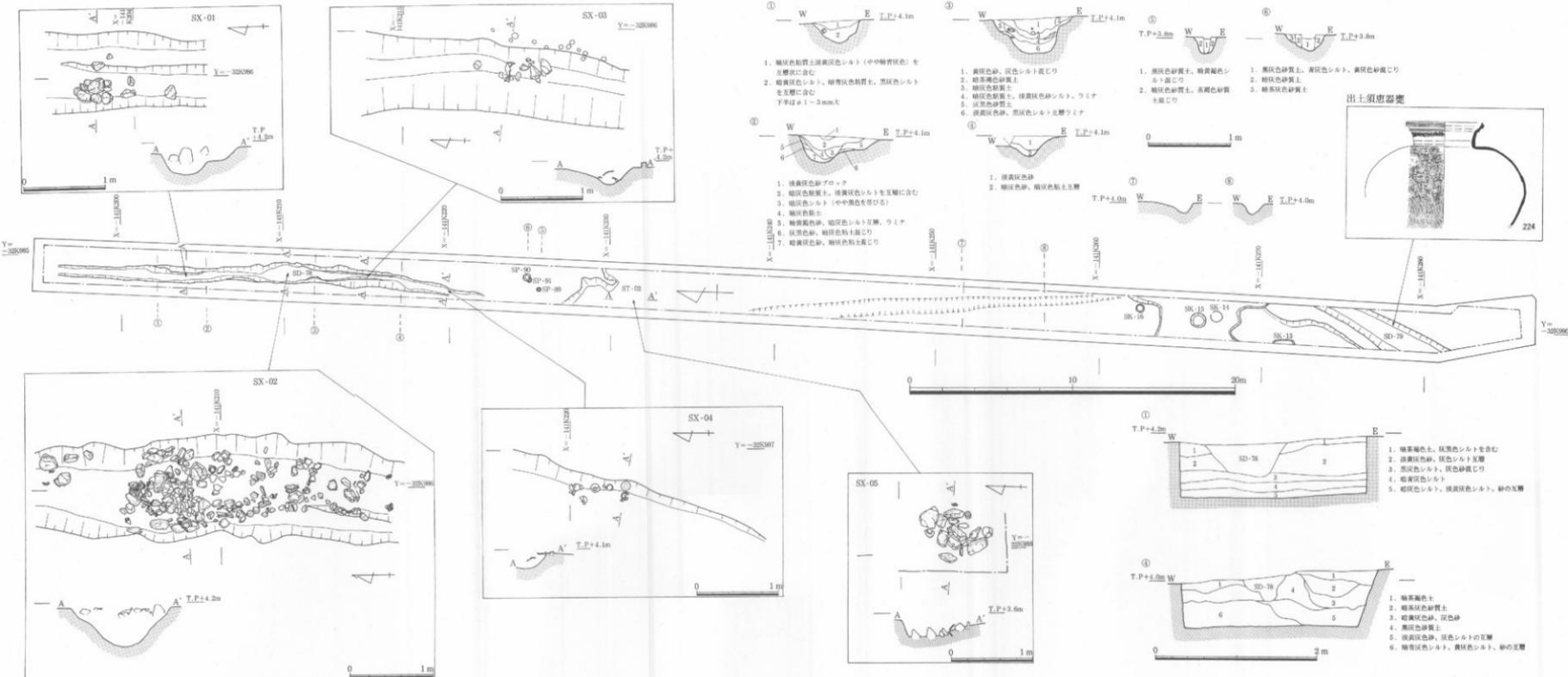
#### S D - 79 (第67図、図版59)

トレンチの南側で検出された。北東から南西方向に走り、トレンチ外に続いている。第III期調査で検出した、古墳時代の自然流路Ⅲ S R - 01・02に相当しているものと考えられる。埋土はラミナの認められる砂層が堆積しており、遺物は須恵器杯身や杯蓋、壺などが出土している。

#### 土坑 (第67図、図版59)

#### S K - 13~16

S K - 13は矢板に切られているので平面形は不明であるが、他は円形を呈している。遺物が出土していないので、所属時期は明らかではない。



第67図 V区第2遺構面平面図

## 第5章 遺物

### 第1節 出土遺物の概要

第III期調査では中世の遺構が多く検出され、遺物も大量に出土したが、今回の調査ではこの時期の遺構は少なかったため遺物の量も少ない。逆にこれまで出土量の少なかった近世の遺物がS区のSD-11よりまとまって出土しており、その種類も染付を中心とした陶磁器類や土製品などがある。概して遺物の量は減少しているものの、包含層出土のものを含めて各時代の遺物が出土しており、ここでは木製品以外の主な出土遺物について概略を述べる。

#### 近世

近世～近代までのものが、第1遺構面で検出した溝（水路）や基本層序II～III層から出土している。特にS区SD-11からは、染付を中心とした磁器や陶器の他に土製品などが出土している。

#### 染付（磁器）碗

主に碗類が出土しており、口径の大きさにより小杯（口径5cm未満）、小碗（口径5～9.1cm未満）、中碗（口径9.1～12cm未満）、大碗（12～15cm未満）<sup>(1)</sup>に分類した。

その他近世で特徴のある器種として、次のような遺物が出土している。

#### 紅猪口

化粧道具の一つ。小杯程度の大きさで、浅い形状を呈している。中に紅を入れて、通常は伏せて置くため口縁端部は平坦になっており、文様は外面だけに施されるのが普通である。磁器製で外面が菊花形の文様のものが数点出土している。

#### 灯明受皿

平底の内面に一、二箇所切り込みがある環状の仕切りが付くもので、この上に灯明皿を載せて、垂れた油を受けるための台である。陶磁器製のものが出土している。

#### 泥面子

粘土を型抜きにした素焼きの円盤状土製品で、子供の玩具として使用されていたものである。一定の距離から穴に投げ入れたり、相手の面子に当てて、勝負を競った。表面に文字や当時の気役者の紋、火消しの図などのモチーフが施されているのが特徴で、調査では「田」の文字が施されたものが出土している。

### 貝独楽

貝独楽（ペイゴマ）は本来海螺（バイ）という貝殻の中に鉛を溶かして入れ、その上に蠍を詰め上部を平らに削ったものという。数人で同時に独楽を回して、人の独楽を弾き飛ばすと勝ちという遊びで、江戸時代から特に京阪地方で盛んであったと言われている。明治時代に入ってからも引き続き盛んに行われ、鉄物製のものも作られた。調査では、それを模して作られたと考えられる、土製のものが出土している。

その他の遺物としては土人形、煙管、「寛永通宝」などが出土している。

### 中世

この時期の遺物の出土量は、包含層のそれを含めて少なく、V区SD-78の出土遺物が調査全体の出土量の大半を占めている。

#### 瓦器椀・瓦器皿

瓦器椀は出土量は少ないが、「楠葉型」、「大和型」、「和泉型」が、それぞれ出土している。瓦器皿の初現期である11世紀から、13世紀末頃までのものが見られるが、14世紀代のものは出土していないようである。

瓦器皿は、見込みのヘラミガキがジグザグ状ものが出土している。

#### 土師器皿

土師器皿は中皿、小皿、があり、11世紀代の「て」の字状口縁を呈するものから、12~13世紀代のものが出土している。

#### 土釜

口縁部付近に鍔をめぐらす煮炊き道具で、羽釜とも呼ばれる。その材質によって瓦器釜、土師器釜に分けられる。完形での出土はなくそのほとんどが破片であるが、口縁部と鍔の形態の特徴により「河内型」、「大和型」、「摂津型」、がそれぞれ出土している。

#### 瓦器足釜

扁平球状の瓦質の体部に短い太めの鍔をめぐらし、三方に棒状の脚が付くもので、その形状から三足とも呼ばれる。破片も含めて個数が多い。底部の下で直接火を焚いて使用されたため、出土時は全体に煤が付着しているのが通常である。

#### 土師器足付き鍋

形状は足釜によく似るが、体部の鍔ではなく、口縁部の形態が受け口状を呈するものである。出土数は少なく既往の調査では1点しか確認されていなかったが、V区SD-78から、破片も含めて、新たに数点出土した。

### 須恵器

量は少なかったが、東播系の片口鉢や壺の出土が目立つ。

### 輸入陶磁器

白磁、青磁が出土しており、白磁は玉縁口縁を呈する碗が多く、一部外反するものもある。青磁は碗、皿ともに見られ、同安窯系、竜泉窯系のものが出土している。

### 奈良～平安時代

この時期の遺構は、T区で奈良時代の自然流路S R-07を検出しているのみで、須恵器が2点出土している他は、遺物はほとんど出土していない。

### 弥生～古墳時代

自然流路や水田面からの遺物がほとんどであるが、出土量は少なかった。

### 須恵器

6世紀前半頃の杯身、杯蓋壺などの他に、包含層中には初期須恵器の破片が見られる。

### 土師器

S・T区S R-06・08より前期の庄内～布留式期ものが、少量ではあるが出土している。

### 弥生土器

前期のものではなく、中期以降のものが出土しているが、主に包含層からの出土で、その量も少ない。後期の高杯や壺の底部の出土が目立つ。

その他小型の柱状片刃石斧が出土している。

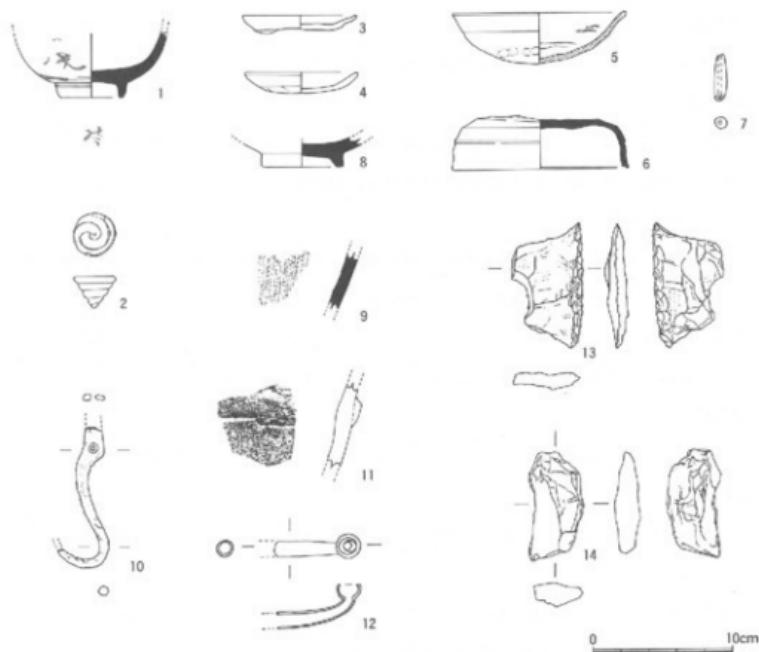
## 第2節 R区の出土遺物

### S D-01 (第68図、図版64)

染付碗（1）と貝独楽（2）が出土している。1は推定で口径約12cmを測る中碗で、文様は草花文か。底部外面に変形字での銘があるが判読不明である。「渋」、「然」に類似している。2は素焼きで巻貝状を呈している。

### S D-04 (第68図、図版64)

土師器皿（3・4）、瓦器碗（5）、須恵器杯蓋（6）が出土している。3・4はいずれも口縁部に1回のヨコナデを施し、形状は平底から屈曲して口縁部へ続く。5は和泉型瓦器碗で、外面には指押さえの痕が僅かに残り、内面は見込みから連続する粗い圓線ミガキが施されている。高台は付されていない。尾上編年のIV-3期（以下IV-3と記す）に相当する。<sup>(2)</sup> 6は鈍い稜と口縁端部に内傾する明確な段を持つ。中村編年のII型式1段階～2段階（以下II-1～2と記す）に相当する。<sup>(3)</sup>



第68図 SD-01・04、包含層出土遺物

包含層出土遺物（第68図、図版64・65）

土錘（7）、白磁碗（8）、須恵器片（9）、鉤状鉄製品（10）、円筒埴輪片（11）、煙管（12）等の他石器類（13・14）が出土している。7は紡錘形を呈し、径2.5mmの穴が貫通する。8は底部の破片で、断面台形の削り出し高台を持つ。横田・森田編年<sup>(4)</sup>の碗II類に相当するものと考えられる。9は小片であるが外面に繩文が見られ内面にはナデが施されている。10は両端を欠いているが、径5.5mmの穴が貫通している。用途は不明であるが棹秤の先に取り付けてある鉤に類似する。12は煙管の雁首部分で銅製。13は不定形スクレイパーで、片方の側縁に細部調整を施して刃部を作り出し、他の側縁は風化面が残る。14は全体に風化しており、細部調整は認められない。13・14ともサヌカイト製。11はタガ部分<sup>(5)</sup>の破片で、外面調整は1次調整のタテハケのみが施され、低いタガが付く。川西編年のV期に相当する。

### 第3節 S・T区の出土遺物

#### S E -01 (第69図、図版66・67)

瓦器椀（15・16）、瓦器皿（17）が出土している。15は楠葉型瓦器椀と考えられ、外面は粗い分割ヘラミガキが施され、内面は密な圓線ミガキ、見込みには粗いジグザグ状のヘラミガキが施されている。体部は内湾し、口縁端部の沈線はやや下方に施されている。橋本編年のII-1期（以下II-1と記す）に相当する。16も楠葉型瓦器椀と考えられ、体部は内湾し口縁端部も内湾気味に終わり、端部下位に沈線が施されている。外面は体部の約3分の2に密な分割ヘラミガキが施されており、内面には密な圓線ミガキと見込みに連結輪状のヘラミガキが二重に施されている。I-3に相当する。17は口縁部が強いヨコナデにより外反しており、内面は密なヨコ方向のヘラミガキと見込み全体にジグザグ状のヘラミガキが施されている。

#### S E -02 (第69図、図版68)

瓦器皿（18）、土師器皿（19）、瓦器椀（20）、土師器鍋（21）が出土している。18はヨコナデにより口縁部が外反しており、内面は密なヨコ方向のヘラミガキ、見込みには間隔の狭いジグザグ状のヘラミガキが全体に施されており、さらに十字状のヘラミガキを重ねているようである。20は楠葉型瓦器椀と考えられ、内湾する体部で、口縁端部も内湾気味に終わり、端部の沈線はやや下方に施されている。外面は摩耗しているが、密な分割ヘラミガキが底部付近まで認められ、内面には密な圓線ミガキ、見込みにはジグザグ状のヘラミガキが施されている。I-2～3に相当する。21は器面全体に板状工具によるナデが施され、外面には煤の付着が認められる。

#### S E -03 (第69図、図版68)

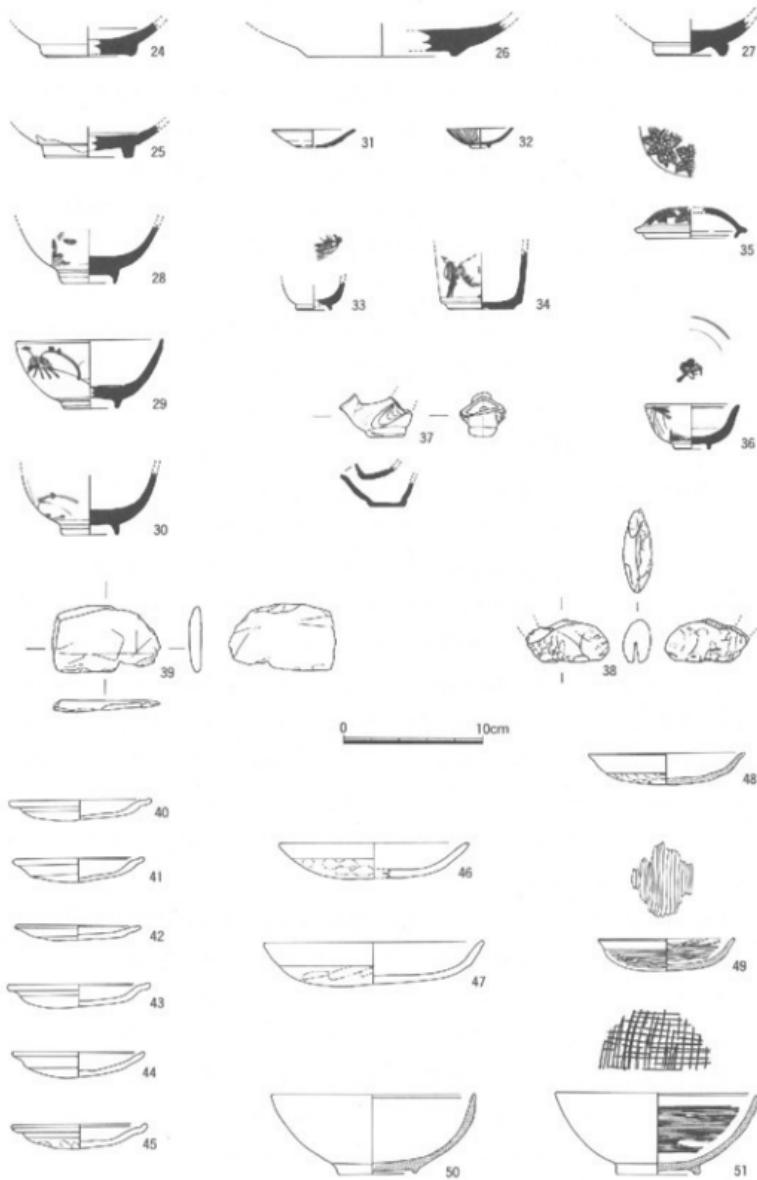
22は砥石。両端は欠損しているが、両面、両側面とも使用痕が認められ擦り減っている。熱を受けた痕跡が有り全体に黒く煤けている。23は滑石の石片で、表面は滑らかに加工されており、石鍋の一部と考えられる。

#### S D -11 (第70図、図版68～72)

白磁（24・25）、青磁（26）の他、近世の陶磁器類（27～36）、土製品（37・38）、砥石（39）などが出土している。24は白磁碗底部で、幅広の低い削り出し高台と見込みに沈線状の段を持ち、外面は露胎である。碗IV-1類に相当する。25も白磁碗底部で比較的高い削り出し高台と見込みに沈線状の段を持つ。外面高台部分は露胎である。IV-2類に相当する。26は青磁皿の底部である。底部は平坦で器壁は厚く、内側を垂直に削り出す低い高



第69図 S E -01・02・03、出土遺物



第70図 SD-11・15出土遺物

台を持つ。軸は全体に厚くかかるが、高台内側に一部露胎部分がある。27は天目茶碗の底部で、高台部分に一部軸がかかり、軸の色は黒褐色を呈する。高台内側の中央部は突出している。28~30・33・36は染付碗で、中碗（28~30）、小椀（36）、小杯（33）に分類される。33・36は主に酒杯に使用されたものか。31は陶器小皿。黄褐色の軸が施されるが、外面は口縁部付近を除き露胎。32は菊花形の紅猪口。磁器製。34は染付の猪口。円筒形を呈し、外面には草花文が描かれている。主にそば猪口として使用されたものか。35は染付の蓋。山吹文が描かれている。37は磁器製で、頭部を欠くが鳥形をしており、内部は中空になっている。尾にあたる部分は筒状でそこが吹き口となる笛の一種か。<sup>(7)</sup> 38は魚形の土製品。左右型合わせで作られており、底部に穿孔がある。39は板状でぶい暗灰色を呈しており、全体に摩耗しているため使用痕を認め難いが、砥石と考えられる。

#### S D - 15 (第70図、図版72・73)

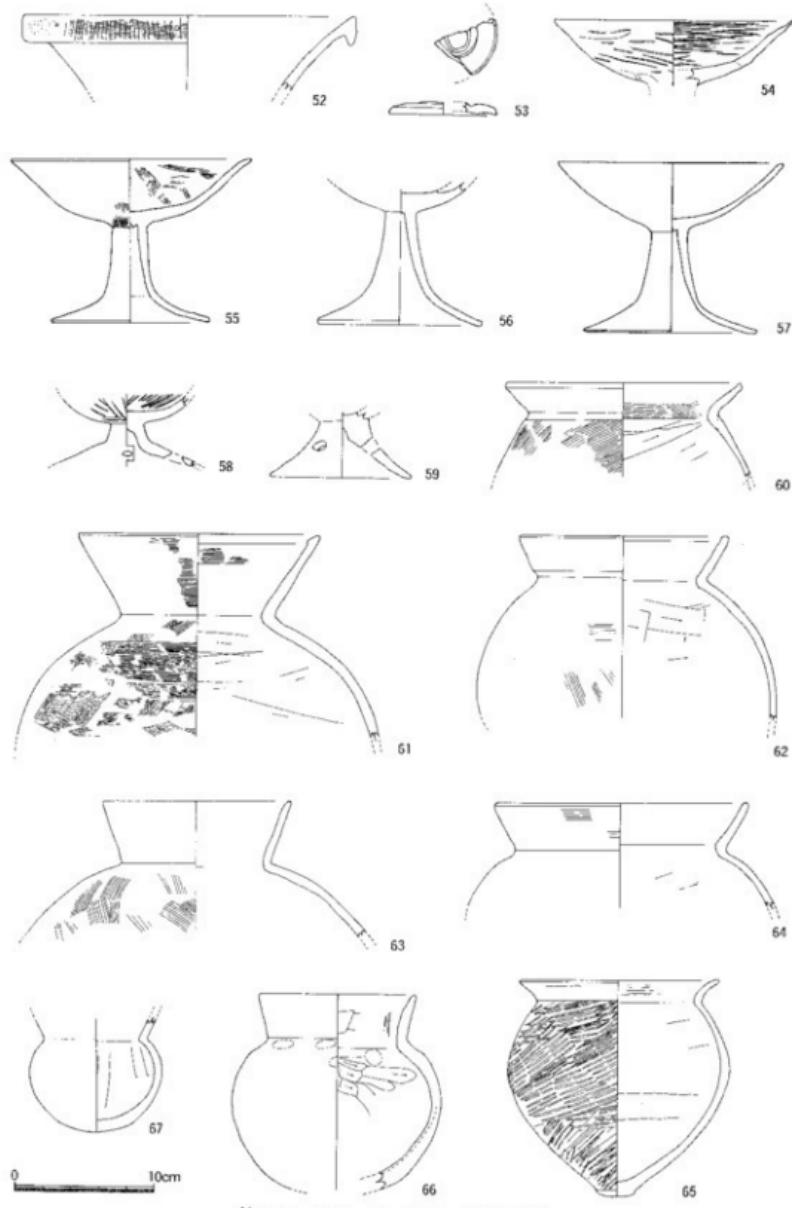
土師器皿（40~47）、瓦器皿（48・49）、瓦器椀（50・51）が出上している。40~45は「て」の字状口縁を呈する土師器皿である。46・47は土師器中皿で、口縁端部は外反気味に終わり、体部下半には指押さえの痕が残る。48は体部下半に指押さえの痕が残り、口縁部及び端部はヨコナデにより外反する。外内面の調整は摩耗のため不明である。49も口縁部が外反気味に終わり、外面の体部下半と内面に太目のヘラミガキ、見込みにも同様のヘラミガキが施されている。50は口縁端部が内湾気味に終わり、沈線をやや下方に施す楠葉型瓦器椀と考えられる。外面内面の調整は摩耗のため不明。I - 3 に相当する。51は大和型瓦器椀と考えられ、内湾する体部に外反する口縁部が続き、端部は沈線による段を有する。外面はかなり摩耗しているが内面は密な圓線ミガキと見込みには細い格子状のヘラミガキが施されている。<sup>(8)</sup> 川越編年の第I段階C型式（以下 I - C と記す）に相当する。

#### S K - 08 (第71図、図版66)

弥生土器（52）が出土している。広口壺の口縁部で、口縁端部はやや肥厚気味に下垂して外面に面を持ち、そこに櫛掛け簾状文と不規則に並んだ方形の刺突文が施されている。IV様式に相当するものと考えられる。

#### S R - 06 (第71図、図版74・75・78)

弥生土器壺の蓋（53）、古墳時代前期の土師器（54~67）が出土している。53は破片であるが復元すると径7.8cmの円板状となり、上面に凹線で装飾が施されている。54~57は布留式期の高杯。いずれも湾曲して開く杯部に掘がながらかに開く高い脚部が付く。54は杯部のみで脚部を欠く。湾曲して開く杯部に外面及び内面にヘラミガキが施されている。



第71図 SK-08、SR-06出土遺物

55は全体にナデが施されるが、脚部と杯部の接合部にハケメがわずかに残る。56・57は摩耗のため調整は不明である。58は杯部と脚部の一部を欠いているが庄内系椀形高杯である。杯部内面に放射状ヘラミガキが施されており、脚部の三方向に円形の透かし孔が有る。60～65は甕で、球形の体部を持ち外面をハケメ、内面をヘラケズリするものと、タタキメを施し突出する底部を持つものがある。66・67は丸底壺である。

S R - 07 (第72図、図版76)

須恵器平瓶 (68) が出土している。平底で把手と口縁部を欠く。IV-3に相当する。

S R - 08 (第72図、図版76)

主に弥生時代後期の土器が出土している。69は小型の鉢である。口縁部は大きく外反し、外面及び内面にヘラミガキが施されている。70・71は口頸部を欠くが長頸壺の体部である。70は平底で、外面は横方向のヘラミガキ、内面底部に指押さえの痕が残る。71は突出する底部を持ち、外面は縱方向のヘラミガキと櫛描き文と波状文を施している。体部中位に穿孔有り。72は壺で球形の体部に短い頸部が付き、口縁部は大きく外反する。外面は縱方向のヘラミガキ、内面は口縁部が横方向のヘラミガキと体部には全面にハケメが施されている。

S P - 53 (第72図、図版77)

捕葉型瓦器椀 (73) が出土している。全体に摩耗しているが内面に團線ミガキがわずかに残る。I-3に相当する。

S N - 01 (第72図、図版77)

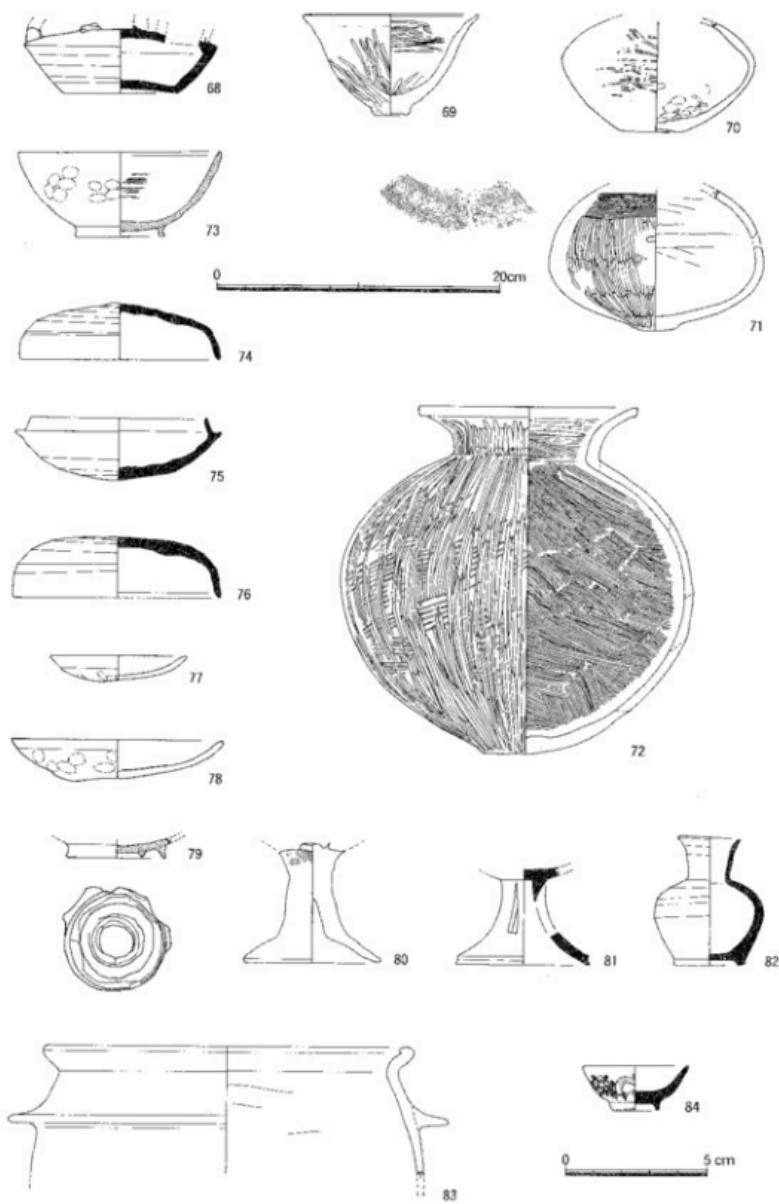
74は須恵器杯蓋で、棱は形骸化して沈線状になっている。II-4に相当する。

S N - 02 (第72図、図版77)

75は須恵器杯身で、内傾する短いたちあがりを持ち、その端部は丸く納められている。II-4に相当する。

包含層出土遺物 (第72図、図版77・78)

76は須恵器杯蓋で、S-6区第3遺構面検出の水田面ベース層より出土している。II-3～4に比定される。77は土師器皿で、S-6区第2遺構面鉤溝内（基本層序II層）から出土している。78は土師器皿中皿でS-5～6区基本層序II層からの出土。79は瓦器椀底部で、高台は二重に付く。S-7区基本層序II層からの出土。80は上師器高杯の脚部で、S-7区東側側溝からの出土。81は須恵器高杯脚部で、三角形の透かし孔が刻まれる。S-5区基本層序IV層出土。82は須恵器長頸壺でT-1区西壁断面のS R-07埋土とされる



第72図 SR-07・08、SN-01・02、SP-53、包含層出土遺物

層からの出土である。N-3に比定される。83は土師器釜で、口縁端部を内側に折り返し、肩部下方に鈎を巡らす。菅原編年の大和B<sub>1</sub>型に相当する。S-7区基本層序II層出土。84は磁器製の小杯。口径約4cmを測り、文様は外面のみに五弁花文が描かれている。紅猪口として使用されたものか。S区SD-11を切る攪乱内から出土している。

#### 第4節 U区の出土遺物

##### S E - 05 (第73図、図版79)

土師器杯 (85・87)、土師器甕 (86) が出土している。85は粗雑な作りで外面は指押さえの痕が顕著に残り、口縁部に1周のヨコナデを施す。内面はナデ調整と太くて粗いヘラミガキが認められる。内面の約3分の2は焼しにより黒色を呈するので黒色土器A類ともいえる。87は底部のみで断面三角形の高台が付く。86は球形の体部に短い口頸部が付く。

##### S E - 06 (第73図、図版84)

須恵器杯蓋 (88) が出土している。I-5～II-1に相当する。

##### S E - 08 (第73図、図版79・80)

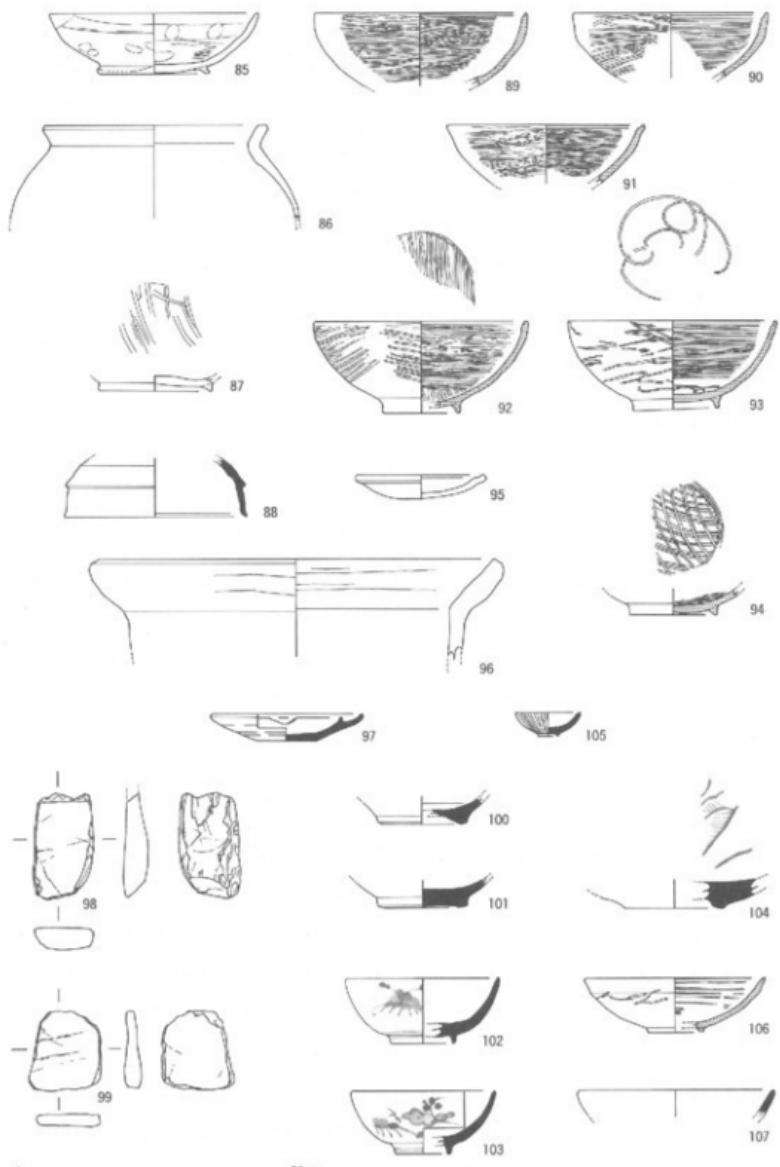
瓦器椀 (89～94)、土師器皿 (95)、土師器鍋 (96) が出土している。91は口縁部はヨコナデにより外反し端部は沈線により段を持つので、大和型瓦器椀と考えられる。外面は幅の狭い分割ヘラミガキ、内面も同様な圓線ミガキが密に施されている。I-C～II-Aに相当する。89・90・92・93は口縁部の外反は認められず、直立するという桶葉型瓦器椀の特徴を示しているが、92は見込みにジグザグ状のヘラミガキが密に施されている大和型の特徴も兼ね備えている。89がI-2、90がI-3、92がI-2、93がI-3～II-1にそれぞれ相当する。94は底部のみであるが、見込みにジグザグの方向を変えた斜格子状のヘラミガキが施されている。大和型と考えられ、I-B～Cに相当する。95は「て」の字状口縁に近い形態を呈している。96は外面に煤の付着が認められる。

##### S D - 11 (第73図、図版81・87)

97は陶器製灯明受け皿である。内面に環状の仕切りが付き、半月状の切り込みがある。灯明皿を上に載せて使用し、受け皿で灯明皿から垂れる油を受けた。98は砥石の破片である。板状で片面に使用痕が認められる。

##### S D - 22 (第73図、図版81・87)

砥石 (99)、白磁碗 (100・101)、染付碗 (102・103)、青磁皿底部 (104) が出土している。99は破片で、板状。両面を使用している。100は断面三角形の低い高台を削り出しており、見込みには沈線状の段を持つ。外面は露胎で、見込みにも一部露胎部分がある。碗



第73図 SD-11・22・24・38・60・SE-05・06・08出土遺物

IV-1類に相当する。101は厚い低めの削り出し高台を持つ。豊付及び高台内側は露胎。碗IV-1類に相当する。102・103は中碗で、梅花文、が描かれている。104は厚目の釉が掛けられ、高台豊付は施釉の後ヘラケズリにより露胎。見込みにヘラ状及び櫛状の工具により描かれた文様がある。

S D-24 (第73図、図版81)

菊花形の紅猪口 (105) が出土している。

S D-38 (第73図、図版80)

大和型瓦器椀 (106) が出土している。外面のヘラミガキは省略化され、内面には間隔の広い圓線ミガキが施されている。III-Cに相当する。

S D-60 (第73図、図版81)

青磁碗の口縁部破片 (107) が出土している。

S I-01 (第74図、図版82・83)

弥生時代後期の土器が出土している。108は高杯で、杯部は脚部に対して大きめで、口縁部は屈曲して外反する。脚部の裾は緩やかに広がり、端部は斜め上方に屈曲し明確な面を持つ。全体に摩耗が著しいが、裾部にハケメ、脚部に6条の沈線文と幅広の縦方向のヘラミガキが認められる。109・110も脚部を欠くが同様の形態を示している。111は壺で、摩耗しているが体部の外面と内面にハケメの痕がわずかに残る。112は底部のみの出土。

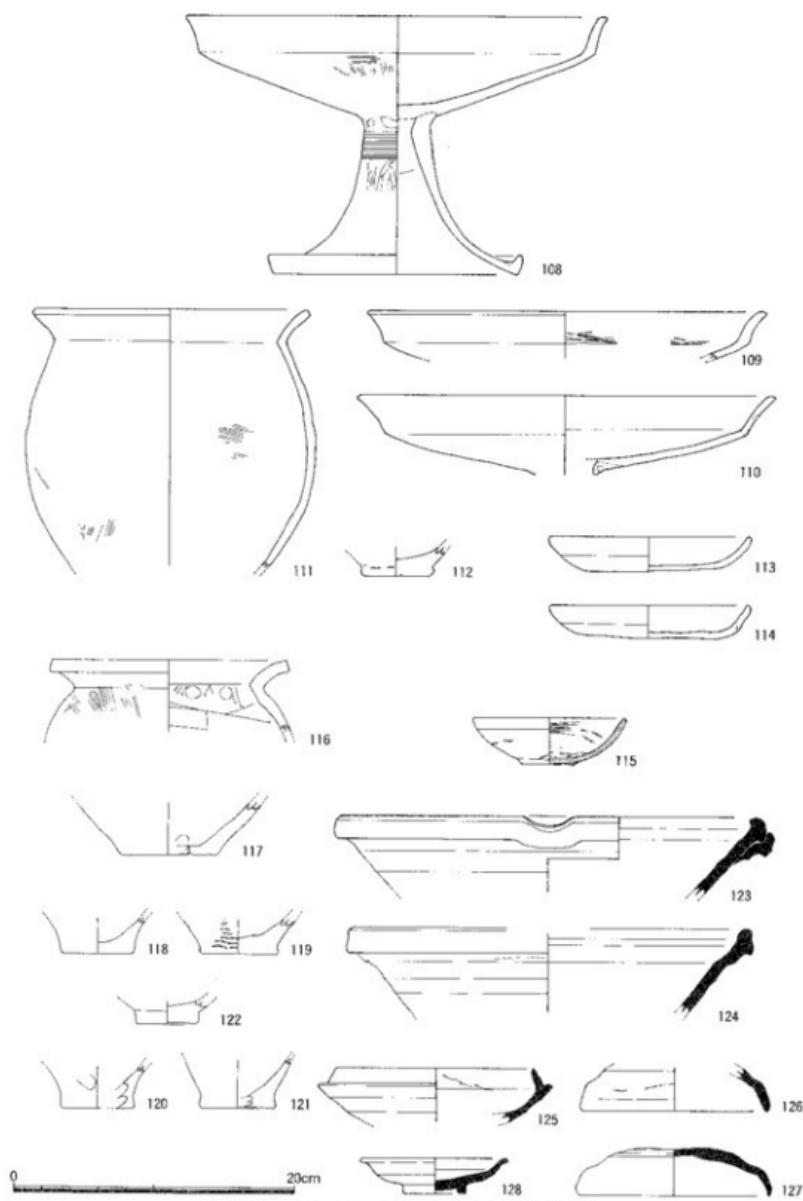
S P-86 (第74図、図版84)

土師器中皿 (113・114) が出土している。口縁部はナデにより端部にやや面を持つ。

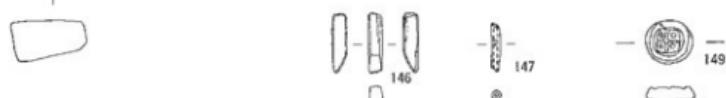
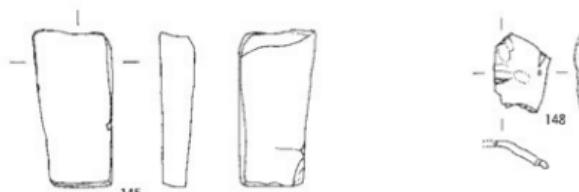
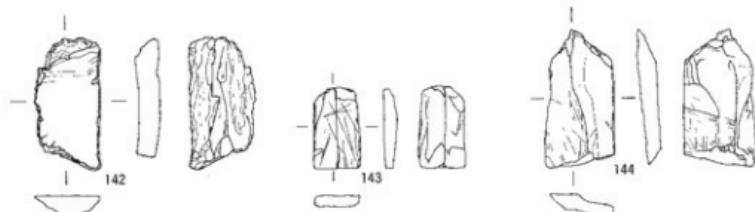
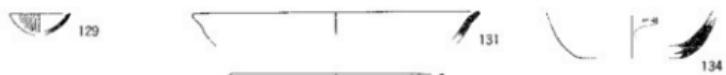
包含層出土遺物 (第74・75図、図版81・83~87)

115は桶葉型瓦器椀で、法量の縮小化が見られ、高台も形骸化している。外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面の圓線ミガキも粗い。IV-1に相当する。U-11区基本層序II層からの出土である。116~121は弥生時代後期の土器で、116は第3遺構面検出水田面のベース層となっている基本層序IV層、117~121は基本層序V層からの出土である。

S I-01の直下で出土しているので、一連の土器群に含まれる土器であろう。116は壺で口縁部は屈曲して外反し、端部に内傾する面を持つ。体部外面にハケメ、内面にはヘラケズリが施されている。123・124は東播系須恵器片口鉢である。基本層序I層からの出土。125は須恵器杯身、126は杯蓋である。いずれも基本層序II層からの出土でII-5に比定される。127は杯蓋で水田面のベース層直上の基本層序III層から出土している。II-5に比定される。128は篠窯産の須恵器皿である。基本層序II層からの出土。129は菊花形の紅猪



第74図 S I -01、S P -86、包含層出土遺物



0 20cm 0 5cm

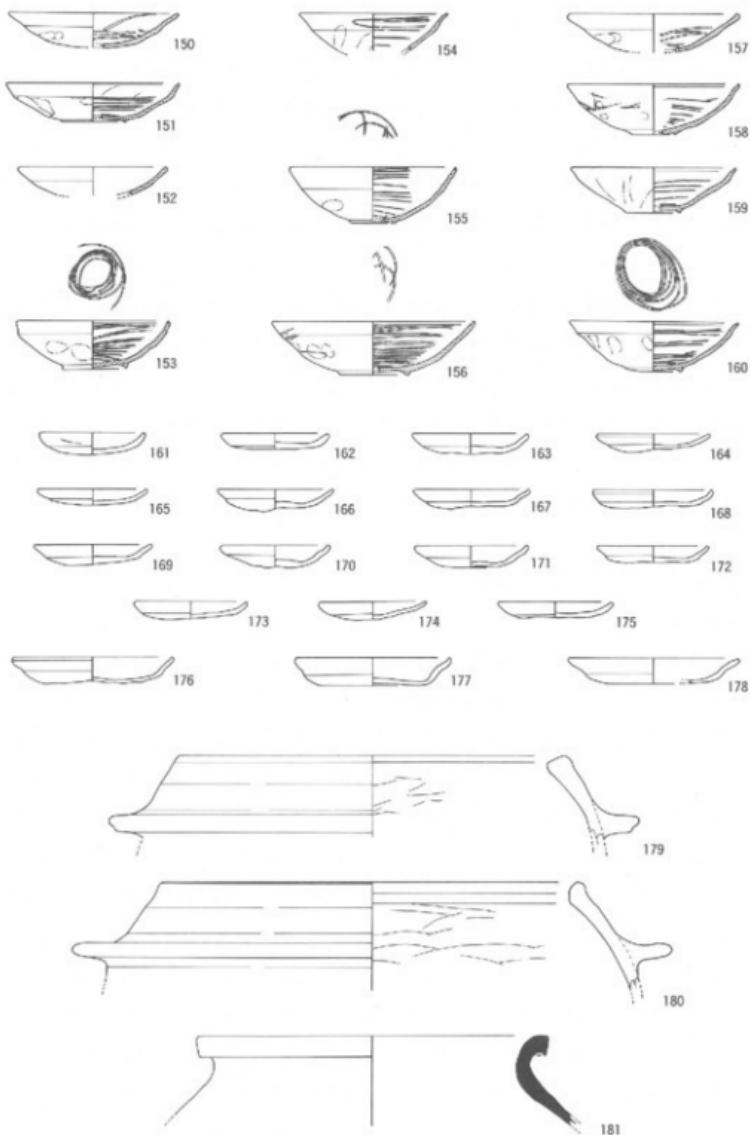
第75図 U区包含層出土遺物

口。磁器製で基本層序II層から出土。130は染付小碗で、底部外面に「氏明」の銘がある。基本層序I層からの出土。131～135は青磁である。134は青磁碗の底部片で、体部から口縁部と高台部分を欠くが、内面に片彫りで飛雲文と考えられる文様が施されており、龍泉窯系碗I-4類に相当すると考えられる。135は青磁皿で、底面は全面施釉の後釉を搔き取り、内面には櫛状工具による花文が施されている。龍泉窯系皿I-2-b類相当する。136～141は基本層序I・II層から出土した白磁である。136～138は玉縁状口縁を持つ。137は小さめの玉縁と直線的な体部を持ち、碗III類に相当し、136・138は白磁碗IV類に相当する。139～141は白磁底部である。139は釉は薄く、全体に貫入が見られるが、高台部分及び底面は露胎である。碗II-1類に相当する。140は器壁が薄く断面三角形の高台を持つ。外面の施釉は底部まで施される。141は底部の器壁が厚く、幅広の低い高台を削り出している。碗IV-1類に相当する。142～145は砥石の破片である。146は小型の柱状片刃石斧、147は紡錘形の土錐である。両端は欠損する。148は土製の面の破片。149は泥面子で「〇」に「田」の字のモチーフがされている。

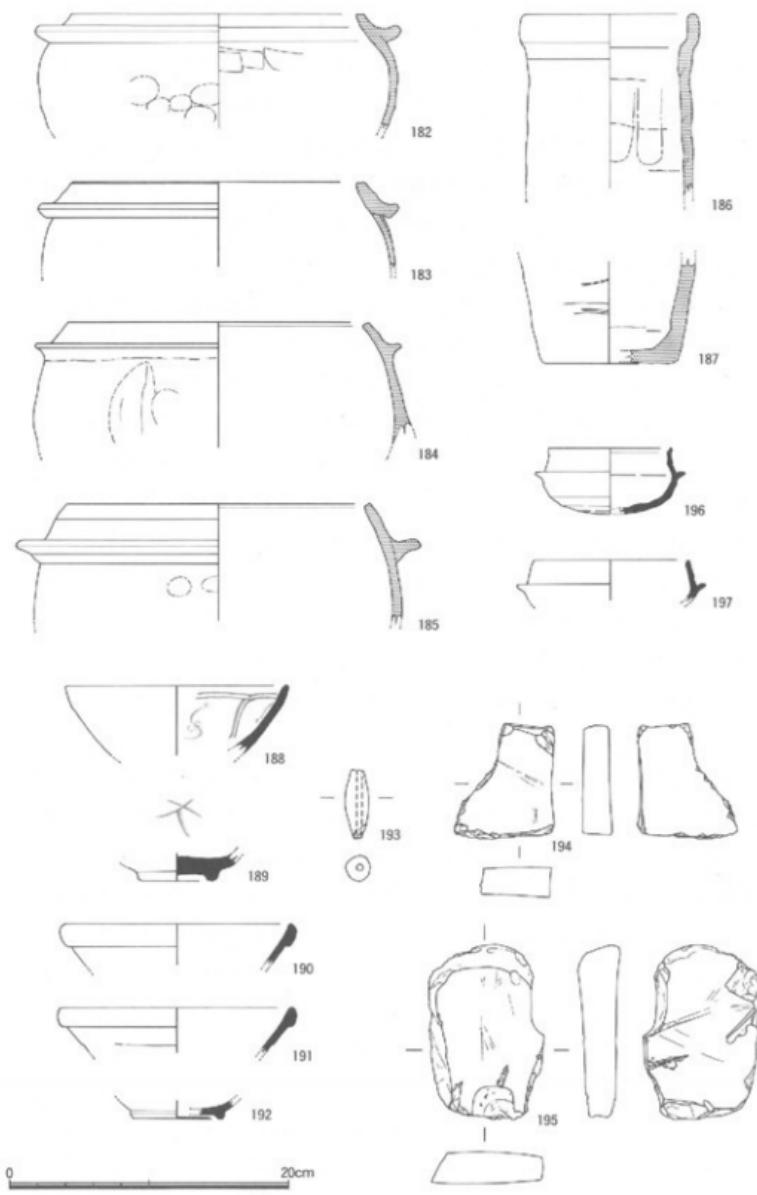
## 第5節 V区の出土遺物

### SD-78 (第76・77図、図版88～91)

瓦器椀、土師器皿、輸入陶磁器類など中世の遺物が一括で出土している。150～160は瓦器椀である。150・152・157は和泉型瓦器椀で、内面には幅広の粗い圓線ミガキが施され、形骸化した高台を持つ。152は底部を欠くが、もはや無高台の段階のものであろう。外面内面にはヘラミガキが認められない。いずれもIV-2～3に相当する。151・154・156・158～160は大和型瓦器椀で、151は形骸化した高台を持ち、内面には数条の粗い圓線ミガキが施されている。III-Cに相当する。154は口縁部が外反し、端部は沈線が施されることにより段を持つ。底部は欠くが、内面には粗い圓線ミガキが施されている。III-Dに相当する。156は内面には口縁端部から底部付近にかけて粗い圓線ミガキが、見込みには連結輪状のヘラミガキが施されている。III-B～Cに相当する。158～160は内面に粗い圓線ミガキが施され、160の見込みには連結輪状のヘラミガキが認められる。158・160がIII-C、159がIII-Dに相当する。161～178は土師器皿で、そのうち176～178が中皿である。いずれも口縁部にヨコナデが施されているが、端部が内湾気味に終わるものと、外反或いは斜め上方に向かい直線的に終わるものがある。179・180は土師器釜、185は瓦器釜である。179は肩部に厚めの短い鍔を巡らし、口縁端部は肥厚し内傾する平坦面を成す。河内J型に相当する。180も河内J型と考えられ、こちらの方は口縁端部をわずかに上方に突



第76图 SD-78出土遗物



第77圖 SD-78・79出土遺物

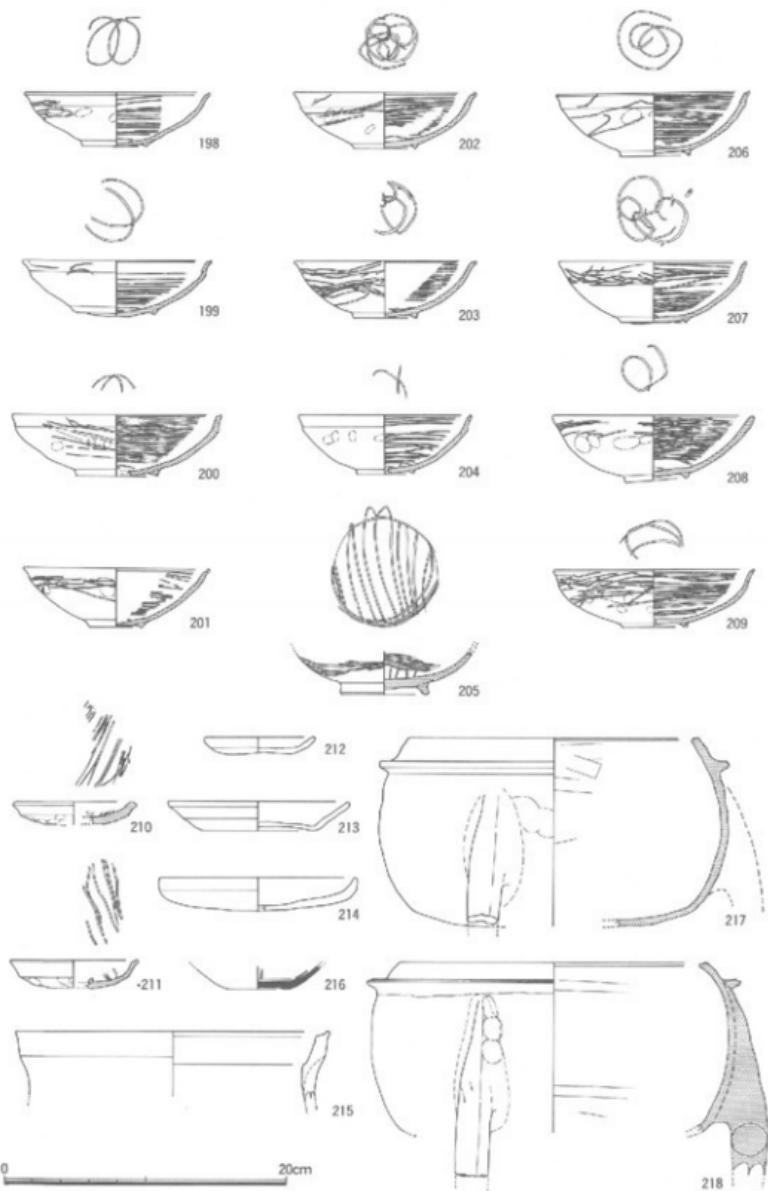
出させている。185は内傾する口縁部に短い鈍を持つ。内外面はナデによる調整が施されている。摂津E型に相当する。181は須恵器甕で、口縁部は外反し端部は下垂気味に外側に面を持つ。磨耗が著しい。182～184は脚部を欠いて出土しているが、瓦器足釜である。いずれも外面に煤が付着する。186は瓦質製で円筒形を呈している。器壁は薄く、口縁部は受け口状を呈しており、端部を丸く納める。口縁部の外面内面ともヨコナデ、内面は縱方向のナデが施され、粘土紐の痕が残る。形状からは土管のようなものが想定され、同形のものを連続してつないで使用したものと推定される。187も瓦質製で、底部のみの出土であるため、器形は不明である。188・189は青磁碗、190・191は白磁碗である。188は底部を欠くが全面に施釉され、内面には二本の沈線により分割され、片彫りの飛雲文が施されている。龍泉窯系碗I-4-a類に相当する。189は底部のみで、見込みに片彫りで「大」字様の文様が施されている。龍泉窯系碗I-1類に相当する。190・191はいずれも底部を欠くが口縁部は玉縁状を呈しており、碗IV類に相当する。192は緑釉陶器の底部で、高台の内側にやや段を持ち、疊付け及び高台内は露胎である。193は土錘。紡錘形を呈し、紐孔は径約4mmを測る。194は板石状の破片であるが、用途は不明である。右英安山岩製。195は磁石で、五面に使用痕が認められる。

S D-79（第77図、図版91）

須恵器杯身（196・197）が出土している。196がI-5、197がII-2に相当する。

S T-02（第78図、図版92～94）

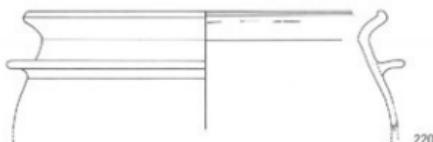
S D-78と同様に中世の遺物が一括して出土しているが、出土した瓦器椀を見るとS D-78のそれと比較して若干古い形態を示すものが多いように思われる。198～209は瓦器椀である。205・208を除きいずれも体部から口縁端部にかけて強いナデによる外反が見られ、口縁部端部内側に沈線が施されることにより段状を呈していることから大和型瓦器椀と考えられる。198がIII-B～C、199・200・202がIII-B、201・204がIII-C、203・206・209がIII-A、207がIII-A～Bに相当する。見込みには主に連結輪状のヘラミガキが施されている。205は底部のみの出土であるが、外面には密なヘラミガキが底部付近まで施され、内面にも密な圈線ミガキが施されており、見込みのヘラミガキはジグザグ状である。ヘラミガキと圈線ミガキの特徴から大和型瓦器椀と考えられ、しっかりとした高台を持つので古段階のI-C～Dに比定される。208は端部に沈線が施されているので大和型と考えられるが、口縁部が外反せずに湾曲して終わる楠葉型瓦器椀の特徴も兼ね備えている。大和型のIII-Aまたは楠葉型のII-2～3に相当する。210・211は瓦器皿である。210の



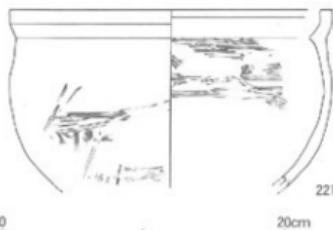
第78図 ST-02出土遺物



219

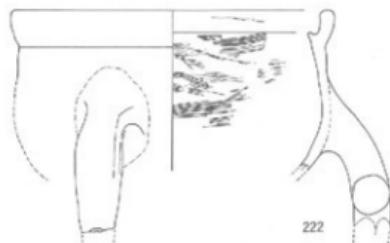


220



20cm

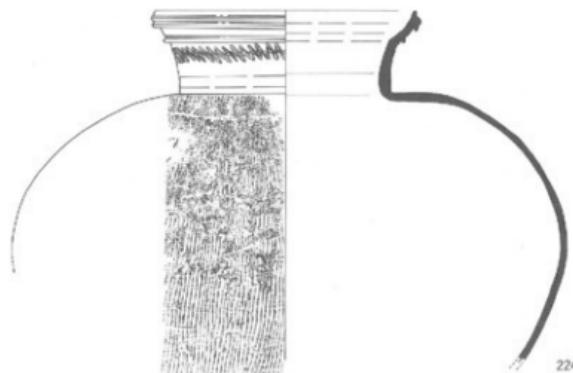
221



222



223



224



225



226

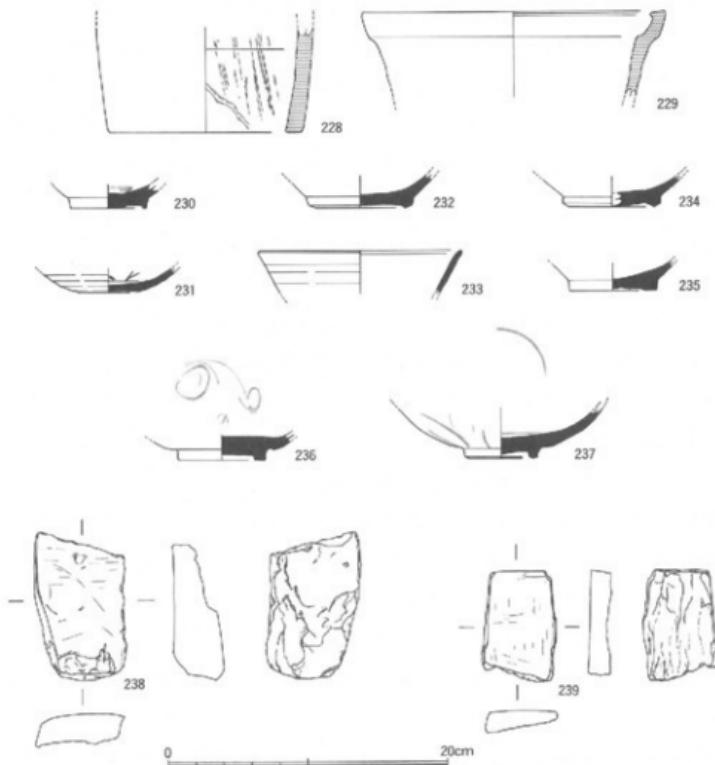


227

第79圖 V區包含層出土遺物（1）

器壁は厚い。両者とも口縁部はヨコナデにより外反し、見込みにはジグザグ状のヘラミガキが施されている。212～214は土師器皿である。213・214は中皿で、213は口縁部が外上方に開き、端部を丸く納める面取りが見られる。214は平坦な底部から口縁部が垂直気味に立ち上がる。216は白磁皿底部で、内面は見込みと体部の境で段を持ち、縦の隆線で分割されている。平底無高台で、底部疊付けは露胎。<sup>(10)</sup> 215は土師製で、口縁部のみの出土である。口縁部内側はやや段を成し受け口状を呈しており、体部は推定で半球形か鍋形を呈しているものと考えられ、足付き鍋と考えられる。217・218は瓦器足釜で、口縁部のすぐ下に短い鈎を巡らしている。

包含層出土遺物（第79・80図、図版92・94～96）



第80図 V区包含層出土遺物（2）

219は尖低の中央に径7~11mmの焼成前の穿孔がある。器種は不明である。220は土師器釜で大和B<sub>1</sub>型に比定される。221・222は土師器足付き鍋である。口縁部は受け口状で、内外面ともハケメによる調整が施されている。223は須恵器甕。口縁部は大きく外反し、端部は下垂して終わる。頸部から肩部にかけて平行タタキメが残る。225は東播系須恵器片口鉢の底部と考えられ、底部のほぼ中央付近に径6~7mmの円形の穿孔がある。用途は不明であるが、内面にのみ黒い煤状の物質の付着が認められた。以上の遺物は中世の包含層である基本層序II~III層から出土している。224・226・227は古墳時代の須恵器。224の壺は底部以外はほぼ完形で、SD-79直下の砂混じり粘質土（基本層序IV層）から出土しており、遺構からの出土遺物と考えてよからう。体部外面には縦方向のタタキメとカキメが残り、口縁端部付近に二条の隆線、頸部上部に一条の隆線があり、その直下には波状文を巡らしている。体部内面はタタキの痕を擦り消している。226は無蓋高杯である。杯部下半の二条の隆線の間に斜めのヘラ書き文を連続して施している。227は器台脚部。逆「ハ」の字に開く脚部から裾部は外反して終わる。二条の隆線で構成される上下二条の凹線の下に波状文が施されている。228は瓦質の円筒製品で、用途、器種は不明である。基本層序I層の旧耕作土からの出土。229は口縁部の内側が受け口状を成しており、瓦器鍋の口縁部である。旧耕作土からの出土。230~235は白磁で、236・237が青磁である。基本層序I層及びII層からの出土。230・232~234は白磁碗の底部。230は底部の器壁は厚い割りには、華奢な高台を削り出している。高台内は露胎であるが外内面には貫入が見られ、見込みに櫛目の施文がある。碗VII類に相当する。232~234も底部で、断面台形の高台を削り出している。いずれも碗IV-1類に相当する。235は口縁部のみで底部を欠くが口禿げで、碗IX類に相当する。231は白磁皿で見込みに段を持ち、ヘラ書きの施文がある。皿IV類に相当する。236は青磁碗底部で、見込みに片彫りでキノコ状の文様が施されている。龍泉窯系碗I-4-a類に相当する。237は蓮弁文様の青磁碗で、見込みに片彫りで1条の沈線が施されている。龍泉窯系碗I-5-a類に相当する。238・239は底石である。片面に使用痕が認められる。

## 第6節 出土銭貨（第81図、図版72）

調査を通して数は少ないが銅銭が出土しており、江戸時代の「寛永通宝」と北宋時代の渡来銭がある。240・241は「寛永通宝」で、真書体、対読、鑄造年代が1636~1659年（江戸時代前半）のいわゆる古寛永であろう。いずれもS区の第1遺構面SD-11から出土している。242は約2分の1の破片で、字体は潰れて判読しがたいが、真書体、順読で「無



240

寛永通宝  
1636～1659年  
近世



242

燕寧元寶  
1068年  
北宋



241

寛永通宝  
1636～1659年  
近世



243

宣和通寶  
1119年  
北宋(折二錢)

第81図 出土銭貨

寧」の2文字が読めるので、1068年初鋤の「燕寧元寶」か「燕寧通寶」のいずれかであろう。U区の基本層序II層からの出土。243は約4分の3の破片で1文字分が欠けている。「宣」と「通寶」の文字が読み取れるので、初鋤年1119年の「宣和通寶」と考えられる。

#### 註

- (1)染付碗の分類については『東京都新宿区内藤町遺跡』1992 東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会を参考にした。
- (2)尾上実『南河内の瓦器椀』『藤沢一夫先生古希記念古文化論集』1981 柏書房
- (3)中村浩『和泉須恵器の研究』1981 柏書房
- (4)横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- (5)「円筒埴輪論議」『考古学雑誌』第64巻第2号1978
- (6)橋本久和「第5章 第2節 高槻における中世土器の編年」『上牧遺跡発掘調査報告書』1980 高槻市教育委員会
- (7)用途は明確ではなく水滴の一種か。
- (8)川越俊一「大和出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』1983

- (9)菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1982
- (10)橋本久和「脚付き土師貢鍋について」『高槻市文化財年報平成4年度』1994高槻市教育委員会
- (11)龜井北遺跡の落ち込み8007出土遺物（遺物番号189）や2号墓北西周溝出土遺物（遺物番号327）に焼成前に穿孔が施される類似のものがあり、2号墓北西周溝出土のものは鉢形の壺底部の破片とされている。服部文章氏の御教示による。
- 『龜井北（その1）』1986大阪府教育委員会・大阪文化財センター

#### 参考文献

- 日本民具学会編『日本民具辞典』1997ぎょうせい
- 日本風俗史学会編『日本風俗史事典』1979弘文堂
- 斎藤忠『日本考古学用語辞典』1992学生社
- 扇浦正義『江戸発掘』1993名著出版
- 『新宿内藤町遺跡に見る 江戸のやきものと暮らし』1993東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会
- 森隆『西日本の黒色土器生産（上）（中）（下）』『考古学研究』第37巻第2・3・4号1990・91
- 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』第54号1969
- 白石太一郎「瓦器の生産に関する二・三の見え書き」『古代文化』第27巻第1号1977
- 橋本久和『大阪北部の古代後期・中世土器様相』『高槻市文化財年報昭和63・平成元年度』1991高槻市教育委員会
- 山本信夫「北宋貿易陶磁器の編年」『貿易陶磁研究』No.8 1988
- 中村浩『研究入門 須恵器』1990柏書房
- 『神出』1986妙見山遺跡調査会
- 中世土器研究会編『概説中世の土器・陶器』1995真陽社
- 橋本久和『中世土器研究序論』1992真陽社
- 堀柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究IV』1988日本中世土器研究会
- 百瀬正恒『平安時代の絆釉陶器』『中近世土器の基礎研究II』1986日本中世土器研究会
- 巽淳一郎「平城京における平安時代の焼物」『愛知県陶磁資料館研究紀要2』1983
- 斎藤孝正「猪俣窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナルNo.211』1982ニュー・サイエンス社
- 前川要「平安時代における絆釉陶器の編年的研究」『古代文化』第41巻第5号1989
- 久光重平・今井育雄『中世・近世渡米鉢標本集』1981日本文化資料センター
- 坂詔秀一編『出土渡米鉢』1986ニュー・サイエンス社
- 『日本出土鉢総覧 1996年版』1996兵庫埋蔵鉢調査会
- 『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』1991雄山閣
- 森岡秀人・寺沢薰編『奈良土器の様式と編年（近畿編I）』1989木耳社
- 田辺昭三『須恵器大成』1981角川書店

## 第6章 木製品

### 第1節 S・T区出土の木製品

S E - 01 (第82図、図版97)

水溜に使用されていた曲物側板（1）と折敷（2）が出土している。1は一重の側板と四枚のマワシから成り、側板内面の刻み目は縦方向である。合わせ目には幅の細い縫じ皮が残る。2は約3分の1の出土で、全体では推定で隅丸方形を呈する。周縁部に縁を取り付けてあった縫じ皮が残っている。

S E - 02 (第82図、図版97)

不明木製品（3）が出土している。円柱形を呈しており、両端に加工痕が残る。

S E - 03 (第82図、図版97)

水溜に使用されていた曲物側板（4）と井戸側の横桟（5）と隅柱に使用されていたと考えられる角材（6）が出土している。4は一重の側板に上下二枚のマワシが付き、下端に木釘穴がある。側板内面の刻み目は縦方向である。5には隅柱の穴へ差し込むために、両端を切り込んで加工している。6は上部に横桟を差し込むための長方形の穴が開けられ、下端は6面取りの加工により先端を尖らせてている。

S R - 08 (第82図、図版97)

自然木の先端を加工した杭（7）が出土している。六面取り加工が施され、表面に木皮が残っている。

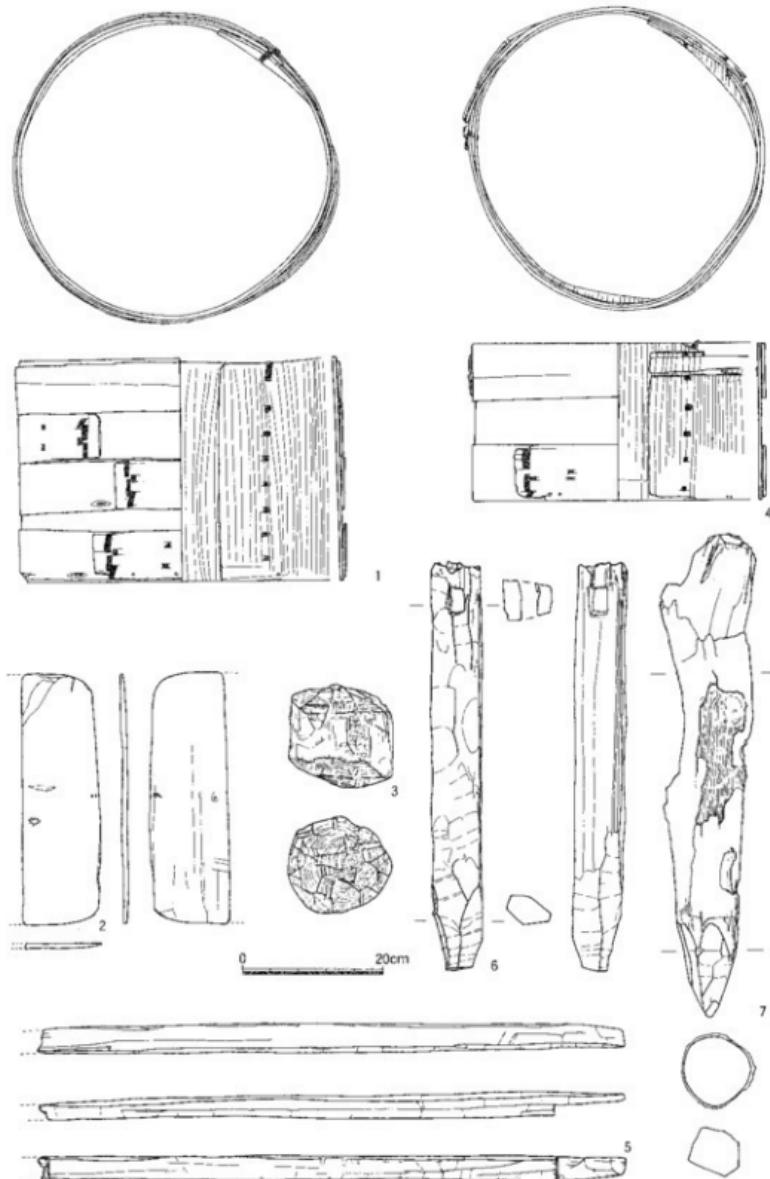
### 第2節 U区の出土木製品

S E - 05 (第83図、図版98)

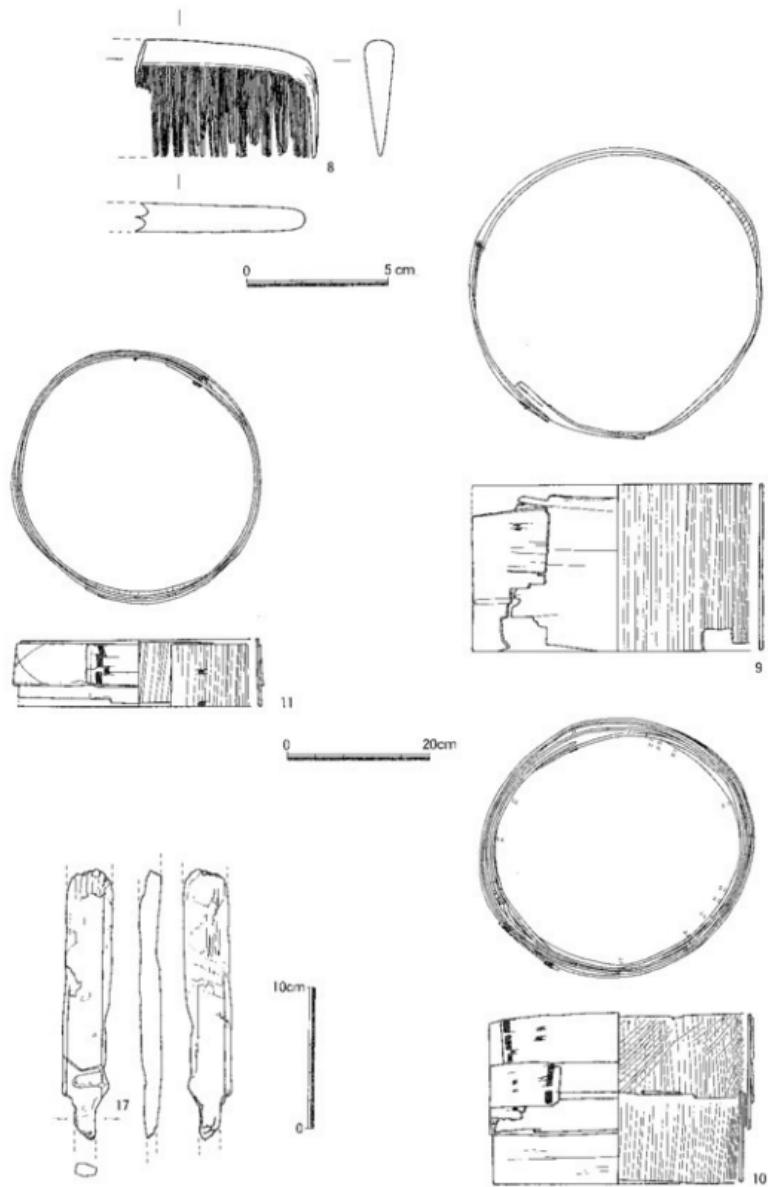
横櫛（8）が出土している。歯の間隔が非常に密に作られている。

S E - 07 (第83図、図版98)

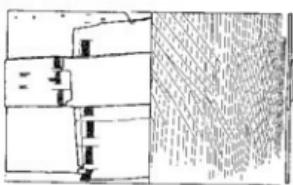
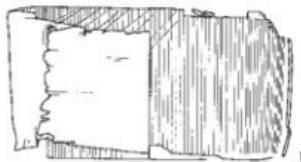
井戸の水溜に使用されていた曲物側板（9～11）が出土している。遺構内では上から9・10・11の順番で重ねられていた。9は一重の側板のみで、側板内面の刻み目は縦方向である。10は一重の側板二段と二枚のマワシで構成されている。側板内面の刻み目は上段が縦方向と斜め方向で、中段は縦方向のみである。下端に木釘穴が残る。11は一重の側板に一枚のマワシから構成される。側板内面の刻み目は縦方向で、マワシに大きく「×」が刻んである。



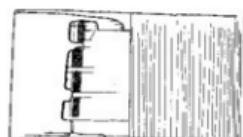
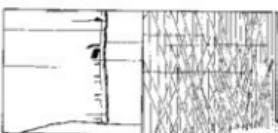
第82図 S E -01~03、S R -08出土木製品



第83図 S E - 05・07、包含層出土木製品



0 20cm



15

第84図 SE-08、SR-11出土木製品

#### S E - 08 (第84図、図版98)

井戸の水槽に使用されていた曲物側板（12～15）が出土している。遺構内では上から12～15の順番で重ねられていた。12は一重の側板のみで、木釘穴が五箇所に残る。側板内面の刻み目は縦方向に一部斜め方向のものが認められる。13は一重の側板と一枚のマワシから構成される。上部に二十箇所の木釘穴が残り、側板内面の刻み目は縦方向と斜め方向である。14は一重の側板のみで、綴じ皮がわずかに残り、側板内面の刻み目は縦方向と斜め方向のものを斜格子状に施している。15は一重の側板のみで、側板内面の刻み目は縦方向である。

#### S R - 11 (第84図、図版98)

弓状を呈する棒状製品（16）が出土しているが用途は不明である。加工痕は認められないで自然木か。

#### 包含層 (第83図、図版98)

第3遺構面の水田耕作土層から不明木製品（17）が出土している。板状を呈しており、両端は欠けているようであるが、片側は人為的に加工が施され、幅を細くしている。

#### 参考文献

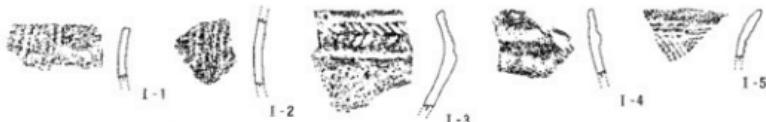
- 市川秀之・鈴木寛子「第IV章第2節 西ノ辻遺跡出土の中世木器」『神並・西ノ辻・鬼 虎川遺跡発掘調査概要・IV』1987大阪府教育委員会  
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書I』1993 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編  
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書II』1994 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編  
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書III』1995 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編  
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書IV』1995 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編  
小谷方明『大阪の民具・民俗誌』1982文化出版局  
西村歩『天川村曲物考』『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要2』1994

## 第7章 まとめ

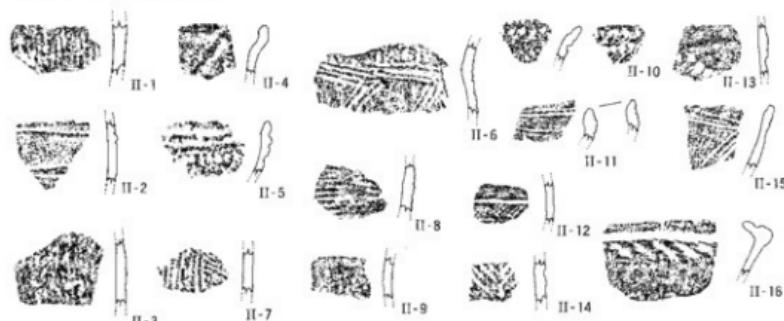
第1章第2節で述べているように住宅敷地内では、既に調査会による第I・II期調査、そして市教育委員会による都市計画道路部分の調査が実施されており、古墳時代～近世の遺構面が検出されている。今回の調査においても大方は同様の調査成果が得られているが若干相違点などもあるので、ここでは各時代ごとの遺構と遺物について既往の調査と比較し述べることでまとめとしたい。

### 1. 繩文時代

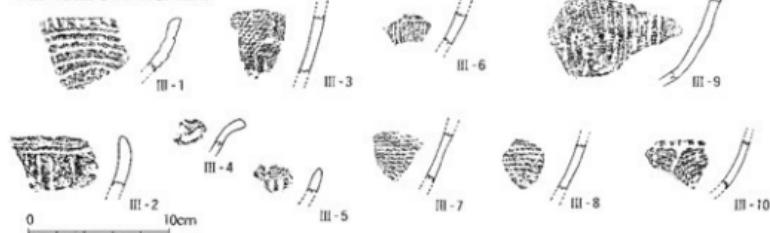
I期で検出された縄文土器



II期で検出された縄文土器



III期で検出された縄文土器



第85図 北新町遺跡出土縄文土器

この時期の遺構は、既往の調査と同様に検出されておらず、また遺構面も存在しなかった。基本層序VI層の黒色粘土より下位の土層堆積状況は、シルト、砂層そしてまた黒色粘土という交互に堆積が繰り返されていることが観察され、この層は河内潟、河内湖による水性の堆積作用によって形成されたものと推定される。遺物は自然河川内やVI層を構成する砂層から、上方からの流れ込みによる土器片が数点出土しているが、磨耗が激しく土器の種類さえ特定できなかった状況であった。しかし、既往の調査結果と同様、縄文土器であると推定され、住宅敷地北東側の上位に位置する場所に、この時期の遺構が存在しているものと推定される。

## 2. 弥生時代

この時期の遺物は各包含層中に破片が散見する程度であり、既往の調査よりもさらに遺構面の存在する可能性は低いと考えられる。縄文時代と同様に、今のところ北東側に遺構の存在が推定されるに過ぎない。

## 3. 古墳時代

この時期の遺構は、調査区を北東から南西方向に流れる自然河川や、水田跡を検出している。特にS・U区では畦畔で区画された水田跡が良好に検出している。自然河川はその出土遺物から古墳時代を通じて流れていたと推定され、後期になるとその幅を縮小している。水田の時期であるが、水田耕作面や畦畔内から須恵器が出土しているので、古墳時代中期末～後期頃の時期と考えている。今回の調査でも、第III期調査と同様、建物跡などの遺構は検出されなかったので、集落域からは外れているようである。今回の調査結果と既往の調査結果を踏まえると、住宅敷地内全体にこの時期の水田が存在していたことが判明した。

## 4. 奈良～平安時代

奈良時代の遺構はT区で検出された自然流路S R-07のみであり、今回の調査ではこの時代の遺構、遺物とも希薄であった。この自然流路は第I期調査で検出され人面墨書き土器を出土した奈良時代の自然河川であるI・河川A'-1と同一のものと考えられる。

平安時代（9世紀～11世紀前半）の遺構、遺物も希薄で、今回の調査においては、この時期は欠落しているようである。

## 5. 平安時代末～鎌倉時代（中世前半）

この時期の遺構は、既往の調査（特に第II・III期調査）では、各調査トレンチの西側において、集落跡を検出している。今回の調査トレンチはV区を除き、その東側にあたるた

め、予想通り耕作地として利用されていたために、検出された遺構は少なかったが、それでもS・U区で11世紀末～12世紀代の井戸や溝、柱穴などの遺構が検出されている。13世紀代の遺構は検出されていないので、この時期には集落が分散する形で、敷地内の北東域にも存在していたことが推測され、12世紀終りから13世紀代に入ると敷地内の西側に限って、集落が営まれるようになるが、既往の調査結果では14世紀代に入ると集落は廃絶されたようである。

V区は第III期調査の西側にあたり、既往の調査で検出している溝III・S T-02の延長部分が検出され、それに直交するように、新たに南北方向に走る溝SD-78が検出された。これらは既往の調査で検出している、13世紀の集落跡の区画溝と考えられ、集落がさらに西側へ広がる可能性を示している。また、このSD-78では完形に近い状態で瓦器椀、土師器皿などの遺物が多数出土し、その中でも特に、瓦器足釜、土師器足付き鍋、瓦器・土師器釜などの煮炊き具が多く出土しているのが特徴である。これらの一括性の高い出土遺物は、出土状況から、溝の廃絶時期に近い頃に廃棄されたものと考えられ、瓦器椀は13世紀後半～末頃の時期を示していることから、遅くとも14世紀初頭には既に廃絶されていたようで、既往の調査結果で得られた集落の廃絶時期に一致している。当時の地理的環境を考慮すれば、すぐ西側には深野地の前身である広見池が存在しており、池のすぐ近くで営まれていた集落であったことが推定される。

## 6. 中世後半～近世・近代

既往の調査結果同様、14世紀以降の遺構及び遺物は検出されておらず、基本層序II層で見られるように、鋤溝が確認されるだけで、14世紀初め頃に集落が廃絶された後は、近世、近代に至るまで畑や水田などに利用されていたようである。第1遺構面で検出したように、東西方向、南北方向に走る水路によってが区画されるのは少なくと近世以降のようであるが、V区で検出されたSD-78のように、何度か改修をされながらも、中世以降現在に至るまで残っているのは、他の溝とは性格を異にしていることが推測される。この付近には「五の坪」「六の坪」といった条里制に関連した小字名が残っているので、坪境または、条里の境界を示す溝ではないかと推測されるが、条里制の施行とその時期については今後さらなる検討が必要であろう。

## 第8章 考察編

北新町遺跡発掘調査に伴う花粉およびプラント・オパール分析

川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

### はじめに

本報告は、北新町遺跡調査会が遺跡周辺の古環境推定、特に稲作の確認のために、川崎地質株式会社に委託して実施した、花粉分析およびプラント・オパール分析調査の概報である。

また、北新町遺跡は大阪府中部の大東市北新町に位置する遺跡である。

### 分析試料および分析方法について

分析試料は、トレーナー内のNo.1～3地点（第86図）で川崎地質株式会社の担当者が採取した。

花粉分析およびプラント・オパール分析に使用した試料は、同一のブロックを分割して使用したものである。

また各地点の層相および試料採取層準を、第87図の花粉ダイアグラム左端の柱状図に示した。

花粉分析処理方法は渡辺（1995）に従い行った。  
顕微鏡観察は光学顕微鏡を使用し、通常400倍で、  
必要に応じて600倍、あるいは1000倍を用いて行  
った。また、原則として木本花粉総数が200個体以上  
になるまで同定・計数を行い、同時に検出される草  
本花粉の同定・計数も行った。

プラント・オパール分析方法は藤原（1976）のグ  
ラスビーズ法に従った。

### 分析結果

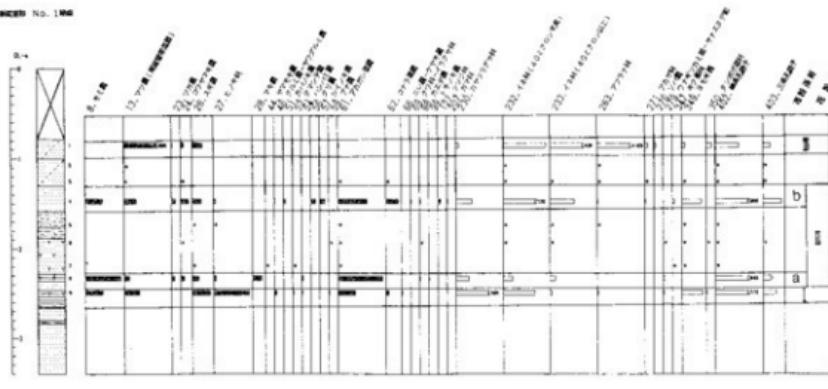
花粉分析結果を第87図に、プラント・オパール分  
析結果を第88図に示す。

第87図の花粉ダイアグラムでは、同定した木本花



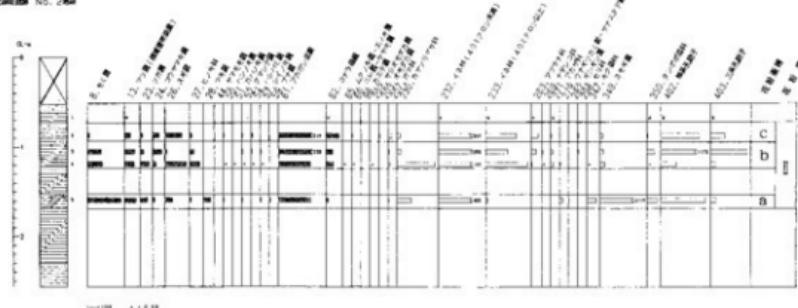
第86図 試料採取地点（K区）

EXHIBIT NO. 188



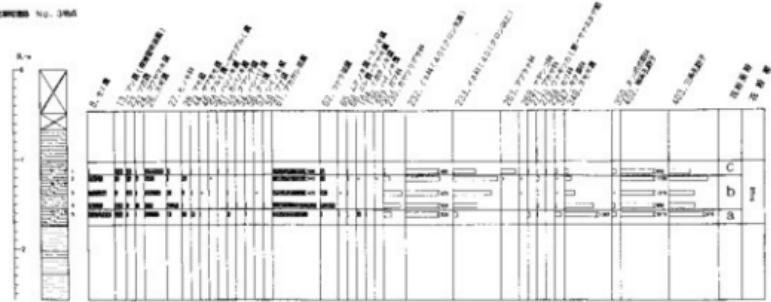
—100 μ

EXHIBIT NO. 288



—100 μ

EXHIBIT NO. 388



—100 μ

第87図 北新町遺跡の花粉ダイアグラム

粉総数を基数にした百分率を、各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また、花粉化石の含有量が少なく、検出木本花粉総数が200個体に満たない試料については、検出できた種類を\*で示した。

第88図のプラント・オパールダイアグラムでは、検出個体数を1グラムあたりの含有個体数に換算し、スペクトルで表した。

## 考察

### (1)花粉分帶

花粉組成の特徴から、下位よりI、II、IIIの3花粉帯を設定した。花粉帯の特徴、該当する調査地点、試料番号は次のとおりである。

#### 1) I 帯 (No. 1 地点試料No. 9)

ヒノキ科が32%と卓越し、モミ属、マツ属（複維管束亞属）、スギ属、アカガシ亜属がそれぞれ15%程度の出現率を示す。

#### 2) II 帯 (No. 1 地点試料No. 8, 4, No. 2 地点試料No. 5 ~ 2, No. 3 地点試料No. 4 ~ 1)

アカガシ亜属が卓越する。またモミ属は下部でアカガシ亜属と同様に卓越するが、上部に向かって減少する。モミ属の出現状況によって下位よりa, b, c亜帯に細分した。

##### a 亜帯 (No. 1 地点試料No. 8, No. 2 地点試料No. 5, No. 3 地点試料No. 5)

モミ属が20~30%、アカガシ亜属が30~40%と卓越し、マツ属（複維管束亞属）、スギ属、マキ属が5%程度出現する。

##### b 亜帯 (No. 1 地点試料No. 4, No. 2 地点試料No. 4, 3, No. 3 地点試料No. 4, 3, 2)

アカガシ亜属が30~60%と卓越し、モミ属が15%程度の出現率を示す。また、マツ属（複維管束亞属）、ツガ属、コウヤマキ属、ヒノキ科、コナラ亜属は数%の出現率を示す。

##### c 亜帯 (No. 2 地点試料No. 2, No. 3 地点試料No. 1)

アカガシ亜属が50~60%程度と卓越し、スギ属が16%, マツ属（複維管束亜属）、ツガ属、コウヤマキ属、コナラ亜属が数%の出現率を示す。モミ属は2%程度と低い出現率を示す。

#### 3) III 帯 (No. 1 地点試料No. 1)

マツ属（複維管束亞属）が86%と卓越し、スギ属を9%伴う。

### (2)推定年代

北新町遺跡では、出土遺物から各層準の堆積時期が推定されている。表1に、花粉帯と

堆積時期の関係を示す。I 帯は弥生時代、II 帯 a 亜帯が弥生時代～古墳時代前期、b 亜帯が古墳時代前期～中世初頭、c 亜帯は中世、III 帯は中世後半の植生を表すと考えられる。

このほか、プラント・オパール分析試料のうち、No. 1 地点試料 No. 3 は中世初頭、No. 1 地点試料 No. 5 は古墳時代前期の堆積と推定されている。

### (3) 堆積状況

表 1 花粉帯と推定時期

No. 3 地点		No. 2 地点		No. 1 地点		花粉 帯	花粉 帯	推定時期
試料 No.	推定時期	試料 No.	推定時期	試料 No.	推定時期			
				1	中世後半	III		中世後半
1	中世後半 ～前半	2	中世初頭			c		中世
2	中世初頭							
3	古墳時代 後期	3	古墳時代 後期	4	古墳時代 後期～ 中期	b	II	中世初頭 ～ 古墳時代前期
4	古墳時代 前期	4	古墳時代 前期					
5	弥生時代	5	弥生時代	8	古墳時代 前期以前	a		古墳時代前期～ 弥生時代
				9	弥生時代	I		弥生時代

今回の I 帯に相当する No. 1 地点試料 No. 9、II 帯 a 亜帯に相当する No. 2 地点試料 No. 5、No. 3 地点試料 No. 5 採取層準は、水平方向に連続する腐植質粘土であり、広い範囲にわたって水の停滞した環境が推定される。I 帯および II 帯 a 亜帯は、弥生時代から古墳時代前期の植生を表していると考えられる。同時代の調査地点は、梶山・市原（1986）の古地理図によれば河内潟あるいは河内湖東岸の低湿地に位置し、地層の観察結果と矛盾しない。

### (4) 稲作について

稲作跡の検証を目的として、No. 1 地点試料 No. 3、5、No. 2 地点試料 No. 2、3、No. 3 地点試料 No. 2、3 において、プラント・オパール分析を実施した。

今回分析を実施した 6 試料のうち、No. 1 地点試料 No. 3、No. 2 地点試料 No. 3、2 では、イネのプラント・オパールが 3000 個/g 程度以上検出された。一般に稲作跡では、イネのプラント・オパールがおよそ 3000 個/g 以上検出されることが多く、上記 3 試料の層準で稲

作が行われていた可能性は高い。また、No.3地点試料No.2ではイネのプラント・オパールは700個/g検出されたのみであり、No.1地点試料No.5、No.3地点試料No.3では全く検出されなかったことから、これらの地点で稲作が行われた可能性は低い。

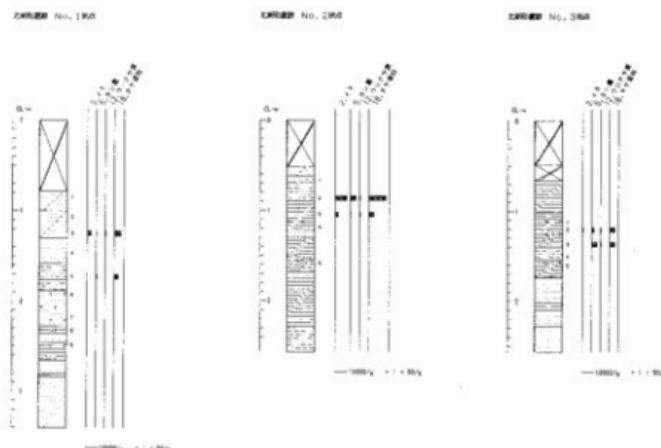
花粉では、イネ科植物のうち栽培種は、40ミクロン以上の粒径を示すものが多く、雑草にも40ミクロン以上の粒径を呈すものがある（中村、1974）。一般に稻作跡の分析結果では、イネ科（40ミクロン以上）は数10%以上の出現率を示すことが多い。一方、稻作と無関係な大阪層群の分析結果では、検出されるものの数%程度である。したがって、No.1地点の試料No.1はイネ科（40ミクロン以上）が46%と卓越し、調査地点での稻作を示唆すると考えられる。No.2地点試料No.4、No.2地点試料No.4～2、No.3地点試料No.4～1でもイネ科（40ミクロン以上）は20%以上出現し、調査地点あるいは周囲での稻作が考えられる。

以上のことと各層準の推定年代から、遺跡内での稻作の様子が以下のように推定される。  
①弥生時代～古墳時代前期（II带b亜帶）

遺跡内および周辺で稻作が行われていた可能性は低い。

②古墳時代（II带b亜帶）

前期にはNo.2、3地点周辺で稻作が行われたと考えられ、後期に入るとNo.2地点付近でも稻作が行われていたと考えられる。



第88図 北新町遺跡のプラント・オパールダイアグラム

### ③中世（II帯 c 亜帯～III帯）

ほぼ遺跡内全域で稲作が行われていたと考えられる。後半でも遺跡内の稲作が行われたと考えられる。

#### (5) 植生変遷

##### 1) 弥生時代（I帯期）

後背の生駒山地北部では、山麓部でカシ類などを要素とする照葉樹林が分布していたと考えられる。山麓から山頂部にかけては、モミ、スギ、ヒノキなどを要素とする中間温帶林が発達していたと考えられる。

遺跡は河内湖あるいは河内潟東岸の低湿地に立地し、イネ科、カヤツリグサ科などが多く生育していたと考えられる。

##### 2) 弥生時代～中世（II帯期）

後背の生駒山地北部では、山麓から山腹部でカシ類を要素とし、ヤマモモやマキ属などを混在する照葉樹林が分布していたと考えられる。山腹から山頂部では、モミ、ツガ、コウヤマキ、スギ、ヒノキを要素とする中間温帶林が分布していたと考えられる。

a 亜帯期、b 亜帯期、c 亜帯期へと移行するに伴い、花粉組成でモミ属の減少、アカガシ亜属の増加が見られる。しかし、スギ属、ツガ属、コウヤマキ属は、同じ中間温帶林要素であるモミ属とは異なった出現傾向を示すことから、II帯での花粉組成の変化は、気候変化に伴う中間温帶林の縮小と照葉樹林の拡大には結びつかないと考えられる。モミ属の分布域が何らかの原因で縮小したために、アカガシ亜属が過大評価されたことが原因の一つに考えられる。

a 亜帯期（弥生時代～古墳時代前期）では、遺跡は引続き低湿地に立地していたと考えられる。■2、3地点でイネ科（40ミクロン未満）、ヨモギ属が高い出現率を示すことから、河内湖あるいは河内潟周辺の低湿地でイネ科、その周囲の自然堤防でイネ科、ヨモギ属などの草本が繁茂していたと考えられる。

b、c 亜帯期（古墳時代前期～中世）でもイネ科（40ミクロン未満）の出現率が高く、湿地などで生育していたと考えられる。

また前述の様に、b 亜帯期初め（古墳時代前期以降）に調査地点周辺で稲作が行われ、古墳時代後期以降中世には調査地点でも稲作が行われていたと考えられる。

##### 3) 中世後半（III帯期）

後背の生駒山地北部一帯は、アカマツなどを要素とする二次林に被われるようになった

と考えられる。また、山腹から山頂部にかけては、ツガ、コウヤマキ、スギなどを要素とする中間温帯林も分布していたと考えられる。

No. 1 地点試料No. 1 は、イネ科（40ミクロン以上）、ソバ属などの栽培種と共にアブラナ科が高い出現率を示す。同様の花粉組成の特徴は、大阪府南部地域でおよそ16世紀以降の堆積物で認められ（藤田ほか, 1991）、そこでのアブラナ科は栽培種に由来すると考えられている。したがって、遺跡内では稲作、ソバの栽培のほか、アブラナ科の栽培が行われていた可能性がある。

### まとめ

北新町遺跡での分析から、以下のことが明らかになった。

- (1)花粉分析の結果から I, II, III, 帯を設定し、II帯は a, b, c 亜帯に細分した。
- (2)出土遺物などから推定される花粉帯の堆積時期は、I 帯が弥生時代、II 帯 a 亜帯が弥生時代から古墳時代前期、b 亜帯が古墳時代前期から中世初頭、c 亜帯が中世、III 帯が中世後半である。
- (3) I 帯、II 帯 a 亜帯（弥生時代～古墳時代前期）当時、北新町遺跡は河内潟あるいは河内湖東岸の低湿地に立地していたと考えられる。
- (4) プラント・オパールと花粉分析の結果から、古墳時代前期以降に北新町遺跡周辺あるいは調査地点周辺で稻作が行われ、古墳後期以降中世にかけては調査地点でも稻作が行われたと推定される。
- (5) 遺跡周辺の森林植生は、弥生時代から中世後半にかけて、自然植生である照葉樹林およびその上位に分布する中間温帯林から、二次植生であるアカマツ林へと変化していくと考えられる。

### 引用文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析方法－. 考古学と自然科学, 9, 15-29.
- 藤田憲司・占谷正和・渡辺正巳（1991）大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について. 日本国文化財科学会第8回大会研究発表要旨集, 33-34.
- 鴨山彦太郎・市原 実（1986）大阪平野のおいたち, P138. 青木書店, 東京.
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として. 第四紀研究, 13, 187-197.
- 渡辺正巳（1995）花粉分析法. 考古資料分析法, 84-85. ニュー・サイエンス社.

## 北新町遺跡出土の「東大寺」刻印瓦について

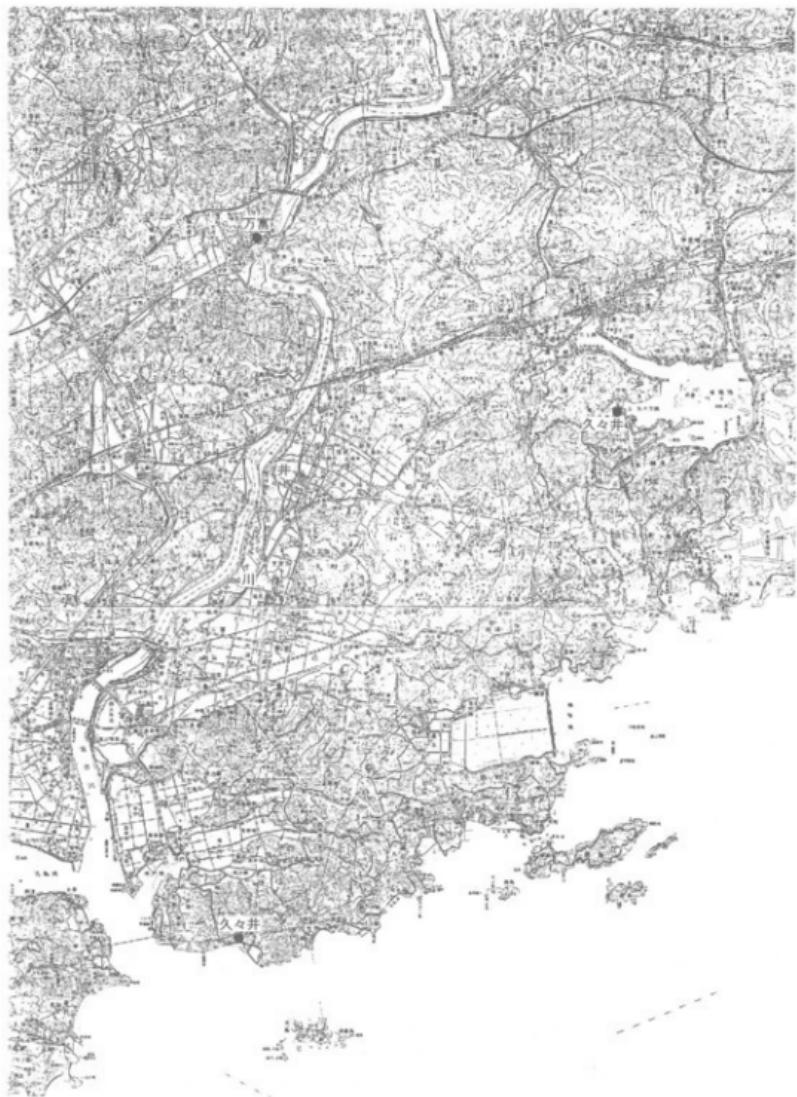
### 1. はじめに

北新町遺跡の第III期調査（M区）では、「東大寺」の刻印の入った平瓦が1点出土している。<sup>(1)</sup> この瓦は、平安時代末（1180年）に平重衡の南都攻めにより焼失した東大寺再建に関連して、鎌倉時代初期に、岡山県瀬戸町にある万富瓦窯で製作されたものである。この瓦窯の操業には、当時東大寺再建のため大勧進職に任せられた俊乗坊重源が深く関与していたとされている。同調査においては、この他にも刻印はないものの、瓦の凸面に施された菱形のタタキメの文様が酷似する平瓦の破片が、数点出土している。ここでは、これらの瓦について簡単ではあるが、若干の考察を行いたい。

### 2. 万富東大寺瓦窯とその瓦について

万富東大寺瓦窯は岡山県赤磐郡瀬戸町万富に所在する。東大寺瓦窯の所在する瀬戸町は岡山県の南部に位置し、周囲を山々で囲まれるが、北接する熊山町には旧山陽道が走り、町東部には吉井川が南流し瀬戸内海に注いでいる。東大寺瓦窯は南流する吉井川が西へ蛇行している万富地区（古くは梅と呼ばれていた）の南北に伸びた標高約20mの尾根上に所在する。古くから「東大寺大佛殿」の銘のある軒瓦類や「東大寺」の刻印のある平瓦の出土が知られており、国史跡に指定されていたが、窯の基數、位置、規模、形態等についてはほとんど知られていなかった。しかし、昭和54年に岡山県による磁気探査と発掘調査が<sup>(3)</sup>実施され、指定区域内において13基の窯跡が確認された。窯の構造はいずれもロストル式の平窯で、規模は幅1.2m、1.5m、2.5mの3種類があり、2条ないし3条の分焰炉を持ち、焼成室の長さは約3mと推定されている。分焰炉は平瓦と粘土を交互に積み重ねて構築していた。この調査ではコンテナ50箱にのぼる大量の瓦の出土が報告されているが、出土したのは平瓦のみで軒瓦類は出土しておらず、軒瓦類を焼いた窯は別に存在するものと推定され、瓦の種類によって窯が分けられていたようである。

ここで焼かれた平瓦の特徴は、大きさで言えば幅35cm、長さ42cm、厚さ2.5cmを測り、凸面に施された菱形文或はそれに横線や縦線を配した幾何学的文様のタタキメと凹面は板状工具によるケズリやナデが施され、「東大寺」と陽刻された刻印を持つことである。刻印は縦50mm、横20mm程の隅丸長方形で、外郭に1重の突線を巡らして、その中に「東大寺」の銘を陽刻で配置する。但し刻印はすべての平瓦に施されているわけではなく、刻印のないものも存在することが報告されている。<sup>(7)</sup> それでは次に北新町遺跡で出土した瓦について見ていくことにする。



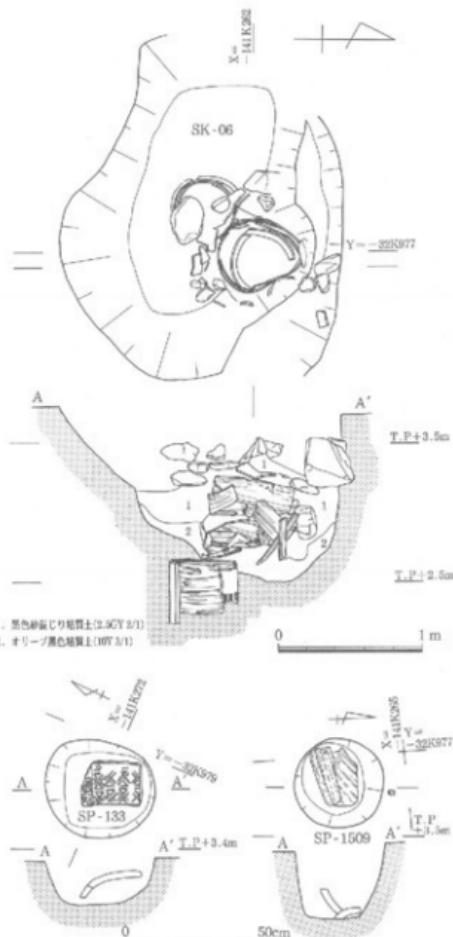
第89図 万富東大寺瓦窯位置図

### 3. 出土状況

まず瓦の出土状況であるが、瓦が出土したのは、M区で検出した中世の遺構面においてであり、井戸であるIII・SK-06、とピットIII・SP-133(1436)、III・SP-1509、III・SP-1515のいずれも遺構からの出土である。同一面では井戸や土坑、溝等とともに、多数のピットが検出されており、11～13世紀頃の集落跡と考えられている。

III・SK-06は、平面形2×2.5mの椭円形に近い不定形を呈し、深さ約1.3mを測る井戸である。井戸の構造は、最上部に割り石が残っていたので、石積みによる井戸側であったと考えられ、井筒として底部を欠く常滑大甕を転用し、その上に大型の曲物側板を載せ、甕の内部にも曲物側板がある。その下にはやはり水溜め用の曲物を置き、その外側に3枚の平瓦を曲物に密着させる状態で囲んでいた。

甕と下部の瓦の位置はずれてい るが、甕内部の曲物と平瓦の内側にある曲物の径の大きさは一致するので、元来は一つの井筒として機能していたものと考えられる。この3枚の平瓦の中の一つに「東大寺」の刻印が入っていたが、同時に使用されていた他の2枚の平瓦も刻印は認められないものの、凸面の菱形の



第90図 東大寺瓦出土遺構 計(1)より作成

タタキメがよく似ており、同様のものと考えられる。遺構内から出土した他の遺物には土師器皿、東播系須恵器鉢、瓦器鍋等があり、常滑甕と合わせて13世紀前半頃の時期を示している。

III・S P-133(1436)は平面形0.4×0.5m、深さ30cmを測るピットで、平瓦が凸面を上にした状態で出土しており、礎板に転用されていたものと考えられる。

III・S P-1509も径約0.3m、深さ40cmを測るピットで、平瓦の破片2枚が凹面を上にして重ねた状態で出土しており、やはり礎板に転用されていたものと考えられる。2枚の破片は同一個体で、接合することができた。

また、III・S P-1515からも菱形のタタキメが施される平瓦が出土しており、礎板として使用されていたものと考えられる。

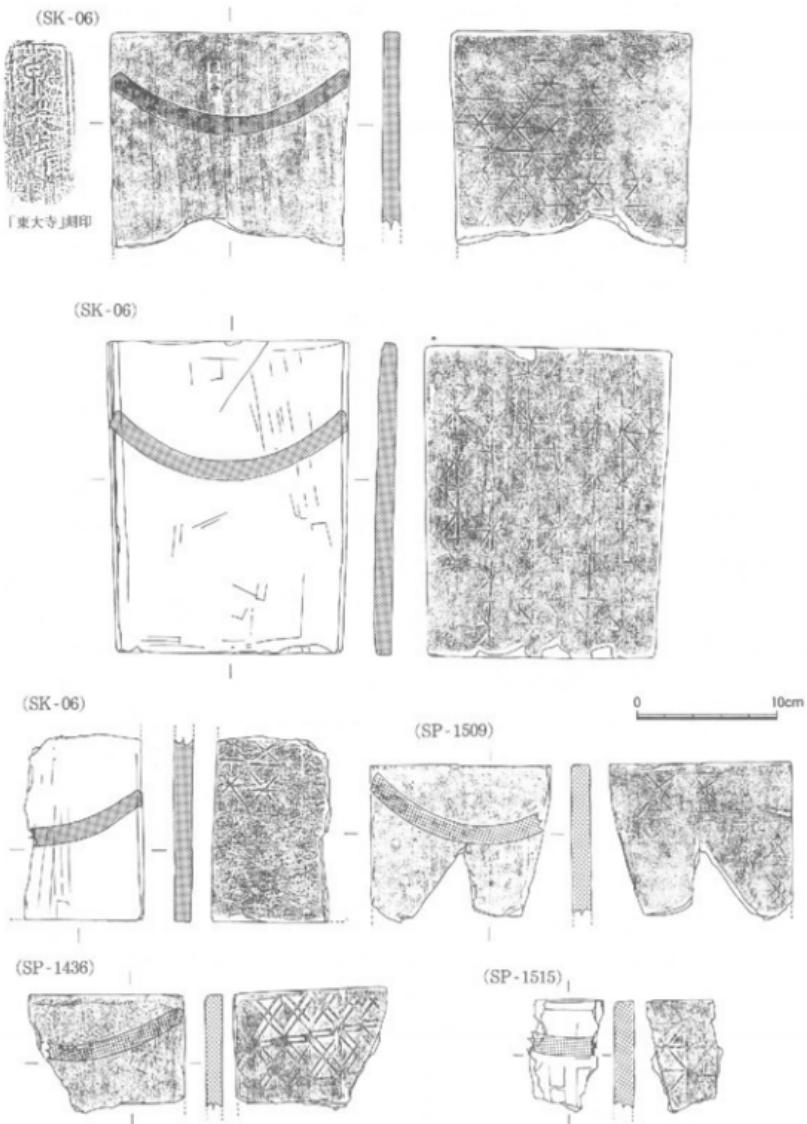
このように出土した瓦は、井戸の施設の一部やピットの礎板として転用された状態で出土している。

#### 4. 出土瓦

1～3はIII・S K-06からの出土である。1は約3分の2の残存で、凸面に菱形文に横線が菱形の交点で交差するタタキメが施されており、凹面は板状工具によるケズリ或いはナデが施されている。<sup>(8)</sup> 門面上部には「東大寺」の刻印がある。刻印は陽刻で、縦約cm、横約cmの隅丸長方形を呈し、外側に1重の突線が巡り、その中に「東大寺」の鉢を配置する。<sup>(9)</sup> 2はほとんど完形で、凸面の文様は1と同様であるが、それに縦線が加わる。刻印は見られなかった。3は破片で、1と同様凸面に菱形文と横線が菱形の交点で交差するタタキメが施されている。破片部分には刻印は見られなかった。4はIII・S P-133(1436)出土で、凸面に菱形文と横線が交差する2重線のタタキメが施されている。<sup>(10)</sup> 5はIII・S P-1509出土で、4と同様に2重線のタタキメが施されているが、菱形の形状が横長である。6はIII・S P-1515出土で、凸面に菱形文と横線が菱形の交点で交差するタタキメが施されている。このように1以外には「東大寺」の刻印は見られないものの、凸面に施された菱形文に横線を配するタタキメの文様と凹面に板状工具によるケズリあるいはナデを施す特徴から、万富瓦窯産の東大寺瓦であると考えられる。

#### 5. 東大寺再建と重源

1180年（治承4）に焼失した東大寺の再建計画は、1181年（治承5）に藤原行隆が造仏・造寺長官に任せられ開始されるが、と同時にその年の8月（改元により養和元年）俊乗坊重源が造営大勤進職に任せられた。重源の出自については紀氏或いは当時淀川河口の大坂



第91図 東大寺瓦実測図 種(1)より作成

湾に面した港であった渡辺の津を本拠地とした武士団である渡辺党の出身とも言われているが、確かなことは不明である。13歳で出家し醍醐寺に入り、後高野山でも修業をし、その頃から高野聖として社会的作善を行なっていたと考えられる。重源は自分が行なった作善を書き留めており、これは『南無阿弥陀仏作善集』として今日も残っている。

大勸進職としての重源は、東大寺再建のため諸国を勧進したほか、周防国が東大寺造営料国となると、国司に任せられ木材の伐採や運搬に努力した。また1193年（建久4）備前国が東大寺造営料国になると、1196年（建久7）にはそれまで東大寺燈油田として点在していた荒地を開発して、野田保（現在の岡山市野田あたり）と交換したり、邑久郡長沼庄、神崎庄の開発に関与した。また、これとは別に重源が行なった作善の中で備前国に関連するものを挙げると

- ①大仏や仏像の修復の数、播磨国一軀、備中別所一軀、備前常行堂一軀、備中庭瀬一軀
  - ②吉備津宮に鐘を施入
  - ③備前一宮常行堂を建て、丈六の阿弥陀仏を施入
  - ④備前国府の近く（湯迫）に大湯屋を立て、田三丁、畠六丁をその費用に充てる
  - ⑤豊原御庄（邑久郡）内に豊光寺と湯屋を立てる
  - ⑥此国外中諸寺の修造凡そ廿二所
  - ⑦備前岡船坂峠（備前市三石）を開き、往還人の難儀を救う
- などがある。

そして『南無阿弥陀仏作善集』の裏文書である作善集紙背文書の中に吉岡郷の地名が見られ、これは瓦窯の存在する瀬戸町万富地区のことと指している。その内容は

（朱書） 「官アミダ仏」

吉岡郷真依納沙汰四十二石二斗五升八合

津納三十六石九斗二升六合

とあり、さらに瓦に関しては

御瓦用途九百七石七斗二升

御瓦運上雜用六百八十六石三斗四升四合

除新田庄卅石定

吉岡御瓦 納二百二十一石三斗七升六合

（鉢）

鼓物箇河内権守是助百七石

合百石 船貨并雜用七石

白土運上雜用五十一石七斗六升六合

倉殘麦百十六石五斗四升四合内

梶取安清御瓦雜用請懸

御瓦

魚住梶取清房雜用請懸

右太略注進如件

建仁三年七月 日

惣判官代藤原 (花押)

の記事で、ここでいう「吉岡御瓦」とは東大寺瓦のことであり、この内容からすると備前国が東大寺造営国料となった建久4年（1193）からこの建仁3年（1203）までの少なくとも約10年間は、万富で東大寺瓦が焼かれていたことになり、その運営には重源が深く関与していたと推定されている。

## 6. 生産地及びその周辺での出土状況

それでは何故万富産の瓦が北新町遺跡で出土したのか。先述のとおりこの瓦は東大寺再建のため焼かれたものであり、通常の瓦とは異なりその使用目的が明確にされているものである。それ故北新町遺跡のような集落跡から出土することにはそれなりの理由、歴史的背景があったものと考えられるのである。これを考える前に生産地である岡山県万富及びその周辺での瓦の出土状況がどうであるか、過去において採集されていたものが知られているので、ここではこれらの瓦について触れておきたい。

### 東大寺瓦出土地

- (1)瀬戸町吉井川倉治沖
- (2)瀬戸町寺見御堂山下三角岩の深淵（吉井川内）
- (3)瀬戸町久津山麓
- (4)瀬戸町多田原阿保田神社境内
- (5)瀬戸町鍛冶屋天皇山山頂
- (6)瀬戸町大井西池
- (7)瀬戸町万富上の山番神堂境内
- (8)岡山市一宮字山神吉備津宮常行堂跡
- (9)岡山市湯迫浄土寺

- (10)岡山市福島
- (11)和気町安養寺
- (12)熊山町弥上本土井
- (13)熊山町可真下上井谷
- (14)佐伯町矢田部天満神社

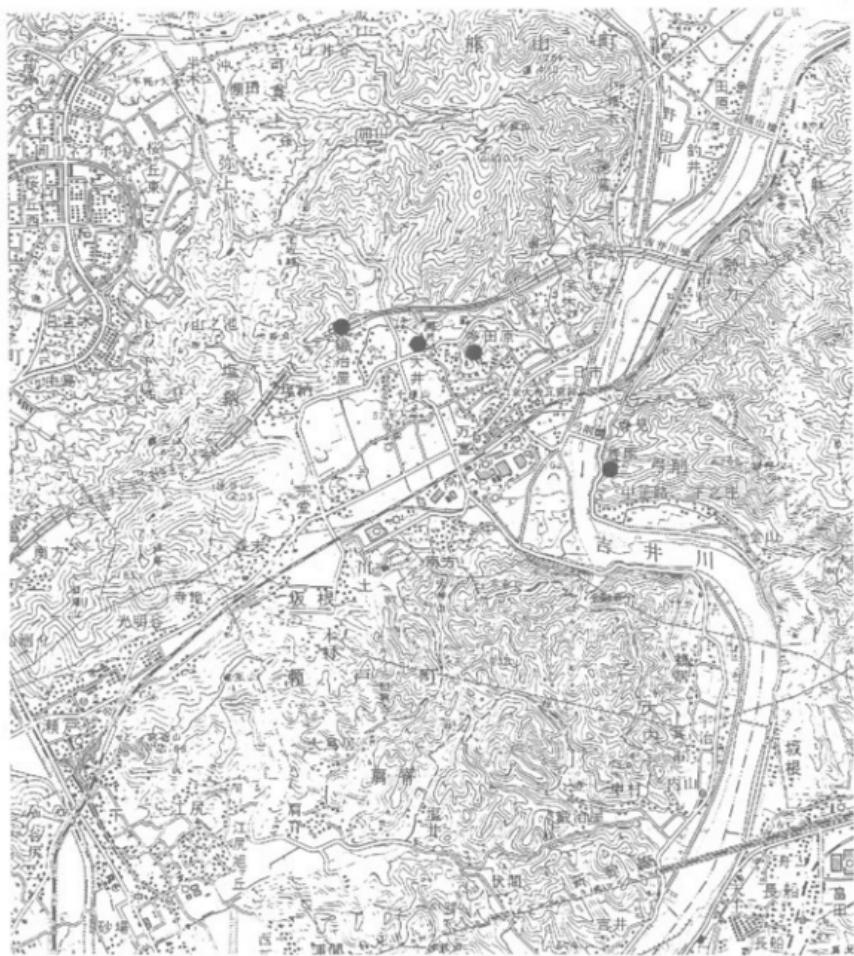
これらの出土地点を見ると(1)～(7)までは瀬戸町内であり、その内(1)(2)は、いずれも窯跡のある場所から東南約800mの吉井川の河川内である。(1)では河川内で砂利採集中に水面下約8mの所から揚がったとされている。ほとんどは軒丸瓦で、平瓦は少量の破片のみであった。(3)～(7)は窯跡の存在する尾根或いはその周辺の山裾であり、未発見の窯跡の存在を示唆する資料と言える。(8)は作善集に記載のある所で「東大寺」の刻印のはいった瓦が出土している。(9)も作善集に記載のある寺である。湯屋も建てられていて、寺域内から「東大寺」の刻印の押された瓦片が出土している。(10)は江戸時代の寛文年間中に漁師の網に掛かって揚がったものと伝えられ、現在は東大寺に収蔵されているものである。(11)は吉井川の上流にあたる和気町内で、安養寺にはかつて常行堂があったと伝えられることから、重源に関わりのあった寺と考えられる。(14)もさらに吉井川を遡った場所になる。(12)(13)は北接する熊山町内からで、窯跡が存在する場所や、(3)～(7)の瓦が採集されているのと同じ熊山山塊の山裾にあたる。

このように窯跡の調査からの出土品以外はいずれも採集遺物であり、北新町遺跡のように調査で且つ、他の使用目的での出土は今のところ例を見ない。

## 7. 東大寺での使用状況

消費先の東大寺ではどのように使用されていたのであろうか。ひとくちに東大寺再建と言っても壮大な計画で、重源一代では完成せず、二代榮西、三代行勇へ引き継がれていった。しかし、大仏殿、南大門、阿弥陀堂などの中軸部分は重源が完成させ、塔、戒壇院、中門は榮西が造ったことになっている。

このとき再建された大仏殿は、その後永祿10年（1567）に再び戦火をうけて炎上している。<sup>(11)</sup>ただ昭和42年に鐘楼部分の修理工事が実施され、使用されていた平瓦に菱形のタタキメと「東大寺」刻印が確認されており、万富で焼かれた瓦が大仏殿のみならず、他の伽藍にも使用されていたことが言える。<sup>(12)</sup>それは大仏殿の完成が建久5年（1195）とされており、紙背文書に書かれた「吉岡御瓦」の記事が建仁3年（1203）であることからも、大仏殿完成以後も万富の地で瓦が焼かれていたことからも推測される。となると再建全体に要した



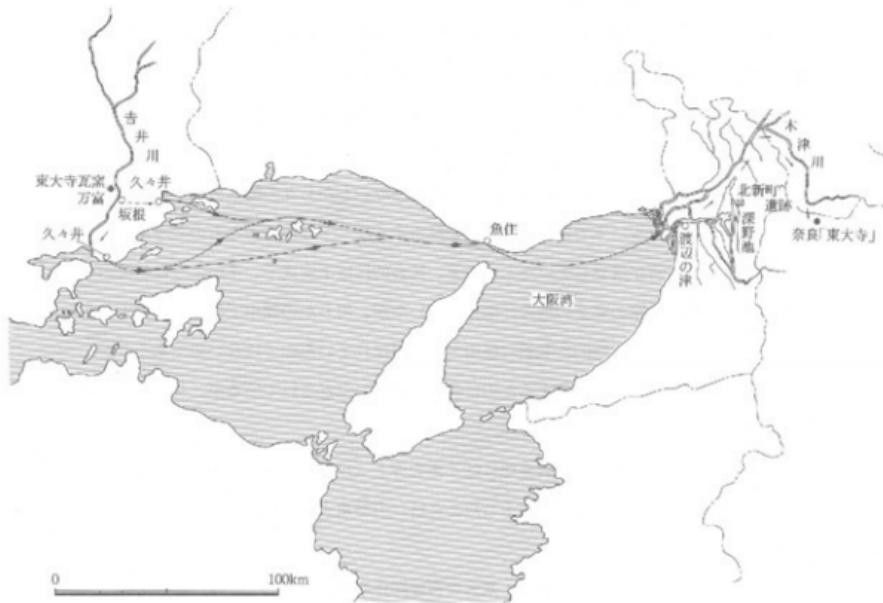
第92図 東大寺瓦採集地点

瓦の数は莫大な量になり、現在万富で確認されている13基の瓦窯では到底生産がおぼつかなく、出土地の(3)～(7)、(12)(13)などに見られるように、指定区域外、或いは周辺に瓦窯が存在していたことが推測されている。<sup>(13)</sup>

## 8. 瓦の運搬

万富で焼かれた瓦がどのようにして東大寺まで運ばれたのであろうか。大量の瓦を運ぶには、人員や技術的問題もあるが、何よりも瓦を円滑に運ぶ安全な経路が確保されていなければならない。既に重源は、造営料国である周防国より切り出された材木を瀬戸内海の舟運を利用して奈良まで運んでおり、万富の瓦も同じ経路によって運ばれたものと考えられる。

では東大寺まで瓦を運んだ経路をたどってみよう。瓦窯のある万富は瀬戸内海から約20kmの内陸部に所在する。瓦窯のすぐ東側には吉井川が南流しており、瓦は吉井川を船で下って瀬戸内海まで運ばれたと考えられている。出土地(1)(2)のように吉井川内から瓦が出土するのは、運搬途中で船から落ちたものとされている。瀬戸内海まで運ばれた瓦は海船に積み替えられ、海路大阪を目指した。この瓦を積み替えた港は久々井であったと考えられているが、現在備前市と岡山市に同地名が存在し、積み替えを行なった港については二説がある。備前市の久々井港まで瓦を運ぶには、吉井川を下り備前市坂根あたりで一旦荷揚げ



第93図 東大寺瓦搬送ルート

をして、陸路を久々井まで運んだものとされている。これに対して岡山市の久々井に至るにはさらに吉井川を下ることになるが、舟運だけで運ぶことができ、大量の瓦を運ぶには陸路を利用するよりも効率が良いと考えられ、出土地<sup>10</sup>などはこの経路が利用されていたことを示す有力な資料となっている。いずれにせよ久々井を出航した船は海路大阪へ向かうが、途中播磨国に魚住泊があり、作善集には重源が魚住泊を改修した記事があるので、大阪へ向かう途中に停泊地として利用されていたのであろう。当時大阪の港の中心となっていたのは、淀川河口付近にあった渡辺津であった。現在の天満橋付近がその地であり、ここもまた重源に縁の深い場所であった。<sup>(14)</sup>ここまで運ばれた瓦は再び川船に積み替えられ、淀川・木津川を通り木津を目指したものと考えられる。瓦は木津まで行き、そこで陸揚げされて、東大寺まで運ばれたものと考えられる。東大寺までは直線でおよそ6kmの行程である。

## 9. 北新町遺跡の位置付け

このように東大寺まで瓦の輸送は、瀬戸内海から淀川の水運を利用した経路が考えられているが、それでは北新町遺跡で東大寺瓦が出土した理由は何であろうか。

北新町遺跡は河内平野の北東部に位置し、当時は深野池が遺跡のすぐ西方にあった。深野池は寝屋川を通じて西流し、渡辺津のあった淀川河口へ通じていたので、船によって北新町まで来ることは可能であったはずである。また、北新町からは清滝峠越えで木津に行くことができるが、この経路は他の大阪から奈良へ入るルートのなかでも比較的起伏の少ない道であり、瓦を運ぶには問題はなかったであろう。しかし瓦の輸送の主要経路は、淀川から木津へ向かうルートであり、北新町を経由するルートは補助的なものと考えられよう。当時は鎌倉幕府が成立していたとはいえ、社会的には不安定で、そのような状況の中で重源は瓦の輸送経路の安全の確保に努力していたが、何らかの理由で淀川を利用するルートが使えなくなり、一時的に北新町経由で瓦が運ばれていたのではないであろう。<sup>(15)</sup>

或いは、重源は東大寺を再建するために各地を勧進したとされているが、その勧進に協力した者に与えられたものであろうか。

いずれにせよ、北新町遺跡の調査地には「東大寺」（ひがしおおてら）という小字名が残っており、そこから東大寺瓦が出土したことは、当時東大寺との関連が深かったことは事実であろう。

表2 東大寺再建関係年表

1180年（治承4） 平重衡の南都攻めにより、東大寺、興福寺焼失。

1181年（治承5）	東大寺造仏、造寺長官に藤原行隆が任せられる。 重源、東大寺再建のため大勧進職に任せられる。
1183年（寿永2）	宋の仏工陳和卿、東大寺大仏の修補を始める。
1185年（文治1）	源頼朝、米1万石、砂金1千両、上綱1千疋を東大寺に寄進。 大仏開眼供養が行なわれる。
1186年（文治2）	重源、伊勢神宮に東大寺大仏殿造営を祈る。
1190年（建久1）	重源、東大寺を再建し棟上げが行なわれる。
1193年（建久4）	備前国、播磨国が東大寺、東寺の造営料国となる。
1199年（正治1）	東大寺南大門再建、法華堂（三月堂）改造。
1203年（建仁3）	運慶、快慶ら、東大寺仁王門金剛力士像を完成。
1206年（建永1）	重源没す。（86）
1567年（永禄10）	松永久秀、三好三人衆を東大寺付近で破る。大仏殿炎上。
1962年（元禄5）	東大寺大仏の修復を完了し、開眼供養が行なわれる。

### 註

- (1)『北新町言遺跡第3次発掘調査概要報告書』1997大東市北新町遺跡調査会
- (2)「治承の兵火」と呼ばれ、東大寺とともに興福寺も焼失しているが、興福寺は藤原氏の氏寺であったため、多くの領地や莊園が寄進され、その再建は早かった。
- (3)軒丸瓦は梵字の「眞（ア）」、軒平瓦は梵字の「梵（パン）」を中心に「東大寺大佛殿」の文字を配している。「梵（パン）」は大日如来（盧舎那仏）を表している。
- (4)昭和2年に指定されている。この他に鎌倉期の東大寺再建瓦窯には愛知県伊良湖東大寺瓦窯があり、こちらも国史跡に指定されている。伊良湖東大寺窯の瓦は軒丸・軒平瓦とも「東大寺大沸殿瓦」の文字を配し、「大佛殿」或いは「東」の刻印がなされている。
- 『渥美半島埋蔵文化財調査報告書』1966渥美町教育委員会（平成4年復刻版）
- (5)『泉瓦窯・万富東大寺瓦窯跡』1980岡山県教育委員会
- (6)(5)のなかで凸面のタタキメの文様は、7型式に分類されている。1. 斜格子文、2. 菱形文、3. 菱形文に横線を交点で交差させる、4. 3型にさらに縱線を交点で交差させる、5. 1型或いは2型を複線にする（2重のタタキメ）、6. 3型を複線にする、7. 繩目文があり、さらに0型としてタタキメを板状工具で削り消すものを挙げている。
- (7)(5)と同じ。刻印は平瓦の凹面に1個押されるのが普通であるが、なかには2個・3個押される例もある。また丸瓦の内面や平瓦の側端面に押されたものも報告されている。
- (8)3型。凹面の上縁部には、幅1cm程の無い金色の物質が帯状に付着しており、当初金泥かと思われたが、奈良国立文化財研究所において成分分析をしてもらったところ、その成分は黄銅鉛で、自然に付着した可能性が高いとのことであった。
- (9)4型。
- (10)5型。

- (1)松永・三好の合戦により大仏殿が炎上する。その後元禄5年（1692）に徳川幕府により再建されている。
- (2)『国宝東大寺鐘桟修理工事報告書』1967奈良県教育委員会
- (3)一説には30万枚とも50万枚とも言われている。また元禄の大仏殿再建時には13万枚の瓦が使用されたとされており、昭和大修理ではその内約3万枚が再利用されたとのことである。
- (4)重源はこの渡辺の地に別所を建て、浄土堂の他倉庫や湯屋なども存在したと言われている。
- (5)瓦が陸揚げされたとされる木津周辺での出土が期待されるが、今のところ東大寺瓦の出土例はないようである。

#### 参考文献

- 大山裔平「仏教の動向」『日本の歴史9 錦倉幕府』1974掌室館
- 三浦主一「経済生活の変化」『大阪府史第3巻（中世編I）』1979大阪府  
『瀬戸町誌史料集』1985瀬戸町
- 矢部秋夫「東大寺再建と瀬戸町」『瀬戸町誌』1985瀬戸町

遺物観察表

件名	番号	器種	高さ(cm)	色調	形態・特徴	調整・手法	通査名
	1	朱付綱	高さ 4.7	赤色 明緑灰色 底面 4.6 赤緑白色	高さのある高台から内側して体部は伸びる	外面 内部に草花文 底部外面に文字	SD-01
	2	貝殻	高さ 2.0 幅 2.0	赤色 明緑灰色	巻貝状	丁寧なつくり 素焼き	SD-01
	3	土師器蓋	高さ 1.3	赤色	凹凸のある底盤から口縁部は水平方向に伸び環部は丸い	外面 強い模ナデによる使跡	SD-01
	4	土師器蓋	高さ 1.5	赤色	丸い底からゆるやかに外上方に伸び口縁部は丸く終 口径 8.0 赤白色	外面 模ナデ、口縁部でわざかにつまみあげ 内面 ナデ	SD-04
61	5	瓦器 梗	高さ 3.7 (和柄) 口径 3	赤色 灰白色	高台の形跡はなし	外面 指押さえ	SD-04
	6	瓦器 梗	高さ 3.6 口径 12.2	赤色	中央の低い天井部、垂直な立ちあがりとの間に無い模 をもつ。口縁端部に内傾する明瞭な段を有する	外面 口縁にナデ、天井部3/4にヘラケゼリ 内面 ナデ	SD-04
66	7	土 跡	身さ 3.3 厚さ 0.8	赤色 灰白色	筋縫形	中央に径0.25cmの穿孔	II層
	8	白磁 網	高さ 2.1 口径 6.0	赤色 灰白色	断面台形の高めの高台	高台は削り出し 底面内面は施釉	II層
66	9	風呂敷片	高さ 30.1	赤色 灰 色		外面 纏文 内面 ナデ	I層
64	10	陶器飾品	高さ 30.1	黒褐色	平齊の鉢		I層
65	11	陶器輪形	高さ 5.6 直径 6.2 厚さ 1.7	赤色 灰白色	低いタガを有する	外面 1次調整によるタテハケのみ、貼りつけ先等 内面 ナデ	II層
64	12	椎 容	身さ 0.4 厚さ 3.0	赤色 灰白色	腹部 尖頭		I層
65	13	石製器皿	高さ 0.9 口径 4.0 厚さ 1.7	赤色 灰白色	平面断形 サヌカイト型	片方の側縁部に細部調整 片方は風化面を残す	II層
65	14	石不明品	高さ 0.9 口径 4.0 厚さ 1.7	赤色 灰白色	サヌカイト型	全体に風化している 細部調整は認められず	II層
	15	瓦 器 梗	高さ 5.7 (大柄) 口径 15.2	赤色 灰白色	器壁は厚く、丁寧なつくり ゆるやかに内側し、口縁部は 外は外気株に丸く終わる 高台台形、端部や下位に底板	外面 貼り付け高台 重い3分割のヘルミガキ 内面 簡単なジグザグ状のヘルミガキと密な織編ミガキ	SE-01
	16	瓦 器 梗	高さ 5.5 (漆塗) 口径 15.3	赤色 灰白色	器壁は厚く、丁寧なつくり ゆるやかに内側し、口縁部は 端部外気株に丸く終わる 墓壙や下位に底板	外面 貼り付け高台 体部2/3に密な3分割のヘルミガキ 内面 2重の連結輪状のヘルミガキと密な織編ミガキ	SE-01
	17	瓦 器 皿	高さ 2.2 口径 9.9	赤色 灰白色	口縁部は粗面し外反する	外面 指押さえ、強いナデ 内面 0.1mm程のジグザグ状のヘルミガキと織編ミガキ	SE-01
	18	瓦 器 皿	高さ 2.3 口径 10.6	赤色 灰白色	丸みをもってゆるやかに外上方に開き、口縁部で外 反する	外面 ヨコナデ 内面 密なジグザグ状のヘルミガキと織編ミガキ	SE-02
	19	土師器蓋	高さ 1.7	赤色 灰白色	丸みのある底盤から口縁部は外反する	底面に指押さえ、内外とも口縁部1段ナデ	SE-02
67	20	瓦 器 梗	高さ 5.4 (漆塗) 口径 12.3	赤色 灰白色	丁寧なつくり、器壁は厚く口縁部はさらに厚みを増す 歩くやかに内側し口縁部は内側に丸く終わる 墓壙上位に底板	外面 貼り付け高台 墓壙に運びした瓦の正裏、裏面をヘルミガキ 内面 ジグザグ状のヘルミガキ 密な織編ミガキ	SE-02
	21	土師器蓋	高さ 9.8	赤色 (漆塗) 灰白色	体部から「く」の字に屈曲して伸びる口縁部をもつ 口縁部は外傾する平坦面	外面 窓が村番 内面 板状工具によるナデ	SE-02
68	22	砥 石	高さ 10.6 幅 7.5 厚さ 1.5	赤色 灰白色	板状で両端は欠損	両面、両側面に使用痕 進行差	SE-03
	23	石 破	高さ 7.5 幅 9.5 厚さ 2.1	赤色 灰白色	滑石製 縛部破片		SE-03
69	24	白磁 網	高さ 2.3 口径 7.0	赤色 灰白色	無い器底 低い高台 見込みに比縫状の段を持つ	外面 削り出し高台 底部周辺は無難 内面 底面に施釉	SD-11

遺物観察表

登録番号	測定	目次	形質(a)	色調	形態・特徴	調査・手法	通称名
69	25	白 磁 器	高台 2.3	杏仁形	高めの高台から角度をもって体部は開き見込みに沈線 狀の段をなす	外面 剥り出し高台 高台まで無鉛 内面 全面に施釉	SD-11
	26	青 磁 器	高台 2.4	杏仁形 ヨリ一深	平坦な見込み 底部器向は厚い 高台 内側が直進な断面三角形の低い高台 狹は厚い	外面 剥り出し高台 内面 全面施釉	SD-11
70	27	天目茶碗	高台 2.6	杏仁形 底径 4.5	高台内中央部は突出する	外面 底部周辺は無鉛 内面 全面施釉	SD-11
	28	染付茶碗	高台 4.0		細い直進な高台から内側して体部は聞く 底部の器肉は厚い 広い見込み	外面 剥り出し高台に 2 本の条縞 体部に草花文 内面	SD-11
71	29	染付茶碗	高台 4.9		平坦な見込みから外上方へ聞く	外面 剥り出し高台に 1 本の条縞 体部下方に 1 条の界線 草花文の染付 内面 見込みは無鉛	SD-11
	30	染付茶碗	高台 4.3		全体に丸みをもち器肉は厚い	外面 丸みのある剥り出し高台に 1 本の界線 体部下方に 1 条の界線と草花文 内面	SD-11
72	31	ミニ四脚	高台 1.3		無高台 口縁部は外反する	外面 全体に無鉛 体部へケズリ、口縁部に先端 内面 全面施釉	SD-11
	32	紅 猪 口 磁	高台 1.4		菊花紋 内気泡味に伸びる体部	外面 底部は無鉛 等間隔のヘラ模様が放射状に施される	SD-11
73	33	染付茶碗	高台 1.8		口縁部は平坦面を持つ	内面 全面施釉	
	34	そば漬口 磁	高台 4.1		「ハ」の字に聞くしっかりした高台から丸みをもって	外面 剥り出し高台 染付のみ無鉛	SD-11
69	35	染付茶碗	高台 5.9		体部は上方へ伸びる	内面 青・藍色で磨削文	
	36	染付茶碗	高台 4.4		は立ちあがる	内面 見込みから体部中位まで無鉛	
71	37	染付茶碗	高台 2.2		連「ハ」の字の立ち上がりから田曲して丸い天井部へ	外面 天井部に山吹文と 1 条の界線	SD-11
	38	染付茶碗	高台 8.0		続く	内面 全面施釉	SD-11
74	39	染付茶碗	高台 3.2		織く直進な高台から丸みをもって外へ開き口縁前でわ	外面 高台と体部の境に 1 条の界線 竹文を体部にあしらう	SD-11
	40	染付茶碗	高台 6.8		ずかに外反する	内面 見込みに秀文と 1 条の界線 口縁部に 1 条の界線	SD-11
68	41	土 壁 製	高台 2.5		綱部は中空 尾の部分は複数	左右重合せ成形 一部彩色	SD-11
	42	土 壁 製	高台 3.1		に広い逆邊	左左右重合せ成形	SD-11
75	43	土 壁 製	高台 7.7	灰白色	綱をしたのか 尾ビレは欠損する	全体に摩耗	SD-11
	44	土 壁 製	高台 9.5		板状に割れ 縫い光沢	指揮さえ ナダ 強いヨコナダ 「て」の字状口縁	SD-15
76	45	土 壁 製	高台 1.5		大ぶりな垂形 手頃な底盤から上方へ開き本平面に向びた集	指揮さえ ナダ 強いヨコナダ 「て」の字状口縁	SD-15
	46	土 壁 製	高台 1.7		底盤の底盤から上方へ開きやや手に伸びた後上方へ向かう	指揮さえ ナダ 「て」の字状口縁	SD-15
77	47	土 壁 製	高台 1.5		浅い底盤から上方へ開き、わずかに上方へ向かう	口縁部ヨコナダ 「て」の字状口縁	SD-15
	48	土 壁 製	高台 1.7		大きく倒す底盤から上方へ開き、手に伸びた後上方へ向かう	指揮さえ 口縁部ヨコナダ 「て」の字状口縁	SD-15
78	49	土 壁 製	高台 1.9		丸く深い底盤から上方へ開き、端はわざり上方へ向かう	指揮さえ 口縁部ヨコナダ 「て」の字状口縁	SD-15
	50	土 壁 製	高台 1.7		盛った綱形、外上方へ開き水平に伸びた後上方へ向かう	指揮さえ 口縁部ヨコナダ 「て」の字状口縁	SD-15
79	51	土 壁 製	高台 2.0		均質な底盤でゆるやかに外上方へ開く	底盤に指揮さえ、ナダ、口縁部内外ともヨコナダ 畫描している	SD-15
	52	土 壁 製	高台 3.0		深く大きな綱形 ゆるやかに外上方へ開く	わずかにナダの痕 畫減している	SD-15
80	53	瓦 壁 製	高台 2.3	杏仁形 底径 11.0	大ぶり丁寧なつくり	磨滅している	SD-15
	54	瓦 壁 製	高台 5.5	杏仁形 沙勿内灰色 底径 16.0	丸井底部から立ち上がり、口縁部は外反し端部は厚く 折る	外面 体部に太いヘラミガキ、口縁部は横ナダ 内面 大い平行のヘラミガキ 数条の縦線ミガキ	SD-15
81	55	瓦 壁 製 (壁裏)	高台 3.5	杏仁形 底径 14.6	断面逆三角形の低い高台 内側する体部は口縁部へ厚 みを増す 端部や下位に沈線	外面 黏り付け高台 内面 磨耗している	SD-15

遺物観察表

件名	番号	器種	高さ(cm)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名	
72	69	瓦部 磁器 (大和) I-C	高さ 5.9 口径 14.6	透明白色 輪状黄色	「ハ」の字に開く丸めの高台 磁器の凹凸は複数 端部上位に残り沈線	外面 内面	軽くしている 輪子状の細いヘラミガキ 轮の邊縁ミガキ	SD-13
66	62	条生弘口壺 足 3種式	高さ 5.3 口径 20.8	透明白色 2段式	逆「ハ」の字に開く輪部は垂下	外面 内面	底部はナゲ、口縁増厚に輪状突出と方形の刺突穴 ナゲ	SK-08
72	63	条生量の器 口径 7.8	高さ 6.9 口径 7.8	透明白色 黄褐色	扁平な体部の上面に溝状の円弧が残る 作付は丁寧	外面 内面	不明 不明	SR-06
54	54	十脚基盤形 布留 I	高さ 4.7 口径 19.2	透明白色 2段式	环部のみ残存 环部中位でわざかに屈曲し、口縁へ続く	外面 内面	輪のへらミガキ 横方向へ細いヘラミガキ	SR-06
74	55	上端唇高脚 布留形	高さ 11.7 口径 17.3 底径 11.4	透明白色 2段式 黄褐色	环部は外反して上方に開く 磁器は垂直に下り、裾部 は水平に伸びる	外面 内面	軽減している 唇部にハケメ ナゲ	SR-06
56	56	土唇唇高脚 底径 15.8	高さ 9.6 口径 15.8	透明白色 2段式	环底部に丸みをもつ 根部はゆるやかに開く	外面 内面	外・内面とも軽減している	SR-06
57	57	七脚基盤脚 底径 20.3	高さ 12.2 口径 25.8	透明白色 灰白色	深さのある杯部、脚部は垂直に下り、裾部は水平に伸 びる	外面 内面	外・内面とも軽減している	SR-06
58	58	上端唇高脚 庄内 III	高さ 5.3 口径 20.3	透明白色 2段式	丸い杯底低、無い座面から脇曲し唇部は開く、透かし 窓が穿たれる	外面 内面	脚部に削めの細いヘラミガキ 透かし窓の深さ8cm 脚底部から放射状の細いヘラミガキ	SR-06
59	59	土唇唇高脚 庄内 III	高さ 4.7 口径 10.0	透明白色 2段式	脚底のみ 透く「ハ」の字に開く脚部に透かし窓が穿たれる	外面 内面	ナゲ 透かし窓は外から内へ施される ナゲ	SR-06
71	60	土唇唇高脚 口径 15.8	高さ 6.7 口径 15.8	透明白色 2段式	「ク」の字に屈曲する体部と口縁部 磁器は上に押さ れる	外面 内面	体部に削めのハケメ 表面に横、削めのハケメ 9本/1.5cm 脚部へラケズリ	SR-06
61	61	土脚唇高脚 口径 17.2	高さ 14.5 口径 17.2	透明白色 2段式	丸い体部から「ク」の字に屈曲し、口縁部は真っ直ぐ 伸び、脚部に内側する面をもつ	外面 内面	体部に削めと横方向のハケメ 脚部へラケズリ 脚体幅1.5cm 口縁部に横方向のナゲ	SR-06
62	62	土脚唇高脚 口径 14.5	高さ 12.9 口径 14.5	透明白色 2段式	丸い体部から「ク」の字に屈曲し、口縁部は内側して 上方へ伸びる 磁器は丸みのある曲をもつ	外面 内面	体部に削めと横方向のハケメ 脚部に横方向へのラケズリ	SR-06
75	63	上脚唇高脚 口径 14.2	高さ 9.2 口径 14.2	透明白色 2段式	脚部は屈曲したのも、わざか斜め外に直行する 肩部に張りをもつ	外面 内面	体部に削めのハケメ 脚部にヘラケズリ	SR-06
64	64	土脚唇高脚 口径 18.0	高さ 7.5 口径 18.0	透明白色 2段式	丸い体部から「ク」の字に屈曲し、口縁部はわざかに 内側して伸びる	外面 内面	口縁部に横方向のナゲの痕 体部に花・右のナゲの痕	SR-06
65	65	土脚唇高脚 庄 内 口径 14.2	高さ 15.5 口径 14.2	透明白色 2段式	小さい背部 内側する体部から「ク」の字に屈曲し、 短く外反する	外面 内面	削めのタタキメ(5本/1.8cm) 横方向のナゲの痕	SR-06
66	66	土脚唇高脚 口径 11.0	高さ 14.0 口径 11.0	透明白色 2段式	疎形の体部から直角に立ち上がり、口縁部はわざかに 斜めに直行する	外面 内面	脚部に指捺され 体部に横方向に指ナゲ 口縁部に横方向のナゲ	SR-06
74	67	土 部 壁 小型火薬室 口径 9.6	高さ 8.1 口径 9.6	透明白色 2段式	疎形の体部から屈曲し、口縁部に伸びる	外面 内面	横方向の板ナゲ 縦方向のナゲ	SR-06
76	68	瓦瓶唇平脚 N-3 底径 8.3	高さ 4.6 底径 8.3	透明白色 2段式	中央の高い底部から脇曲し外上方へ伸び、天井部に丸 みをもつ 把手、口縁部形状不規	外面 内面	体部は屈曲へラケズリ 天井部貼り付け 不明	SK-07
69	69	介 生 瓶 Y-1構造	高さ 7.2 口径 12.3	透明白色 2段式	小さな底部から内側して立ち上がり口縁部で外反する	外面 内面	底部と体部の境目に指捺され、体部に削めのヘラミガキ 口縁部は横方向、底部は縦方向へラミガキ	SR-06
70	70	折生縫唇高脚 Y-O構造	高さ 8.4 口径 4.5	透明白色 2段式	体部は最大径を中半にもう円形 底部中央は高い 脚、口縁部は形状不規	外面 内面	体部中位に横方向のヘラミガキ 底部に多数の明顯な指捺され	SR-06

遺物観察表

登録年月日	登録番号	品種	生長(年)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺構名
76	71	新生米穀	高周 10.1 V-O様式	赤褐色 黄褐色	小さな底部 体部最大径はやや下位に位置する 面部形状不明 体部中央に穿孔	外面 四隅に凹の窓があり、周囲に縦の溝状溝を有し、その間に横枝文 内面 不明	SE-08
	72	赤米穀	高周 25.0 V-I様式	赤褐色 黄褐色	底部は円形化、球形の体部は最大径を中半にもち、口 縫部は彎曲し、外反する 端部外側に面をもつ	外面 真めのタケキの上に落葉から断面に5段のヘラミガキが重なる 内面 全面に板ナデ(7本/1cm)	SE-08
77	73	瓦器 槌	高周 6.1 II-3	赤褐色 灰白色	高さのある高台 体部から口縫部へ厚みを増す 端部や下位に浅い沈縫 丁寧なつくり	外面 指押さえ 内面 圓錐ミガキがわずかに残る	SE-33
	74	瓦器 砕	高周 4.1 II-2~3	赤褐色 灰白色	大きいくびつ 内溝する立ち上がりと平坦な天井部の 端部に浅い接縫を持つ	外面 天井部はヘラケズリ 立ち上がりは回転ナデ 内面 ナデ	SE-01
77	75	瓦器 砕	高周 4.5 II-4~5	赤褐色 灰白色	丸みのある底部から内面に延出し、口縫部へ繋ぐ 受 部はやや反る	外面 底部中半までヘラケズリ 口縫部はナデ 内面 ナデ	SE-02
	76	瓦器 砕	高周 6.1 II-3	赤褐色 灰白色	ほぼ直線的な立ち上がりと平坦な天井部	外面 天井部はヘラケズリ 口縫部は回転ナデ 内面 ナデ	SE-01
77	77	土器留置	高周 1.9 II-1~2	赤褐色 灰白色	丸い底部から外上方へ伸びる縫部は丸く終わる	底面に指押さえ 口縫部は内外とも横ナデ	日輪
	78	土器留置	高周 2.0 II-1~2	赤褐色 灰白色	いびつな形	多数の指押さえ 口縫部は内外とも横ナデ	日輪
77	79	瓦器 槌	高周 1.4 II-2	赤褐色 灰白色	高めの高台と低く小さい高台が2重に並ぶ	貼り付け高台 断続している	日輪
	80	土器留置	高周 7.0 II-2	赤褐色 灰白色	太く短い脚部 番部は「ハ」の字に開き端部は厚みを もって丸く終わる	外側にハケメ 内面 断続している	日輪
77	81	瓦器 留置	高周 7.0 II-5	赤褐色 灰白色	端部から番部へゆるやかに聞く	端部に指押さえ 口縫部にナデによる凹溝 通し窓以外に 内面 ナデ	日輪
	82	瓦器 留置	高周 9.3 II-3	赤褐色 灰白色	内溝する体部から底面に上方に伸び、口縫部端部で外 反する 留置	削り出し高台 体部へラケズリ 口縫部ナデ	日輪
77	83	土 盖	高周 9.1 大高H.墨	赤褐色 灰白色	内溝する体部から底面に上方に伸び、口縫部端部で外 反する 留置	端部は貼りつけ ナデ 留付蓋 内面 板ナデ 口縫部は横ナデ	日輪
	84	瓦器 留置	高周 1.6 II-2	赤褐色 灰白色	端部に折り返す 端は水平方向に短く伸びる	内面	埋乱
78	85	土器留置	高周 4.4 II-2	赤褐色 灰白色	端部に折り返す 端は水平方向に短く伸びる	外側 五弁花鉢付 内面	SE-06
	86	土器留置	高周 6.7 II-2	赤褐色 灰白色	内溝する体部から底面に上方に伸び、口縫部端部で外 反する 留置	外側 指押さえ ナデ 内面 ナデ(崩滅)	SE-06
79	87	土器留置	高周 1.1 II-2	赤褐色 灰白色	中央の高い底部に断面近三角形の高台	外側 褶り付け高台 ナデ 内面 足込みに0.2cm幅のヘラミガキ	SE-05
	88	瓦器 留置	高周 4.2 I-S-II-1	赤褐色 灰白色	高さのある天井部から深い接縫をもって下った口縫部 は短く外反する 端部は内傾す浅い凹面を有す	外側 天井部は回転ヘラケズリ 口縫部ナデ 内面 回転ナデ	SE-06
84	89	瓦器 槌	高周 5.2 I-C	赤褐色 灰白色	内溝する体部から立直する口縫部は直立する	外側 分割性のある直なヘラミガキ 内面 密な縦縫ミガキ	SE-06
	90	瓦器 槌	高周 4.6 I-C-H-1	赤褐色 灰白色	内溝する体部から丸い底面を見せた番部は直立する	外側 分割性のある太めのヘラミガキ 内面 密な縦縫ミガキ	SE-06
79	91	瓦器 槌	高周 4.2 I-C-D	赤褐色 灰白色	内溝する体部から外反する 端部は外反す	外側 丸く適なヘラミガキ 内面 直なヘラミガキ	SE-06

遺物観察表

登録名	番号	基種	出雲(a)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名
80	92	瓦 葵 棘	高さ 6.6 (厚さ) I - 2 口径 15.4	色の黒色 無底白色	高さのある高台から内側する体部と直立する口縁部を もつ 口縁に厚みをもつ残り沈縫が巡る	外側 貼り付け高台 ナデ 3分割のヘラミガキ 内面 見込みに0.2cm幅のジグザグヘラミガキ 密な織縫ミガキ	SE-08
	93	瓦 葵 棘	高さ 5.5 (厚さ) I - 3 - I 口径 14.8 底径 6.6	無底黑色 青白 - 黄白	半球形に近いゆるやかな曲線を描く体部 口縁部や下位に浅く広く広く沈縫が巡る	外側 球状に指揮され 不規則なヘラミガキ 内面 0.15cm幅の連続輪状ヘラミガキ 密な織縫ミガキ	SE-08
79	94	瓦 葵 棘	高さ 1.9 (大きさ) I - B - C 底径 6.0	無底黑色 青白 - 黄白	断面近三角形の低い高台	外側 貼り付け高台 内面 ジグザグ状のヘラミガキが扇子に富む 密な織縫ミガキ	SE-08
	95	土器部類	高さ 1.7 (厚さ) I - C - D 口径 28.4	青灰色 青白 - 黄白	均質な厚みで口縁は「て」の字形が退化したもの	底部に指揮され 内外とも口縁部は接ナデ	SK-08
80	96	土器部類	高さ 7.0 (厚さ) 口径 38.4	青灰色 青白 - 黄白	「く」の字に退化する厚い口縁部は外側する端面を有 する 硬粒がめだつ	外側 球部に指揮され 口縁部ナデ 内面 口縁部に横方向のナデ	SE-08
	97	打削受盤	高さ 1.9 口径 10.6	青白 灰白色	平坦な底部から傾斜して上方へ伸びる口縁部と1.5 cm内側に切り込みの入った堅厚の仕切りが巡る	外側 口縁部のみの施用 内面 全面施用 貫入 仕切りの裏面は蓋で半月状に施り取る	SD-11
81	98	磁 石	高さ 2.0 口径 10.4	青白 青白 - 黄白	青白	両面に使用度	SD-11
	99	磁 石	高さ 9.7 口径 10.4	青白 青白 - 黄白	青白	両面に使用度	SD-22
73	100	白 磁 棘	高さ 2.0 厚さ 1.5	青白 灰白色	「ハ」の字に開く高台	外側 貼り出し高台は無輪 内面 見込み無施	SD-22
	101	白 磁 棘	高さ 1.8 厚さ 1.5	青白 灰白色	低い高台	外側 高台内無施 内面 全面施用	SD-22
81	102	染 村 棘	高さ 4.7 口径 10.8	青白 灰白色	直立する高台 広い見込みからゆるやかに立ち上がる	外側 高台に2本の界線 体部下位に1本の界線 体部に横枝文 内面 見込みは蛇の目駄ハ半	SD-23
	103	染 村 棘	高さ 4.5 口径 10.2	102と同様		外側 102と同 内面 102と同	SD-22
81	104	青 磁 盆	高さ 2.1 底径 6.2	青白 明神灰色 青底白色	低い高台	外側 貼り出し高台 豊村は施用後へラケツリされ無施 内面 ヘラによる片刷り 全面施用	SD-22
	105	紅 色 口 盆	高さ 1.7 口径 4.6	青白 灰白色 青白	花口盆	体部中位まで無施 高台から口縁部へ放射状ヘラ描き	SD-24
83	106	瓦 22 棘	高さ 3.9 (大きさ) III - C	青白 灰白色	形変化する高台から外上方へ斜く体部	外側 貼り付け高台 ナデ 口縁部底面にヘラミガキ 内面 口縫部の網いた織縫ミガキ	SD-28
	107	青 磁 棘	高さ 1.9 口径 14.0	青白 青白 - 黄白	内側気泡の口縁端部のみ	外側 施用 内面 施用	SD-60
82	108	赤生土器高脚	高さ 36.5 Y様式	青白 底径 27.2	太い脚部から腹部はゆるやかに開き、瓶部は上方に肥 厚する 瓶部は外上方へ開き屈曲し、わずかに外反する	外側 施用部にも後のヘラ書き其のヘラミガキ 施用部へ手ナデ 内面 ナデ	SI-01
	109	赤生土器高脚	高さ 3.3 Y様式	青白 底径 27.6	杯 口縁部のみ残存 口縫部外反する口縁部	外側 口縫部ココナデ 施用している 内面 施用部へヘラミガキ 施用している	SI-01
83	110	赤生土器高脚	高さ 5.0 Y様式	青白 青白 - 黄白	脚基部からゆるやかに外上方へ伸び屈曲し外反する	外側 口縫部はナデ 施用している 内面 施用している	SI-01
	111	赤生上器要部	高さ 34.4 Y様式	青白 底径 29.2	脚部中央で張りをもつ、口縫部は「く」の字に屈曲し、 わざかに外反する 瓶部は角ぼる	外側 施用ナデ (ハケ目がわざかに残る) 施用している 内面 板ナデ 施用している	SI-01
83	112	赤生土器底盤	高さ 2.1 底径 4.5	青白 青白 - 黄白	底盤中央が高い	外側 指揮され 内面	SI-01
	113	七葉器中盤	高さ 2.5 口径 14.0 底径 11.5	青白 青白 - 黄白	平坦な底盤から内側する口縫部は上方へ押される	口縫部は二度のナデによって端部に面をもつ	SP-06

遺物観察表

件名	形態	基種	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	通名
84	114	土器部中腹	重約 8.4 φ134.5 厚さ約 0.5	赤褐色 黒褐色	平坦な底部から内側する口縁部は上方へ押される	口縁部は二度のナデによって端部に面をもつ	SP-86
85	115	瓦器 鋸	重約 3.3 φ110.5 厚さ約 0.5	白色 黄褐色	形骸化した高台から内側して口縁部へ伸びる口縁部	外側 高台は貼りつけ ナデ 口縁部は横ナデ 内側 口縁から見込みまで隙間の大きさ開いた隙間ミガキ	日層
	116	衛生土器裏	重約 5.1 φ16.8 V型式	赤褐色 黒褐色	体部から脱い「く」の字に屈曲する口縁 その端部は外縁する面を持つ	外側 体部はヘラケズリ (ハケメ5本/1.1α) 葉部、口縁部ナゲ 内側 体部はヘラケズリ (左→右) 端部に指押さえ	V層
	117	衛生土器底	重約 3.8 直径 6.8	白色 白褐色	平坦な底部から「ハ」の字に聞く体部 に高い黄色	外側 底部に黒斑 内側 底部底面に指押さえ	V層
	118	衛生土器底	重約 2.5 直径 5.2	赤褐色 白褐色	平坦な底部から直角に体部は立ち上がる に高い黄色	外側 磨滅している 内側 磨滅している	V層
83	119	衛生土器底	重約 2.5 直径 5.4	白色 白褐色	平底から進「ハ」の字に聞く体部 に高い黄色	外側 横方向のタキ目 内側 磨滅している	V層
	120	衛生土器底	重約 3.0 直径 5.0	白色 白褐色	平底で窪みのある底部 に高い黄色	外側 底部ナゲ 指押さえ 内側 磨滅している	V層
	121	衛生土器底	重約 3.5 直径 5.2	白色 白褐色	平底で横へ突出した底部 に高い黄色	外側 磨滅している 内側 磨滅している	V層
	122	衛生土器底	重約 1.6 直径 4.2	赤褐色 白褐色	中央部が少し高い底部 に高い黄色	外側 底部ナデ 内側 磨滅している	V層
	123	圓錐形口縁	重約 5.4 直径 30.0 厚さ約 0.5	白色 白褐色	進「ハ」の字に聞く体部から丸みを伴つ口縁は上方へ 突出 下端は垂下する	外側 ナデ 口縁は残る 内側 ナデ	日層
	124	圓錐形口縁	重約 6.0 直径 26.2 厚さ	白色	進「ハ」の字に聞く体部から大きく外へ反り、丸みを もった把頭部は上方へ突出、下端は垂下する	外側 ナデ 内側 口縁部 強いナデで凹面をなす	日層
84	125	圓錐形杯身	重約 3.8 直径 14.6 厚さ約 0.5	赤褐色 灰白色	大ぶり大きい底部から外上方へ開き、受部は短く上方に 伸び、立ち上がりは内傾し端部は丸い	外側 回転ヘラケズリ ナデ 内側 ナデ	日層
	126	圓錐形杯身	重約 2.1 直径 12.9	白色 灰白色	丸い端部は「ハ」の字に聞く E-5 直径 12.9 灰白色	外側 回転ナデ 振いナデ 内側 ナデ 粘土質の模	日層
85	127	圓錐形杯身	重約 2.4 直径 13.4	白色 灰白色	辺立ち上がりから平坦な天井部へ伸びる I堆	外側 天井部1/2位 回転ヘラケズリ ナデ 内側 ナデ	日層
84	128	圓錐形	重約 2.5 直径 10.2	白色 灰白色	斜め上方に立ち上がる浅い体部から口縁部は外反ぎ に屈曲する 基盤は厚くシャープさに欠ける	外側 高台は削り出し 体部はヘラケズリ ナデ 内側 ナデ	日層
	129	柱	重約 1.3 直径 4.4	白色 明緑灰色 白褐色	花壇型 内溝する体部と内傾する端面を持つ	外側 従事者間隔の放射状のヘラ搭き 施釉 内側 全面施釉	日層
81	130	蓋付口縁	重約 1.7 直径 2.5	白色	豪奢な高台から内側して体部は伸びる 見込みに平坦	外側 草花文 底部に2本の界線 高台中央に「氏明」鉢 内側 無文 全面施釉	日層
	131	蓋	重約 2.0 直径 2.0	白色	外反する口縁部のみ残存	外・内面とも全面施釉	日層
86	132	蓋	重約 2.3 直径 2.0	白色	直行する口縁部	外・内面とも全面施釉	日層
	133	蓋	重約 2.2 直径 18.0	白色	直行する口縁部	外・内面とも全面施釉 外面に縦かい貫入	日層
	134	蓋	重約 2.7 直径 1.8	白色	厚い底盤内溝する	外・内面とも全面施釉 貫入が背面に内面に垂直文を形成	日層
81	135	蓋	重約 2.0 直径 2.0	白色	平坦な底部から屈曲して体部は伸びる	底外縁は施釉の仕付き取る 内面には唐草文による花文	日層
86	136	蓋	重約 2.0 直径 16.0	白色	口縁部は玉縁をなす	全面施釉	日層
81	137	蓋	重約 2.0 直径 14.4	白色	直線的な体部 口縁部は小さな玉縁をなす	全面施釉	日層

遺物観察表

編號	器種	高さ(cm)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名
86	口縁部 口縁部 口縁部 口縁部	高さ 1.0 幅 0.4 高さ 2.9 幅 0.6	口縁部は玉縁状をなす 高台は「ハ」の字に開き、底面部端は水平な平面 高台部欠損 きめ細かい 高台部欠損	全面拡張 難は薄く、貫入が見られる 全面拡張 低い高台	全面拡張 難は薄く、貫入が見られる 全面拡張 割り出し高台 内面は無地	I層
	138 139 140 141					
	142	紙 石 高さ 9.0 幅 3.0	青磁	1面のみ使用痕	I層	
	143	磁 石 高さ 11.3 幅 2.6	砂岩	2面に使用	I層	
87	144 145 146 147	磁 石 高さ 9.0 幅 3.0 紙 石 高さ 9.9 幅 3.6	青磁(粘板岩) (粘板岩)	1面のみ使用痕 1面のみ使用痕	I層 III層	
	148	泥質小皿 高さ 0.2 口径 1.7	立体的な仏の手裏面	表は丁寧なナデ 裏面に指押さえ 布目が顯著	I層	
	149	虎 面 子 口径 1.7	平四ツ目結	1面端に虎の目結 1面端で4方に分割して1つ切り	I層	
	150	瓦 瓶 横長 (和様) H-2~3	高さ 3.5 口径 12.0	浅い圓盤な器形で底部欠損 基盤の厚みは均質である	外面 体面に指押さえ 口縁部は横ナデ 内部 0.2~0.3は幅のヘラミガキが2周する	SD-78
88	151	瓦 瓶 横 (大和) H-3~C	高さ 2.8 口径 12.4	浅く凸凹の美しい壁盤は薄い 足せり一色	外面 指押さえが顯著 内部 無い箇所ミガキが数条	SD-78
	152	瓦 瓶 横 (和様) H-3~3	口径 10.4	口縁部に厚みをもつ 旋紋は無し	外面 压滅している 内部 压滅している	SD-78
89	153	瓦 瓶 横 (和様) N-1	高さ 3.0 口径 10.5	形変化した高台から内側して体部は伸びる 赤白	外面 貼り付け高台 指押さえ顯著 ヨコナデ 内部 縫間の開いた箇所ミガキ	SD-78
	164	瓦 瓶 横 (大和) D-1~D	高さ 2.7 口径 10.0 旋紋	浅「ハ」の字に開く体部と外反する口縁部をもつ 浅い旋紋が縦部に上向きに位置する	外面 指押さえ わざかにヘラミガキが残る 内部 縫辺から太さに「パラつき」のある粗い箇所ミガキ	SD-78
90	155	瓦 瓶 横 (和様) H-3~3	高さ 4.0 口径 11.8	形変化した高台 均質な厚みをもって口縁へ伸びる 赤白	外面 貼り付け高台 ナデ 体面に指押さえ 内部 10周回の箇所ミガキ 連結輪状のヘラミガキ	SD-78
	156	瓦 瓶 横 (大和) D-1~B	高さ 3.8 口径 14.4	西い器形でやわらかに外上方へ伸び口縁端部には沈線が 一造する	外面 高台は貼り付けナデ わざかにヘラミガキと指押さえ 内部 縫間の開いた箇所ミガキ 連結輪状ヘラミガキ	SD-78
91	157	瓦 瓶 横 (和様) H-2~3	高さ 2.7 口径 12.0	ゆるやかに外上方に伸び、厚みをもつ縁部には沈線 が一造する	外面 指押さえ 内部 太く粗い箇所ミガキ	SD-78
	158	瓦 瓶 横 (大和) H-3~C	高さ 3.6 口径 12.3	形変化した高台 接い器形 赤白	外面 貼り付け高台 ナデ 体部には指押さえとナデ 内部 縫間の開いた箇所ミガキ	SD-78
92	159	瓦 瓶 横 (人和) H-3~D	高さ 3.2 口径 11.6	小瓶 形変化した高台から外上方へ伸び屈曲した口縁 赤白	外面 貼り付け高台 ナデ 細粒状の指押さえ 内部 大きく縫間の開いたヘラミガキが7周回	SD-78
	160	瓦 瓶 横 (人和) H-3~C	高さ 3.6 口径 12.0	凹凸のある器皿は薄めで口縁部でわざかに外反し、沈 縫は上位を巡る 様は殆ど見られず	外面 貼り付け高台 放射状の指押さえ 内部 連續性的の無い箇所ミガキ	SD-78
93	161	土器器皿 H-3~T 口縁部	高さ 1.8 口径 7.5 口縁部	丸い瓶からなだらかに口縁部へ続き端部は丸く終わる	外・内とも口縁部はヨコナデ 繋ける	SD-78
	162	土器器皿 H-3~T 口縁部	高さ 1.2 口径 7.8 口縁部	平底な底からなだらかに口縁部へ続き端部は丸い	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
94	163	土器器皿 H-3~T 口縁部	高さ 1.5 口径 9.2 口縁部	厚みのある平底から底面気味に口縁部へ伸び端部は丸い	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	164	土器器皿 H-3~T 口縁部	高さ 1.5 口径 9.0 口縁部	いびつ、ゆるやかに口縁部へ伸び端部は丸い	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
95	165	土器器皿 H-3~T 口縁部	高さ 1.5 口径 7.8 口縁部	ゆるやかに口縁部へ開き端部は丸く終わる	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	166	土器器皿 H-3~T 口縁部	高さ 1.5 口径 9.2 口縁部	丸みのある底盤から外上方へ開き口縁端部は丸く終わる	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78

遺物観察表

登録番号	遺物名	部 様	生 命(a)	色 調	形 态・特 徴	調 整・手 法	遺物名
86	167	土器器皿	新高 1.4 口徑 8.2 厚さ 0.4	赤褐色 黒褐色	平坦な底面から屈曲して立ち上がり口縁部に「て」の字を有する	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	168	土器器皿	新高 1.3 口徑 8.2 厚さ 0.4	黒褐色	平坦な底面から内側にして口縁部へ裏く 縁部は上方へ押される	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	169	土器器皿	新高 1.5 口徑 8.4 厚さ 0.4	黒褐色	平坦な底面から屈曲して運「ハ」の字に開く	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	170	土器器皿	新高 1.6 口徑 7.8 厚さ 0.4	黒褐色	丸みのある底部を内側で口縁部をもつ	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	171	土器器皿	新高 1.9 口徑 7.8 厚さ 0.4	黒褐色	凸凹のある底部から屈曲して運「ハ」の字に開く	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	172	土器器皿	新高 1.8 口徑 7.8 厚さ 0.4	黒褐色	平坦な底面から屈曲して口縁部へ裏く縁部は上方へ押される	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	173	土器器皿	新高 1.9 口徑 7.8 厚さ 0.4	黒褐色	偏平な底面で口縁部は近く内側する	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	174	土器器皿	新高 1.8 口徑 7.8 厚さ 0.4	黒褐色	いびつな	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	175	土器器皿	新高 1.7 口徑 7.8 厚さ 0.4	黒褐色	偏平な底面 縁部は丸く終わる	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	176	土器器皿	新高 1.9 口徑 7.8 厚さ 0.4	黒褐色	円内のある底面から屈曲して口縁部へ裏く縁部は上方へ押される	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	177	土器器皿	新高 2.0 口徑 8.0 厚さ 0.4	黒褐色	平坦な底面から屈曲し外側する 口縁部は上方へ押される	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	178	土器器皿	新高 1.9 口徑 7.8 厚さ 0.4	黒褐色	平坦な底部よりゆるやかに屈曲して縁部は丸く終わる	外・内とも口縁部はヨコナデ	SD-78
	179	土器器皿	高高 5.8 河内 J 口徑 27.8 厚さ 0.4	赤褐色 灰褐色	縁は水平に伸び口縁部は内側へ内傾する縁部をもつ	外面 縁部は足り付け、指押さえ、ナデ 内面 ナデ	SD-78
	180	土器器皿	高高 7.8 河内 J 口徑 26.6 厚さ 45.5	赤褐色 灰白色	縁は水平に伸び内傾する体部から口縁部は上方へ立ち上がる	外面 縁部は足り付け、指押さえ、ナデ 内面 ナデ	SD-78
	181	便器器皿	高高 6.4 河内 J 口徑 21.1	赤褐色 灰褐色	内側する体部から口縁部は大きく外反し口縁部は重複して下する	外面 口縁部ヨコナデ 体部は板ナデ 内面 痢減している	SD-78
	182	瓦器足盤	高高 8.2 口徑 23.3 厚さ 3.4	赤褐色 黒褐色	半球形の体部から口縁部は立ち上がり気味で水平な端面を有する 縁部は短く反る	外面 縁は貼り付け 指押さえ、ナデ 口縁部ヨコナデ 内面 体部は板ナデ 口縁部ナデ	SD-78
	183	瓦器足盤	高高 6.1 口徑 27.7 厚さ 3.0	赤褐色 黒褐色	半球形の体部、口縁部は水平な端面をもち縁は短く反る	外面 縁部は貼り付け 痢減している 内面 痢減している	SD-78
	184	瓦器足盤	高高 8.0 口徑 26.6 厚さ 3.1	赤褐色 黒褐色	半球形の体部 内傾する端面をもつ口縁部は上方へ伸びる	外面 縁、算鼻頭とともに貼り付け指押さえ、ナデ 内面 体部は板ナデ	SD-78
	185	瓦 壺	高高 8.5 河内 J 口徑 22.2 厚さ 2.9	赤褐色 灰褐色	半球形の体部 内傾する端面をもつ口縁部	外面 縁は貼り付け 指押さえ、ナデ 口縁部ヨコナデ 内面 体部は板ナデ 煙付着	SD-78
	186	瓦器不耐品	高高 10.0 口徑 22.0 厚さ 12.0	赤褐色	土管管 口縁部は受口状を呈する	外面 口縁部はヨコナデ 丁寧なつくり 内面 口縁部はヨコナデ 体部は縱方向のナデ 粘土鉢の根	SD-78
	187	瓦器器皿	高高 7.3 藍高 9.0	赤褐色 灰褐色	平坦な底面から屈曲して体部は上方へ伸びる	外面 板ナデ 内面 瓶部にナデの痕 保有者	SD-78
	188	瓦器器皿	高高 10.0 口徑 18.8 厚さ 1.4	赤褐色	底面欠損 やや内側する体部	外・内とも全面黒 内面は2本の弦貫で分離 斜溝の施設文	SD-78
	189	瓦器器皿	高高 9.0 口徑 18.8 厚さ 1.1	赤褐色	底面器皿が厚い 高台の断面は台形	縫付と高台内は露胎 見込みに「大」の片割り 貫入	SD-78
	190	瓦器器皿	高高 9.0 口徑 18.8	赤褐色	玉座状口縁 内側に凹面をなす	全面に垂れの施設	SD-78
	191	瓦器器皿	高高 9.0 口徑 18.8	赤褐色	玉座状口縁 体部器皿壁は薄い	体部下半は無胎	SD-78
	192	瓦器器皿	高高 1.3 口徑 16.4 厚さ 1.4	赤褐色 黒褐色	高台高いもの 体部は内側して伸びる	削り出し西台 堆付西台内は無胎	SD-78
	193	土 壽	高高 1.6 口徑 1.6 厚さ 0.4	赤褐色 黒褐色	熱鍊器	中央をはずれて0.4cmの縫孔	SD-78
	194	石不耐品	高高 11.6 口徑 11.6 厚さ 5.0	灰白色	石美安山岩		SD-78
	195	瓶 石	高高 11.6 口徑 11.6 厚さ 5.0	淡黄色		5面に使用板	SD-78
	196	便器器皿	高高 4.7 口徑 8.8 厚さ 0.4	赤褐色	深みのある丸底から内側する体部、受部は水平方向に伸び、内側する縁部は上方へ押される	外面 瓶部/口辺に回転ヘラケツリ 口縁、受部とも口もナデ 内面 ナデ	SD-78

## 遺物観察表

試験番号	遺物名	器種	高さ(cm)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名
77	197 銀器類	高さ 2.0 II-2 口径 11.1	透明白色	透明白色	中央部上方へ伸びる受部 わざかに内側する口縁部	外面 受部、口縁部に凹凸ナデ 内面 ナデ	SD-79
93	198 瓦器類 (大和) II-B-C	高さ 3.8 口径 13.0	透明白色	透明白色	形骸化した高台から外上方へ開き、口縁部で外反する 沈縫は端部上位に通る	外面 脱け付け高台 ナデ 指揮され 分離性のヘラミガキ ココナデ 内面 隅縫の開いた箇所ミガキ 見込みに輪状のヘラミガキ	ST-66
92	199 瓦器類 (大和) III-A	高さ 4.0 口径 13.3	透明白色	透明白色	断面逆三角形の高台より底部は低い 体部は外上方へ 開き屈曲し、口縁部は外反する 沈縫は端部上位を通る	外面 脱け付け高台 放射状指揮さえ ヨコナデ 内面 隅縫の開いた箇所ミガキ 見込みに輪状のヘラミガキ	ST-67
200 瓦器類 (大和) III-B	高さ 4.5 口径 14.8	透明白色	透明白色	断面逆三角形の高台から外上方へ開く体部は直進し外反する 口縁部に厚みをもち沈縫は上向きに通る	外面 脱け付け高台 ナデ 指揮さえ 縫いヘラミガキ 内面 脱け付け高台 ナデ 指揮さえ 縫いヘラミガキ	ST-68	
93	201 瓦器類 (大和) III-C	高さ 4.2 口径 13.0	透明白色	透明白色	形骸化した高台から外上方に伸び、縁部は廣く外反す る 沈縫は上方に位置する	外面 脱け付け高台 ナデ 指揮され 頭部のあらわいヘラミガキ 内面 隅縫の開いた箇所ミガキ 見込みに輪状のヘラミガキが一部	ST-69
92	202 瓦器類 (人骨) III-B	高さ 4.0 口径 9.5	透明白色	透明白色	断面逆三角形の低い高台 内湾する体部から口縁部は 外反し沈縫は上位を通る やや扁平な器形	外面 脱け付け高台 ナデ 指揮さえ わざかにヘラミガキ 内面 尖底部の開いた箇所ミガキ 見込みに輪状のヘラミガキが複数に重なる	ST-70
93	203 瓦器類 (大和) III-A	高さ 4.7 口径 12.8	透明白色	透明白色	内湾して伸びる体部と外反する口縁部をもつ 沈縫は上向きに位置する 高台の断面は尖った逆三角形	外面 脱け付け高台 ナデ ヘラミガキ 内面 隅縫の開いた箇所ミガキ 脱離状態のヘラミガキ	ST-71
204 瓦器類 (大和) III-C	高さ 4.3 口径 12.2	透明白色	透明白色	形骸化した高台と少し屈曲する口縁部をもつ 沈縫は上位に位置する	外面 体部に指揮さえ ヘラミガキは認められず 内面 隅縫の開いた箇所ミガキ 簡略な連続輪状のヘラミガキ	ST-72	
93	205 瓦器類 (大和) I-C-D 直径 6.1	高さ 3.0 口径 6.1	透明白色	透明白色	安定し高さのある高台から内湾して体部は伸びる 沈縫は上向きに位置する	外面 脱けつけ高台 ナデ 断面内湾、体部に分離性のヘラミガキ 内面 脱けつけ高台 ナデ リグザグ状のヘラミガキ	ST-73
92	206 瓦器類 (大和) III-A	高さ 4.5 口径 12.6	透明白色	透明白色	高さはないが丁寧なつくりの高台から内湾して体部は 伸びる 口縁端部は外反する 沈縫は上向き	外面 脱け付け高台 縫いヘラミガキ 指揮さえ 内面 隅縫の開いた箇所ミガキ 簡単な輪状のヘラミガキ	ST-74
78	207 瓦器類 (人骨) III-A-B	高さ 4.3 口径 12.3	透明白色	透明白色	均質な厚みで底部から口縁部へ統く 沈縫は上位に位置する 器形円形にいびつ	外面 脱け付け高台 口縁部に不規則なヘラミガキ 内面 隅縫の開いた箇所ミガキ 通脱輪状のヘラミガキ	ST-75
208 瓦器類 (?)	高さ 4.7 口径 14.2	透明白色 透明白色	透明白色	高台から口縁部へ厚みを増す 沈縫は上向き	外面 高は脱けつけ ナデ 体部に指揮さえ ヘラミガキが底をへ 内面 やや圓な輪縫ミガキ 簡單な輪状のヘラミガキ	ST-76	
93	209 瓦器類 (大和) III-A	高さ 4.1 口径 14.4	透明白色	透明白色	浅い器形で口縁部で立ち上がり端部では外反する 沈 縫は上位に位置する	外面 脱離した脱けつけ高台 ナデ 体部に指揮さえ ヘラミガキ 内面 隅縫の開いた箇所ミガキ 簡單な輪状のヘラミガキ	ST-77
210 瓦器類 II	高さ 1.6 口径 8.2	透明白色	透明白色	器壁は薄い 口縁部は短く外反する	外面 底部に指揮さえ 口縁部はヨコナデ 内面 見込みにジグザグのヘラミガキは幅が細い	ST-78	
92	211 瓦器類 II	高さ 2.0 口径 9.0	透明白色	透明白色	深さのある底部からやや立ち上がり口縁部は外 反し、その縁部は丸い	外面 断面に指揮さえ 口縁部はヨコナデ 内面 見込みに0.1cm幅のジグザグのヘラミガキ	ST-79
	212 土器類 II	高さ 1.9 口径 8.0	透明白色	透明白色	半楕の底部からやるやかに外上方へ開く	器形とともに口縁部はヨコナデ	ST-80
	213 土器類 II	高さ 2.4 口径 8.8	透明白色	透明白色	中央の高い直底から傾斜し肩部は外上方へ開き底部は丸い	器形とともに口縁部はヨコナデ 斜曲部に指揮さえ	ST-81
	214 土器類 II	高さ 2.1 口径 9.6	透明白色	透明白色	半楕な底から角度をもって短く	器形とも口縁部はヨコナデ	ST-82
	215 土器類 算付罐	高さ 5.0 口径 22.3	透明白色	透明白色	口縁部に受口状の段を持つ	口縁部はヨコナデ 縫部外側はナデ つまみあげ 内面 ヨコナデ	ST-83
94	216 白磁豆皿 I	高さ 4.6 口径 4.0	明透灰色	透明白色	中央部がやや高い底盤から外上方へ開く体部をもつ 縁部は水平に伸びる 線が青	外面 施付は無地 貫入 内面 見込みと体部の間で段をなし体部は能の跡で分離	ST-84
93	217 瓦器足皿 II	高さ 15.5 口径 20.4 高さ 28.5	透明白色 透明白色	透明白色	体部から内湾し口縁部へ統く 口縁端部は内側する端 縫をもつ 縫は無く水平に伸びる 線が青	外面 縫、脚ともに脱けつけ 指揮さえ ナデ 口縁部横ナデ 内面 脱離方向の板ナデ	ST-85

遺物観察表

回数	品名	器種	目録(a)	色調	形態・特徴	調整・手法	連携名
83 78	218 瓦器足盤	高台	15.2 口径 21.6 脚径 26.7	赤褐色 内側黄褐色 脚部白色	体部から内側し口縁部へと続く 口縁端部は内傾する 難面をもつ 脚は短く水平に伸びる 底部に窪	外側 脚部とも貼りつけ 指押さえ ナデ 口縁部はヨコナデ 内側 わざかに横方向のナデの痕	ST-02
84	219 不用品	高台	5.6 内側△側面 脚部 脚部	赤褐色 内側△側面 脚部	底尖の突堤に穿孔あり 一部黒斑	外側 丁寧なナデ 内側 不調整	日替
	220 土師器蓋	高台	8.6 口径 25.1 大和 B : 脚径 28.4	赤褐色 内側灰白色 脚部白色	体部から屈曲し口縁部は外上方へ開く 口縁部は内側に少し折り返す 脚は上位で水平に伸びる	外側 脚部に貼りつけ 指押さえ ナデ 口縁部はヨコナデ 内側 不調整だがナデ	日替
	221 土師器片	高台	12.6 口径 25.0	赤褐色 脚部	口縁部は受口状に段をなし、底部は水平な面をもつ 脚部着	外側 口縁部ヨコナデ 体部は底張のナデの痕 内側 横方向の板ナデ	日替
86 79	222 土師器片	高台	15.7 口径 22.2	赤褐色 内側灰白色 脚部	口縁部は受口状に段をなし、底部は水平で面をもつ 底部に側面着	外側 口縁部ヨコナデ 脚部は貼りつけ 指押さえ ナデ 内側 横方向へ板ナデの痕	日替
	223 信意器蓋	高台	7.1 口径 34.4	赤褐色 内側灰白色 脚部	口縁部は直面に立ち上がり大きく外反して端部は垂下する	外側 脚部に指ナデ 傷～背部にタタキ日 内側 ナデ	日替
87	224 信意器蓋	高台	25.0 口径 32.4 脚径 33.5	赤褐色 灰白色 ～灰白色	口縁部から側面にかけていづつ 張りのある裏面から直立する口縁部 口縁部は外側で底張の痕	外側 体側部は範囲方向のタタキにキメ 口縁部に6条の波状文 内側 体側部ナデ すりけし 口縁部はつまみあげナデ	日替
88	225 信意器口縁	高台	2.0 東 滅 手径 2.0	赤褐色 灰白色 内側灰白色	底部中央付近に 0.6～0.7cm の穿孔 底部から外上方へ伸びる体部をもつ	外側 底部に系切り痕 体部は回転ナデ 内側 傷が全面に付着	日替
	226 信 意 器	高台	4.8 無蓋 手径 12.8	赤褐色 灰白色	厚みのある杯底部からやわらかく外方に伸び口縁部 部は上方へ直行し薄い 脚部形状不明	外側 橫方向の縞線3本の間に斜め(左下→右上)のヘラ擦き 内側 回転ナデ	日替
89	227 信 意 器	高台	5.2 蓋部 手径 19.0	赤褐色 灰白色	透「ハ」の字に幾く算盤から脇部は外反する 橫方向の縞線1本 で区分され、底纹文 透かし文は内側にもの隠れをおく	外側 划けけ 划り出し基準 織文(5&1/直角) 透かし文は外へ 内側 回転ナデ	日替
	228 信意不用品	高台	7.5 手径 11.7	赤褐色 内側灰白色	均質な等みでは底直立する	外側 丁寧なナデ 内側 範囲方向にナデの痕	日替
90	229 瓦 器 蓋	高台	6.1 口径 22.6	赤褐色 粉灰白色	体部はほぼ直面に伸び口縁部は受口状を示す 脚部は水平に近い底面をもつ	外側 口縁部ヨコナデ 内側 ナデ	日替
	230 白 瓦 器	高台	1.8 V 瓦	赤褐色 灰白色	高台は患者	外側 高台には無地 内側 印目で模文	日替
91	231 白 瓦 器	高台	1.7 V 瓦	赤褐色 灰白色	底部中央がひざかに高く体部は丸みをもって外上方へ開く 部は外上方に伸びる	外側 底部は無地 体部羽輪ヘラケメリ 内側 見込みに段を融資ヘラ筋で模文	日替
	232 白 瓦 器	高台	2.3 V - 1 瓦	赤褐色 灰白色	低い高台で體壁は厚い 部は外上方に伸びる	外側 透けり出し高台 底部は無地 内側 全体に施地	日替
92	233 白 瓦 器	高台	2.2 V - 1 瓦	赤褐色 灰白色	低い高台で體壁は厚い 部は外上方に伸びる	外側 划り出し高台 1部分高台まで體が垂下する 内側 全面施地	日替
	234 白 瓦 器	高台	2.0 V - 1 瓦	赤褐色 灰白色	低い高台 脚部は厚い 部は外上方に伸びる	外側 划り出し高台は無地 内側 全面施地	日替
93	235 白 瓦 器	高台	3.1 脚部	赤褐色 内側灰白色 脚部	体部は外上方へまっすぐ伸び口縁部でわざかに外反する	外側 全面施地 内側 口壳	日替
	236 有 瓦 瓶	高台	1.5 1-4-1 瓶	赤褐色 内側灰白色 脚部	底部等みをもつ	外側 划り出し高台 高台内は無地 内側 見込みに片割りのコノコ状文	日替
94	237 有 瓦 瓶	高台	2.6 1-5-1 瓶	赤褐色 灰白色 脚部	広い見込みからやかに体部は開く 裏面とも貢入が美しい	外側 划り出し高台 体部に墨井の文織 内側 1条の片割り状文	日替

遺物観察表

品名	規格	部種	出量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
95	80	238	鐵石	■ 30.0 ■ 6.5	淡黄色 因面に使用痕		日暦
		239	鐵石	■ 3.0 ■ 0.1	灰色 一面にのみ使用痕		日暦

木製品観察表

試験No.	井深No.	遺物No.	器種	遺物名	遺物内での使われ方	法量(cm)	特徴
97	82	1	曲物	SR-01	木面	32.6(高) 49.2(径)	1重の側板に4枚のマワシ 縫の細い縫じ皮 内面に縦の平行な割み目
		2	折敷	SE-01		36.1 11.3 0.8(厚)	約1/3が出土 株を止めていた縫じ皮が残る
		3	不明木製品	SE-02		14.9(高)	14.9(径)
		4	曲物	SE-03	木面	22.8(高) 42.0(径)	1重の側板に合わせて逆の2枚のマワシ 下辺に木釘穴 縫じ皮残存
		5	角材	SE-03	井戸側の横枝	84.1 4.2 3.5(厚)	両端に切り込み
		6	角材	SE-03	井戸側の隅柱	58.6 7.5 5.6(厚)	下端は手斧で削り取り、上端には方形の 柄穴
98	83	7	杭	SR-08		70.0	13.0(径)
		8	横櫛	SE-06		4.2 6.6 1.1(厚)	断面逆二等辺三角形 齒の間隔は密 接き櫛
		9	曲物	SE-07	木面	24.0(高)	42.0(径)
		10	曲物	SE-07	木面	25.3(高) 39.2(径)	複雑な組み合わせ 上段の側板は斜めと 縦下段の側板は縦の割み目 9・11と組 み合はさって検出 最上段
		11	曲物	SE-07	木面	9.8(高) 36.0(径)	1重の側板に1枚のマワシ 「×」印 内面に縦の割み目 9・10と組み合はさっ て検出 下段
		12	曲物	SE-08	木面	21.0(高) 41.0(径)	1重の側板のみ 内面に斜め縦の割み目 木釘穴が5ヶ所 13~15と組み合はさっ て検出 最上段
99	84	13	曲物	SE-08	木面	24.8(高) 41.6(径)	1重の側板と1枚のマワシ 内面は斜め と縦の割み目 木釘穴が20ヶ所 12・ 14・15と組み合はさり出土 2段目
		14	曲物	SE-08	木面	17.9(高) 39.6(径)	1重の側板のみ 内面に斜め格子の割み 目と縦の割み目 縫じ皮残存 12・13・ 15と組み合はさって出土 3段目
		15	曲物	SE-08	木面	18.9(高) 33.2(径)	1重の側板のみ 内面に縦の割み目 幅の広い縫じ皮 12~14と組み合はさっ て最下段
		16	不明木製品	SR-11		119.8 2.5~4.0(径)	弓状 加工痕は認められない
83		17	不明木製品	包含層		19.4(長) 3.5(幅) 1.7(厚)	刃の柄の部分を模したもの 先端を細く 加工

## R区

## 遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模(cm)	點(s)	平面形	時代	遺物		参考	
							辨認	開版		
SD-01	6~10	第1	1.5×41.8	45	直線	近世	7・8	1・2	68	水路・統列・石列 Q区に接ぐ SD-03
02	1~2	第1	—×17.5	45	直線	近世	—	2	—	水路
	5	第1	—×7.5	13	直線	近世	—	—	—	水路
03	4~9	第1	1.7×11.3	36	直線	近世	9	1	—	水路 L・O区に接ぐ SD-01に合流
04	1~9	第2	3.2×47.2	100	直線	中世?	11	3~4+9	68	Q区に接ぐ
05	3~4	第4	0.3×9.6	3	蛇行	発生以前	—	—	—	自然流路 舌状に終わる
06	2~7~8	第4	0.4×21.0	5	蛇行	発生以前	—	—	—	自然流路 舌状に終わる
07	2	第4	0.6×6.6	8	蛇行	発生以前	—	—	—	自然流路 舌状に終わる
08	1~6	第4	0.5×13.2	5	蛇行	発生以前	—	8	—	自然流路 舌状に終わる
09	1~6	第4	0.4×12.2	9	蛇行	発生以前	—	8	—	自然流路 舌状に終わる
10	6	第4	0.4×3.4	5	蛇行	発生以前	—	8	—	自然流路 舌状に終わる
SK-01	9	第3	0.7×1.2	36	瘤円形	古墳?	13	6	—	—
02	4	第3	1.8×2.0	19	不定形	古墳?	14	6	—	—
03	4	第3	0.6×0.6	11	円周	古墳?	14	6	—	—
04	6	第3	0.4×0.8	10	(半円形)	古墳?	15	—	—	花崗岩あり
05	6	第3	0.4×0.6	26	(円形)	古墳?	15	—	—	—
SR-01	1~7~10	第3	1.7~41.0	37	蛇行	古墳?	16	6	—	越野に伴う水路?
02	1~6~8	第3	1.5~24.7	17	蛇行	古墳?	17	6~7+9	—	越野に伴う水路?
03	9~10	第3	1.4~7.6	12	曲線	古墳?	16	6	—	越野に伴う水路? SR-01に切られる
04	6	第3	0.9~6.2	30	蛇行	古墳?	15	—	—	SR-05に切られる
05	4~5	第3	0.6~6.0	30	曲線	古墳?	18	—	—	舌状に終わる

## S区

## 遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (a)	深さ (a)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							神図	図版	神図	図版	
SD-11	1~4	第1	1.7~37.7	54	直線	近世	21	11・12	70	68~72	木路 犀利・石刃 U区に続く SD-12・13・14を分岐
12	4~6	第1	1.5~14.5	14	直線	近世	—	11	—	—	木路 SD-11に合流
13	3・4	第1	1.1~7.3	17	直線	近世	—	11・12	—	—	木路 SD-11に合流
14	1	第1	1.0~6.5	22	直線	近世	22	11	—	—	木路 SD-11に合流
15	6~7	第2	0.6~11.5	14	曲線	日本~桂野	24~25	15~17	70	72~73	SE-01に切られる
16	7	第2	0.3~2.0	20	直線	中世	24	15	—	—	SD-15に切られる
17	5	第2	0.4~2.6	5	曲線	中世	26	—	—	—	舌状に終わる
18	2~3	第3(下)	0.9~12.4	21	直線?	古墳前	41	26	—	—	
	9	第3(下)	0.6~4.2	10	直線?	古墳前	40	26	—	—	
19	8	第3(下)	0.3~6.1	19	直線?	古墳前	42	26	—	—	SR-09に切られる T区に続く
20	5	第3(下)	1.0~13.4	23	蛇行	古墳前	43	—	—	—	
21	2	第3(下)	0.8~2.2	24	直線	古墳前	41	—	—	—	
SE-01	8	第2	2.7~3.1	88	隅丸方形	12初	27	16	69~82	66~67~97	木造曲物御板 井戸側板材 SD-16を切る
02	6	第2	2.7~3.0	56	隅丸方形	12初	28	16	69~82	67~97	井戸抜き取り跡?
03	5~6	第2	2.2~2.5	99	不整円形	12初?	29	16~17	69~82	68~97	木造曲物御板 井戸側板材
SK-06	2	第2	2.0~3.3	47	長円形	中世?	30	17	—	—	素掘り 建物無し
07	6	第2	0.5~0.6	13	橢円形	中世?	—	—	—	—	
08	3	第3(下)	0.7~2.0	9	(不定形)	弥生中	44	—	71	66	愛口縁
09	4	第3(下)	0.5~0.6	28	橢円形	古墳前	45	—	—	—	高杯
10	6	第3(下)	1.6~1.8	32	隅丸方形	古墳以前	43~46	26	—	—	SR-09と重複 SR-09を切る
SR-06	1~2	第3(下)	4.0~10.7	69	直線	古墳前	47	22~24	71	74~75~78	SR-06を切る
08	1	第3(下)	6.0~7.6	52	蛇行?	古墳前	47	24	72~82	76~97	SR-06に切られる
09	6	第3(下)	4.4~10.2	46	蛇行?	古墳以前	43	26	—	—	
	7~8	第3(下)	7.0~2.6	45	蛇行?	古墳以前	—	—	—	—	SD-19を切る
10	6	第4	3.2~9.2	64	蛇行?	古墳以前	—	28	—	—	
	7~8	第4	3.0~4.0	12	蛇行?	古墳以前	—	28	—	—	
SN-01	5	第3	1.9~6.6 (高)17	曲線	古墳後	34~35	19~21	72	77	木口有り 須恵器杯蓋	
02	5~6	第3	1.2~8.0 (高)22	曲線	古墳後	35~37	19~21	72	77	木口有り 須恵器杯身	
ST-01	5~6	第3	3.6~13.2	16	(半円)	古墳後	33	—	—	—	

S图

### 遺稿一覽表

T区

### 道標一覽表

## 遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模(cx)	屋主(a)	平面形	時代	遺構		遺物		参考
							埠頭	民版	埠頭	民版	
SD-11	1~9	第1	2.0~78.0	16	直線	近世	51	38~49	73	81~87	SD-23・34を派生する
22	2~7 10~11	第1	1.1~68.6	14	直線	近世	51	38	73	81~87	水路 竹判・石判
23	3	第1	2.6~4.2	—	直線	近世	51	38	—	—	水路 竹判・石判 SD-11に合流
24	3	第1	0.8~4.3	16	直線	近世	—	—	73	81	水路 SD-11に合流
25	13~14	第1	1.2~3.7	27	直線	近世	—	38	—	—	水路 竹判
26	14	第1	2.6~4.4	14	直線	近世	—	—	—	—	水路
27	3~6 11~15	第1	0.6~44.8	13	直線	近世	—	—	—	—	水路 竹判 SD-22に合流?
28	12	第1	0.8~7.0	16	直線	近世	—	—	—	—	跡構
29	12	第1	0.4~2.6	3	直線	近世	—	—	—	—	跡構 舌状に終わる
30	13	第1	0.4~4.1	14	直線	近世	—	—	—	—	跡構
31	1~3	第1	0.4~23.6	22	直線	近世	—	—	—	—	跡構
32	14	第1	0.4~4.6	15	直線	近世	—	—	—	—	跡構
33	4~5	第1	0.8~14.7	16	直線	近世	—	—	—	—	跡構 SD-11に合流
58	7	第1	1.3~7.4	16	直線	近世	—	49	—	—	本路 SD-11・22に合流
59	8	第1	0.3~5.0	14	直線	近世	—	49	—	—	筋状遺構
60	8	第1	0.7~5.0	20	直線	近世	—	49	73	81	筋状遺構
61	8	第1	0.6~6.2	18	直線	近世	—	49	—	—	筋状遺構
62	6	第1	0.3~11.4	6	直線	近世	—	—	—	—	跡構 舌状に終わる
63	6	第1	0.2~5.1	14	直線	近世	—	—	—	—	筋状遺構
64	6	第1	0.2~4.1	10	直線	近世	—	—	—	—	筋状遺構
65	6	第1	0.1~5.4	12	直線	近世	—	49	—	—	筋状遺構 SD-62に切られる
66	6	第1	0.1~5.5	6	直線	近世	—	49	—	—	筋状遺構 SD-62に切られる
67	7	第1	0.1~4.0	12	直線	近世	—	—	—	—	筋状遺構 否状に終わる
68	7	第1	0.1~4.6	14	直線	近世	—	—	—	—	筋状遺構 SD-70に切られる
69	7	第1	0.2~4.6	12	直線	近世	—	—	—	—	筋状遺構 SD-70に切られる
70	7~8	第1	0.5~4.7	10	直線	近世	—	—	—	—	跡構 NTB-60に切られる SD-68・69に 切られ サ事に分かれ舌状に終わる
71	18	第1	0.5~4.6	12	直線	近世	—	—	—	—	本路
34	1	第2	0.8~6.6	4	直線	中世~近世	—	—	—	—	筋状遺構 2条に分岐、舌状に終わる
35	1~3	第2	0.6~22.4	10	直線	中世~近世	52	—	—	—	筋状遺構 中世で2条に分岐 SD-42に合流する
36	1~3	第2	1.0~22.4	10	直線	中世~近世	—	—	—	—	筋状遺構 SD-42に合流する
37	1~3	第2	1.0~22.7	14	直線	中世~近世	—	—	—	—	筋状遺構 SD-43に合流
38	4~13	第2	1.7~33.6	6	直線	中世~近世	—	—	73	80	跡構 舌状に終わる
39	2	第2	1.4~4.3	8	直線	中世~近世	—	—	—	—	筋状遺構 SD-35に切られる
40	3	第2	1.4~4.0	5	直線	中世~近世	52	—	—	—	筋状遺構 SD-35に切られる
41	3	第2	1.3~4.0	8	直線	中世~近世	52	—	—	—	筋状遺構 SD-35に切られる
42	3	第2	1.3~5.7	5	直線	中世~近世	52	—	—	—	筋状遺構 SD-43に合流する
43	3	第2	5.7~7.1	10	直線	中世~近世	52	—	—	—	筋状遺構 SD-37に合流する
44	12~14	第2	1.2~25.5	4	直線	中世~近世	—	—	—	—	跡構
45	4	第2	0.9~4.2	5	直線	中世~近世	—	—	—	—	筋状遺構 舌状に終わる
46	4	第2	1.1~4.5	14	直線	中世~近世	—	—	—	—	筋状遺構 古舌に終わる

## U区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模(cm)	點(a)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							跡図	図版	跡図	図版	
SD-47	4	第2	0.8×4.4	3	直線	中世～近世	—	—	—	—	歯状遺構 舌状に終わる
48	14	第2	1.7×6.6	6	直線	中世～近世	—	—	—	—	鐵柵
49	13	第2	1.0×6.7	10	直線	中世～近世	—	—	—	—	鐵柵
50	12	第2	0.7×6.1	9	直線	中世～近世	—	—	—	—	鐵柵
51	12・13	第2	1.0×16.9	8	直線	中世～近世	—	—	—	—	鐵柵
52	4	第2	0.8×4.6	11	直線	中世～近世	—	—	—	—	歯状遺構
53	5	第2	0.5×5.2	11	直線	中世～近世	—	—	—	—	鐵柵
72	17	第2	0.2×6.4	4	直線	中世～近世	—	—	—	—	鐵柵
73	17	第2	0.2×4.2	6	直線	中世～近世	—	—	—	—	鐵柵
54	5	第2(下)	0.4×2.9	5	直線	中世	54	—	—	—	舌状に終わる
55	4	第2(下)	2.1×4.5	21	直線	中世	55	—	—	—	舌状に終わる
74	17・18	第2(下)	1.2×12.1	13	直線	中世	56	—	—	—	歯状遺構 舌状に終わる
75	17・18	第2(下)	1.2×10.5	8	直線	中世	56	—	—	—	歯状遺構
76	18	第2(下)	1.6×8.2	22	直線	中世	56	—	—	—	歯状遺構 舌状に終わる
77	18	第2(下)	1.5×3.8	20	直線	中世	56	—	—	—	歯状遺構
56	10	第3	1.2×7.4	14	直線	古墳後	63	48	—	—	SN-03に伴う水路
57	4・13	第3	0.5×11.6	16	直線	古墳後	64	44	—	—	SN-03に伴う水路
SE-04	14	第1	0.3×0.4	68	円形	近世	—	—	—	—	野井戸 底面に板材
06	4	第2(下)	0.2×0.8	52	(円形)	11	55・57	40	73・83	79・98	木造 曲物側板
06	4	第2(下)	1.9×2.6	65	不定形	中世?	58	—	73	84	煮割り 井戸の抜き取り跡
07	6	第2(下)	1.5×1.7	26	円形	中世	59	51	83	98	水槽 曲物側板3段
08	6	第2(下)	0.9×1.0	59	円形	11本～12本	60	52	73・84	79・80 98	木造 曲物側板4段
SK-11	5	第2(下)	1.0×2.5	69	長円形	中世?	61	40	—	—	
12	5	第2(F)	0.8×0.8	7	不整円形	中世?	54	—	—	—	
SR-11	1・2 11～13	第4	5.0×31.4	56	蛇行	発生以前	66	45・48	84	98	
12	13～15	第4	2.2×22.6	63	蛇行	発生以前	66	46・48	—	—	SR-16に合流する
13	4・5・13	第4	2.6×16.8	49	蛇行	発生以前	66	46・48	—	—	2条に分岐 SR-16が合流
14	9	第4	5.4×4.7	43	蛇行?	発生以前	66	57	—	—	
15	18	第4	1.6×5.4	37	直線?	発生以前	—	57	—	—	
16	5・6 14～18	第4	2.0×32.0	43	蛇行	発生以前	—	—	—	—	SR-12が合流しSR-13に合流
17	7～9	第4	1.0×21.0	12	蛇行	発生以前	—	—	—	—	
18	4・5 13	第4(下)	1.8×18.2	25	蛇行	発生以前	66	47・48	—	—	SR-19が合流する
19	5・14	第4(下)	1.6×9.8	59	蛇行	発生以前	—	47・48	—	—	SR-18に合流する
20	14	第4(下)	0.8×5.4	8	蛇行	発生以前	—	—	—	—	舌状に終わる
SN-03	10	第3	0.8×7.0	(高)15	直線	古墳後	63	45	—	—	SD-56を伴う
04	4・13	第3	1.5×17.0	(高)25	直線	古墳後	64	44	—	—	SD-57を伴う

118

遺稿一覽表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (cm)	形状 (m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							sondage	圖版	神社	國版	
SN-05	4・5 14・15 06 7・8 17	第3	0.9×22.7 1.2×23.4	(高)12 (高)19	曲線 直線	古墳後	—	—	—	—	SN-04に合流
							65	55	—	—	南北に行くほど細くなる
SI-01	17	第3	—	—	—	弥生後	65	55	74	82・83	SN-06と重複
SM-10	1・10	第3	3.4×7.9 (22.0)	(長方形)	古墳後	—	—	—	—	—	
11	10	第3	3.6×3.8 (7.5)	—	古墳後	—	—	—	—	—	
12	10	第3	1.4×4.0 (2.9)	—	古墳後	—	—	—	—	—	
13	10	第3	3.0×3.6 (方形)	10.7	古墳後	—	—	—	—	—	蛙群消失
14	10	第3	2.4×4.2 (長方形)	10.3	古墳後	—	—	—	—	—	蛤群消失
15	10・11	第3	4.5×8.0 (22.0)	—	古墳後	—	—	—	—	—	
16	1	第3	2.5×6.8 (14.3)	—	古墳後	—	—	—	—	—	蛙群消失
17	10・11	第3	2.9×6.4 (16.8)	—	古墳後	—	—	—	—	—	蛙群消失
18	11	第3	2.2×2.8 (4.9)	—	古墳後	—	—	—	—	—	蛙群消失
19	11	第3	1.2×7.3 (長方形)	(10.4)	古墳後	—	—	—	—	—	蛙群消失
20	4・5	第3	4.8×4.8 (14.9)	—	古墳後	—	—	—	—	—	
21	4・5 13・14	第3	3.3×9.3 (20.3)	不定形	古墳後	—	—	—	—	—	
22	13・14	第3	5.7×8.4 (46.0)	(長方形)	古墳後	—	—	—	—	—	
23	5・6	第3	3.2×4.2 (6.5)	—	古墳後	—	—	—	—	—	
24	5	第3	2.6×5.6 (13.7)	長方形	古墳後	—	—	—	—	—	
25	5	第3	2.1×5.0 (10.1)	長方形	古墳後	—	—	—	—	—	
26	14	第3	3.1×4.1 (12.9)	長方形	古墳後	—	—	—	—	—	
27	14	第3	4.3×5.8 (10.9)	—	古墳後	—	—	—	—	—	
28	14・15	第3	3.1×4.7 (9.4)	(長方形)	古墳後	—	—	—	—	—	
29	5・6	第3	2.6×4.9 (10.5)	不定形	古墳後	—	—	—	—	—	

## 遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							sondage	図版	sondage	図版	
SM-30	5・6 14・15	第3	4.0× 5.6	22.4 36.0	長方形	古墳後	—	—	—	—	
31	15	第3	4.2× 5.1	(20.1)	方形	古墳後	—	—	—	—	
32	6	第3	3.7× 8.1	(21.6)	—	古墳後	—	—	—	—	
33	6・15	第3	4.3× 4.9	19.7	方形	古墳後	—	—	—	—	
34	6・7	第3	4.5× 6.1	25.1	平行四辺形	古墳後	—	—	—	—	
35	6 15・16	第3	4.8× 6.3	29.0	長方形	古墳後	—	—	—	—	
36	15	第3	2.5× 3.2	(3.7)	—	古墳後	—	—	—	—	
37	6・7	第3	5.7× 7.5	(32.6)	(長方形)	古墳後	—	—	—	—	水口有り
38	7・16	第3	4.7× 7.1	31.1	長方形	古墳後	—	—	—	—	
39	15・16	第3	5.6× 6.8	(35.7)	長方形	古墳後	—	—	—	—	
40	7	第3	1.8× 2.6	(2.7)	—	古墳後	—	—	—	—	水口有り
41	7	第3	3.7× 4.2	15.9	方形	古墳後	—	—	—	—	水口2箇所有り
42	16・17	第3	3.8× 5.6	19.9	長方形	古墳後	—	—	—	—	水口有り
43	16	第3	4.3× 5.0	(12.8)	—	古墳後	—	—	—	—	
44	7・8	第3	3.9× 5.8	(21.3)	(長方形)	古墳後	—	—	—	—	水口2箇所有り
45	7・8 16・17	第3	3.9× 5.3	20.3	長方形	古墳後	—	—	—	—	水口有り
46	16・17	第3	3.1× 4.0	(6.6)	—	古墳後	—	—	—	—	水口有り
47	8	第3	1.4× 1.8	(1.4)	—	古墳後	—	—	—	—	水口有り
48	8	第3	3.7× 5.4	(20.1)	方形	古墳後	—	—	—	—	水口3箇所有り
49	17	第3	3.9× 5.8	21.5	長方形	古墳後	—	—	—	—	水口2箇所有り
50	17	第3	1.3× 2.8	(2.6)	—	古墳後	—	—	—	—	水口有り
51	8	第3	4.2× 5.0	(17.7)	(方形)	古墳後	—	—	—	—	水口3箇所有り
52	8・17	第3	4.8× 5.1	23.3	長方形	古墳後	—	—	—	—	水口有り 畦畔1部消失
53	17・18	第3	4.8× 5.1	22.0	—	古墳後	—	—	—	—	畦畔消失
54	8・9	第3	2.2× 2.8	(3.0)	—	古墳後	—	—	—	—	水口有り 畦畔1部消失
55	8・9	第3	4.5× 6.8	28.4	長方形	古墳後	—	—	—	—	水口有り 畦畔消失
56	8	第3	3.4× 6.0	22.0	—	古墳後	—	—	—	—	畦畔消失
57	9	第3	4.1× 6.2	(34.7)	長方形	古墳後	—	—	—	—	水口有り
58	9・18	第3	2.9× 4.2	(12.2)	—	古墳後	—	—	—	—	畦畔消失
59	9	第3	2.7× 5.6	(9.1)	—	古墳後	—	—	—	—	
60	9	第3	0.3× 0.5	(0.1)	—	古墳後	—	—	—	—	

区

### 遺構一覽表

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模(cm)	棟数(n)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							美図	図版	辨図	図版	
SP-01	R-2	第3	48×48	7	(隅丸方形)	古墳?	—	—	—	—	
2	R-1	第3	37×45	10	楕円形	古墳?	—	—	—	—	
03	R-5	第3	22×46	8	長円形	古墳?	18	—	—	—	
04	R-5	第3	32×43	18	不規形	古墳?	18	—	—	—	
05	R-4	第3	42×45	8	椭円形	古墳?	14	6	—	—	
06	R-4	第3	50×55	6	隅丸方形	古墳?	14	6	—	—	
07	R-8	第3	19×27	8	椭円形	古墳?	—	—	—	—	
08	R-7	第3	22×27	5	椭円形	古墳?	—	—	—	—	
09	R-7	第3	25×31	8	椭円形	古墳?	17	—	—	—	
10	R-4	第3	27×68	26	長円形	古墳?	—	—	—	—	
11	S-5	第2	30×30	8	円形	中世	—	—	—	—	
12	S-5	第2	14×36	6	(円形)	中世	31	—	—	—	SP-13に切られる
13	S-5	第2	28×30	11	円形	中世	31	—	—	—	SP-12を切る
14	S-5	第2	40×43	18	円形	中世	—	—	—	—	
15	S-5	第2	38×42	27	不整円	中世	—	—	—	—	
16	S-5	第2	29×36	22	円形	中世	—	—	—	—	
17	S-5	第2	34×50	27	手門	中世	—	—	—	—	側溝に切られる
18	S-5	第2	28×42	34	(円形)	中世	—	—	—	—	側溝に切られる
19	S-5	第2	18×24	21	円形	中世	—	—	—	—	
20	S-5	第2	23×27	6	円形	中世	—	—	—	—	
21	S-5	第3	25×29	12	円形	中世	—	—	—	—	
22	S-5	第2	22×34	11	円形	中世	—	—	—	—	
23	S-5	第2	23×29	11	円形	中世	—	—	—	—	
24	S-6	第2	25×28	29	円形	中世	—	—	—	—	
25	S-6	第2	42×48	53	椭円形	中世	—	—	—	—	
26	S-6	第2	30×33	33	椭円形	中世	—	—	—	—	
27	S-6	第2	33×40	29	椭円形	中世	—	—	—	—	
28	S-6	第2	25×32	29	椭円形	中世	24	—	—	—	
29	S-6	第2	18×18	16	円形	中世	24	—	—	—	
30	S-6	第2	29×38	20	椭円形	中世	24	—	—	—	
31	S-6	第2	14×19	5	椭円形	中世	24	—	—	—	SD-15を切る
32	S-6	第2	20×20	4	円形	中世	24	—	—	—	
33	S-6	第2	21×23	10	円形	中世	24	—	—	—	
34	S-6	第2	27×31	23	円形	中世	24	—	—	—	
35	S-6	第2	30×31	14	円形	中世	24	—	—	—	
36	S-6	第2	24×26	—	円形	中世	24	—	—	—	
37	S-6	第2	22×24	7	円形	中世	24	—	—	—	
38	S-6	第2	26×26	5	円形	中世	24	—	—	—	
39	S-6	第2	27×27	10	円形	中世	24	—	—	—	SD-15に含まれる
40	S-7	第2	31×33	36	円形	中世	24	—	—	—	

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模(cm)	高さ(a)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							埠頭	國版	埠頭	國版	
SP-41	S-7	第2	43×46	17	円形	中世	24	—	—	—	SD-15に含まれる
42	S-7	第2	30×31	47	円形	中世	24	—	—	—	
43	S-7	第2	15×18	6	円形	中世	24・31	—	—	—	
44	S-5	第2	25×26	11	円形	中世	24	—	—	—	
45	S-5	第2	12×18	9	円形	中世	—	—	—	—	
46	S-5	第2	35×36	20	円形	中世	—	—	—	—	
47	S-5-6	第2	28×30	15	円形	中世	—	—	—	—	SP-48に切られる
48	S-6	第2	23×25	22	円形	中世	—	—	—	—	SP-47を切る
49	S-6	第2	25×28	16	円形	中世	—	—	—	—	
50	S-6	第2	29×30	24	円形	中世	—	—	—	—	
51	S-6	第2	25×26	18	椭円形	中世	—	—	—	—	
52	S-6	第2	26×26	22	円形	中世	—	—	—	—	
53	S-5	第2	25×28	12	円形	中世	31	17	72	77	
54	S-5	第2	23×24	22	(円形)	中世	31	—	—	—	SP-55を切る
55	S-5	第2	30×47	23	椭円形	中世	31	—	—	—	SP-54に切られる
56	S-5	第2	25×28	21	円形	中世	—	—	—	—	
57	S-5	第2	21×22	8	円形	中世	—	—	—	—	
58	S-5	第2	18×26	13	(円形)	中世	—	—	—	—	SP-59に切られる
59	S-5	第2	24×26	25	円形	中世	—	—	—	—	
60	S-5	第2	21×21	6	円形	中世	26	—	—	—	
61	S-5	第3(下)	23×24	11	円形	中世	—	—	—	—	
62	S-6	第3(下)	29×29	10	円形	中世	—	—	—	—	
63	S-6	第3(下)	22×23	13	円形	中世	—	—	—	—	
64	S-5	第3(下)	39×42	12	椭円形	中世	—	—	—	—	
65	S-5	第3(下)	12×27	17	円形	中世	—	—	—	—	
66	S-6	第3(下)	38×39	7	椭円形	中世	—	—	—	—	
67	S-3	第3(下)	37×38	7	椭円形	古墳前	—	26	—	—	
68	S-3	第3(下)	21×26	11	円形	古墳前	41	36	—	—	
69	S-3	第3(下)	17×23	15	円形	古墳前	41	26	—	—	
70	S-3	第3(下)	28×28	10	円形	古墳前	41	26	—	—	
71	S-3	第3(下)	28×32	18	円形	古墳前	41	26	—	—	
72	S-3	第3(下)	27×32	20	円形	古墳前	41	36	—	—	
73	S-3	第3(下)	52×55	26	円形	古墳前	41	26	—	—	
74	S-3	第3(下)	13×15	5	円形	古墳前	41	26	—	—	
75	S-3	第3(下)	19×19	8	円形	古墳前	41	26	—	—	
76	S-3	第3(下)	19×21	19	円形	古墳前	41	26	—	—	
77	S-3	第3(下)	18×23	28	円形	古墳前	41	26	—	—	
78	S-2	第3(下)	18×28	13	円形	古墳前	41	26	—	—	
79	S-2	第3(下)	18×22	13	円形	古墳前	41	36	—	—	
80	S-2	第3(下)	20×22	13	円形	古墳前	41	26	—	—	

遺稿一覽表

## 報告書抄録

ふりがな	きたしんまちいせきだいよんじはっくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	北新町遺跡第4次発掘調査概要報告書							
副書名	府営大東北新町住宅建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	黒田淳							
編集機関	大東市北新町遺跡調査会							
所在地	〒574 大阪府大東市新町13番30号 ☎0720-73-3521							
発行年月日	1998年(平成10年) 3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きたしんまちいせき 北新町遺跡	おおさか 大阪府 だいとうし 大東市 きたしんまち 北新町	27218	45	34度 43分 34秒	135度 38分 24秒	N-1次 1993年7月1日 1993年9月28日 N-2次 1994年7月18日 1994年11月1日 N-3次 1995年7月26日 1996年1月19日 N-4次 1997年2月12日 1997年3月10日	R区 901m <sup>2</sup>  S・T区 823m <sup>2</sup>  U区 1761m <sup>2</sup>  V区 241m <sup>2</sup>	府営大東 北新町 住宅 建替え
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
北新町遺跡	集落跡 集落跡 集落跡 烟、耕作地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世 鎌倉時代	自然河川 上坑 水田跡、自然河川 上坑 自然河川 井戸、土坑、柱穴、 溝、屋敷地の区画 溝、鑿溝			弥生土器 上師器、須恵器 須恵器 瓦器、土師器皿、輸入陶磁器、 瓦器足釜、土師器 足付き鍋、銅鉢、木製品	大型咲群と小咲群で 区画された水田跡 大型咲群と小咲群で 区画された水田跡 区画溝 13世紀末頃 に集落廃絶 北宋錢、井戸の曲物	
	烟、耕作地	近世	東西方向、南北方向に走る水路、 鑿溝			染付などの陶磁器類、土製品、 玩具、銅錢	貝殻、泥面子、土人形、「寛永通宝」	

北新町遺跡第4次発掘調査概要報告書(本文編)

大阪府大東市北新町所在

1998年3月

発行 大東市北新町遺跡調査会

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

